

# 荒砥北三木堂遺跡II

昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部  
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



資料	財群馬県埋藏文化財 調査事業団保管	01-353
		423
No. 92- 3339	平成5年3月10日	(5)



# 荒砥北三木堂遺跡II

昭和56年度県営圃場整備事業荒砥南部  
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 2

群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





第I～第III文化層出土の遺物



第III文化層出土の遺物





## 序

上毛三山の一つである赤城山南麓の旧勢多郡荒砥村一带は、史跡前二子・中二子・後二子古墳を始めとする数多くの埋蔵文化財が分布している地域として知られています。

この地域で、大規模な圃場整備事業が計画され、工事が着工されたのは昭和49年からでした。この事業により数多くの埋蔵文化財が消滅することになり、関係機関により記録保存のための調査がなされました。

前橋市今井町に所在する荒砥北三木堂遺跡もその一つで、昭和56年度に事業対象区域となり、旧石器時代から室町時代にかけての数多くの遺構が、当事業団によって調査されました。

諸般の事情により発掘調査した遺構・遺物の整理が遅れていましたが平成元年度より3年計画で整理事業を行い弥生時代から室町時代にかけての遺構・遺物は平成2年度に調査報告書を刊行しました。

整理の最終年度となった本年度は、旧石器時代及び縄文時代の成果がまとまりましたので、ここに調査報告書を刊行することにしました。

本報告には、縄文時代草創期の燃糸紋土器及びそれに伴う石器の良好な資料が報告され、また、古墳時代の住居築造にあたって壊された旧石器時代の遺物ブロックの石器が住居の覆土出土の石器や住居床下出土の石器と接合する例も報告されています。

発掘調査後8年の経過を経て調査関係者の総意・協力を得て調査報告書が上梓できたことは、誠に意義深いものがあります。関係者の苦労と熱意に対し心から感謝申し上げますと共に、本報告書が本県の歴史を解明する上での資料として、広く活用されることを願ひ序とします。

平成4年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小寺 弘之



## 例 言

1. 本報告は1981(昭和56)年度の県営園場整備事業荒砥南部地区埋蔵文化財発掘調査に伴う荒砥北三木堂遺跡の発掘調査報告書第II分冊である。本遺跡は旧石器(先土器)時代から縄文、弥生、古墳、奈良、平安時代、及び、中世に亙る複合遺跡である。本報告は、このうち旧石器(先土器)時代と縄文時代に関する調査結果を掲載した。
2. 遺跡名称は地区名称と小字名を併記する方法を採用し、荒砥北三木堂遺跡と呼称した。
3. 本遺跡は前橋市今井町北三木堂306番地、荒口町前原278番地他に所在する。
4. 発掘調査は当事業団が県農政部、及び、県教育委員会と委託契約を締結し実施した。調査担当・調査期間は以下の通りである。

調査担当 鹿田雄三(主任調査研究員) 石坂 茂(調査研究員)  
唐沢史朗(調査研究員) 原 雅信(調査研究員)  
藤巻幸男(調査研究員) 岩崎泰一(調査研究員)

調査期間 1981(昭和56)年12月20日～1982(昭和57)年3月25日

5. 発掘調査資料の整理・報告は、当事業団が県教育委員会より委託され、報告書を作成した。委託期間は1991(平成3)年4月1日～1992(平成4)年3月31日である。
6. 整理作業に際して、縄文関係の遺構・遺物の整理は石坂が、旧石器関係の整理は岩崎が分担した。なお、本書作成の担当者は下記の通りである。

事務担当 邊見長雄、松本浩一、佐藤 勉、神保侑史、岩丸大作、巾 隆之、国定 均、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、船津 茂、松下 登、野島のぶ江、今井もと子、松井美智子、角田みづほ、塩浦ひろみ

整理担当 石坂 茂、岩崎泰一  
鹿沼敏子、霜田恵子、高橋フジ子、桑原恵美子、星野春子、高橋節子、吉原清乃、宮沢房子、長沼久美子、佐藤美代子、尾田正子、高梨房江、千代谷和子、八峠美津子

保存処理 関 邦一、小村浩一、渡邊清治

遺物写真 佐藤元彦

編 集 岩崎泰一





本文執筆 原 雅信 I-1・3

藤巻幸男 II-5・6

石坂 茂 I-2、II-4・7、IV、土器の観察一覧

岩崎泰一 上記分担以外の項目

7. 土器の胎土分析については井上 巖氏(第四紀研究所 所長)に、石材の産地同定については(株)バリノ・サーヴェイに依頼し、その分析結果を寄稿(III、科学的分析)して戴いた。また、第II文化層出土の資料については宇賀俊夫氏(タツミ写真スタジオ)に写真資料の提供を受けた。
8. 石材の同定は飯島静男氏(群馬地質研究会所属)に依頼した。
9. 第III文化層に関連する遺物分布図の作成は下記の業者に委託した。  
遺物分布図の作成 システム提案株式会社
10. 挿図中に使用した方位は、真北である。

11. 遺構実測図は以下の縮尺を基本に掲載した。それぞれ図中のスケールを参照されたい。
- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| 旧石器時代・石器の分布…………… 1 / 120 | 住居…………… 1 / 50 |
| 縄文時代・遺物の分布…………… 1 / 300  | 土塙…………… 1 / 40 |
12. 遺物実測図は以下の縮尺を基本に掲載した。なお、小形石器（石鏃など）は縮尺を変えてあり、別に縮尺率を表示した。
- |                       |                       |
|-----------------------|-----------------------|
| 旧石器時代・単独資料…………… 4 / 5 | 縄文時代の土器・石器…………… 1 / 3 |
| 旧石器時代・接合資料…………… 1 / 2 |                       |
13. 遺物写真図版は、実測図に掲載した順に時代毎に整理し、実測図と対照できるように図版の右下に挿図番号を付した。
14. 旧石器時代の遺物分布図に使用したマークは以下の器種を示している。
- |            |            |         |        |      |
|------------|------------|---------|--------|------|
| ◆ 槍先形尖頭器 a | ◇ 槍先形尖頭器 b | ▲ 有舌尖頭器 | ■ 削器   | □ 掘器 |
| ▲ 加工痕ある剥片  | △ 使用痕ある剥片  | ◇ 打製石斧  | ○ 石核   | ・ 剥片 |
| ・ 碎片       | ○ 敲石       | ・ 磨石    | ・ 礫、礫片 |      |
15. 縄文時代の遺構・遺物に使用したトーンは以下のことを示している。
- |   |   |  |  |
|---|---|--|--|
|  炉 |  ススの付着 |  赤変 |  繊維土器 |
|---|---|--|--|
16. 本書に掲載した航空写真（P L 2）は、国土地理院の承認（承認番号平4 関複、第201号）を得て、KT64-1、C S 20・21を複製したものである。
17. 本書の作成に際し、関係各方面の協力を得た。また、発掘調査の際には県農政部・工事関係者・地権者・地元関係者の多大なる御支援を戴いた。記して感謝の意を表する次第である。
18. 調査資料は一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

# 目 次

巻頭写真

序

例 言

I 遺跡と調査の概要	1	III 科学的分析	178
1. 遺跡の立地	1	1. 出土土器の胎土分析	178
2. 周辺遺跡	1	2. 石材の産地同定	193
(1) 旧石器時代		IV ま と め	199
(2) 縄文時代		1. 第I～第III文化層出土の遺物について	199
3. 調査の方法	5	2. 縄文土器について	201
4. 土層の堆積状態	6	付 土器の観察一覧	210
II 検出した遺構と遺物	7	石器の計測値一覧表	221
1. 第I文化層	7		
2. 第II文化層	8		
3. 第III文化層	8		
(1) 概 要	8		
(2) 出土した遺物	11		
(3) 石器の分布	69		
4. 住 居	84		
5. 土 壇	113		
6. 集石(礫の分布)	122		
7. 包含層出土の遺物	124		
(1) 3 区	124		
a. 遺物分布	124		
b. 出土遺物	133		
(2) 1・2・4・5区	163		

## 挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡の分布 (1)	2	第 37 図	出土石器 (28)	41
第 2 図	周辺遺跡の分布 (2)	3	第 38 図	出土石器 (29)	42
第 3 図	遺跡周辺の地形と調査範囲	5	第 39 図	出土石器 (30)	43
第 4 図	遺跡の基本土層	6	第 40 図	接合資料—64・66・69	45
第 5 図	第 I 文化層出土の石器と出土位置	7	第 41 図	接合資料—51・52・70	46
第 6 図	第 II 文化層出土の石器と出土位置	8	第 42 図	接合資料—5・53・68	47
第 7 図	第 III 文化層・器種組成と石材構成 (1) …	9	第 43 図	接合資料—15	49
第 8 図	第 III 文化層・器種組成と石材構成 (2) …	10	第 44 図	接合資料—16	50
第 9 図	第 III 文化層・器種組成と石材構成 (3) …	11	第 45 図	接合資料—1・19	51
第 10 図	出土石器 (1)	13	第 46 図	接合資料—9・73	52
第 11 図	出土石器 (2)	14	第 47 図	接合資料—40・60	53
第 12 図	出土石器 (3)	15	第 48 図	接合資料—8・10・50	55
第 13 図	出土石器 (4)	16	第 49 図	接合資料—30・41	56
第 14 図	出土石器 (5)	17	第 50 図	接合資料—3・18・24	57
第 15 図	出土石器 (6)	18	第 51 図	接合資料—22・23・31	58
第 16 図	出土石器 (7)	19	第 52 図	接合資料—28・38・61	59
第 17 図	出土石器 (8)	20	第 53 図	接合資料—20・39	61
第 18 図	出土石器 (9)	21	第 54 図	接合資料—21・34・45	62
第 19 図	出土石器 (10)	22	第 55 図	接合資料—4・33・56	63
第 20 図	出土石器 (11)	23	第 56 図	接合資料—29・47	64
第 21 図	出土石器 (12)	24	第 57 図	接合資料—2・25・27・32・62	65
第 22 図	出土石器 (13)	25	第 58 図	接合資料—14・74・86	66
第 23 図	出土石器 (14)	26	第 59 図	接合資料—11・26	67
第 24 図	出土石器 (15)	27	第 60 図	接合資料—100	68
第 25 図	出土石器 (16)	28	第 61 図	同一地点出土の土器	69
第 26 図	出土石器 (17)	29	第 62 図	石器の平面分布と垂直分布	70
第 27 図	出土石器 (18)	30	第 63 図	接合資料の分布 (黒色頁岩)	72
第 28 図	出土石器 (19)	31	第 64 図	接合資料の分布 (その他の石材)	73
第 29 図	出土石器 (20)	32	第 65 図	母岩別資料の分布 (1)	74
第 30 図	出土石器 (21)	33	第 66 図	母岩別資料の分布 (2)	76
第 31 図	出土石器 (22)	34	第 67 図	母岩別資料の分布 (3)	77
第 32 図	出土石器 (23)	35	第 68 図	母岩別資料の分布 (4)	79
第 33 図	出土石器 (24)	37	第 69 図	母岩別資料の分布 (5)	80
第 34 図	出土石器 (25)	38	第 70 図	石材別分布 (黒色頁岩)	82
第 35 図	出土石器 (26)	39	第 71 図	石材別分布 (黒色安山岩・その他)	83
第 36 図	出土石器 (27)	40	第 72 図	2区19号住居と出土遺物	85

第73図	2区49号住居	86	第110図	出土遺物(2)	124
第74図	2区49号住居と出土遺物	87	第111図	3区出土の土器分布	126
第75図	2区49号住居出土遺物(1)	88	第112図	3区出土の石器分布	127
第76図	2区49号住居出土遺物(2)	89	第113図	3区出土の土器(1)	128
第77図	2区49号住居出土遺物(3)	90	第114図	3区出土の土器(2)	129
第78図	2区49号住居出土遺物(4)	91	第115図	3区出土の土器(3)	130
第79図	2区54号住居	92	第116図	3区出土の土器(4)	131
第80図	2区54号住居出土遺物	93	第117図	3区出土の土器(5)	132
第81図	3区4号住居	94	第118図	3区出土の土器(6)	133
第82図	3区4号住居出土遺物(1)	95	第119図	3区出土の石器	
第83図	3区4号住居出土遺物(2)	96		器種組成と石材構成(1)	134
第84図	3区4号住居出土遺物(3)	97	第120図	3区出土の石器	
第85図	3区4号住居出土遺物(4)	98		器種組成と石材構成(2)	135
第86図	3区4号住居出土遺物(5)	99	第121図	3区出土の石器(1)	136
第87図	3区4号住居出土遺物(6)	100	第122図	3区出土の石器(2)	137
第88図	3区4号住居出土遺物(7)	101	第123図	3区出土の石器(3)	138
第89図	4区2号住居	102	第124図	3区出土の石器(4)	139
第90図	4区2号住居出土遺物(1)	103	第125図	3区出土の石器(5)	140
第91図	4区2号住居出土遺物(2)	104	第126図	3区出土の石器(6)	141
第92図	4区2号住居出土遺物(3)	105	第127図	3区出土の石器(7)	142
第93図	4区2号住居出土遺物(4)	106	第128図	3区出土の石器(8)	143
第94図	4区2号住居出土遺物(5)	107	第129図	3区出土の石器(9)	144
第95図	4区2号住居出土遺物(6)	108	第130図	3区出土の石器(10)	145
第96図	4区3号住居と出土遺物	109	第131図	3区出土の石器(11)	146
第97図	5区7号住居	110	第132図	3区出土の石器(12)	147
第98図	5区7号住居出土遺物(1)	111	第133図	3区出土の石器(13)	149
第99図	5区7号住居出土遺物(2)	112	第134図	3区出土の石器(14)	150
第100図	土壌(1)	115	第135図	3区出土の石器(15)	151
第101図	土壌(2)	116	第136図	3区出土の石器(16)	152
第102図	土壌(3)	117	第137図	3区出土の石器(17)	153
第103図	土壌(4)	118	第138図	3区出土の石器(18)	154
第104図	土壌(5)	119	第139図	3区出土の石器(19)	155
第105図	土壌(6)	120	第140図	3区出土の石器(20)	156
第106図	土壌(7)と土壌出土の遺物(1)	121	第141図	3区出土の石器(21)	157
第107図	土壌出土の遺物(2)	122	第142図	3区出土の石器(22)	158
第108図	集石と遺物の分布状態 (2区・6ライン以南)	122	第143図	3区出土の石器(23)	159
第109図	集石と出土遺物(1)	123	第144図	3区出土の石器(24)	160
			第145図	3区出土の石器(25)	161

第146図	3区出土の石器(26)	162	第159図	1・2・4・5区出土の石器(9)	177
第147図	1・2・4・5区出土の土器(1)	164	第160図	三角(A)・菱形(B)ダイアグラム 位置分類図	180
第148図	1・2・4・5区出土の土器(2)	165	第161図	Mo-Mi-Hb三角、Mo・Ch・Mi-Hb 菱形ダイアグラム位置分類図	181
第149図	1・2・4・5区出土の土器(3)	166	第162図	Q t-P 1 相関図	182
第150図	1・2・4・5区出土の石器 器種組成と石材構成	167	第163図	分析対象の土器	186
第151図	1・2・4・5区出土の石器(1)	169	第164図	分析対象土器の電子顕微鏡写真(1)	187
第152図	1・2・4・5区出土の石器(2)	170	第165図	分析対象土器の電子顕微鏡写真(2)	188
第153図	1・2・4・5区出土の石器(3)	171	第166図	分析対象土器の電子顕微鏡写真(3)	189
第154図	1・2・4・5区出土の石器(4)	172	第167図	分析対象土器の電子顕微鏡写真(4)	190
第155図	1・2・4・5区出土の石器(5)	173	第168図	分析対象土器のチャート図(1)	191
第156図	1・2・4・5区出土の石器(6)	174	第169図	分析対象土器のチャート図(2)	192
第157図	1・2・4・5区出土の石器(7)	175	第170図	遺跡の位置と原石採集地点	193
第158図	1・2・4・5区出土の石器(8)	176			

## 表 目 次

第1表	土壌の計測値一覧表	144	第3表	原産地岩石資料の岩質一覧	195
第2表	胎土性状表	179	第4表	遺跡出土土器の岩質一覧	196

## 図 版 目 次

PL 1	遺跡の遠景(南側上空から)	PL 6-1	2区49号住居遺物の出土状態
PL 2	調査以前の遺跡周辺 (KT64-1、C20・21)	2	同住居・埋設土器の検出状態
PL 3-1	遺跡の基本土層(北壁)	3	同住居・石器の出土状態
2	遺跡の基本土層(西壁)	4	2区54号住居全景
3	石器と土器の出土層位	PL 7-1	3区4号住居全景
4	石器の出土状態(第5図1)	2	同住居・遺物の出土状態(1)
5	石器の出土状態(第5図2)	3	同住居・埋設土器の検出状態
PL 4-1	第III文化層・石器の分布状態	4	同住居・遺物の出土状態(2)
2	調査風景(1)	5	同住居・遺物の出土状態(3)
3	調査風景(2)	PL 8-1	3区4号住居・遺物の出土状態(4)
4	調査終了状況	2	同住居・遺物の出土状態(5)
5	暗色帯の試掘状況	3	4区2号住居全景
PL 5-1	2区19号住居全景	4	同住居・遺物の出土状態(1)
2	2区49号住居全景	5	同住居・遺物の出土状態(2)
		PL 9-1	4区3号住居全景

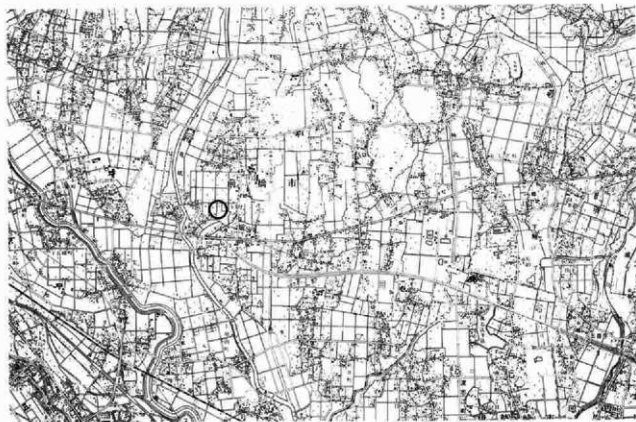


	2	5区7号住居全景	PL24	同・出土石器 (10)
PL10-1	1	5区7号住居・遺物の出土状態 (1)	PL25	同・出土石器 (11)
	2	同住居・遺物の出土状態 (2)	PL26	同・出土石器 (12)
	3	3区6号土壌	PL27	同・接合資料 (1)
	4	同・土層の堆積状態	PL28	同・接合資料 (2)
	5	3区12号土壌	PL29	同・接合資料 (3)
	6	同・土層の堆積状態	PL30	同・接合資料 (4)
	7	3区18号土壌	PL31	同・接合資料 (5)
	8	同・土層の堆積状態	PL32	同・接合資料 (6)
PL11-1	1	3区16号土壌	PL33	同・接合資料 (7)
	2	同・土層の堆積状態	PL34	同・接合資料 (8)
	3	3区17号土壌	PL35	2区49号住居出土遺物 (1)
	4	同・土層の堆積状態	PL36	2区49号住居出土遺物 (2)
	5	3区14号土壌	PL37	2区49号住居出土遺物 (3)
	6	3区11号土壌	PL38	2区49号住居出土遺物 (4)
	7	5区5号土壌	PL39	2区54号住居出土遺物
	8	5区8号土壌	PL40	3区4号住居出土遺物 (1)
PL12-1	1	3区8号土壌	PL41	3区4号住居出土遺物 (2)
	2	3区10号土壌	PL42	3区4号住居出土遺物 (3)
	3	3区13号土壌	PL43	4区2号住居出土遺物 (1)
	4	3区15号土壌	PL44	4区2号住居出土遺物 (2)
	5	集石の検出状態	PL45	4区2号・3号・5区7号住居、土壌出土遺物
PL13-1	1	3区南側・遺物の出土状態	PL46	土壌出土遺物、集石・周辺出土遺物
	2	3区西側・遺物の出土状態		
PL14-1	1	三角錐形石器の出土状態	PL47-1	3区出土の土器 (1)
	2	3区遺物の出土状態 (1)	2	3区出土の土器 (2)
	3	3区遺物の出土状態 (2)	PL48-1	3区出土の土器 (3)
	4	3区遺物の出土状態 (3)	2	3区出土の土器 (4)
	5	3区遺物の出土状態 (4)	PL49-1	3区出土の土器 (5)
PL15		第I・II・III文化層出土の石器 (1)	2	3区出土の土器 (6)
PL16		第III文化層出土の石器 (2)	PL50-1	3区出土の土器 (7)
PL17		同・出土石器 (3)	2	3区出土の土器 (8)
PL18		同・出土石器 (4)	PL51	3区出土の土器 (9)
PL19		同・出土石器 (5)	PL52-1	3区出土の土器 (10)
PL20		同・出土石器 (6)	2	3区出土の土器 (11)
PL21		同・出土石器 (7)	PL53-1	3区出土の土器 (12)
PL22		同・出土石器 (8)	2	3区出土の土器 (13)
PL23		同・出土石器 (9)	PL54-1	3区出土の土器 (14)

	2	3区出土の土器 (15)
P L 55		3区出土の石罨 (1)
P L 56		3区出土の石器 (2)
P L 57		3区出土の石器 (3)
P L 58		3区出土の石罨 (4)
P L 59		3区出土の石器 (5)
P L 60		3区出土の石器 (6)
P L 61		3区出土の石器 (7)
P L 62		3区出土の石器 (8)
P L 63		3区出土の石器 (9)
P L 64		3区出土の石器 (10)
P L 65		3区出土の石器 (11)

P L 66	1・2・4・5区出土の土器 (1) (2)
P L 67	1・2・4・5区出土の土器 (3) (4)
P L 68	1・2・4・5区出土の土器 (5) (6)
P L 69	1・2・4・5区出土の土器 (7) (8)
P L 70	1・2・4・5区出土の土器 (9) (10)
P L 71	1・2・4・5区出土の石罨 (1)
P L 72	1・2・4・5区出土の石器 (2)
P L 73	1・2・4・5区出土の石器 (3)
P L 74	1・2・4・5区出土の石器 (4)
P L 75	分析資料の偏光顕微鏡写真 (1)
P L 76	分析資料の偏光顕微鏡写真 (2)

## 荒砥北三木堂遺跡



国土地理院25000分の1 (大朝)



# I 遺跡と調査の概要

## 1. 遺跡の立地

本遺跡は、前橋市の市街地から国道50号線を東へ10kmほど走り、上武道路と交差する地点の北側、約500mの地点に所在する。

遺跡は広大な裾野を形成する赤城南麓の端部に位置する。赤城山は黒檜山（標高1,828mを測る）を最高峰に、駒ヶ岳や鈴ヶ岳の外輪山を抱える複合層火山で、鍋割や荒山等々の寄生火山を擁す。山麓端部は河川の浸食が著しく、山体の北側や西側には河岸段丘が形成され、山体の南西麓や南東麓は直線的な崖線地形が発達している。また、山体自体も河川や湧水に浸食され、北麓や西麓では大規模なV字状の深い谷と広大な裾野地形が発達する一方、南麓では大小の河川や湧水が豊富で、南北に長い沖積地と丘陵性の台地が交互に入り組み、複雑な地形感を呈している。

本遺跡は、3本の浅い沖積地の合流点に位置しており、沖積地を挟み南北に展開する荒砥川左岸の丘陵性台地に立地している。遺跡周辺には樹枝状の沖積地が発達しており、また、水量の多い湧水の存在も想定可能な浸食の進んだ谷地形も見られ、概ね南麓特有の複雑な地形感を呈する。これまでえた調査成果では、ある程度の水量を持つ河川流域の地形変化を確認しており、荒砥川や市沢川、宮川流域では縄文・早期段階や前期末葉から中期初頭の河川の流路変更や砂壤土（河

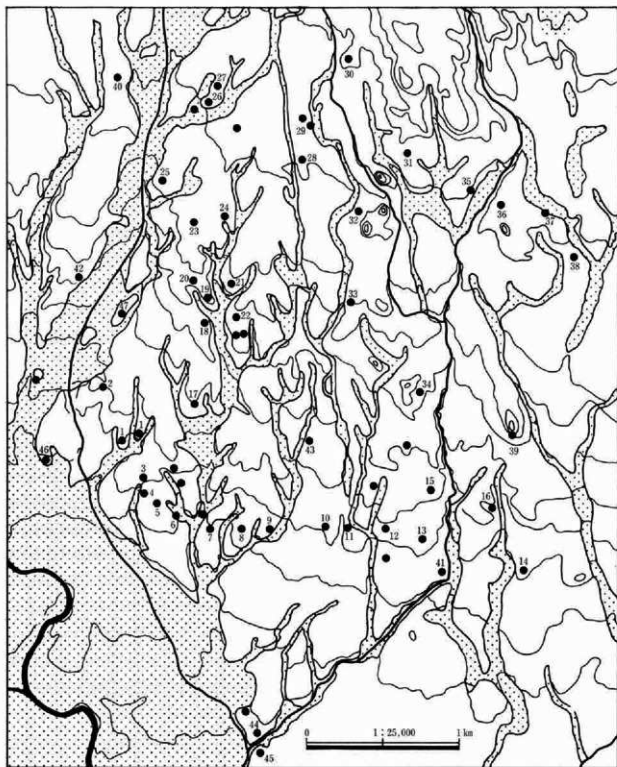
川性堆積物）の堆積に伴う微高地の形成、凹地の埋没状態など、大規模な地形の変化を確認しているほか、地形の変貌に伴う土地利用の変化を確認している。同時に、河川流域から外れる地域では、大きな地形の変化は見られないのであり、地形の極めて安定している事実を確認している。以上の成果からみて、本遺跡と荒砥川の間には幅広い低平な台地が介在しており、河川浸食に伴う地形変化が生じている可能性は少ないのであり、遺跡周辺の複雑な地形感は基本的に原型面の凹凸を反映している、と判断されよう。

以上、遺跡の周辺地形概要と、最近判明している南麓の地形変化の在り方を記してみた。同様な地形変化の状態は西麓にも見られ、関連関連の調査では縄文・前期段階の山体崩落を確認している。多分に時期を同じくする現象と判断されよう。同時に、上武道路関連の調査では沖積地下にも洪積世まで遡る泥炭層が良好な状態で確認され、通常調査では得られない情報抽出の可能性を秘めている。今回の調査では、沖積地に関する情報収集は充分ではなく、水田の確認に終始した感を抱いている。河川流域から外れる地域でもあり、今後は環境変化の把握に留意し、水田以外にも積極的に沖積地下の調査に目を向けていく必要が生じてきている。

## 2. 周辺遺跡

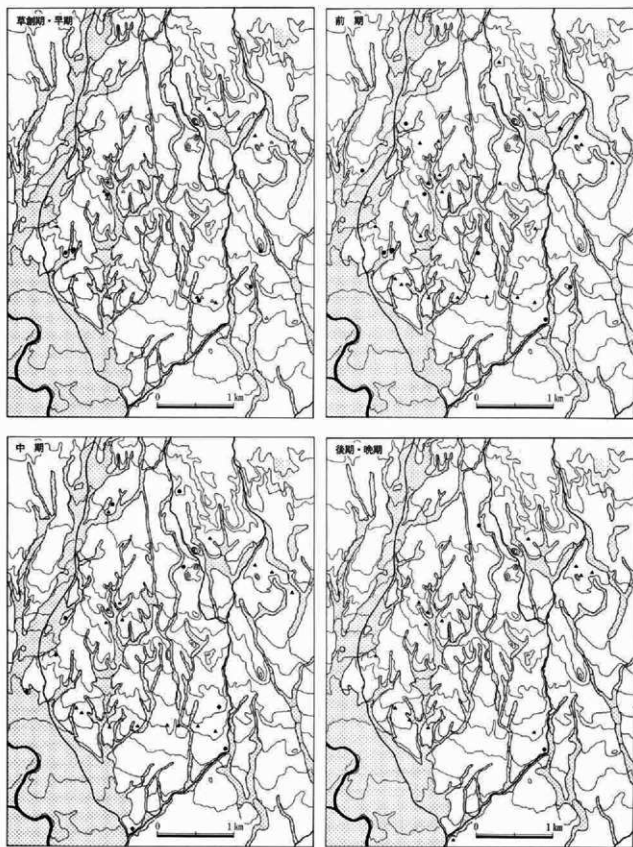
本遺跡の周辺域には圃場整備事業に伴う発掘調査や上武道路関連、住宅団地造成に伴う発掘調査が行われ、膨大な資料が蓄積している。全般に整理作業が遅れており、また、概報に留まる報告も多く、詳細は不明な点が多い。

**旧石器時代** 全般に調査規模の割には当該遺跡の確認は少ない。特に、圃場整備関連の調査では広範な調査規模と期間に追われ、遺物の有無さえ確認されない状況に終始している。一方、組織的に旧石器の試掘を試みている粕川より西の上武関連の調査では、大小規模



1. 荒砥北三木堂遺跡 2. 荒砥北原遺跡 3. 今井道上遺跡 4. 今井道下遺跡 5. 二之宮谷地遺跡 6. 二之宮洗橋遺跡 7. 二之宮千足遺跡 8. 二之宮宮下西遺跡 9. 二之宮宮下東遺跡 10. 二之宮宮東遺跡 11. 飯土井上組遺跡 12. 飯土井中央遺跡 13. 飯土井二本松遺跡 14. 志志江六反田遺跡 15. 二本松遺跡 16. 下陸牛伏遺跡 17. 鶴谷遺跡群 18. 下鶴谷遺跡 19. 柳久保遺跡 20. 渾防遺跡 21. 中鶴谷遺跡 22. 須無遺跡 23. 新山遺跡 24. 前山遺跡 25. 丸山遺跡 26. 山崎遺跡 27. 泉沢谷津遺跡 28. 中山B遺跡 29. 大道遺跡 30. 谷津遺跡 31. 小船岡遺跡 32. 神明山遺跡 33. 下境I遺跡 34. 天神遺跡 35. 北山遺跡 36. 上郷引遺跡 37・38. 内堀遺跡群 39. 石山遺跡 40. 三ツ屋遺跡 41. 荒砥二之原遺跡 42. 宮田遺跡群 43. 荒砥上ノ坊遺跡 44. 荒砥前原遺跡 45. 八坂遺跡 46. 今井白山遺跡 47. 荒砥宮田遺跡

第1図 周辺遺跡の分布(1)



● 前草創前半 ▲ 前草創後半 △ 早期前～晩期 (●=住居検出、▲=包含層)

第2図 周辺遺跡の分布(2)

は様々だが遺跡の発見が続いており、また、前橋市の横伏遺跡や大胡町三ツ屋遺跡(40)の隣接地点、宮城村の市之関前田遺跡・市之関芳ガ沢遺跡・柏倉芳見沢遺跡でも続々と資料を加えており、今後は周辺遺跡の調査を行う際には必ず石器群の有無を確認する積極的態度が要請されよう。

遺跡周辺地域には石山遺跡(39)や大胡町の三ツ屋遺跡が以前から知られ、当該遺跡の密集分布する有望な地域と全国的に研究者の注目を集めてきた。実際、ここ10年の資料的蓄積は著しく、環状分布して石器が出土した下触牛伏遺跡(16)や、上武道路関連の堀下八幡遺跡、飯土井中央遺跡(12)、二之宮千足遺跡(7)、二之宮谷地遺跡(5)、今井道上・道下遺跡(3・4)ではA T降灰以前の石器群や槍先形尖頭器を伴う段階の石器群が検出され、掘れば必ず石器が出土する感を呈している。また、前橋市頭無遺跡(22)では荒屋型彫器を伴い船底状を呈す細石刃核や台形状のナイフが出土しているほか、柳久保遺跡群(19~21)ではA T降灰以前の剣片や、単独でナイフや槍先形尖頭器が出土しており、そのほかにも単独採集の資料が多く出土している。

**縄文時代** この地域一帯では、前期前半と中期後半に遺跡数のピークがある。最近では調査例も増え、これまで欠落していた時期の資料の増加も著しい。以下、時期別に概要を述べていきたい。草創期前半の遺跡は数も少なく、断片的である。本遺跡(1)では3区に竊土器が出土しているほか、2区より槍先形尖頭器と同一地点から無文土器が出土している。同様な形態の槍先形尖頭器は石山遺跡(39)でも出土している。爪形文土器が出土した下触牛伏遺跡(16)や、爪形文土器や押印縄文土器が出土した飯土井中央遺跡(12)は石山遺跡にも近く、ある程度この時期の遺跡が密集分布する傾向が指摘されよう。前半段階の遺跡に比べ、草創期後半の遺跡は確実に増加する。住居や土壇など明確な遺構に伴う例は現状ではなく、大部分が包含層より出土している。全体的に断片的資料が多い中で、本遺跡に隣接する荒砥北原遺跡(2)や下鶴谷遺跡(18)、柳久保遺跡(19)では多量の燃糸文土器が出土

している。早期の遺跡では下鶴谷遺跡が最も充実しており、沈線文土器や条痕文土器が多量に出土している。また、飯土井二本松遺跡(13)では河川性氈蓋層の下位より沈線文土器や条痕文土器と共に、楕円・山形の押印文を横位に交互施文する土器や、燃糸文と縄文を横位に交互施文する土器が出土している。この段階の遺跡は概して少なく断片的であり、住居の検出は見られない。同様な傾向は前期前半まで続く。花積下層段階の住居を検出した下鶴谷遺跡を除き、遺跡周辺には住居を伴う遺跡は見られない。上武関連の調査でも同様な傾向が見られ、粕川右岸の五目牛清水田遺跡や五目牛南組遺跡、周辺の八幡林古墳群で前期前半(花積下層段階)の住居を検出している他は、断片的に土器を出土する遺跡が多く、遺跡が地点的に集中分布する傾向を良く示している。一方、前期後半の遺跡は住居の検出も多く、遺跡の急増する時期と言える。遺跡周辺には丸山遺跡(25)や下鶴谷遺跡、富田遺跡(42)、荒砥上ノ坊遺跡(43)、荒砥二之堰遺跡(41)、荒砥宮田遺跡(47)、北山遺跡(35)、上縄引遺跡(36)で諸磯段階の住居を検出している。遺跡は前期前半以前の地点的な在り方から点々と広がる傾向を強める。住居は単独か数軒の確認に留まり、遺跡は概して小規模である。前期末葉から中期前半は遺跡の減少期であり、中期後半に再び遺跡増加のピークを迎える。集落は泉沢谷津遺跡(27)や荒砥北原遺跡、今井白山(46)、荒砥前原遺跡(44)、荒砥二之堰遺跡、二本松遺跡(15)に見られ、低平な台地に遷地する傾向が著しい。集落は中・小規模集落の例が圧倒的に多く、現状では継続性の著しい大規模集落の例は見られない。後期の遺跡は再び遺跡が減少してくる。荒砥二之堰遺跡では中期後半から後期前半に集落が継続しており、大道遺跡(29)では後期後半の住居が単独で存在する。このほかには柳久保遺跡群(19~21)や内組遺跡群(36~37)に少量遺物が出土しているのにすぎない。晩期の遺跡は更に減少する。本遺跡の周辺域では神沢川と荒砥川の合流する地点に八坂遺跡(45)が知られ、地元では耳飾など多量の遺物を採集している。



### 3. 調査の方法

分布調査、及び、試掘調査の結果、調査対象範囲は6地点・約39,000㎡に及んだ。第1図に示す通り、調査区は沖積地を挟む両側の台地に位置しており、概ね遺構分布の把握が可能と言える。既に報告した通り、試掘調査の結果、耕作がローム層の上面まで及ぶ事実が判明したため、この部分に関してのみ重機を用いて表土を除去した(詳細は荒砥北三木堂遺跡Ⅰ 1991年を参照されたい)。

この地域では、一般的に表土を除去した段階で既に土器や石器が出土するため、遺物分布の把握は概して易しい。一方、住居や土壇は地山に似する暗褐色土で

埋没しており、遺構の確認が難しい。この遺跡でも全く同様な状況が見られ、2区の槍先形尖頭器や3区の燃糸文土器・沈線文土器等々の土器や石器は表土を除去した段階で確認したのであり、包含層の調査時に確認した土壇も多い。調査は常に工事工程に追われ、調整も限界に達していたため、ここでは上述した槍先形尖頭器(2区)や燃糸文土器・沈線文土器(3区)の分布域に限り包含層を徐々に掘り下げ、遺構の検出に努めた。その他の地点では遺物分布の有無を確認し、サブ・トレンチを設け遺構の有無を確認したのにとどまる。旧石器時代の石器群に関する調査は2区南端の



(図は弥生時代以後の遺構分布を示す。荒砥北三木堂遺跡Ⅰより転載)

第3図 遺跡周辺の地形と調査範囲

4ライン以南に限られ、極めて不十分である。槍先形尖頭器は表土を除去した段階で確認され、概ね槍先形尖頭器の分布は把えた、と判断している。一方、それより下位に出土する石器群の有無は全く不明確である。

出土資料の中には複数の段階の石器が含まれ、また、地形的に見ても、暗色帯に石器群が多出する周辺遺跡の例から見ても、検出した石器群の他にも当該石器の存在した可能性は否定できない。

## 4. 基本土層

6ヶ所の調査区とも同様な土層の堆積状態を示している。概ね、ロームの堆積状態は南麓の丘陵性台地に立地する遺跡と同様な状態を示しており、遺跡間対比にも充分に耐え得る、と考えている。ここでは槍先形尖頭器の出土した地点の土層図を示し、その概要を説明していきたい。

第I層 表土層。全体に砂質で、粘性に乏しい。浅間期限のテフラが攪拌状態で混入している。

第III層 暗褐色土。縄文時代遺物の主体的な包含層。

第IV層 黄褐色軟質ローム層。「ソフト・ローム」で、その下面は凹凸が著しい。第III・IV層は若干の色調の差で分層した。槍先形尖頭器は第III・第IVの上下二層から出土している。

第V層 黄褐色硬質ローム層。白色パミス (As-SP)

を混入する。やや明るい色調を呈す。

第VI層 暗褐色硬質ローム層。As-BPを塊状に含む。全体に砂質・硬質で、黒色鉱物を含む。

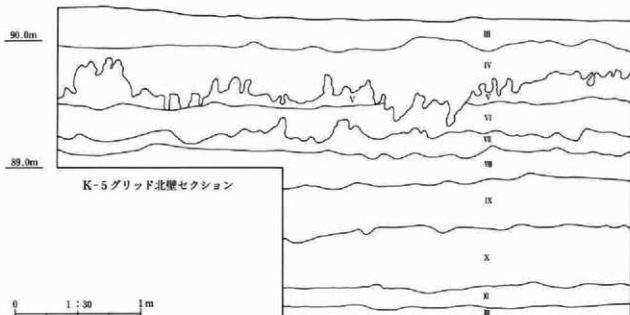
第VII層 赤褐色ローム層。全体に粘性が強く、As-BPを混入する。最近の調査では本層の上位に硬質部を確認している。

第VIII層 暗褐色軟質ローム層。本層の上位部分にA Tの極大値を持つ。「暗色帯」の上部に相当。

第IX層 暗褐色軟質ローム層。「暗色帯」の下位部分に相当し、上層よりやや暗い色調を呈す。本層の上位に石器が出土している。

第X層 暗褐色硬質ローム層。全体に粘土化が進み、粘性が強い。黒色鉱物を多く含む。

第XI層 八崎軽石層 (HP)



第4図 遺跡の基本土層

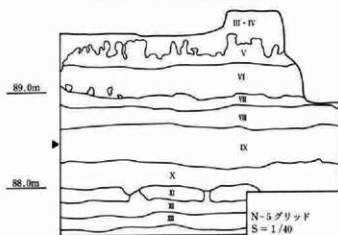
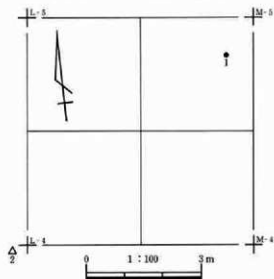
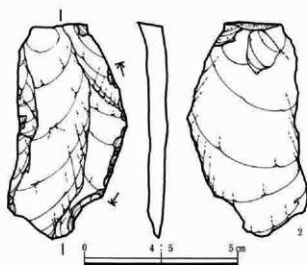
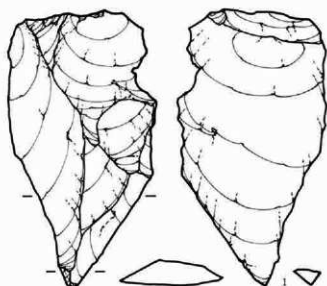
## II 検出した遺構と遺物

## 1. 第 I 文化層

暗色帯（基本土層・IX層の中位）より出土している。調査区南端に近いK-3グリッド・L-4グリッドに単独の状態で出土した。石器は台地先端から約80m、東側の台地縁辺から約50mほど内側の地点に出土している。調査は時間的制約から第III文化層の調査範囲に限り、下層の遺構・遺物の有無を確認するのに留まるため、この地点以外にも当該石器の集中地点や疎群、配石の広がる可能性は強く、寧ろ、その存在を想定した方が良い。

出土資料は図示した2点（第5図1・2）に留まり、調査区内には石器の集中地点や疎群、配石の類は全く確認できない。

第5図1は、平坦打面より剥離した縦長の剥片である。剥片形状も良好で、剥片先端は尖る。背面を構成する剥片の剥離方向は、概ね同一方向を示し、特に、剥片先端は一方の側縁が急に立ち上がり、先端部の強化を図る目的ともおもえる。打面調整・頭部調整の類



第5図 第I文化層出土の石器と出土位置

## II 検出した遺構と遺物

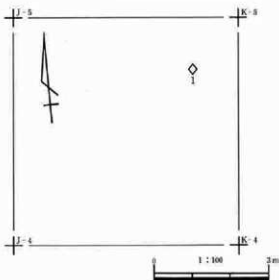
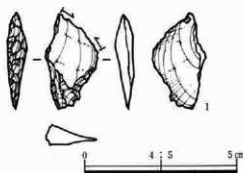
は不明瞭で、「礫山型」に近い剥離手法で剥片を作出している。黒色安山岩。L-4 G。

第5図2は、平坦打面より剥離した縦長剥片である。概ね、側縁は若干左側に振れる傾向が見られ、剥片の先端は開いている。背面を構成する剥離の方向は概ね同一の方向を示しており、この点では1と同様な剥離から作出したもの、と思える。右側縁に使用痕が連続的に生じている。黒色安山岩。K-3 G。

## 2. 第II文化層

1点が出土したのにすぎない。資料は第III文化層の調査資料の中に混在していたものであり、整理の段階で石器の形態的特徴から第II文化層の遺物と認定したものである。J-4グリッドに出土した。

第6図1は、横長剥片を用い、二側縁に加工を施しナイフに仕上げている。左側縁は急峻な加工を施す反面、右側縁は浅く粗い加工を施している。石器先端の側に剥片の打面部分が位置する。黒曜石。



第6図 第II文化層出土の石器と出土位置

## 3. 第III文化層

### 3-1. 概要

第III文化層を構成する石器は総計2,824点を確認している。石器群は今井沼の西に広がる丘陵性台地の南側調査区(2区と呼称する)に出土している。石器群は上面の遺構精査の段階で一部が出土しており、同様な遺物の分布を示す地点は、その他の地点では確認されなほか、住居覆土の遺物にも当該資料の存在は全く見られない。このことから考えて、調査区内には当該段階の資料は分布せず、ほぼ単独状態で存在すると、考えている。とはいえ、当該期石器群に関する調査の不充分な点は否めず、この地点以外にも単独の状態で石器が存在する可能性も否定できないうえ、調査対象

範囲を外れた南側の台地先端部分に関する状況は全く不明瞭である。寧ろ、第I・第II文化層の存在、遺跡立地の傾向から見れば、十分に当該期石器群の存在が予想されよう。

石器群は調査区の南端に近い地点(J~L-3~5グリッド)に分布しており、径10mを越える広い範囲に出土した。石器分布の中心部分は古墳時代の住居(8号)の構築段階で破壊され、最も濃い分布域を逸している。実際、住居覆土より槍先形尖頭器を含む剥片・砕片の類が多量に出土しており、石器が密に分布していた事実を良く示している。そのため、本来もつ石器分布の状態にはほど遠く、石器製作構造を考えるうえでも制約が著しいわけだが、現状の石器分布を見ても、

分布には確実に粗密が存在しており、複数の集中地点からなる石器の分布状態が想定されよう。

出土石器には槍先形尖頭器・有舌尖頭器・打製石斧・削器・掻器の他に、加工痕或使用痕の生じた剥片が見られ、槍先形尖頭器が標準的の石器に据えている。量的には剥片や破片が多量に出土しており、両者で全体の93%を占めている。剥片は「ポイント・フレイク」と言い得る形状を有しており、このことから判断して、槍先形尖頭器の製作を主に行う比較的単純な様相を呈する。槍先形尖頭器には細味の一群と木葉形状を呈す一群からなり、概して完成状態にはほど遠い未製品や、欠損品が多い。このほか、槍先形尖頭器には石器先端や器体中央の欠損部分を打面に「櫛状刻離」を施す例が見られ、この段階の資料には余り例の見られない手法が特徴的に存在する。打製石斧は多分に石器群に伴う可能性が強い反面、有舌尖頭器は単独の状態出土

しており、この地点で製作した痕跡が乏しく、恐らく搬入資料と位置づけられよう。その他の削器・掻器・加工痕或使用痕ある剥片は、剥片剥離の初期に生じる剥片や槍先形尖頭器の製作に伴い作出した剥片を二次利用している例が多い。

石器石材は黒色頁岩が全体の約90%を占めており、ほかには黒色安山岩(5%)、頁岩や点紋頁岩、灰色安山岩、細粒安山岩など10種類程度の石材が存在している。以上の石器石材の在り方は、旧石器時代の全般が特徴的であり、多分に石材性状を反映している。即ち、加工量の多い槍先形尖頭器の製作には斑晶を多く含む、極めてガラス質に富む黒色安山岩より、「粘り」を持つ黒色頁岩を選択した可能性が高い。

接合資料は91例を確認した。大部分が槍先形尖頭器の製作を示し、一部通常の剥片剥離を示す例や蔽石の

第Ⅲ文化層・器種構成 (2,228点)

	剥片 611点 (27.4%)	破片 1,478点 (66.4%)	④
①			
① 有舌尖頭器		1点 (0.05%)	
槍先形尖頭器		32点 (1.4%)	
打製石斧		1点 (0.05%)	
削器		9点 (0.4%)	
掻器		1点 (0.05%)	
石核		10点 (0.4%)	
② 加工痕ある剥片	15点 (0.7%)		
使用痕ある剥片	33点 (1.5%)		
③ 磨石	1点 (0.05%)		
蔽石	13点 (0.6%)		
礫・礫片		23点 (1.0%)	

住居覆土出土資料・器種構成 (596点)

①	剥片 217点 (36.5%)	破片 352点 (59%)	②
① 槍先形尖頭器		13点 (2.1%)	
削器		2点 (0.3%)	
石核		4点 (0.7%)	
加工痕ある剥片	4点 (0.7%)		
使用痕ある剥片	1点 (0.2%)		
② 磨石	1点 (0.2%)		
蔽石	1点 (0.2%)		
礫片		1点 (0.2%)	

石材構成

	黒色頁岩 2007点 (90.1%)	①	③
① 黒色安山岩		123点 (5.5%)	
② 頁岩		49点 (2.2%)	
③ 粗粒安山岩		29点 (1.3%)	
細粒安山岩・灰色安山岩		各4点 (0.2%)	
石英閃緑岩		3点 (0.1%)	
黒曜石・溶結凝灰岩・凝灰質砂岩		各2点 (0.07%)	
点紋頁岩・閃緑岩・砂岩		各1点 (0.03%)	

住居覆土出土資料・石材構成

	黒色頁岩 545点 (91.3%)	①	②
① 黒色安山岩		25点 (4.2%)	
② 頁岩		9点 (1.5%)	
理質頁岩・灰色安山岩・細粒安山岩			
角閃石安山岩・炭質玄武岩・理質実質岩			
ホルンフェルス		各1点 (0.2%)	

第7図 第Ⅲ文化層・器種組成と石材構成(1)

## II 検出した遺構と遺物

### 槍先形尖頭器 (32点)

黒色頁岩 26点 (78%)	①	②
----------------	---	---

① 黒色安山岩	6点 (18.8%)
② 頁岩	1点 (3.2%)

### 有舌尖頭器 (1点)

黒色頁岩 1点 (100%)
----------------

### 打製石斧 (1点)

黒色頁岩 1点 (100%)
----------------

### 削器 (9点)

黒色頁岩 1点 (100%)
----------------

### 掻器 (1点)

黒色安山岩 1点 (100%)
-----------------

### 加工痕ある削片 (15点)

黒色頁岩 15点 (100%)
-----------------

### 使用痕ある削片 (31点)

黒色頁岩 29点 (93.9%)	①
------------------	---

① 黒色安山岩	2点 (6.1%)
---------	-----------

### 石槌 (10点)

黒色頁岩 9点 (90%)	①
---------------	---

① 頁岩	1点 (10%)
------	----------

### 住居層土出土資料

#### 槍先形尖頭器 (13点)

黒色頁岩 12点 (92.3%)	①
------------------	---

① 地質頁岩	1点 (7.7%)
--------	-----------

### 削器 (2点)

黒色頁岩 2点 (100%)
----------------

### 加工痕ある削片 (4点)

黒色頁岩 4点 (100%)
----------------

### 使用痕ある削片 (1点)

黒色頁岩 1点 (100%)
----------------

### 削片 (611点)

黒色頁岩 561点 (91.8%)	①	②
-------------------	---	---

① 黒色安山岩	36点 (5.9%)
② 頁岩	9点 (1.5%)
灰色安山岩	3点 (0.5%)
粗粒安山岩	2点 (0.3%)

### 砕片 (1,478点)

黒色頁岩 1,355点 (91.6%)	①	②
---------------------	---	---

① 黒色安山岩	77点 (5.2%)
② 頁岩	37点 (2.5%)
粗粒安山岩・凝灰質砂岩	各2点 (0.2%)
砂岩・点紋頁岩・黒曜石	
灰色安山岩・粗粒安山岩	各1点 (0.06%)

### 磨石 (1点)

粗粒安山岩 1点 (100%)
-----------------

### 融石 (13点)

粗粒安山岩 8点 (61.5%)	石英閃緑岩 3点 (23.1%)	①
------------------	------------------	---

① 頁岩・閃緑岩	各1点 (7.7%)
----------	------------

### 礫・礫片 (23点)

灰色安山岩 14点 (61.1%)	粗粒安山岩 5点 (21.7%)	①
-------------------	------------------	---

① 頁岩・黒色頁岩・砂岩・溶結凝灰岩	各1点 (4.3%)
--------------------	------------

### 石槌 (4点)

黒色頁岩 3点 (75%)	点紋頁岩 1点 (25%)
---------------	---------------

### 磨石 (1点)

粗粒安山岩 1点 (100%)
-----------------

### 融石 (1点)

頁岩 1点 (100%)
--------------

### 礫片 (1点)

粗粒安山岩 1点 (100%)
-----------------

第 8 図 第三文化層・器種組成と石材構成 (2)

剝片 (217点)

黒色頁岩 209点 (96.1%)	①
-------------------	---

- ① 黒色安山岩 5点 (2.3%)  
点紋頁岩 3点 (1.6%)

砕片 (332点)

黒色頁岩 314点 (89.1%)	①	②
-------------------	---	---

- ① 黒色安山岩 29点 (5.7%)  
② 頁岩 8点 (2.3%)  
粗粒安山岩 3点 (0.8%)  
点紋頁岩・細粒安山岩  
紫玄武岩・灰色安山岩・珪質安山岩  
角閃石安山岩・ホルンフェルス 各1点 (0.2%)

第9図 第III文化層・器種組成と石材構成(3)

接合資料が若干存在している。接合状態からみれば、槍先形尖頭器は大型剝片を素材に製作しており、原石から直接剝離を行い、製作する例は全く見られない。母岩は現状で黒色頁岩に19種類を、点紋頁岩に1種類、頁岩に3種類、黒色安山岩に9種類を確認している。

なお、槍先形尖頭器の出土地点には胎土に特徴的な鉱物を含む同一個体の土器が出土しており、注意され

よう。伴出関係に関する根拠には乏しく判断が難しいわけだが、器壁裏面に指頭圧痕を残し凹凸が見られ、また、器壁が薄い点など、縄文草創期段階の土器に多い特徴を有しており、他の土器とは著しく異なることから、本遺跡の槍先形尖頭器には土器が伴う可能性を残しておきたい。

### 3-2. 出土した石器

住居覆土より出土した石器を含め、総計2,824点が出土している。大部分が槍先形尖頭器の製作に伴い生じた剝片や砕片だが、槍先形尖頭器を主体に、削器や掻器が加わり、一応の器種組成の全般が知り得る状況を呈している。

#### 槍先形尖頭器 (第10~19図)

槍先形尖頭器は総計45点が出土している。欠損資料も多く、また、製作初期を示す例、製作途中を示す例、加工が全面を覆い完成状態に近い例など、様々な製作段階の資料が混在している。そのため、完全な分類は難しい。ここでは、完成状態に近い槍先形尖頭器を例に大別二分して記述していく。

- I類 細味の一群を一括した。器体の下半を欠損するため、全体の形状は不明だが、概ね柳葉形状を呈す。全般に、菱形に近い断面形状を呈し、器体の幅に比べ、厚味を持つ。(第10図2~4・6)
- II類 木葉形状を呈す一群を一括した。資料には製作過程を反映して多様な加工状態が見られ、先端形態や基部形態にもバラツキが著しい。石器の

断面形状はレンズ状を呈す例が主体を占める。器体中央に最大幅を持つ。(第11・12図)

I類に分類した槍先形尖頭器は量的には少なく、図示した4点以外には見られないため、柳葉形状に近い形態は容易に推定可能だが、器体の「長さ」の復元は難しい。欠損部分から判断して、器体の中央付近で欠損しているとも思われぬ。敢えて言えば、1/3程度の所で欠損しているようにも思われ、単純計算して15cm前後の姿が想定されよう。欠損部分には再加工の痕は見られない。

II類に分類した槍先形尖頭器は量的に最も安定して存在している。槍先形尖頭器の多様な製作段階を示す例が混在しているため、ここでは完成状態に近い第10・11図を例に、素材剝片・加工状態等々の形態的特徴を記述していきたい。まず、本類の槍先形尖頭器には著しい平面形態と規模の規格性・斉一性が指摘されよう。概して、器体の最大幅は中央部か、やや下に持ち、長さ8cm・幅3cm前後を測る例が多い。石器先端・基部の形状は両端とも尖る例(第11図1、第12図1・4)と、基部が丸味を持つ例(第11図2・3、第12図2・3)の両者が見られ、差が生じている。石器素材

には剥片を用い、特に横長剥片を多用している。打面部分は器体側縁に位置する場合は圧倒的に多い。器体全面に加工が及ぶ両面加工の例が通例だが、裏面のみ周辺加工を施す例（第11図2・第12図1）、表裏両面とも周辺加工を施す例（第12図4）が見られ、多様な加工状態を示す。以上の多様な加工状態は、概して剥片の形状に即した技術的対応と言える。なお、第11図2は石器先端・基部とも丸味を持ち、他の槍先形尖頭器と大きく異なる形状を呈している。石器断面の形状もD字状を呈し、この資料のみ著しい差が生じている。更には、他の槍先形尖頭器に比べ、側縁の加工状態も著しく異なり、側縁の加工状態は寧ろ撻器の刃部に近い。この段階の槍先形尖頭器には機能的分化の現象は認め難く、製作途上に器種転化を試みた可能性も想定されよう。

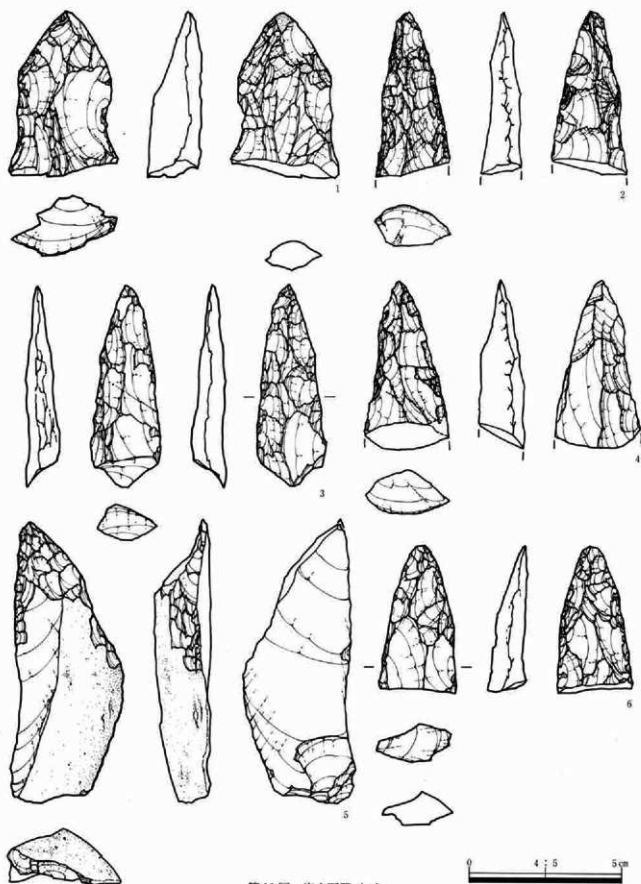
以上、完成状態に近い資料を中心に本類の特徴を示したわけだが、本類にはこれ以外にも製作初期の例、製作途上の例など製作段階の異なる資料も多く、以下に製作段階や石器の形状、素材を考慮して纏めていきたい。

第13図1～4は、槍先形尖頭器の先端、及び、基部破片を一括した。第一次剥離面を残す例（第13図2）も散見され、また、このほか、加工が表裏両面に及ぶ先端部分や基部の破損資料（第13図5～8）も多く、欠損が生じ易い製作実態を良く示している。第14図1～4は大形剥片を素材に槍先形尖頭器を作出する例を一括した。この場合の加工状態は、腹面側の加工量は大きく、背面側の加工量は周辺部に限定的に施す傾向が指摘されよう。と同時に、第14図2の例に典型だが、剥片の打面部分が側縁に位置する場合にはこの部分に集中的剥離を施す例も存在する。なお、この資料には側縁の一部に加工の施されない部分が見られ、刃部を意識しているようにも思える。更に、器体の右側下半部分の加工は左右対象の器形作出を意図したとも考え難く、分類が妥当か検討を要す。第15図の資料4点は製作初期の剥離が終わり、更に剥離を加え、形状を整える段階で欠損、或は、剥離作業が終了している資料を一括した。やや細味の1・2と木葉形状を呈す3・

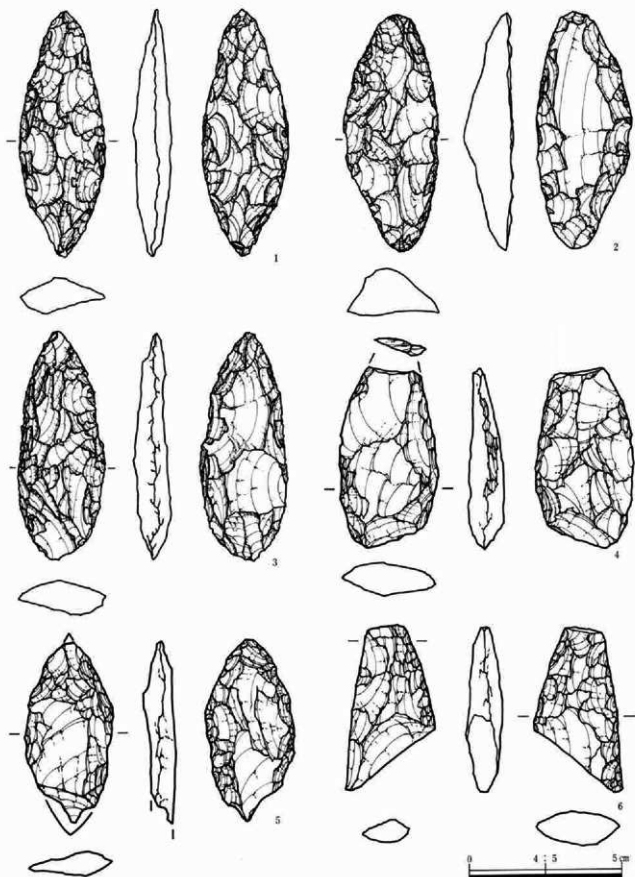
4からなり、前者がI類の槍先形尖頭器の、後者がII類の槍先形尖頭器の製作途上の姿を示す可能性が高い。第16図の4点は製作初期の剥離が終わり、次の段階の剥離を行う段階で欠損したもの（2～4）や、剥離を終了しているもの（1）で、2・4の2点には基部に丸味を持ち、類似する。第17図の資料2点は大形で、第一次剥離面や稜面を大きく残し、剥離初期の姿を良く示している。側縁加工に主力が注がれ、概して石器先端や基部の加工は弱い。

第18図1～3、第19図1・2は、石器の先端部分に「槌状剥離」を施す例や、器体中央の欠損部分を打面に、側縁に剥離を施す例を一括した。以上の特徴を有する一群の槍先形尖頭器を便宜的にIII類と捉え、以下に説明していきたい。1は、器体の中央付近で（意図的な分割か不明だが）二分され、石器先端の剥離や器体の中央付近に剥離を施している。二分する以前の石器形状は細味の感が強く、側縁形状も直線的であり、I類に近い。器体の下半に比べ上半部分の加工は丁寧で、先端部分も丸く作出しており、他の例とは趣が異なる。剥離面の切り合い関係からみて、器体が二分してから後に槌状剥離を施している。更に細かく、下半部分の剥離を見れば、槌状剥離の前後関係は器体中央の剥離→先端部分の剥離の順で施され、先端部分の剥離を終えてから再び先端の細部加工を試みている。この資料に関する限り、以上の剥離が示す性格は不明な点が多い。2は、先端部・右側縁から剥離を施す例で、この剥離より確実に後から側縁や先端に細部加工を施している。この資料に関する限り、剥離は器体の厚味を除去するとも評価されよう。3は、3点からなる接合資料（接合資料一5）の1点で、先端部分を大きく欠損してから後に、欠損部分を打面に槌状剥離を施している。このほかにも資料には欠損部分を打面に側縁加工が施され、2と同様に器体整形の剥離と評価されよう。第19図1は、石器先端、及び、基部側・右側縁の2ヶ所に槌状剥離を施している。先端部分の剥離は側縁部分以外にも、側縁に直交する方向に2条の槌状剥離を施している。また、基部側・右側縁の槌状剥離は打面が明確には見られないため断定できないわけだが、若

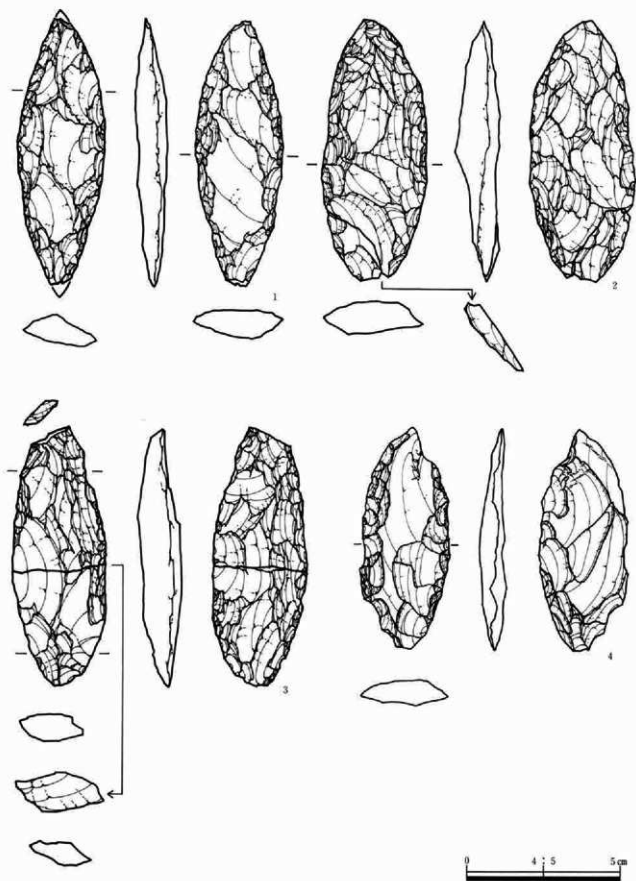




第10图 出土石器(1)

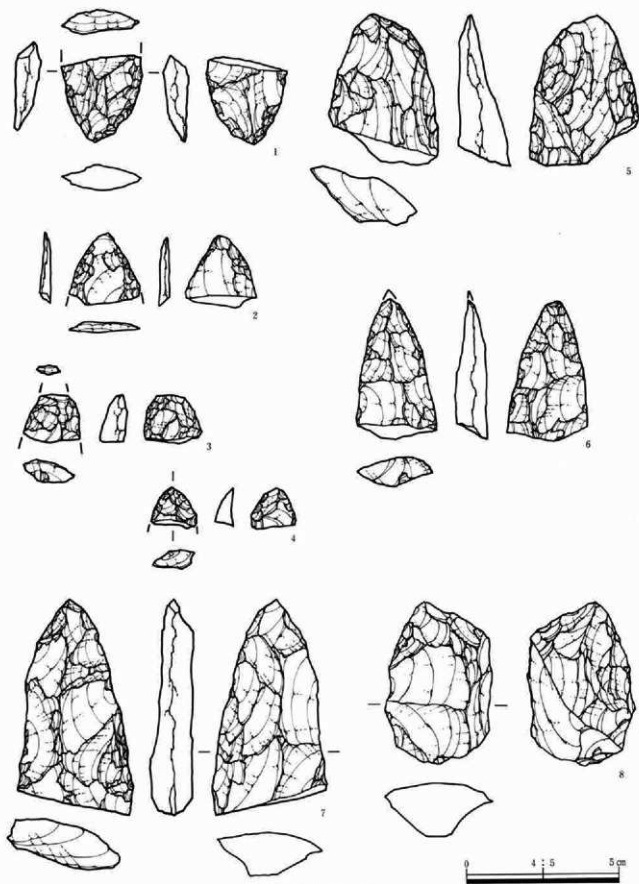


第11図 出土石器(2)

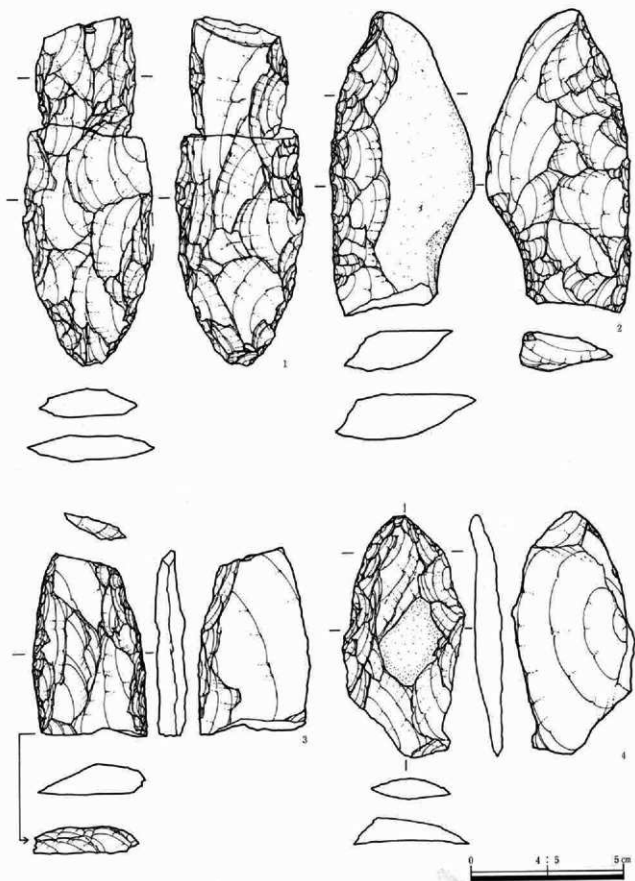


第12圖 出土石器(3)

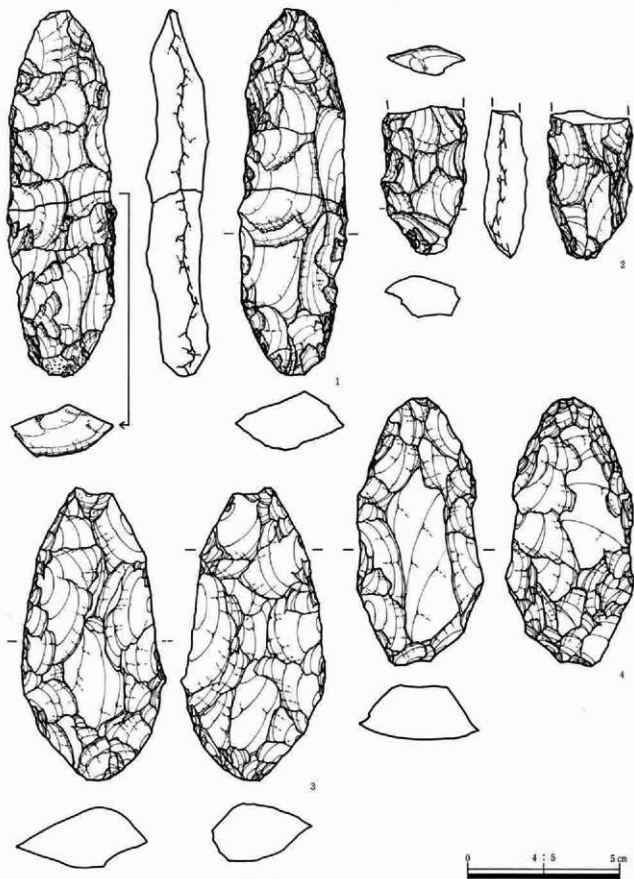
II 検出した遺構と遺物



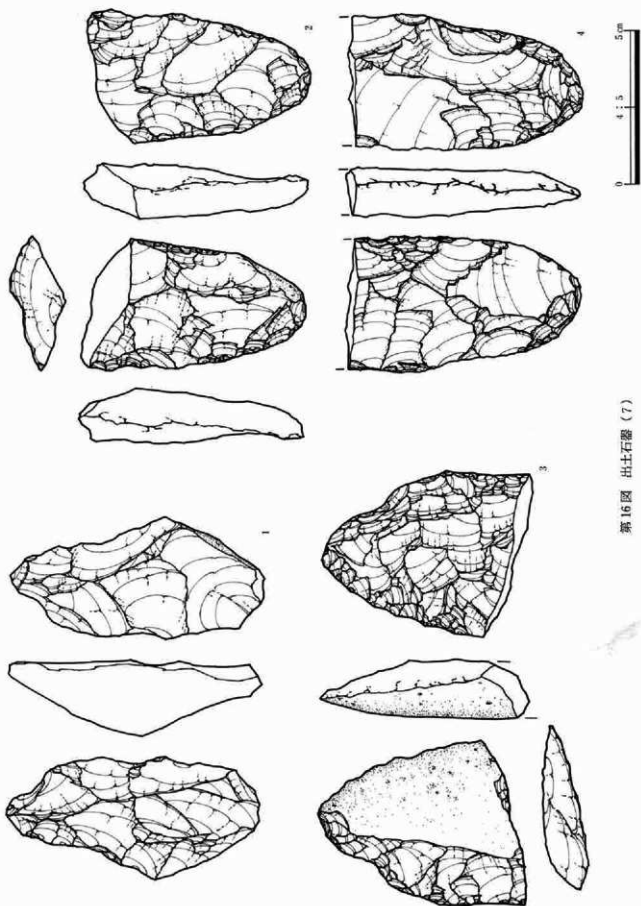
第13圖 出土石器(4)



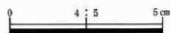
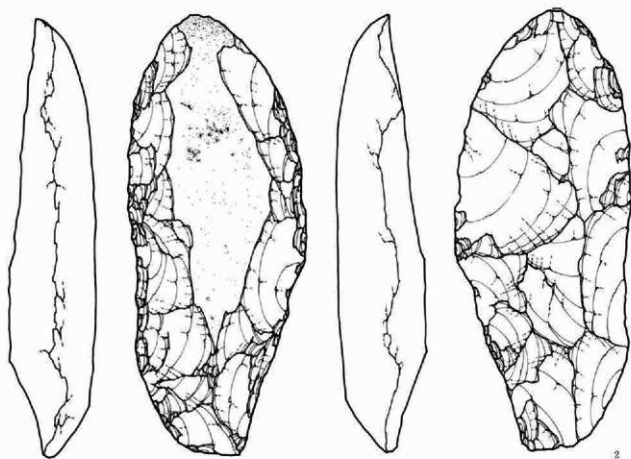
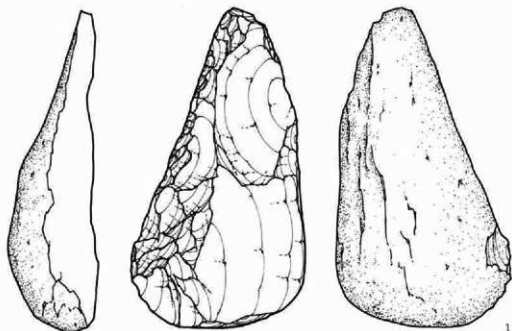
第14圖 出土石器(5)



第15図 出土石器(6)

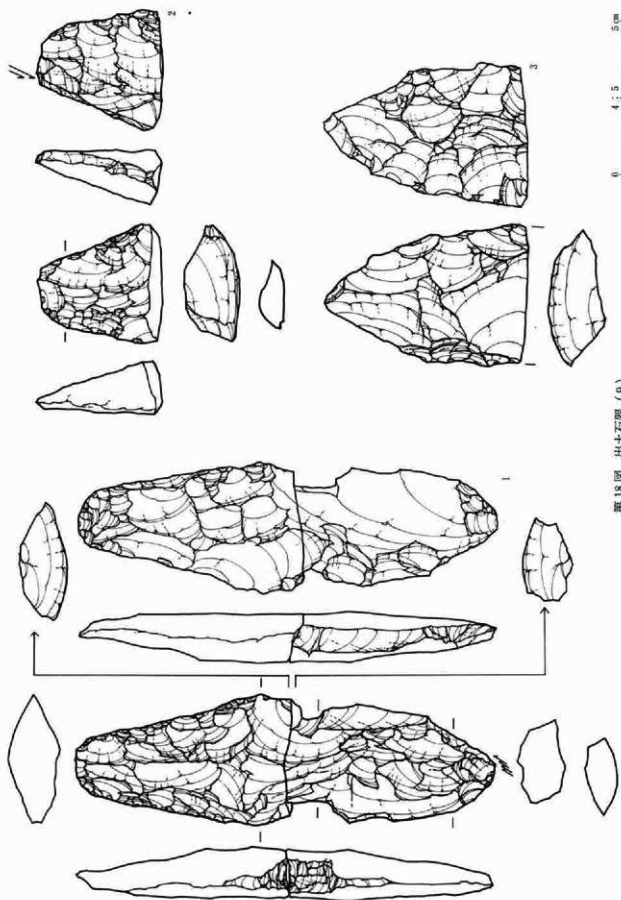


第16図 出土石器(7)

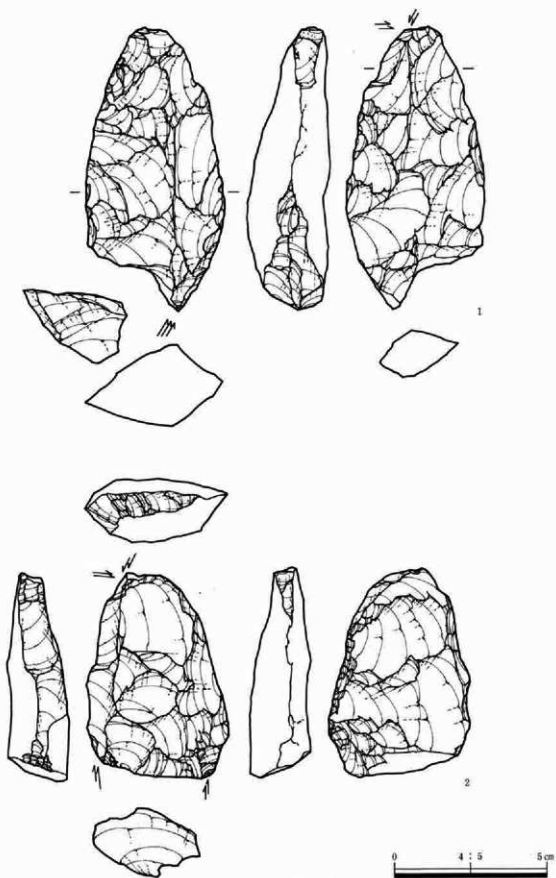


第17図 出土石器(8)





第18圖 出土石器(9)

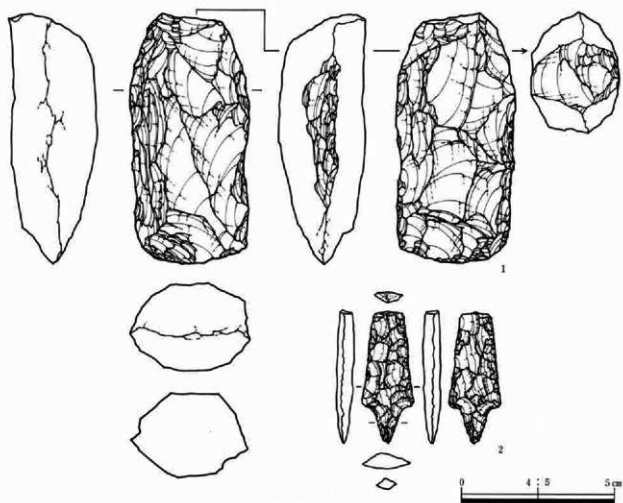


第19図 出土石器(10)

干打窟と認定していい状態が見られ、多分に下半の欠損部分を打面に剝離している可能性が高い。第19図2は、1と同様に先端部分、及び、石器基部の2ヶ所に櫛状剝離を施している。剝離面の切り合い関係からみて、中央付近の欠損部分を打面に剝離を施した後で、先端部分の剝離に移行している。櫛状剝離の在り方は他の資料とも若干の相違が見られ、また、各々の部位で見ても異なる。即ち、この資料に限れば、器体中央部分の櫛状剝離は側縁に限らず周辺にも剝離が及び、更に側縁から器体長軸に直交する方向にも櫛状剝離を施す。また、先端部分には側縁に剝離を施す以外にも側縁部分を打面に剝離を施し、この部分の剝離の在り方は1の剝離と全く一致している。

槍先形尖頭器・III類の最大の特徴は、器体中央付近、

及び、石器の先端部分に施す櫛状剝離と言える。最も注意しておくべき点は、当該資料は総て器体中央付近で破損した資料であるということで、製作段階の差に関係なく槍先形尖頭器の形状を保つものには、この種の剝離は見られない点は注意されよう。即ち、以上の事実は槍先形尖頭器・III類に限り施す櫛状剝離は、少なくとも器体の厚味を除去する目的で施す剝離とは違う可能性を示しているようにも思える。



第20図 出土石器(11)

## II 検出した遺構と遺物

### 打製石斧（第20図1）

1点のみ出土している。石器の形状は左右の側縁が平行し、「短筒形」を呈する。刃部は平盤状を呈し、片刃に近い。石器の断面形状は台形状に近い。剥離が全面を覆い、刃部裏面には側縁と並行する特徴的な剥離を施している。素材形状は不明だが、加工量が多く多分に当該段階に特有な形態を有している。石器上半部分を欠損する可能性が高く、再生を試みている。

問題は製作地点と共存関係だが、現状では出土切片には接合関係が見られないこと、また、母岩分類が難しいため、この地点で製作した確たる根拠は極めて乏しい。が、一方で出土資料には使用痕が乏しいこと、石器再生を試みることから判断して、遺跡製作の石器と見られよう。この種の石器は概して小形例が多く、ある意味では出土資料も完成状態と言えるわけだが、基部の作出状態は完成状態には遠い。ある程度形状が完成した状態で持ち込み、最終的に部分的な加工を施し、石器を製作・使用する可能性も考慮しておくべきかもしれない。黒色頁岩。

### 有茎尖頭器（第20図2）

1点のみ出土している。左右の側縁とも身の部分は直線的に推移し、返し部は器軸に対し直に交わる。茎は概ね三角形形状を呈し、器体長に占める茎部長の割合は概して低い。先端部分を欠損している。石器に残る

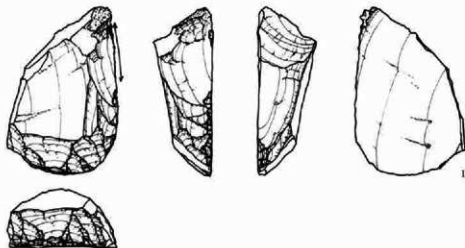
加工状態・石器形状から判断して、確実に搬入石器と思える。黒色頁岩。

### 掻器（第21図1）

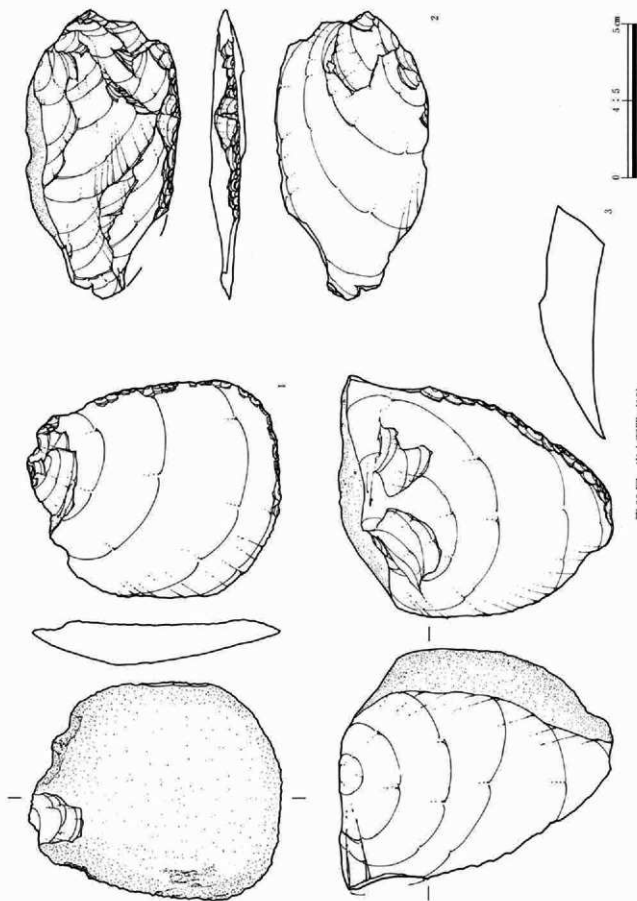
1点のみ出土している。上面の礫面を打面に、厚い板状剥片を二分した一方を石器の素材に用いている。機能部は右側縁と剥片端部の2ヶ所になっている。剥片端部、及び、右側縁の中間部に至る加工は綿状剥離を呈し、使用痕が著しい。黒色安山岩一7。

### 削器（第22～24図、第25図1）

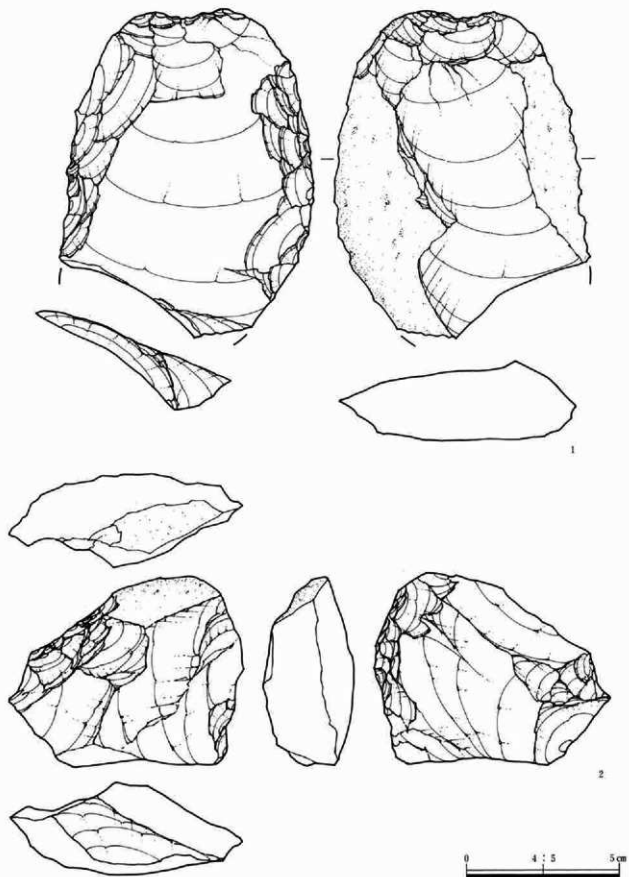
9点が出土している。礫面を残す例が多く、剥離の初期に生じる大形剥片の他、槍先形尖頭器を製作する初期の剥片を用い、側縁形状の良好な部分に刃部を作出している。刃部は微細な剥離を施す例（第22図1・2）と、少し粗い加工を施す例（第23図1、第24図1）、掻器に近い刃部角度を持つ例（第24図2・3）が出土している。このほか、槍先形尖頭器の製作時に生じる剥片を削器に転用・利用した例も少数だが、2点（第23図2・第25図1）出土している。縦長剥片は左右の側縁に刃部を、横長剥片の場合には剥片端部に刃部を作出する。以上の剥片形状と刃部位置の傾向は通例に漏れず、一般的な在り方を示している。横長剥片より縦長剥片を選択する傾向が高い。9点とも黒色頁岩を用いる。



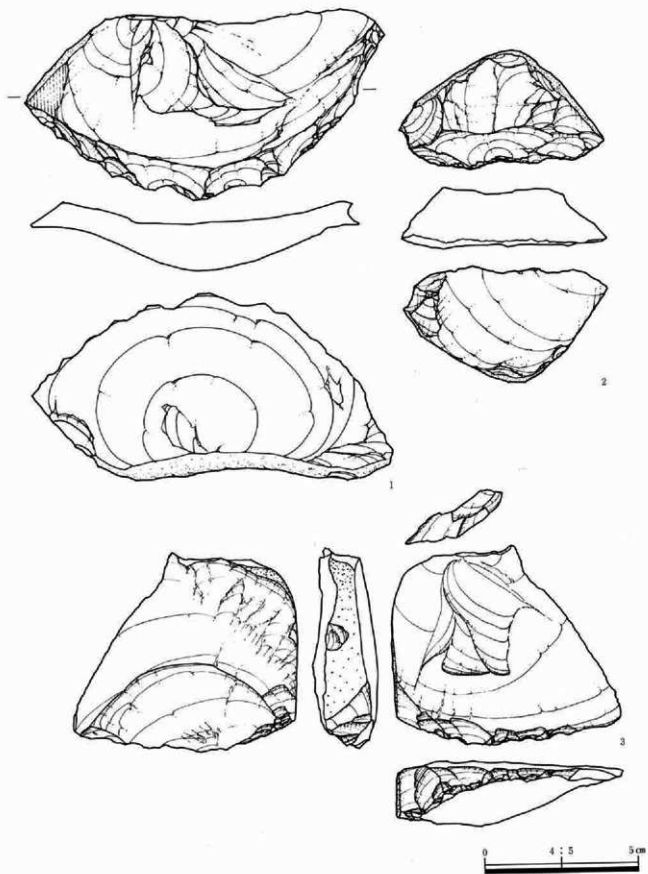
第21図 出土石器(12)



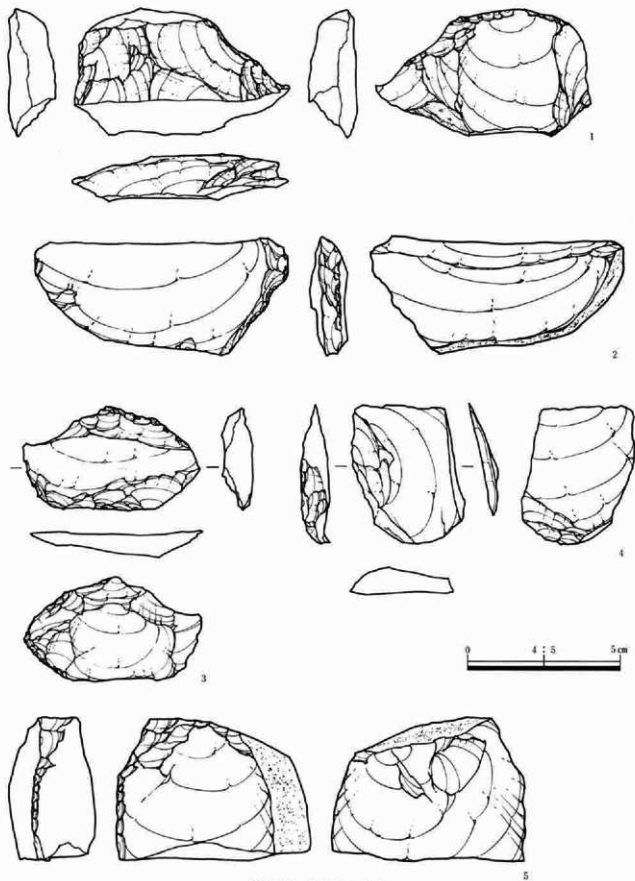
第 22 図 出土石器 (13)



第23図 出土石器 (14)

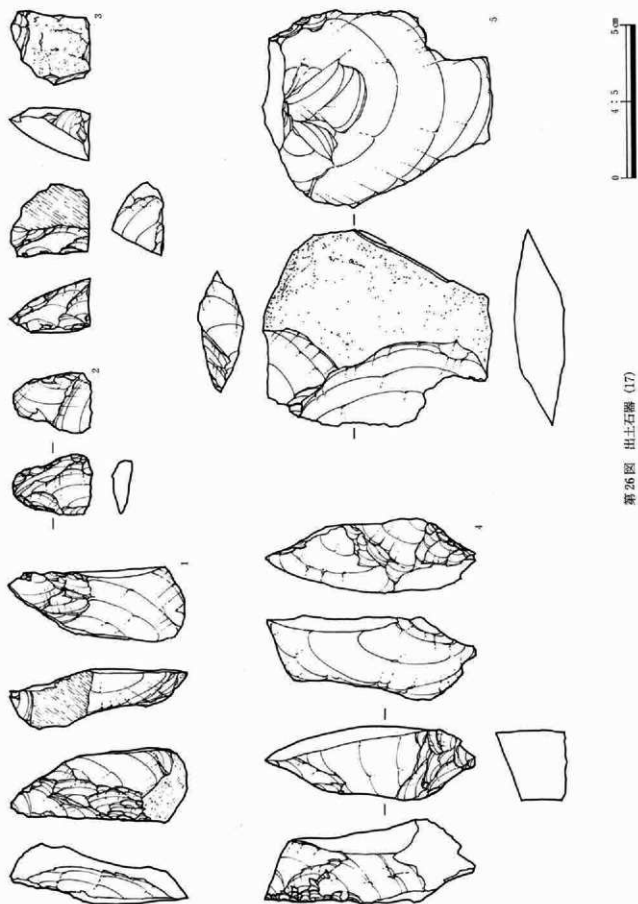


第24圖 出土石器 (15)



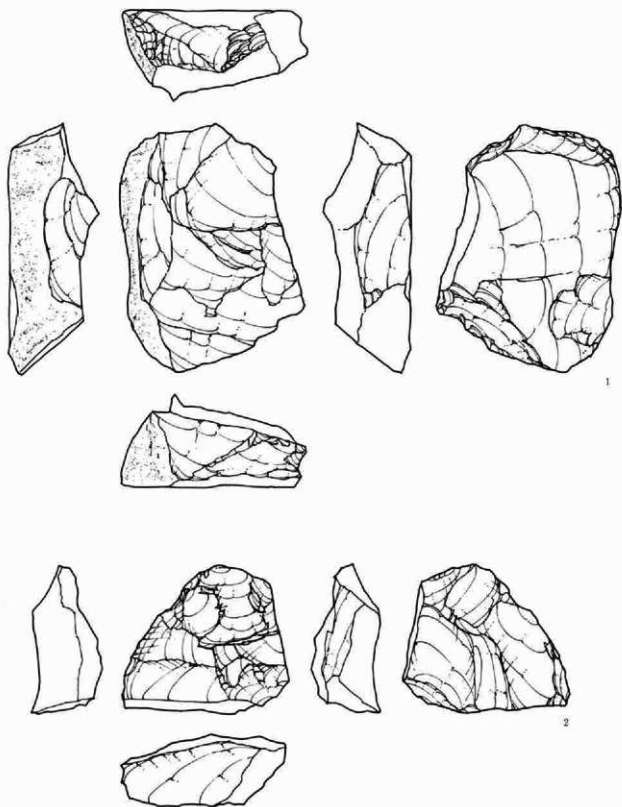
第25図 出土石器(16)



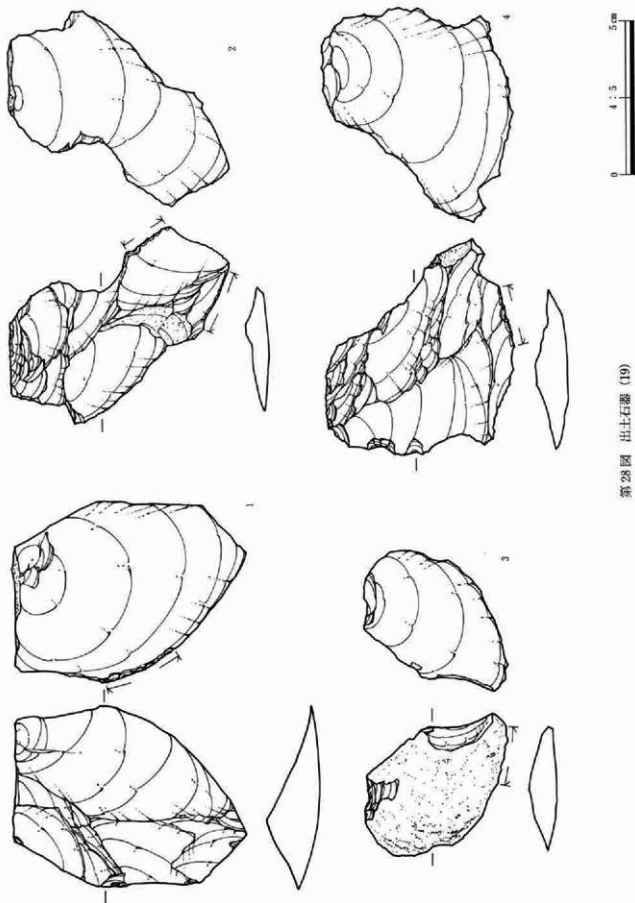


第26圖 出土石器(17)

II 検出した遺構と遺物

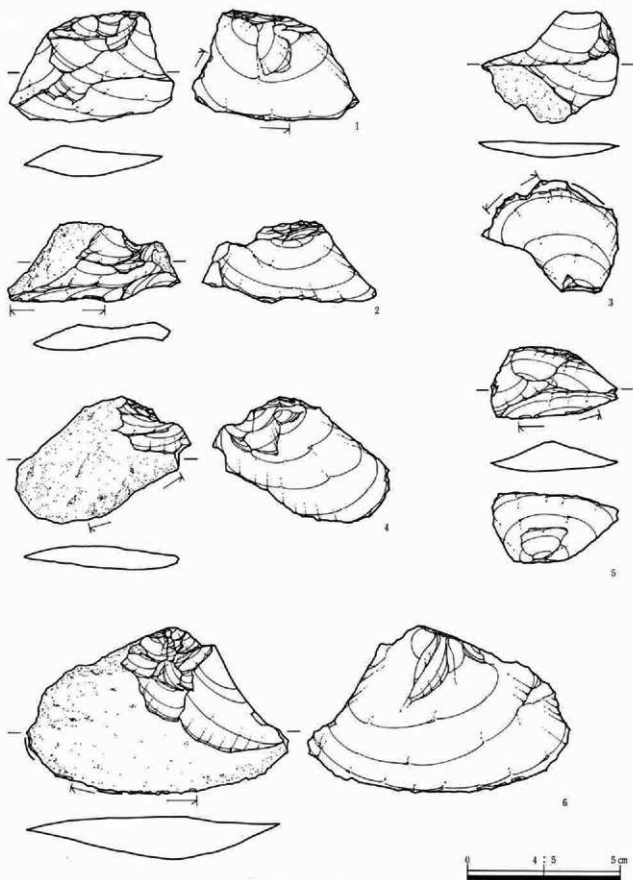


第 27 図 出土石器 (18)

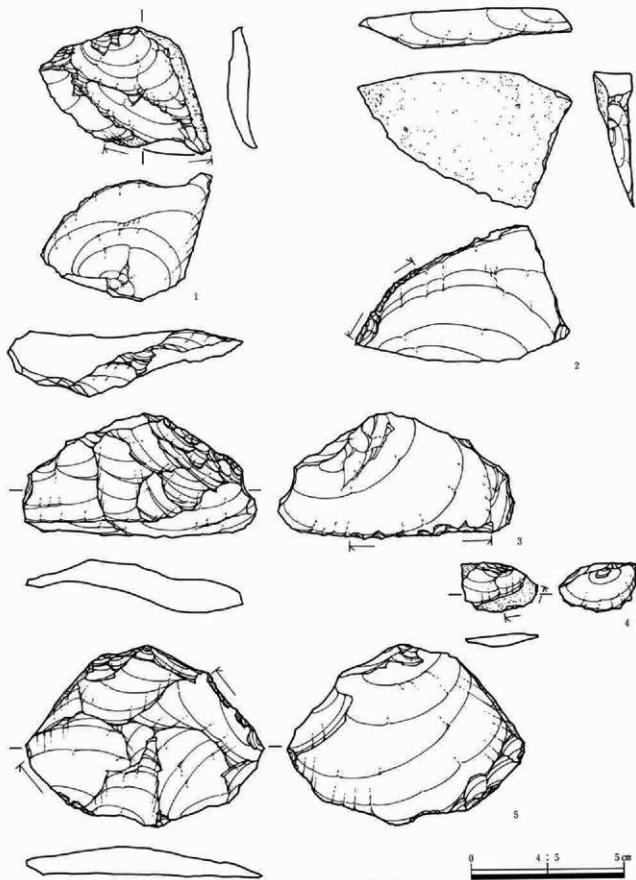


第28圖 出土石器(19)

II 検出した遺構と遺物

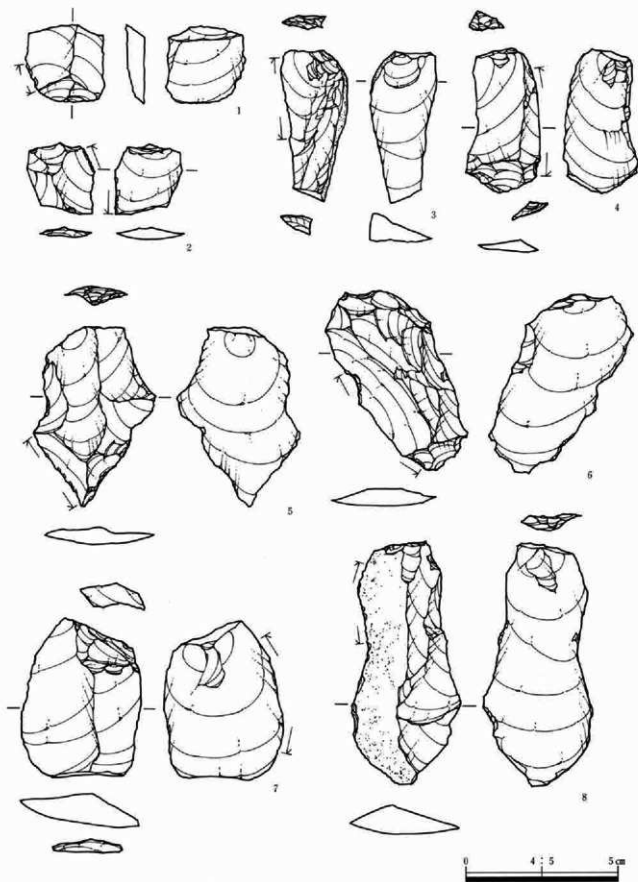


第29図 出土石器(20)

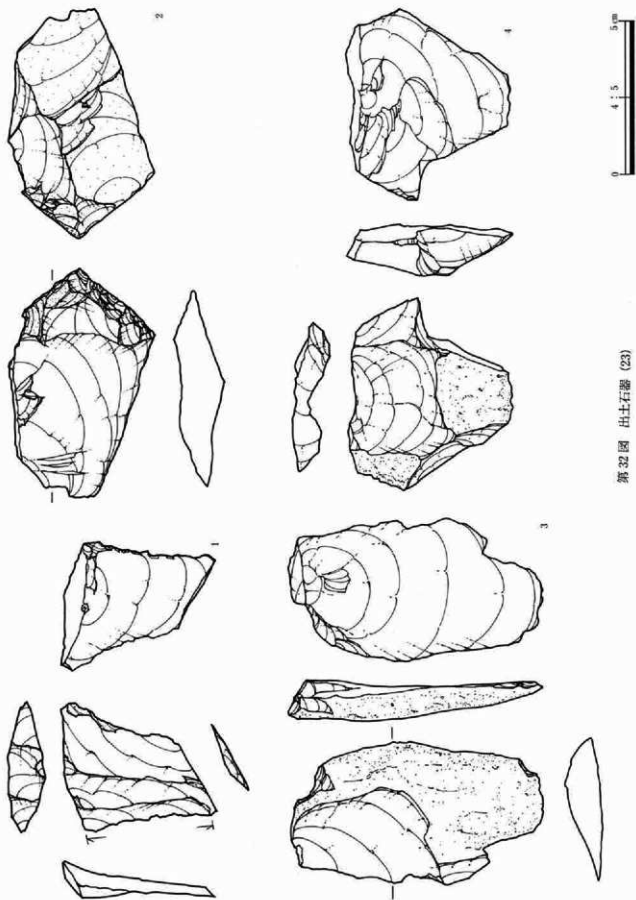


第 30 图 出土石器 (21)

II 検出した遺構と遺物



第31図 出土石器(22)



第32圖 出土石器(23)

## 加工痕ある剥片 (第25図2~5、第26・27図)

15点が出土している。礫面を残す剥片剥離の初期に生じる剥片を用いる例と、槍先形尖頭器の製作段階に生じる剥片を用いる例が出土している。前者の例には第25図2・5、第26図5の他、第27図1も剥離初期に生じる剥片を利用する可能性が残る。概して、削器に近い機能を意識している。一方、圧倒的に多い後者の例には加工状態の似る例(第26図1・4)も存在するわけだが、概して加工意図の不明な例が多い。

## 使用痕ある剥片 (第28~32図)

31点が出土している。剥離の初期に生じる、礫面を部分的に残す剥片と、槍先形尖頭器の製作段階の初期に生じる剥片の両タイプが出土している。前者は量的に少なく(第29図4・6、第30図2、第32図1・3)、黒色安山岩に多い。後者の例が圧倒的に多く、主体を占めている。通例に漏れず、使用部位は縦長剥片の場合には左右の側縁に、横長剥片の場合には剥片端部に位置する例が多い。

## 石核 (第33~35図)

10点が出土している。大形剥片を素材に、表裏両面に剥離痕を残す槍先形尖頭器の素材と思える例(第33・34図)と、原石の小口部分から剥離を行う例(第35図)或は、分割礫を用い横長の剥片を作出する例(第60図、接合資料-100)の他、大形剥片を二分し、分割面を打面に側縁部で小片を作出する例(第42図、接合資料-53)が出土している。石核は3種に分類され、前者を石核のI類、II類に、後者の例を石核のIII類と扱っておきたい。

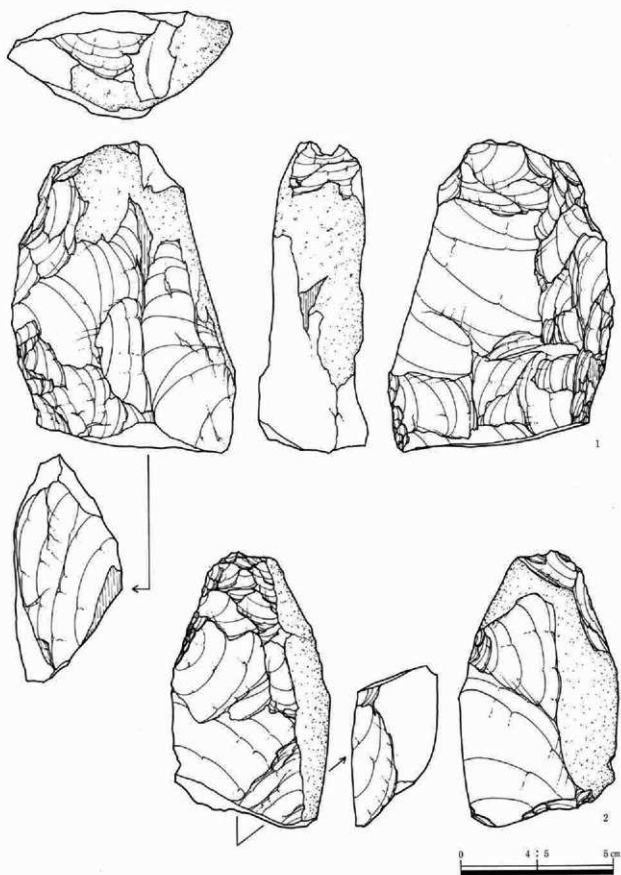
I類の石核は、4例(第33・34図)を図示した。1例を除き、総て大形剥片の表裏両面に剥離痕が見られ、概ね槍先形尖頭器の粗削り段階を示すと考えている。側縁部分に剥離が集中する例(第33図1、第34図1)が多く見られ、槍先形尖頭器の製作状況を示す一方、先端の部分に剥離が集中する例(第33図2)も全く見られないわけではない。第34図2は大形の剥片が中央付近で欠損し、欠損部分に若干剥離が加わる例であり、

本類の範疇で把えるより、寧ろIII類の範疇で把え得る可能性も否定できない資料と考えている。が、1例を除きIII類に分類可能な石核は存在せず、石器群に安定して組成するとはいえないため、ここでは形状を重視して、I類の石核と見た。このほかにも、接合資料の中にはI類に分類可能な例(第59図1・3)が見られ、参照されたい。

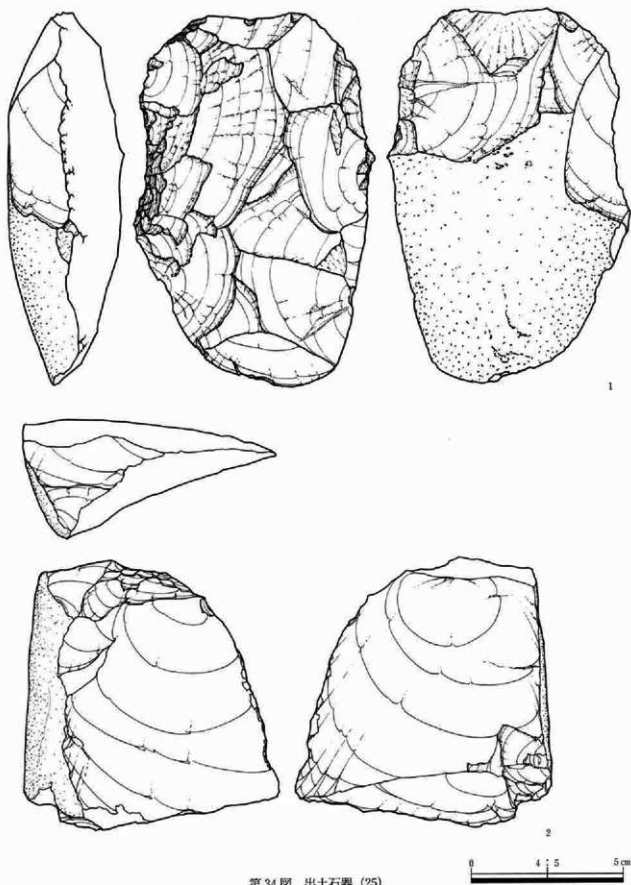
II類の石核は、単独出土の1例(第35図1)を図示した。このほかにも、分割礫を素材に分割面を打面に剥離を行う例や、剥離の意図は不明だが厚手の剥片を用い剥離を行う例・接合資料-74(第58図)や、接合資料-26(第59図)が出土している。第35図1は原石の小口部分を打面に幅広剥片を剥離する例で、剥離が初期段階で終了しているため、剥離の意図を理解するうえでは極めて情報が不足しており、不明な点が多い。そのため、これ以後の剥離が槍先形尖頭器の製作を行う可能性も否定できない。が、一方では削器以下に見た剥離の初期に生じる剥片を使う例が見られ、更には槍先形尖頭器の製作は大形の剥片から製作する場合が圧倒的に多く、このことから考えてII類の石核に分類可能と判断した。

III類の石核は1例(第42図、接合資料-53)が出土しているのにすぎない。本例が示す剥離手順は以下の順に展開している。まず、礫面を片側に残す大形剥片を剥離し、剥片を中央部分で二分する。更に、粗い加工を周辺に施し、概ね、この段階で石核の形状作出を終えている。剥離は石核の側縁部分で行われ、5枚を超える小片を剥離して作業を終えている。本例の場合、打面調整は見られない。既に述べた通り、本例は1例が出土したのにすぎないため、不明な点が多い。これ以外に適当な器種には器種が想定可能だが、何度にも及び剥離を試みる状態は器種の機能部作出とは大きく異なるようにも思えたため、ここでは石核と扱った。槍先形尖頭器・III類の側縁に特異な剥離を施す例と共に、本例は側縁部分の剥離を行う点では一致しており、注目されよう。先に述べた槍先形尖頭器・III類の側縁剥離も装着を有利に導く加工と考えるには加工が甘く、装着するには不充分ともいえる。

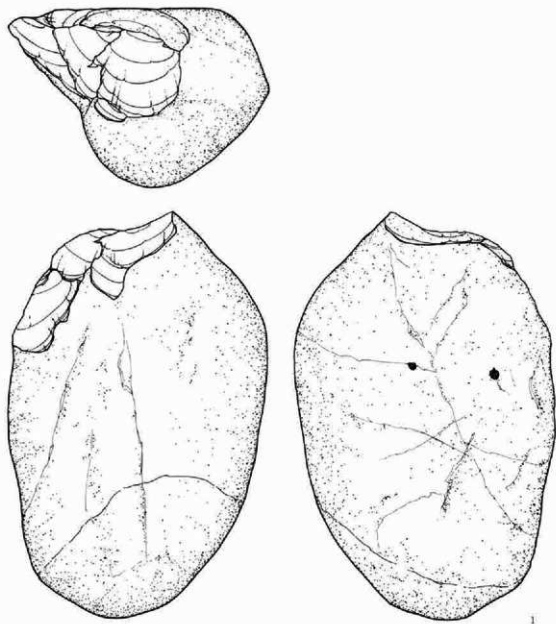




第33圖 出土石器 (24)



第34図 出土石器(25)



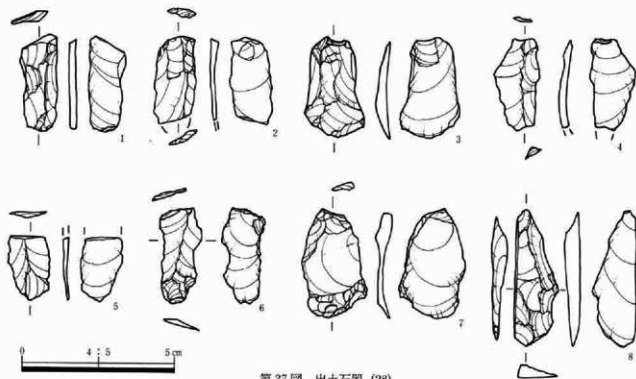
第35圖 出土石器(26)



II 検出した遺構と遺物



第36図 出土石器 (27)



第37図 出土石器 (28)

## 小剥片 (第36・37図)

33例を図示した。散えて項目を立て図示した意図は、これまで述べてきた槍先形尖頭器・Ⅲ類や石核・Ⅲ類が、小剥片を目的に剥離する可能性を残しているからでもある。

掲載資料は出土資料の93%を占める剥片・砕片から形状に留意して任意に選び出したわけだが、掲載資料を見る限り、目的の剥片は見られないようにも思える。即ち、槍先形尖頭器・Ⅲ類や石核のⅢ類から想定可能な剥片の形状を考えてみた場合、以下の特徴を有する小剥片が存在していたためでもある。

まず、槍先形尖頭器・Ⅲ類の剥離で生じる剥片には、「男女倉技法」より作出する剥片と同様な形状の剥片が存在しているはずだが、槍先形尖頭器の側縁部を取り込む「初期削片」や、槍先形尖頭器の一部を断ち切る削片は出土資料の中には殆ど存在せず、多少なりとも可能性を残す資料は1例(第37図8)が出土しているのとどまる。以上の状態は掲載資料の形状にも良く示され、打面に微細な剥離痕を取り込む点状打面を持つ例も多く、大部分が槍先形尖頭器の製作に伴う剥片と理解されよう。

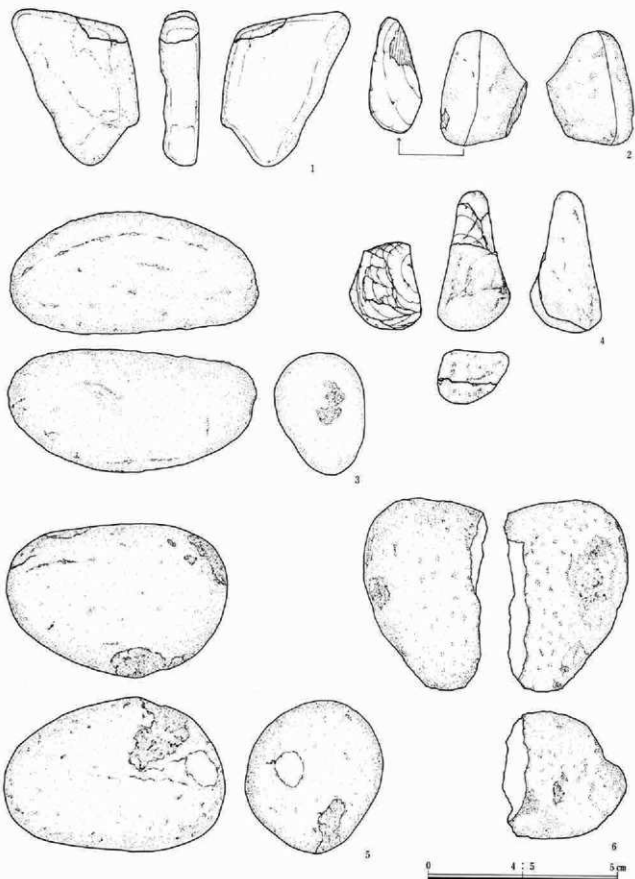
## 敲石 (第38図、第39図1・3)

13点出土している。粗粒安山岩が8点、石英閃緑岩が3点、頁岩、閃緑岩が各1点と、粗粒安山岩を多く用いる。やや大形の例と小形の2種が出土している。

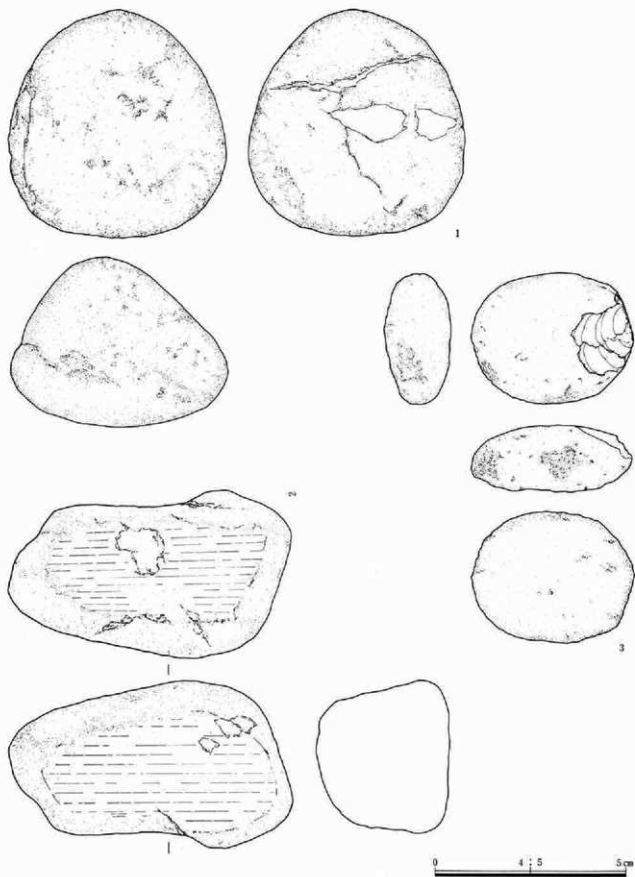
第38図1(接合資料-80)は、礫と礫片が接合し、完形の礫に復元した。資料には明確な打痕に乏しく、分類が妥当か検討を要す。ここでは礫に分類したわけだが、礫の破損は重視されよう。溶結凝灰岩。第38図2・4は、小形の円礫を用い、小口部分に打痕を持つ。2点とも中央付近から縦位に欠損している。2(接合資料-78)は粗粒安山岩、4(接合資料-79)は頁岩を用いる。第38図3・5は大形の円礫を用い、小口・側縁部分に打痕を持つ。3は石英閃緑岩を、5は粗粒安山岩を用いる。第38図6は、側縁部分に打痕を持ち、中央部分から欠損している。粗粒安山岩。第39図1は大形の礫を用い、側縁に打痕を持つ。第39図3は小形の礫を用い、小口・側縁に打痕を持つ。粗粒安山岩。

## 磨石 (第39図2)

1点が出土している。微妙だが、表裏両面に摩擦痕が生じている。



第38図 出土石器 (29)



第39圖 出土石器(30)

## 接合資料

接合作業の結果、90例229点（礫類の接合・3例を含む）が接合している。接合率は10%にも満たず、概して良好な接合資料は乏しい。それでも槍先形尖頭器の製作状況を示す資料も得られ、以下に概要を示していきたい。

### 接合資料—64（第40図）

総計3点からなる接合資料で、槍先形尖頭器1点、剝片2点が接合している。下半部に剝離を加えてから先端部を剝離した時点で、剝離を終えている。槍先形尖頭器は厚く、未だ製作の初期段階を示している。

### 接合資料—65（第40図）

槍先形尖頭器と剝片が接合している。大形剝片の周辺に加工を施す。側縁には加工の施されない部分を大きく残しており、刃部を意識している可能性も強く、分類が妥当か検討を要す。

### 接合資料—66（第40図）

槍先形尖頭器と剝片が接合している。ある程度まで加工が進み、剝離が器体全面を覆う。剝片は側縁部分に接合している。その後も若干の側縁加工が行われ、最終的に先端部分の剝離に失敗し、剝離を終えている。

### 接合資料—69（第40図）

総計3点からなる接合資料で、槍先形尖頭器と剝片が接合している。薄手の大形剝片を素材に、周辺加工を主に施し、製作を試みている。側縁部分の剝離で中央付近から欠損している。なお、上半部分は再度加工を施され、器種の転用を試みている。

### 接合資料—70（第41図）

槍先形尖頭器と剝片が接合している。裏面に礫面を大きく残す大形剝片を素材に、周辺部分に加工を施す。製作段階の初期を示す好例と言える。剝片は下半部分に接合しており、その後も側縁の加工を試みている。

通例に漏れず、本例にも打面側を主に剝離する傾向が指摘されよう。

### 接合資料—52（第41図）

大形剝片の中央付近で欠損した2点が接合している。裏面側の側縁部や下半部分には大きな剝離が加わり、石核のI類に分類されよう。槍先形尖頭器の製作初期に破損している。なお、下半部分には微細な加工も見られ、器種の転用を試みている可能性も指摘されよう。

### 接合資料—51（第41図）

石核と剝片が接合している。剝離は裏面に礫面を大きく残す大形剝片の打面部分や側縁に集中している。石核のI類に分類され、槍先形尖頭器の製作初期段階に欠損している。

### 接合資料—68（第42図）

先端・側縁に種状剝離を施す槍先形尖頭器・2点が接合している。剝離の詳細を見れば、以下に理解されよう。

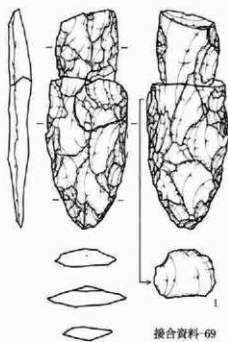
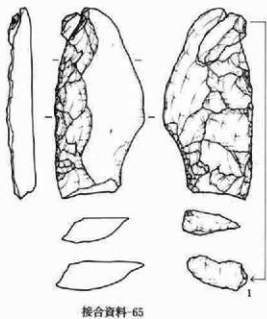
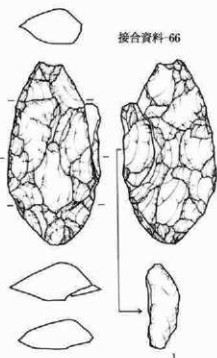
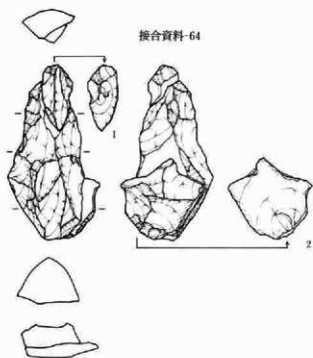
槍先形尖頭器の母型作出 → 中央付近で折れ（破損か、折断か不明） → 上半部分（折れ面から側縁に種状剝離を施す）・下半部分（折れ面から側縁に種状剝離を施す → 先端部分に種状剝離を施す → 先端裏面に微細な剝離を行う）の順で作業を進めている。上半部分の側縁の微細な加工と種状剝離の前後関係は直接の切り合い関係は見られないため、不明確である。

本例の最も大きな特徴は先端・側縁の種状剝離だが、この種の剝離が示す性格は不明な点が多い。想定可能な考え方には、先端部分の剝離には男女倉技法的な剝離や小形剝片の剝離、このほかには彫器の刃部作出、器体の厚味を減じる剝離が想定され、折れ面の剝離は小形剝片の剝離、彫器の刃部作出、柄に装着する目的等々が想定されよう。

### 接合資料—5（第42図）

総計3点からなる接合資料で、槍先形尖頭器と剝片

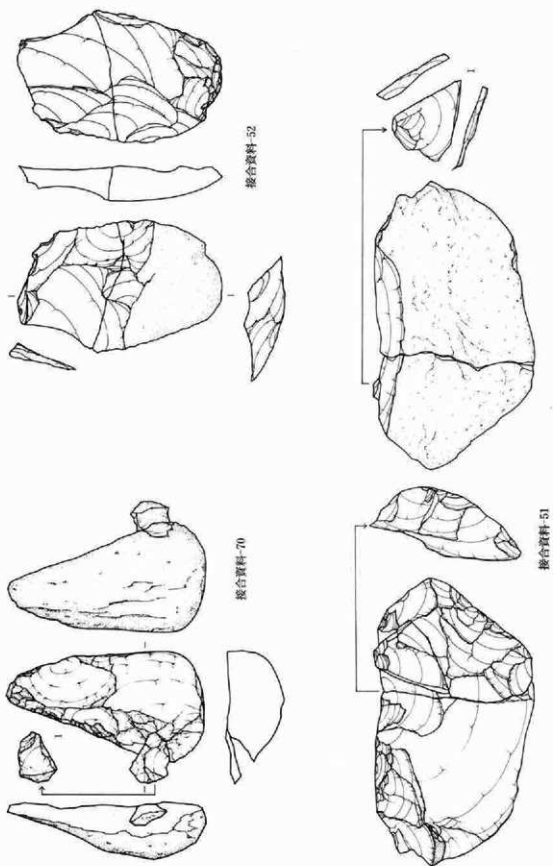




0 1 : 2 10cm

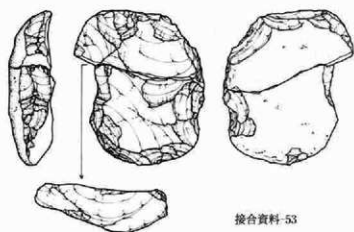
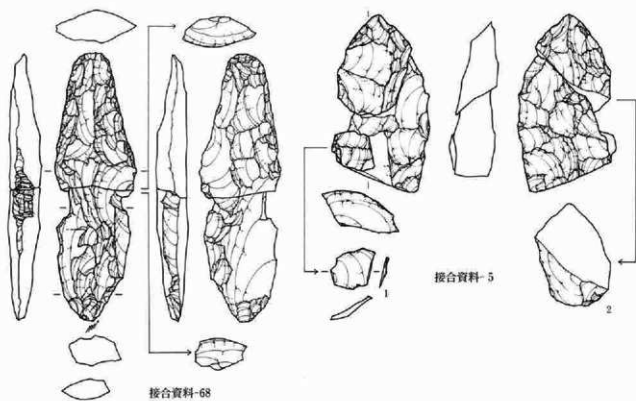
第 40 図 接合資料-64~66・69

II 検出した遺構と遺物



第41図 接合資料-51・52・70





第 42 圖 接合資料—5・53・68

が接合している。槍先形尖頭器の側縁加工の段階で大きく先端部分を欠損しており、再び先端部分の作出を意図して加工を進めている。本例にも先端部分に櫛状剥離が施され、この場合、器体の厚味を減じる意図を強く感じる。

#### 接合資料—53 (第42図)

2点の石核が接合している。大形剥片を中央付近で折断し、石核の素材を作出している。その後の剥離は、周辺加工→折断部分から側縁に櫛状剥離を施している。側縁の剥離は多数に及び、上半部分で6枚、下半部分で8枚の小形剥片を剥離している。

この種の剥離は槍先形尖頭器・III類の側縁剥離に通じる特徴を有する。槍先形尖頭器の場合には何点か浮かぶ剥離の性格も決定的根拠を欠いたわけだが、本例は槍先形尖頭器の製作とは大きく異なり、少なくとも器体の整形が目的とはいえない、と判断されよう。

#### 接合資料—15 (第43図)

総計6点からなる接合資料で、槍先形尖頭器2点と剥片・砕片4点が接合している。大形の剥片を素材に用い、表面には礫面を残している。剥離は大形剥片の打面側で主に進み、やや大形の剥片(1)や砕片(4)を剥離している。槍先形尖頭器は剥片端部に近い薄手の剥片の周辺部分に加工を施し、作出を試みている。

表面の礫面や裏面の第一次剥離面から考えて、長さ15cm・幅5cm・厚さ1.5cm程度の剥片が想定され、極めて薄い剥片を用いている。

#### 接合資料—16 (第44図)

7点からなる接合資料で、槍先形尖頭器1点と剥片6点が接合している。側縁に礫面を残す大形の剥片を素材に用いている。接合資料—15とは異なり、剥離は大形剥片の端部で行われ、やや大形の剥片(1~3)を剥離し、打面側で槍先形尖頭器の製作を試みている。槍先形尖頭器は、側縁加工の段階で中央部分から欠損している。

接合資料—15は剥離を打面側から、接合資料—16は

反対側から行う点で異なるわけだが、剥離は最初大胆とも思えるほど、大きく剥離している。

#### 接合資料—1 (第45図)

5点の剥片が接合している。打点は左右の側縁に見られ、槍先形尖頭器の製作状態を良く示している。概ね、剥離は二周しており、1~4の剥片の打点より、5の打点は内側に位置する。黒色頁岩—1に分類。

#### 接合資料—19 (第45図)

2点の剥片が接合している。剥離は左右の側縁から対向するよう行われ、比較的打点間の距離は近接しており、槍先形尖頭器の先端部分の剥離と見られよう。

#### 接合資料—9 (第46図)

3点の剥片が接合している。表面には大きく第一次剥離面を残していること、やや大形の剥片を剥離していることからみて、剥片剥離の初期段階を示す資料と見られよう。3の側縁には微細な使用痕が生じている。黒色頁岩—6に分類。

#### 接合資料—73 (第46図)

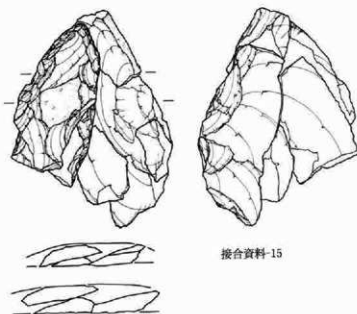
3点の剥片が接合している。剥片は平坦な打面から剥離され、槍先形尖頭器の製作に伴う剥片とは異なる可能性も指摘されよう。3の剥片の側縁部分には微細な使用痕が生じている。黒色安山岩。

#### 接合資料—60 (第47図)

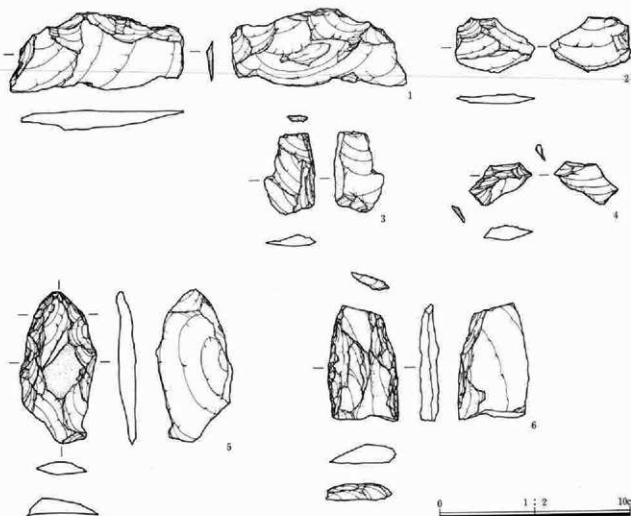
3点の剥片が接合している。剥離は打点を大きく移動しており、また、接合状態で剥片の表面には大きく第一次剥離面を残していることから、槍先形尖頭器の製作初期の段階を示している。

#### 接合資料—40 (第47図)

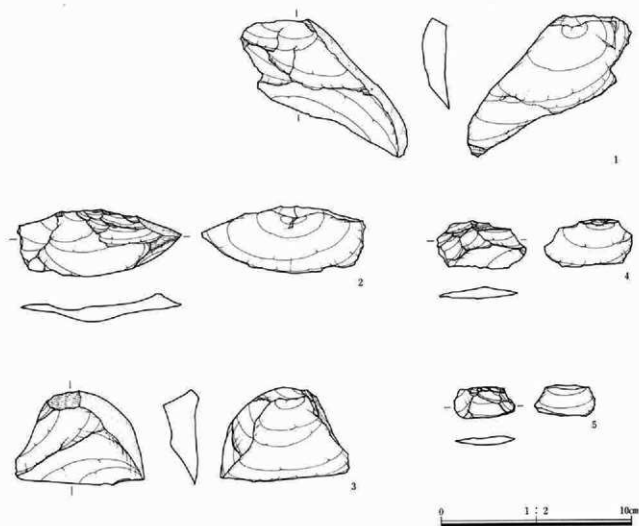
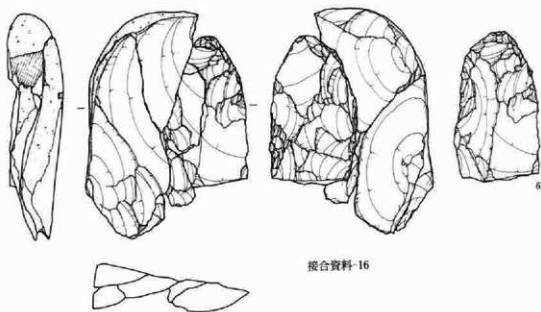
3点の剥片が接合している。剥片の打点は左右に別れて側縁に位置する。剥片は平坦打面より剥離する。



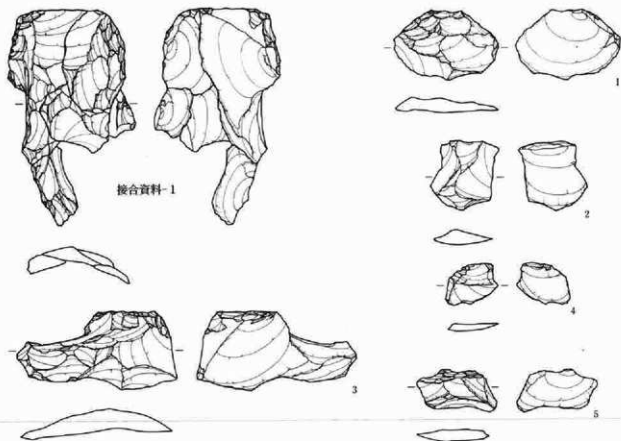
接合資料-15



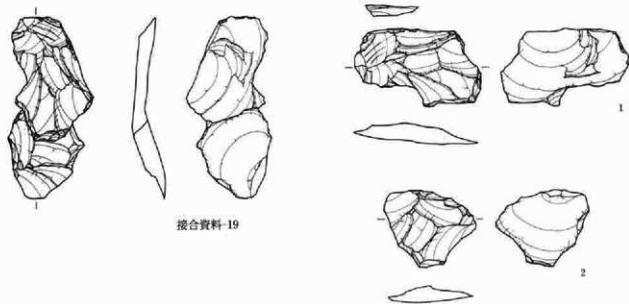
第43圖 接合資料-15



第44図 接合資料-16



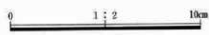
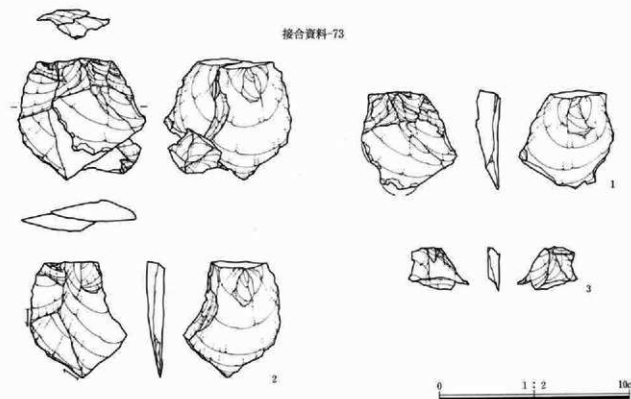
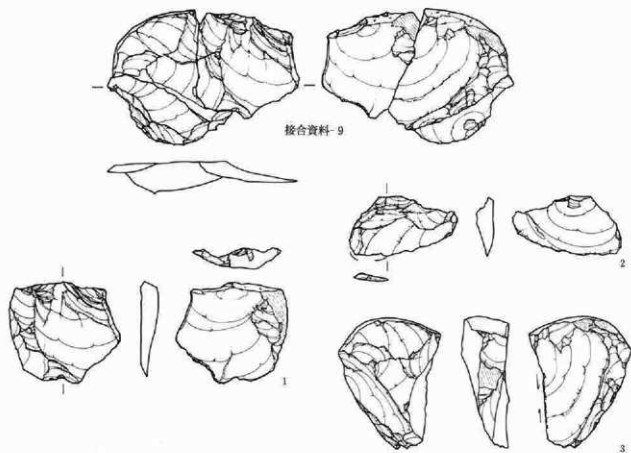
接合資料-1



接合資料-19

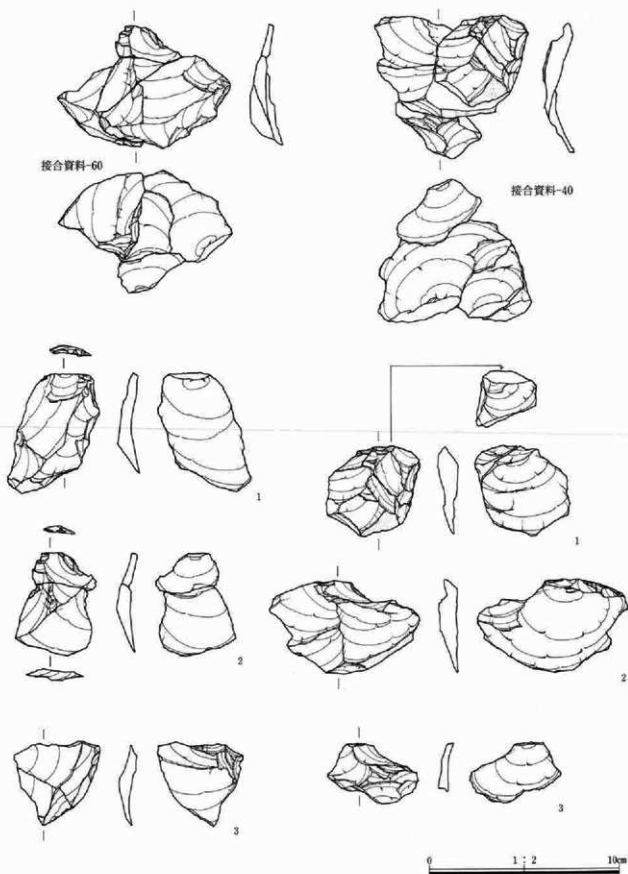
0 1 : 2 10cm

第45図 接合資料-1・19



第46図 接合資料-9・73





第47圖 接合資料—40・60

## II 検出した遺構と遺物

### 接合資料—10 (第48図)

2点の剥片が接合している。小片の接合だが、左右両端に打面を持つ。同一母岩に多数のポイント・フレイクが存在することから、槍先形尖頭器の製作段階に生じる例と考えている。頁岩—1に分類。

### 接合資料—8 (第48図)

3点の剥片が接合している。側縁に礫面を、表面に広く剥離面を残す。多分に槍先形尖頭器の製作初期に生じる剥片と見られよう。黒色頁岩—5に分類。

### 接合資料—50 (第48図)

2点の剥片が接合している。2点とも同一方向から剥離しているわけだが、打面の位置は大きく異なり、剥離段階は相違している。

### 接合資料—41 (第49図)

5点の剥片が接合している。1は他の剥片とは工程が異なり、個体を遠く作業が展開している。剥離は、槍先形尖頭器の製作初期の段階を示している。

### 接合資料—30 (第49図)

2点の剥片が接合している。本例は同一方向の剥離だが、打面の位置が大きく異なり、未だ大形の剥片を剥離している。接合資料の表面には広い平坦な剥離面を残しており、槍先形尖頭器の製作初期の段階を良く示している。

### 接合資料—3 (第50図)

6点の剥片が接合している。1～4と5・6の剥片は打面の位置が異なること、全体の剥離状態からみて、ある程度、槍先形尖頭器の製作が進んだ段階の資料と思える。黒色頁岩—3に分類。

### 接合資料—18 (第50図)

2点の剥片が接合している。2点とも同一方向から剥離され、剥片(2)の側縁・剥片端部には微細な加工を施す。

### 接合資料—24 (第50図)

2点の剥片が接合している。2点とも小形で、同一方向から剥離している。剥離の意図は明確ではない。

### 接合資料—31 (第51図)

2点の剥片が接合している。剥片には礫面が大きく残る。2点とも点状の打面形状を呈しており、多分に槍先形尖頭器の製作初期に生じる剥片の特徴を良く示している。

### 接合資料—23 (第51図)

2点の剥片が接合している。2点とも礫面を大きく残し、点状の打面形状を呈す。接合資料—31と同様に槍先形尖頭器の製作初期に生じる剥片と見られよう。1は側縁に欠こうが加わり、削器に分類した。

### 接合資料—22 (第51図)

3点の剥片が接合している。3点とも縦長で、良好な形状を呈している。剥片は平坦打面から作出され、この点では槍先形尖頭器の製作に伴い作出する剥片が、明確ではない。

### 接合資料—61 (第52図)

2点の剥片が接合している。2点とも同一方向から剥離され、点状打面を呈す。剥片の表面には礫面を残しており、槍先形尖頭器の製作初期に生じる剥片と見られよう。

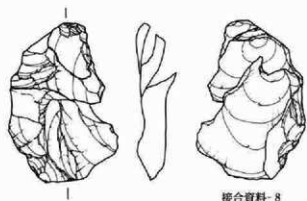
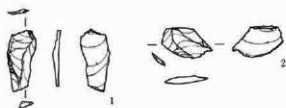
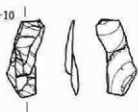
### 接合資料—28 (第52図)

2点の剥片が接合している。2点とも剥片端部には素材の分割面(平坦面)を大きく残しており、剥離の初期段階を示している。

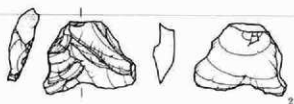
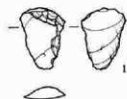
### 接合資料—38 (第52図)

2点の剥片が接合している。2点とも平坦打面より作出している。

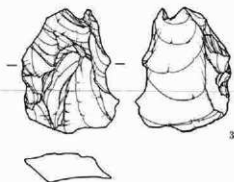
接合資料-10



接合資料-8

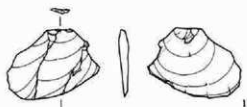
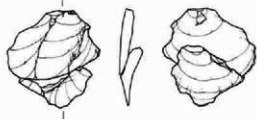


2

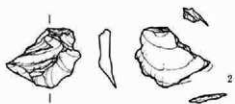


3

接合資料-50



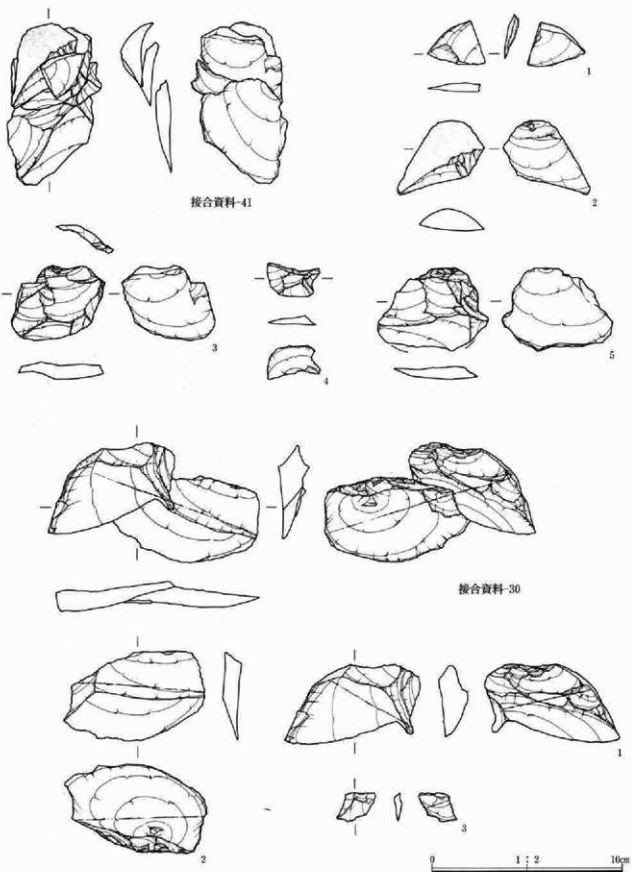
1



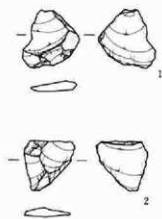
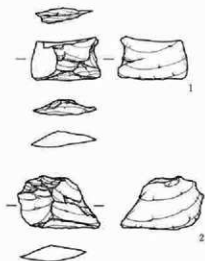
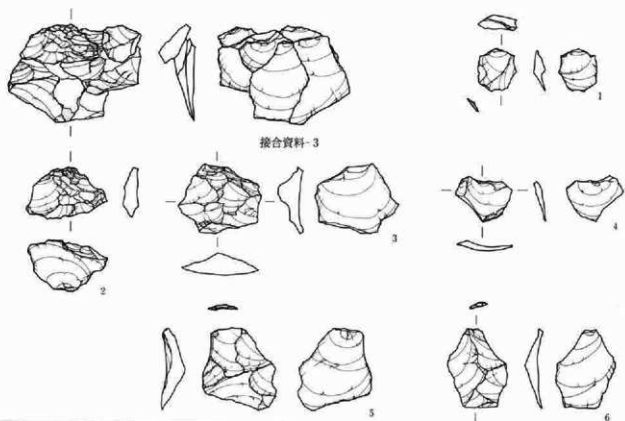
2



第48圖 接合資料—8・10・50



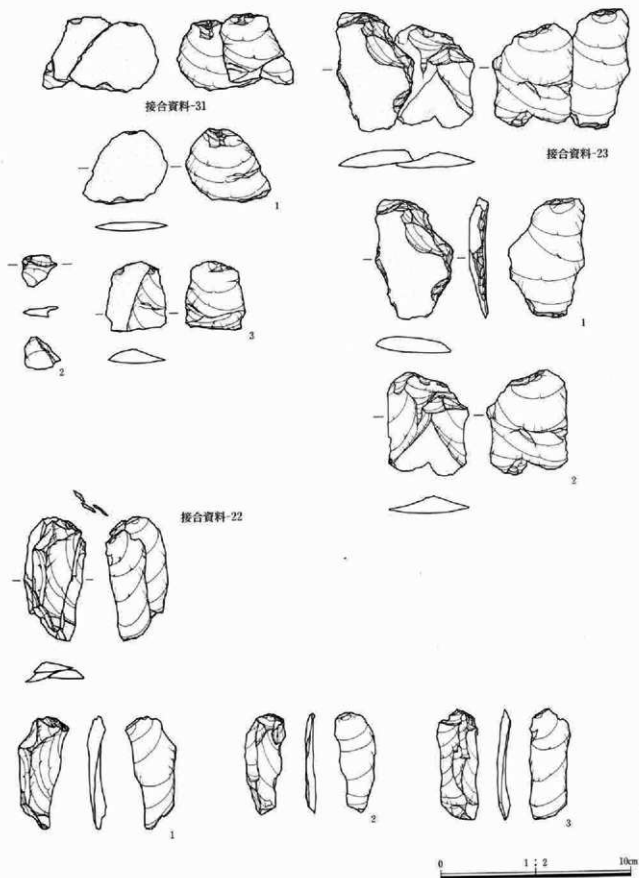
第 49 図 接合資料—30・41



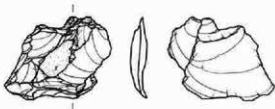
0 1 : 2 10cm

第50圖 接合資料—3・18・24

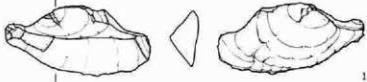
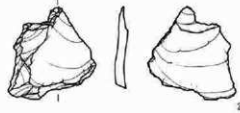
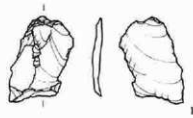
II 検出した遺構と遺物



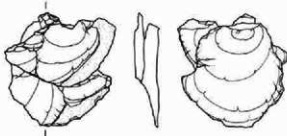
第51図 接合資料-22・23・31



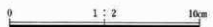
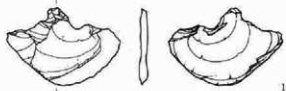
接合資料-61



接合資料-28



接合資料-38



第52圖 接合資料-28・38・61

## II 検出した遺構と遺物

### 接合資料—39 (第53図)

3点の剥片が接合している。やや大形の剥片だが、剥片1・2は礫面を打面に、剥片3は平坦な打面より剥離している。剥片には広く平坦面を残し、剥片剥離の初期段階の状態を良く示している。

### 接合資料—20 (第53図)

2点の剥片が接合している。剥片は打面の位置が大きく異なる。やや大形の剥片(1)には、剥片の端部に使用痕が生じている。

### 接合資料—21 (第54図)

2点の剥片が接合している。剥片は表面に礫面を残し、平坦打面より連続して剥離している。剥片形状は概して不定形である。

### 接合資料—34 (第54図)

2点の剥片が接合している。2点とも、平坦な同一打面より剥離している。

### 接合資料—45 (第54図)

3点の剥片が接合している。3点とも同一打面より剥離され、やや大形の剥片を剥離している。やや大形の剥片(2)は、剥片端部に使用痕が生じている。

### 接合資料—4 (第55図)

2点の剥片が接合している。2点とも礫面を打面に剥離され、剥片形状は概して大きい。1の側縁部には使用痕が生じ、2の側縁部には粗い加工を施している。黒色頁岩—3に分類。

### 接合資料—33 (第55図)

2点の剥片が接合している。2点とも同一打面より剥離され、中央付近で欠損している。打角は90°に近い。

### 接合資料—56 (第55図)

2点の剥片が接合している。剥片は大形で、打点を大きく移動して剥離している。2点とも節理の部分で

欠損している。

### 接合資料—29 (第56図)

3点の剥片が接合している。剥片1・2と剥片3は打面の位置が大きく異なる。接合資料の表面には広い平坦面が部分的に残り、剥片剥離の初期段階を示している。

### 接合資料—47 (第56図)

3点の剥片が接合している。3点とも打面の位置が異なり、剥離の意図は明確ではない。槍先形尖頭器の剥離とは異なるようにも思える。

### 接合資料—62 (第57図)

2点の剥片が接合している。剥片の表面には礫面を残し、同一打面より連続して剥離している。

### 接合資料—2 (第57図)

中央付近で折れた2点の剥片が接合している。同一母岩には多量のポイント・フレイクが存在しており、本例も同様の工程から生じた剥片と見られよう。黒色頁岩—2に分類。

### 接合資料—27 (第57図)

中央付近で折れた2点の剥片が接合している。本例から読み取れる剥離の意図は不明だが、側縁部分の剥離の在り方は槍先形尖頭器の製作に伴う剥片の可能性を示す、と考えている。

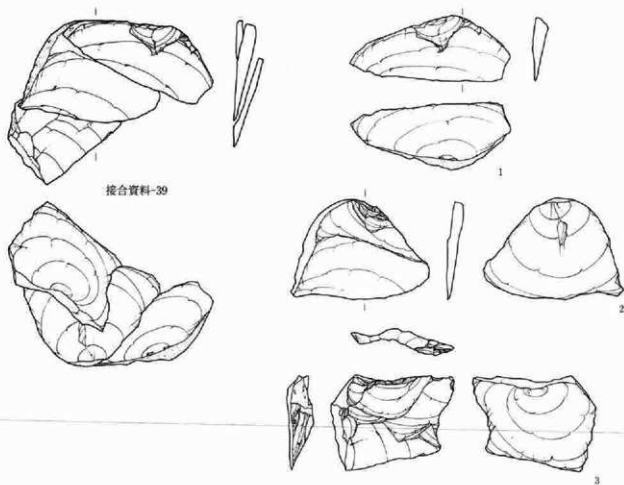
### 接合資料—32 (第57図)

縦位に折れた2点の剥片が接合している。表面には大きく礫面を残す。

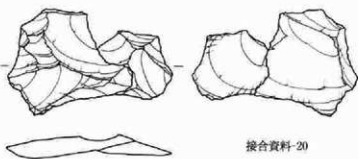
### 接合資料—86 (第58図)

横位に折断する2点の資料が接合している。幅広い剥片の打面部分に加工を施している。折断はこの加工段階に生じた可能性が高い。





接合資料-39



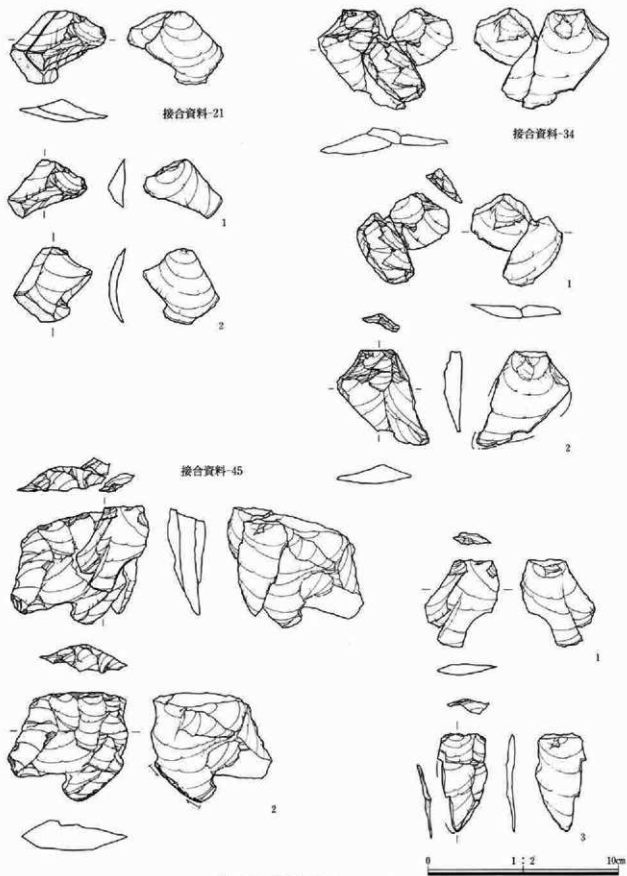
接合資料-20



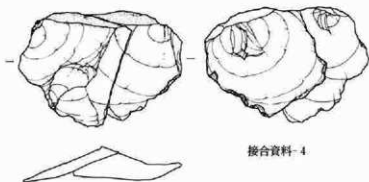
0 1 : 2 10cm

第53圖 接合資料—20・39

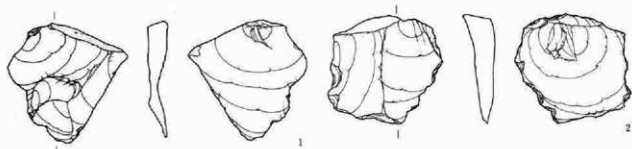
II 検出した遺構と遺物



第54図 接合資料—21・34・45

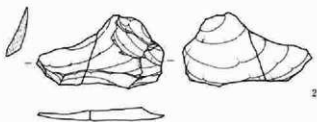
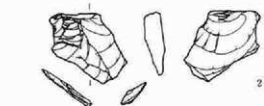
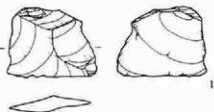
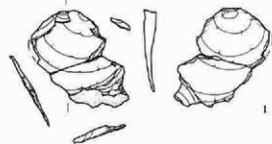
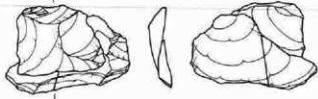
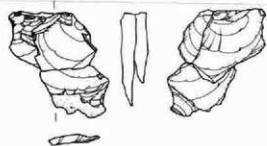


接合資料-4



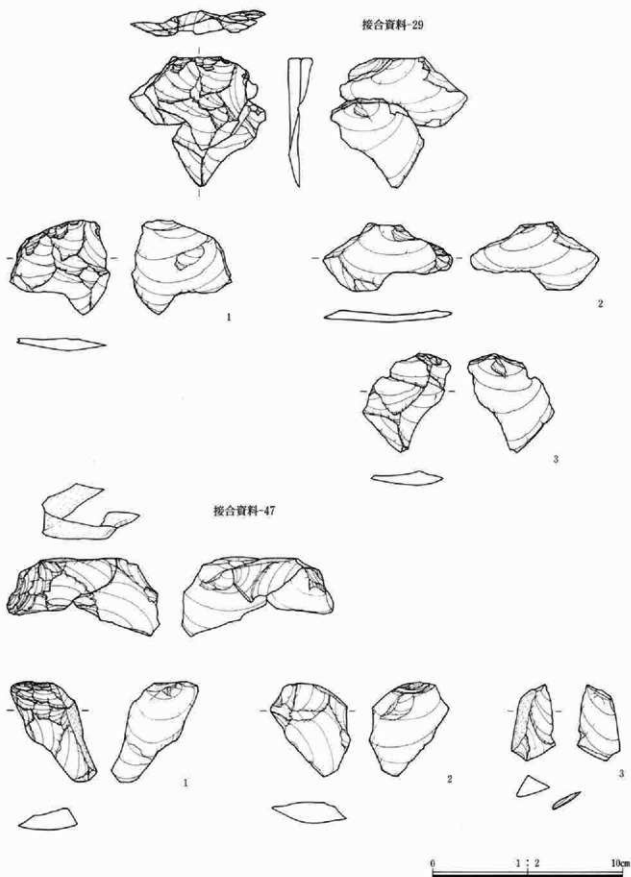
接合資料-33

接合資料-56

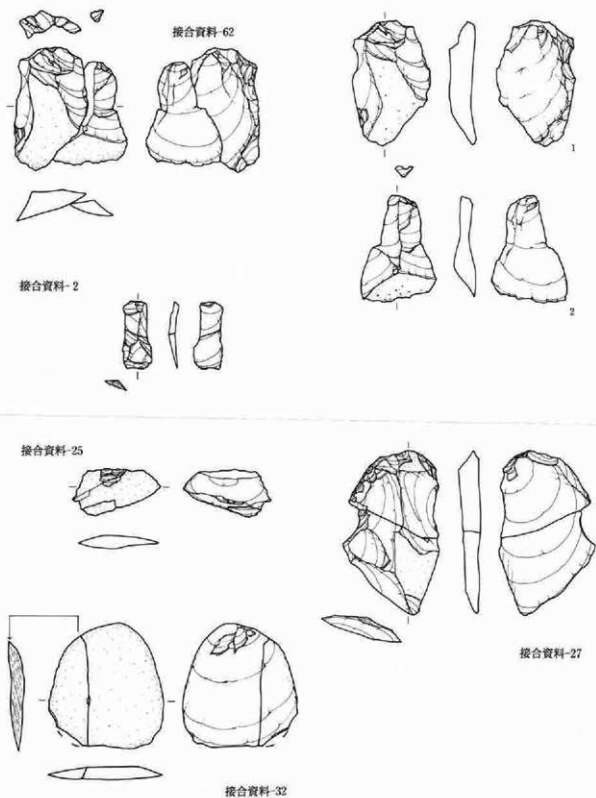


0 1:2 10cm

第55图 接合資料-4・33・56

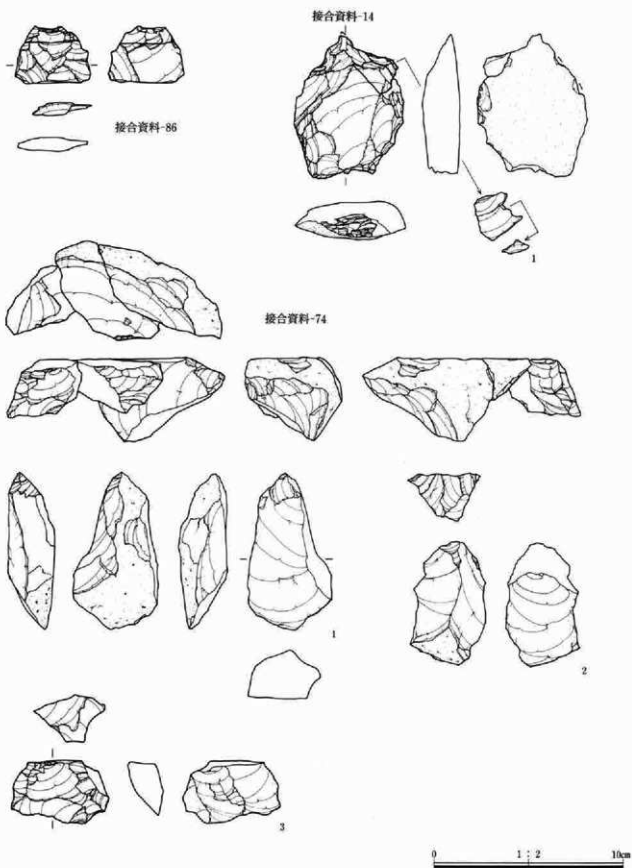


第56図 接合資料-29・47



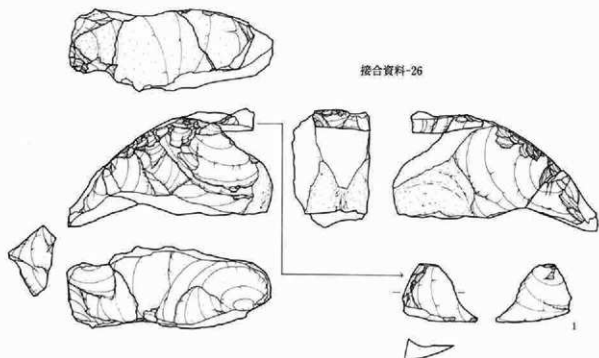
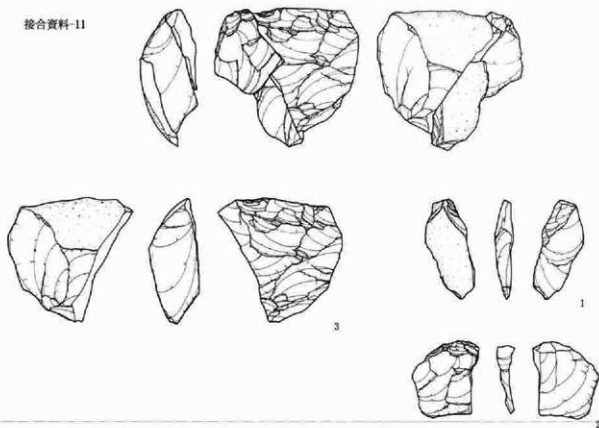
第 57 図 接合資料—2・25・27・32・62

II 検出した遺構と遺物



第58図 接合資料-14・74・86

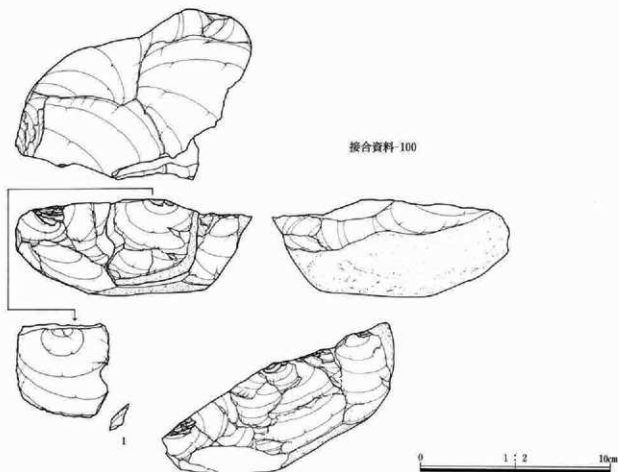
接合資料-11



接合資料-26

0 1 : 2 10cm

第 59 圖 接合資料-11・26



第60図 接合資料-100

接合資料-14 (第58図)

削器と剥片が接合している。裏面に裸面を大きく残す剥片を用い、周辺に加工を加え粗い刃部を作出している。先端部分は尖頭状を呈する。基部は平縁を呈し、剥離は側縁の加工に先行する。黒色頁岩-14に分類。

接合資料-74 (第58図)

石核と剥片が接合している。上面には分割段階に生じた広い平坦面を持つ。まず、剥離は上面から行われ、打面を転移して剥離が進む。2点の剥片(1・2)は右側の側面を打面に剥離している。剥片(3)の剥離方向は不明だが、石核に転用され小片を剥離している。黒色安山岩-2に分類。

接合資料-11 (第59図)

石核と剥片が接合している。裏面に裸面を大きく残

す大形の剥片を石核素材に使用している。剥離は上面部分に集中しており、石核は1の剥片を剥離した段階で二分している。剥離は分割より以後も行われ、2の剥片は別の石核より剥離している、と判断されよう。点紋頁岩-1に分類。

接合資料-26 (第59図)

石核と剥片が接合している。石核は厚い板状の形状を呈す。剥離は石核の正面・上面で行われ、幅広剥片を剥離している。石核は中央付近から二分され、この段階で作業を終了している。

接合資料-100 (第60図)

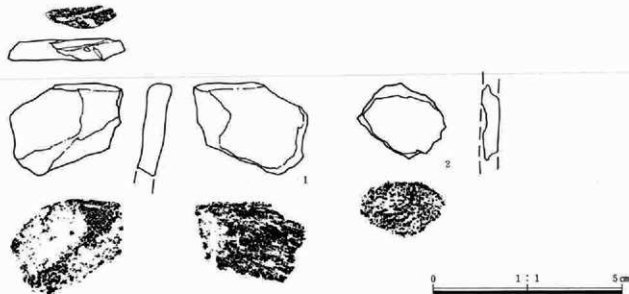
石核と剥片が接合している。石核は原石を分割しており、分割面を打面に石核の正面で主たる剥離が展開している。石核のIII類。



## 同一地点出土の土器

石器群の分布域（第62図を参照）に重複して、古い様相を示す土器が出土している。包含層の上半部には縄文前期の土器や中期の土器が混在しており、また、無紋の土器でもあり、石器群に伴う土器とは断定できないわけだが、胎土や器形、器面整形は前期や中期の土器とも大きく異なる。石器群の主体を占める槍先形尖頭器は時期的に見て土器に伴出していい時期の所産でもあり、石器群に伴う可能性も否定できないため、ここでは他の土器と分け、掲載した。

胎土は総て同一の特徴を示しており、6点の小片が出土している。器壁は3mm～10mmとバラツキ、一定ではない。ここでは、口縁部的小破片と胴部破片の2点を図示した。



第61図 同一地点出土の土器

第61図1は、口唇部に平坦面を持つ小破片である。口唇上面の沈線は浅く、意図的施文が不明瞭である。土器の遺存状態は不良で、器壁の剥落が激しい。現存状態で見える限り、器面には凹凸が見られ、ナデ整形を施す。器壁は薄く、6mmを測る。第61図2は胴部破片で、裏側の壁面に剥落している。器壁は薄く、5mmを測る。

2点とも胎土は同一の特徴を示しており、真珠光沢を持ち、無色透明のウロコ状の薄片（白ウソモ）を多く含む。このほかには岩片の混入も多く、黒ウソモや石英、輝石、角閃岩を含む。土器の識別に際し、最も特徴的な白ウソモは結晶片岩起源と考えるにはやや粗く、片麻岩（白ウンモカコウ岩）やペグマタイト起源の可能性も残る。

## 3-3 石器の分布

槍先形尖頭器を主たる組成器種に持つ第Ⅲ文化層は、2区南端に分布していた。石器は台地先端から約70m、幅120mの台地中央付近に検出され、予想以上に内側に入り込む地点に出土した。石器は上面の遺構精査の段階で既に確認可能で、調査区内には同様に出土状態を示す地点は見られない。石器の出土地点の地形

は南側に緩く傾斜しており、平均傾斜は8°を測る。

## a. 石器の集中地点

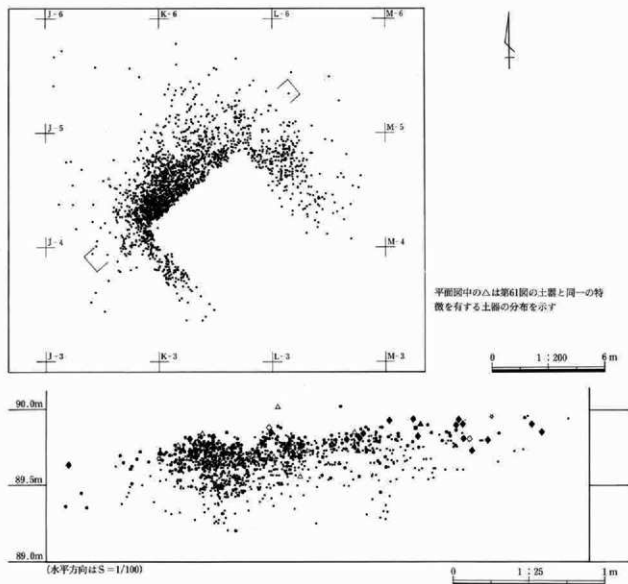
石器の集中地点は、2区・台地南端（4～6ライン）で確認した。既に上面の遺構精査の段階で、古墳時代・住居（8号）周辺に剥片や砕片が多量に分布していたわけだが、この段階では\*他の縄文石器の出土状態と異なる。その程度の認識に終始した。が、住居覆土や

## II 検出した遺構と遺物

壁面から槍先形尖頭器が出土した結果、住居周辺から出土している剥片類も槍先形尖頭器に伴う遺物と確信を深めた。住居・床下の調査と並行して、できうる限り当該資料の収集を試みた。出土位置の不明な資料群の大部分は床下調査の段階で採集され、総計596点を得た。

石器の分布は東西18m・南北15mの範囲に及ぶ。概して分布範囲は広く、ほぼ1ヶ所の集中部を形成して出土しているわけだが、若干の粗密を以て石器は分布している。石器は住居の北西コーナー付近に最も濃く分

布するほか、東側にも集中地点を形成するようにも見える。石器群の主体的な分布域を住居で逸しているため断定は困難だが、接合資料の分布状態（接合資料の分布の項を参照）も上記推定を裏付けている。石器は総計2,824点（うち、出土位置の明確な資料は2,228点）が出土している。石器群の主たる組成器種は、槍先形尖頭器で45点が出土している。剥片や砕片が全体の90%以上にも及び主体を占めるわけだが、このほか打製石斧・有茎尖頭器・搔器が各1点、削器11点、加工痕や使用痕の著しい剥片が現状では組成する。出土し



第 62 図 石器の平面分布と垂直分布

た石器は黒色頁岩が90%を越え、接合資料の数も多い。次には黒色安山岩が続き、全体の約5%を占めている。このほかには、点紋頁岩・頁岩・砂岩・粗粒安山岩・細粒安山岩・灰色安山岩など、11種の石材を使用している。石器群はII層に限定して出土しており、包含層の上位部分で縄文前期や中期の土器と混在、出土している。なお、As-YPが拡散するIII層には全く出土を見

#### b. 接合資料の分布

接合作業の結果、90例の接合資料を得た。接合資料には石器の製作状態を知る良好な資料に乏しい。また、住居覆土の資料と接合している例も若干だが存在しており、提示できない資料も16例を数える。ここでは、黒色頁岩は2点が接合する例と2点以上が接合する例に分け、他の石材は種別に分け、接合資料の分布を記していきたい。

**黒色頁岩の接合資料** 接合資料の数が多く、そのためここでは2点接合の例と2点以上が接合する例に分け、図化した。

第63図・上段には2点からなる接合資料の分布状態を示した。大きくみて、接合資料の分布は住居北壁の中央付近を境に、住居・北東コーナー付近で接合する例と北西コーナー付近で接合する例の二群に大別されるよう。

##### a. 北東コーナー付近の接合資料

接合資料—14・23・25・26・50・52・62・64・69・82・83

##### b. 北西コーナー付近の接合資料

接合資料—6・18・21・24・27・32・33・36・45・54・58・59・61・66・68・85・86・102・103

両地点を跨ぐ接合例は、1例（接合資料—57）が存在するのにすぎない。2点からなる接合資料の分布を見る限り、両群には石器の製作が各々独立している傾向が指摘されよう。

第63図下段には、2点以上からなる接合資料の分布状態を示した。2点からなる接合資料の分布と同様に、分布状態は住居北壁の中央付近を境に東西に分布する

ない。

石器群は古墳時代の住居（8号）と重複しており、分布域の大部分を逸しているわけだが、多量の剝片や砕片が出土しており、石器製作の色彩を極めて強く残している。住居の構築で石器分布範囲の全体の3/4が壊され、相当量の石器群を逸している。

傾向を示す一方、両地点を跨ぐ、接合も多い。

##### a. 北東コーナー付近で接合が完結する資料

接合資料—29・30・31・32・39・56

##### b. 北西コーナー付近で接合が完結する資料

接合資料—1・16・22・34・46

##### c. 両地点を跨ぐ接合資料

接合資料—3・8・15・37・40・41・51

2点接合の資料とは違い、2点以上からなる接合資料の分布は両地点を跨ぐ例が多い。以下に器種関係からみた分布を整理していきたい。

#### 接合資料—3（第50図）

剝片1・2・4～6（北西コーナー）

剝片3（北東コーナー）

#### 接合資料—8（第48図）

剝片1（北西コーナー）

剝片2・3（北東コーナー）

#### 接合資料—37

剝片1の縦位折断の左側・剝片2（北西コーナー）

剝片1の縦位折断の右側（北東コーナー）

#### 接合資料—40（第47図）

剝片1b・2～3（北西コーナー）

剝片1a（北東コーナー）

#### 接合資料—41（第49図）

剝片1（北西コーナー）

剝片2～5（北東コーナー）

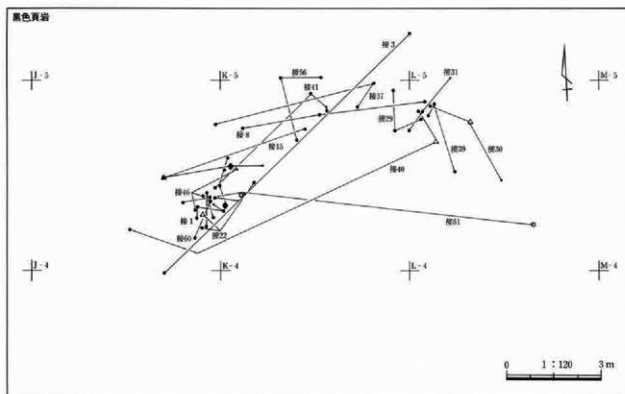
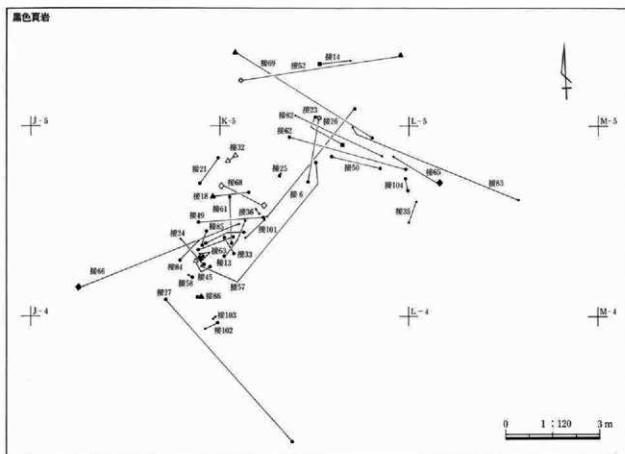
#### 接合資料—51

剝片1・石核2a（北西コーナー）

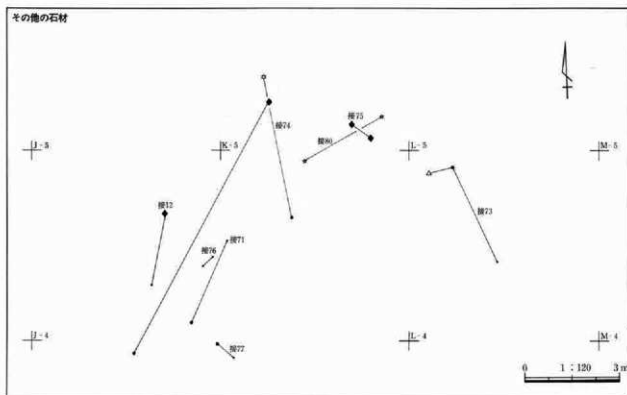
石核2b（北東コーナー）

両地点を跨ぐ6例の接合資料には、石器製作地点から

II 検出した遺構と遺物



第 63 図 接合資料の分布 (黒色頁岩)



第64図 接合資料の分布（その他の石材）

製品が移動する状態、或は、地点の相違が工程の相違を示す状態は見られない。即ち、別々の素材で剥離が想定可能な資料（接合資料—41）や、石核が移動したとも想定可能な資料（接合資料—51）を除き、地点を変え移動する蓋然性の高い石器や剥片が移動しているのではなく、移動する根拠の乏しい工程の途中の資料が主体を占めているのである。地点間を跨ぐ接合資料は直接的に両地点の関係を示す、とはいえない。

**黒色安山岩の接合資料** 接合作業の結果、7例の接合資料を確認した。黒色頁岩と同様に、接合資料は住居北壁の中央付近を境に東西に分かれ、分布している。

### c. 同一母岩の分布

既に述べた通り、黒色頁岩が出土総量の90%以上を占める。周知の通り黒色頁岩は余程良好な接合資料が得られない限り、母岩の分類が難しい。出土資料には良好な接合資料に乏しく、そのうえ分布域の大部分を古墳時代の住居に壊され、分析の条件は極めて悪い。このため母岩分類も充分ではなく、石器の製作構造を

北西コーナー付近には接合資料—70・71・76・77が、北東コーナー付近には接合資料—73・75が、中間付近には接合資料—74が分布しており、地点間を跨ぐ接合資料は見られない。

**頁岩の接合資料** 1例の接合資料（接合資料—12）を確認している。住居北西コーナー付近に分布しており、槍先形尖頭器と破片が接合する。

**溶結凝灰岩の接合資料** 1例の接合資料（接合資料—80）を確認している。敲石に分類可能な礫の接合資料で、住居の北東コーナー付近に分布している。

理解するうえで制約が多い。石器群の構造的な理解を深めるには制約が著しいわけだが、断片の情報から本質に迫る立場には変わらない。

分類の結果、黒色頁岩に19種、点紋頁岩に1種、頁岩に3種、黒色安山岩に9種の母岩を確認した。ここでは黒色頁岩・黒色安山岩・その他の石材の順で同一母岩の分布状況を示し、併せて石材単位で分布状況を

## II 検出した遺構と遺物

示した(第70・71図)。接合資料の分布と共に参照されたい。

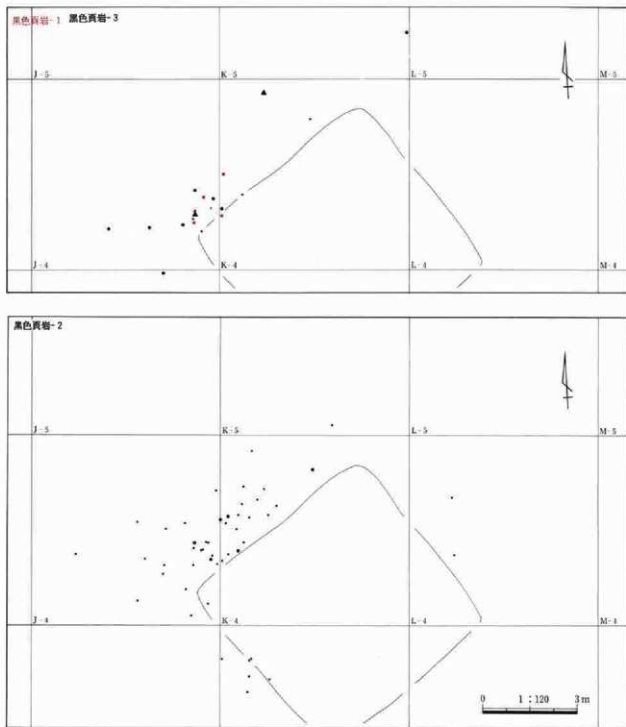
### 黒色頁岩-1の分布(第65図)

総計8点(うち、住居覆土出土の資料2点)が出土している。この中には5点からなる接合資料-1を含

む。資料は剥片からなり、住居・北西コーナー付近に集中出土している。剥片は総てポイント・フレイク状を呈す。母岩には白色鉱物を多く含む。

### 黒色頁岩-2の分布(第65図)

総計64点(うち、住居覆土出土の資料2点を含む)が出土している。この中には2点からなる接合資料



第65図 母岩別資料の分布(1)

一2を含む。剥片が大部分を占め、住居・北西コーナー付近を主体に分布するほか、北東コーナー付近にも数点が分布する。剥片はポイント・フレイク状を呈することから、槍先形尖頭器の製作に伴う剥片と判断されよう。この母岩には白色の鉱物を多量に含み、部分的に縞状構造の近い状況を示す。

#### 黒色頁岩—3 (第65図)

総計19点(住居覆土の13点を含む)が出土している。この母岩には2例の接合資料(接合資料—3・4)を含む。剥片や破片が大部分を占め、住居・北西コーナー付近に集中分布する。剥片はポイント・フレイク状を呈す。母岩は灰白色に近く、白色鉱物を多く含む。

#### 黒色頁岩—4 (第66図)

総計21点(住居覆土の4点を含む)が出土している。この母岩には2例の接合資料(接合資料—5・6)を含む。剥片が大部分を占め、住居・北西コーナー付近に集中分布する。剥片はポイント・フレイク状を呈す。母岩は青灰色に近く、出土資料の中では摩耗が激しい。接合資料—69も同一母岩に分類可能だが、根拠には乏しい。

#### 黒色頁岩—5 (第66図)

総計7点(住居覆土の4点を含む)が出土しており、1例の接合資料(接合資料—8)を含む。剥片が大半を占め、住居の北壁周辺に出土している。剥片はポイント・フレイク状を呈す。母岩は青灰色に近い。

#### 黒色頁岩—6 (第66図)

総計10点(住居覆土の2点を含む)が出土しており、2例の接合資料(接合資料—9・101)を含む。剥片が大半を占め、住居の北壁周辺に出土している。剥片はポイント・フレイク状を呈す。母岩は青灰色に近く、白色鉱物を多量に含む。

#### 黒色頁岩—7 (第66図)

総計15点(住居覆土の5点を含む)が出土している。剥片や破片が大部分で、住居の北壁周辺に出土している。剥片はポイント・フレイク状を呈す。母岩は珪化が進み、青灰色に近い。

#### 黒色頁岩—8 (第66図)

総計2点(1点は住居覆土出土の槍先形尖頭器、第

10図3)が出土している。残る1点は剥片で、住居・北壁周辺に分布している。母岩は、やや粗い石材感を呈す。

#### 黒色頁岩—9 (第66図)

総計3点が出土している。3点とも住居北壁周辺の出土だが、槍先形尖頭器は剥片の分布とはやや離れて分布している。母岩は珪化が進み、青灰色に近い。

#### 黒色頁岩—10 (第66図)

総計2点が出土している。槍先形尖頭器(第16図3)と破片が出土しており、住居北東コーナー付近に分布している。母岩は珪化が進み、筋状の節理構造を持つ。

#### 黒色頁岩—11 (第66図)

総計21点(住居覆土の3点を含む)が出土しており、1例の接合資料(接合資料—13)を含む。剥片や破片が多量に出土しており、大部分は槍先形尖頭器の製作に伴う資料と判断している。住居・北西コーナー付近を主体に分布するほか、北東コーナー付近にも2点の剥片が分布している。母岩は灰白色に近い。

#### 黒色頁岩—12 (第66図)

総計7点(住居覆土の2点を含む)が出土しており、住居・北東コーナー付近に集中する。剥片は大形で、ポイント・フレイク状を呈す。母岩は若干だが石英を含み、灰白色を呈す。

#### 黒色頁岩—13 (第67図)

1点(第35図1)のみ出土しており、住居北東コーナー付近に分布している。単独資料で、出土資料の中には同一の母岩は全く見られない。

#### 黒色頁岩—14 (第67図)

総計3点が出土している。3点とも接合(接合資料—14、第58図)しており、住居・北東コーナー付近に分布する。母岩は黒色の鉱物を含み、青灰色に近い。

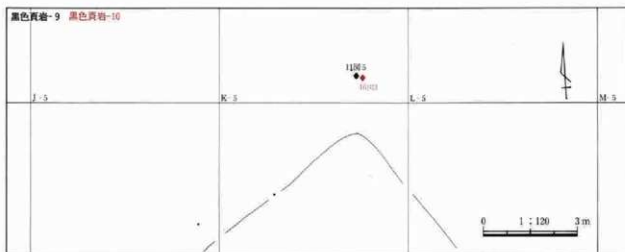
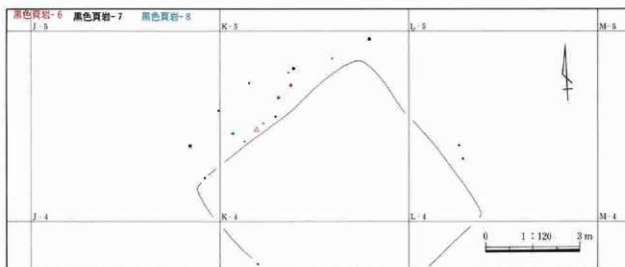
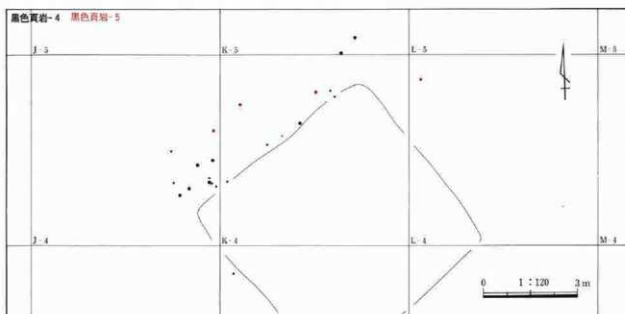
#### 黒色頁岩—15 (第67図)

1点のみ出土しており、住居・北西コーナー付近に分布する。母岩は白色鉱物を多量に含み、黒色に近い。表面の風化は弱い。

#### 黒色頁岩—16 (第67図)

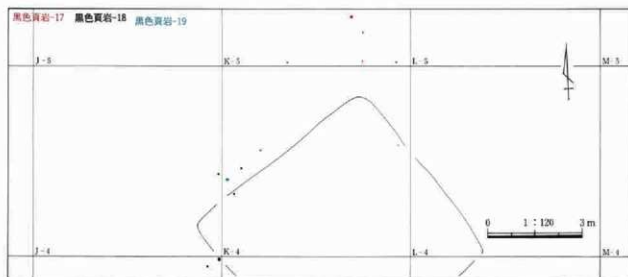
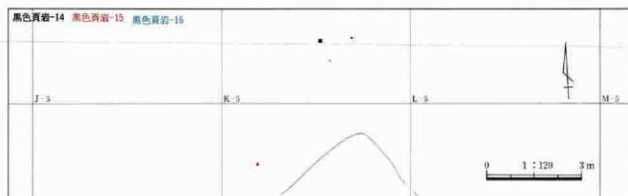
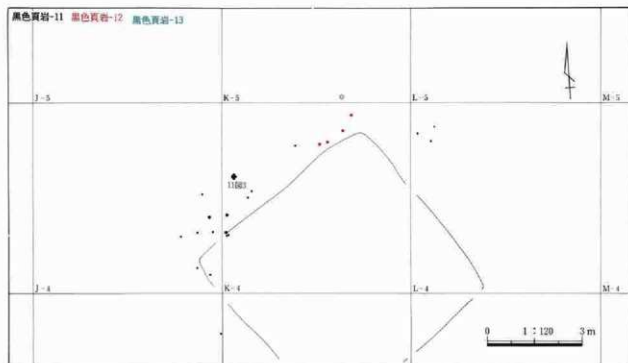
1点のみ出土しており、住居・北東コーナー付近に分布する。母岩は白色鉱物を含み、珪化が進む。

II 検出した遺構と遺物



第66図 母岩別資料の分布(2)





第67図 母岩別資料の分布(3)

**黒色頁岩—17 (第67図)**

総計4点が出土しており、剥片や破片のみからなる。3点が住居・北東コーナー付近、1点が北西コーナー付近に分布する。母岩は珪化が進み、白色の筋状構造を持つ。

**黒色頁岩—18 (第67図)**

総計6点が出土しており、接合資料(接合資料—102)1例を含む。剥片や破片のみからなり、6点とも住居・北西コーナー付近に分布しており、3点が住居北側に、2点が住居西側に出土している。母岩は珪化が進み、白色の鉱物を含む。表面の風化は弱く、黒色を呈す。

**黒色頁岩—19 (第67図)**

総計3点が出土しており、剥片や破片のみからなる。明確に集中分布せず、散漫な状態で分布する。母岩は青灰色を呈す。

**黒色安山岩—1 (第68図)**

10点(接合資料—70・71を含む)が出土している。住居北西コーナー付近に分布するほか、周辺にも若干分布する。母岩は青灰色の流紋構造を有し、風化が激しく、斑晶の抜け落ちた痕跡を残す資料の一群を一括したわけだが、微妙に異なり複数の母岩を含む可能性を残している。

**黒色安山岩—2 (第68図)**

29点(接合資料—72・73)が出土している。大部分が剥片や破片で、住居・北西コーナー付近、北東コーナー付近とも分布している。母岩は目の粗い縞状構造を有する一群を一括したわけだが、縞状構造の入り方で細分が可能とも思われ、母岩分布の作図より先行して細分を試みた。母岩は各々13点(2a)・3点(2b)・7点(2c)・1点(2d)・5点(2e)からなる5群に区分され、分布を比較した。縞状構造の微妙な差の下に分類を試みており、剥離方向でも微妙な差が生じる可能性を残している。そのため、縞状構造の差を直接判断材料にはできない。現状では、細分した母岩分布は住居・北西コーナー付近に母岩2d・2eが、住居・北東コーナー付近に2a・2cが集中分布するほか、住居北壁の北側に母岩2bが集中分布している。以上の分布傾向が示す背景は不明な点が多く、遺存状

態も完全ではないため、現状では説明が難しい。

**黒色安山岩—3 (第68図)**

5点(接合資料—74を含む)が出土している。接合資料は槍先形尖頭器の製作を示す痕跡に乏しいのに対し、他の2点はポイント・フレイク状を呈し、槍先形尖頭器の製作が想定可能でもある。住居の北壁周辺に分布する傾向が指摘されよう。母岩は平行する縞状の構造を持つ一群を一括した。

**黒色安山岩—4 (第68図)**

8点が出土している。槍先形尖頭器の製作に伴い生じる破片が主体を占め、住居・北西コーナー付近に分布している。母岩は大小の斑晶を含み、斑晶の抜け落ちた一群を一括した。

**黒色安山岩—5 (第68図)**

2点が出土している。槍先形尖頭器の製作に伴い生じる剥片が主体を占め、住居・北西コーナー付近に分布している。母岩は風化が著しく、斑晶の抜け落ちた一群を一括した。

**黒色安山岩—6 (第68図)**

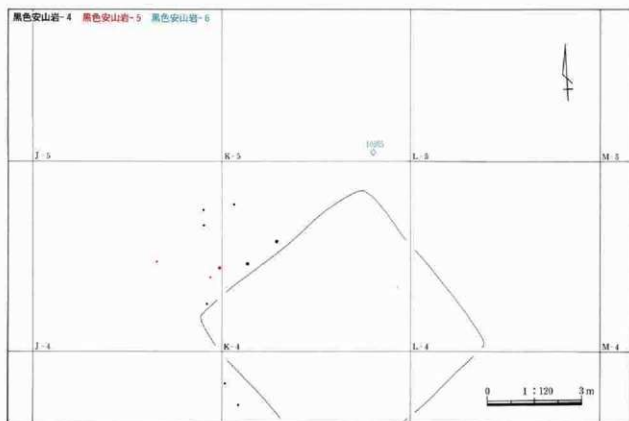
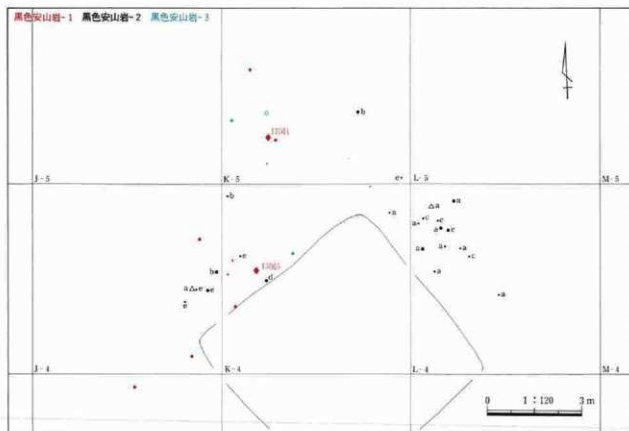
1点(第10図5)のみ出土している。III類に分類が可能な個縁に縞状剥離を有する槍先形尖頭器で、住居・北東コーナー付近に出土している。母岩は斑晶の混入が少ない、見た目にも緻密な良質の石材感を呈す。

**黒色安山岩—7 (第69図)**

11点(接合資料—76・77、及び、住居覆土の3点を含む)が出土している。槍先形尖頭器の製作に伴い生じる剥片や破片とは異なり、通常の剥離で生じる剥片が多い。住居・北西コーナー付近に主に分布するほか、北壁の付近にも分布している。母岩は斑晶の混入が少なく母岩—6より更に緻密な感が強い。この母岩には撻器(第21図1)を含む。

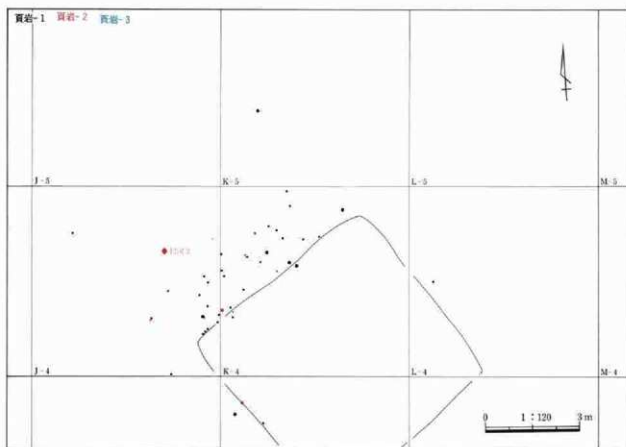
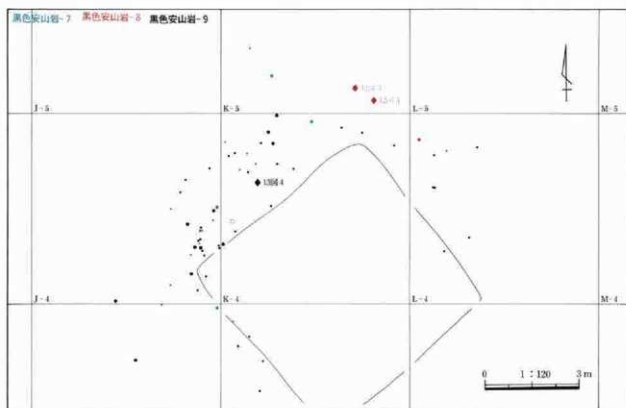
**黒色安山岩—8 (第69図)**

17点(接合資料—75、及び、住居覆土の3点を含む)が出土している。資料には槍先形尖頭器(第12図3)を含む他、ポイント・フレイク状を呈す剥片や破片が多い。特定の分布傾向を示さず、散漫に分布している。母岩は斑晶の混入が少なく、風化が弱い。



第 68 図 母岩別資料の分布 (4)

II 検出した遺構と遺物



第 69 図 母岩別資料の分布 (5)

**黒色安山岩—9 (第69図)**

52点が出土している。資料には槍先形尖頭器(第13図4)の先端破片を含む他、ポイント・フレイク状を呈す剥片が多い。分布の主体は住居北西コーナー付近だが、北東コーナー付近の分布も多い。母岩は母岩—8に比べ、やや大きな斑晶を混入しており、若干風化している一群を一括したわけだが、風化状態や斑晶の入り方に微妙な差が生じており、母岩—2と同様に細分を試みた。細分が可能か全く断定できないわけだが、母岩は各々4点(9a)・20点(9b)・3点(9c)・11点(9d)・3点(9e)・不明4点に細分が可能と見た。分布は住居北西コーナー付近に9aが分布する傾向が指摘可能な一方、9b・9c・9d・9eは北西コーナー、及び、北東コーナーとも分布しており、明確な集中分布は指摘できない状況を示していた。この母岩に関する細分は有効性に欠け、と判断されよう。

**頁岩—1 (第69図)**

総計45点(住居覆土の5点を含む)が出土している。資料は住居・北西コーナー付近を主体に分布し、ポイント・フレイク状の剥片を多量に含む。多分に槍先形尖頭器の製作に伴う可能性が高い。母岩は珪化が進み、表面の風化は弱い。

**頁岩—2 (第69図)**

総計9点(住居覆土の1点を含む)が出土している。接合資料(接合資料—12)には槍先形尖頭器(第12図2)を含み、そのほかには剥片や砕片が出土している。住居・北西コーナー付近に集中分布する。母岩は若干風化が進み、青灰色の地に白色の縞状構造を有す。

**頁岩—3 (第69図)**

1点のみ出土している。住居・北東コーナー付近に分布しており、他の資料とは分布域が大きく異なる。資料の表面は礫面に覆われ、平坦な打面を持つ。母岩は風化が進み、やや荒れる。

**点紋頁岩—1**

総計6点(住居覆土の5点を含む)が出土しており、

1点が住居の西側に分布している。出土位置が明確な資料は1点に留まるため、母岩分布の主体は明確ではない。接合資料—11を含む。

**粗粒安山岩の分布(第71図)**

29点が出土しており、住居覆土の出土は見られない。敲石と礫(礫片を含む)に大別され、明確な分布を示している。礫片の中には敲石の破片も存在する可能性も否定できないわけだが、敲石と礫の分布には差が見られ、以下の傾向が指摘されよう。

概ね、礫の分布域は3ヶ所で、住居北側に分布している。石器分布とはやや離れて分布する傾向が見られ、特に5ライン付近には明瞭な分布域を形成している。礫の分布密度は低く、また、タールヤスの付着も見られないなど、礫群・火処と認める積極的根拠には欠けるわけだが、特に5ライン付近には石器群の分布域を避け礫が分布しており、単なる石器製作地点とは思われぬのである。同様に、敲石にも5ライン付近に分布が集中する傾向をしめしている。が、同時に一方では石器分布とは関係なく、周辺に単独分布する傾向も指摘され、この点で礫の分布とは異なる。

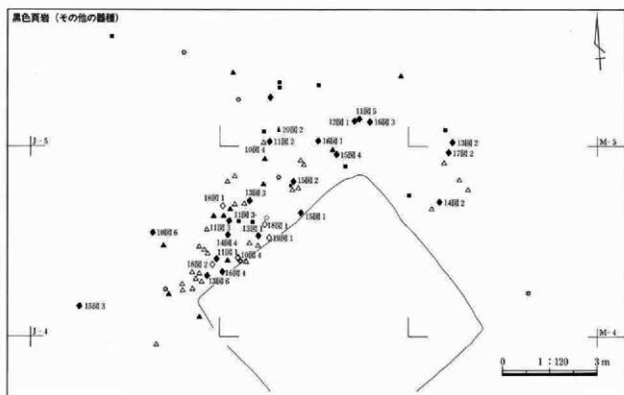
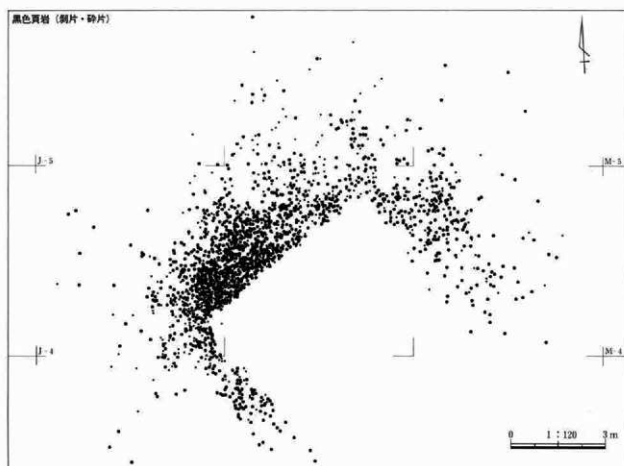
**石英閃緑岩(第71図)**

4点が出土している。粗粒安山岩と同様、5ライン付近に分布するほか、石器群の分布域とはやや離れて1点が単独で分布している。

**その他の石材分布**

建質頁岩1点(槍先形尖頭器、第10図1)、砂岩が1点、細粒安山岩・灰色安山岩が各3点、凝灰質砂岩が2点、変質玄武岩・フォルンフェルス各1点が出土している。建質頁岩は住居覆土の出土だが、これ以外の石材は出土位置を確認している。概ね、住居・北西コーナー付近に分布しており、また、変質玄武岩を除いて剥片形状もポイント・フレイク状を呈し、槍先形尖頭器の製作に伴い生じる剥片の可能性が高い。

II 検出した遺構と遺物



第 70 図 石材別分布 (黒色頁岩)



## 4 竪穴住居

調査により検出された竪穴住居は7軒であり、調査区単位での内訳は2区が3軒、3・5区が各1軒、4区が2軒となっている。2・4区と3・5区とは幅30~40mの小規模な沖積地を挟んで向かい合う台地上に位置し、各調査区を合わせた調査対象面積は7haに及んでいるが、調査区域内での各住居の分布状況は極めて散漫的である。これら住居の所属時期については、諸磯a式期が4軒（2区49・54住、3区4住、4区2住）、諸磯c式期が1軒（5区7住）、時期不明が2軒（2区19住、4区3住）となる。出土遺物が僅少なために時期の判別ができなかった2軒のうち、4区3号住居についてはその形態が正方形を基調とすることや、小破片ながらも2点の土器が黒浜式と諸磯式土器であることから、前期に比定される住居であることはほぼ間違いないであろう。また、もう1軒の住居については、柱穴と判断される小ピットの円形状の配列とその内側に位置する地床炉の存在により住居として認定したものであり、竪穴状の掘り込みは元より明瞭な伴出遺物を確認することはできなかった。この住居の時期については、柱穴の配列が他の住居と全く異なることからみて、少なくとも諸磯式期には該当しないであろう。

伴出遺物により時期の限定できる住居の在り方の特徴を上げるならば、まず諸磯a式期の集落は極めて小規模であり、かつ個々の住居が一箇所に集中することなく散在的な分布を示すことである。諸磯c式期では1軒の住居が検出されているのみであるが、これは諸磯a式期にみられた様相がより一層顕著になったものと同とらえることができよう。

住居構造の面では、諸磯a・c式期ともにその平面形が隅丸正方形を基調として4本主柱をもつ点でほぼ共通し、その規模も一辺が4~5m前後とかなり近似したもとなっている。また、主軸線の方もN45~80°Eの範囲に収まるものが多く、かなり齊一的な内容を有している。炉については、その位置はともに

床面中央部から東壁あるいは北壁寄りにずれる傾向にあるが、形態的には諸磯a式期は埋め壁炉、同c式期は土器を伴わない掘り込み炉への変化が認められる。

遺物の面では、その住居に確実に伴うと判断できるような床面に密着して出土するものは少なく、いわゆる「吹上パターン」的な埋没土中より出土するものが主体を占める。ただ、土器型式でみた場合、出土層位別での差異はほとんどなく、短時間での埋没が想定される。土器は埋設されるものを除いて、完形になるものは少なく、その多くが破片である。石器では、数量的に磨石や凹み石のほかにも多機能的な剥片石器が多く認められる点で注目される。

## 2区19号住居

位置 E-1 写真 PL5-1

形状 後世の土壌擾乱により、住居のプランを確認することはできず、ローム層中に柱穴と炉を検出したのみである。

面積 不明。 方位 不明。

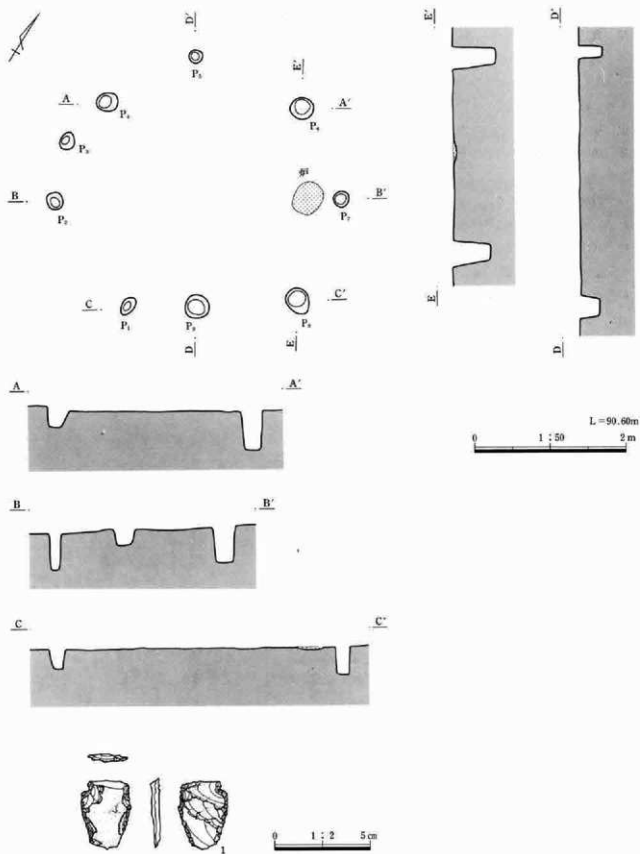
床面 土壌擾乱等もあり、明瞭な床面は確認できなかった。

炉 各柱穴ラインの内側に位置するが、P<sub>1</sub>柱穴に僅か20cmと近接して東側に偏る。平面形は長径45×短径35cmの楕円形状を呈し、深さ3cmの僅かな掘り込みをもつ。壁・底面は被熱により若干赤色化している。

柱穴 円形状の配列をなして9本が検出された。各柱穴の心々間を結んだ距離はP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>:1.65m、P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>:0.85m、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>:0.75m、P<sub>4</sub>~P<sub>5</sub>:1.35m、P<sub>5</sub>~P<sub>6</sub>:1.60m、P<sub>7</sub>~P<sub>8</sub>:1.50m、P<sub>8</sub>~P<sub>9</sub>:1.35m、P<sub>9</sub>~P<sub>1</sub>:0.90mである。また各柱穴の規模(直径×深さ)は、P<sub>1</sub>:27×48cm、P<sub>2</sub>:24×25cm、P<sub>3</sub>:20×18cm、P<sub>4</sub>:30×25cm、P<sub>5</sub>:18×24cm、P<sub>6</sub>:32×53cm、P<sub>7</sub>:20×36cm、P<sub>8</sub>:36×48cm、P<sub>9</sub>:33×20cmであり、他に比べてP<sub>1</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>9</sub>の深度が大きい。

備考 他の付属施設や遺物は検出されず、所属時期については不明である。





第 72 图 2 区19号住居と出土遺物

II 検出した遺構と遺物

2区49号住居

位置 R-9 写真 PL5・6・35~38

形状 長軸を南北にもつやや歪んだ台形状を呈する。長辺5.1×短辺4.6mである。四辺は直線的であり、壁面は約60度の角度で立ち上がる。

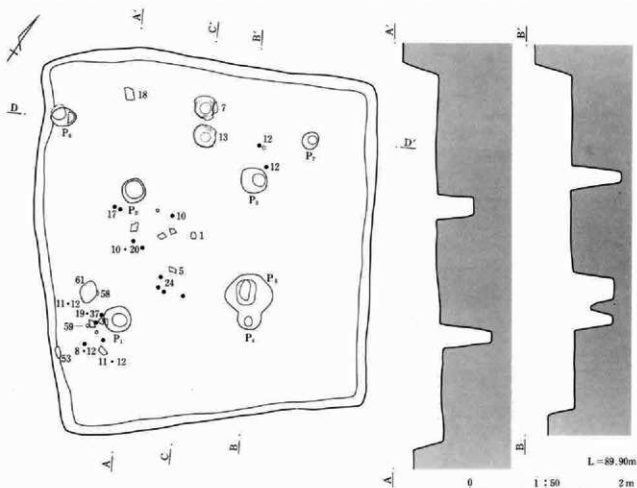
面積 21.02㎡ 方位 N51°E

床面 ロームを42~47cm掘り込んで、床面を構築している。若干の凹凸と傾斜がみられ、北壁際比べて南壁際に10cmほど低くなる。全体的によく踏み固められ、特に主柱穴の内側は叩き床状となっている。

柱穴 1本の建て替えを含めた主柱穴5本と、2本の支柱穴の計7本が検出された。各支柱穴の心々間を結んだ形状はやや歪んではいるものの、住居の外形と近似した四辺形状を呈する。新旧関係は不明であるが、 $P_1$ と $P_2$ のいずれかは建て替えによる柱穴であろう。各支柱穴の距離は $P_1 \sim P_2$  : 1.75m、 $P_2 \sim P_3$  : 1.70m、 $P_3$

$\sim P_4$  : 1.90m、 $P_4 \sim P_5$  : 1.70mで、またその規模(直径×深さ)は $P_1$  : 36×67cm、 $P_2$  : 30×49cm、 $P_3$  : 35×67cm、 $P_4$  : 30×52cm、 $P_5$  : 62×57cm、 $P_6$  : 33×61cm、 $P_7$  : 24×47cmである。

遺物 北壁中央部に近接した位置に、南北方向に並列して2個の深鉢土器(No7・13)が埋設されていたほかに、床面中央部付近を中心にして土器片や石器が検出された。埋設土器は7が底部を、13が口縁部と胴部下半~底部を欠損するが、ともに正位で埋置されていた。No5・10・20・59は床面に密着して、他は3cm以上浮いて埋没土中より出土した。なお、No4は2区35号住居、No11は同12号住居、No17は同29号住居、No18・25は同22号住居などの古墳時代住居より同一個体の土器片が出土している。埋没土中の石器の器種別出土数は打製石斧3点、磨製石斧1点、加工・使用痕ある石器11点、石核1点、砥石2点、凹み石1点

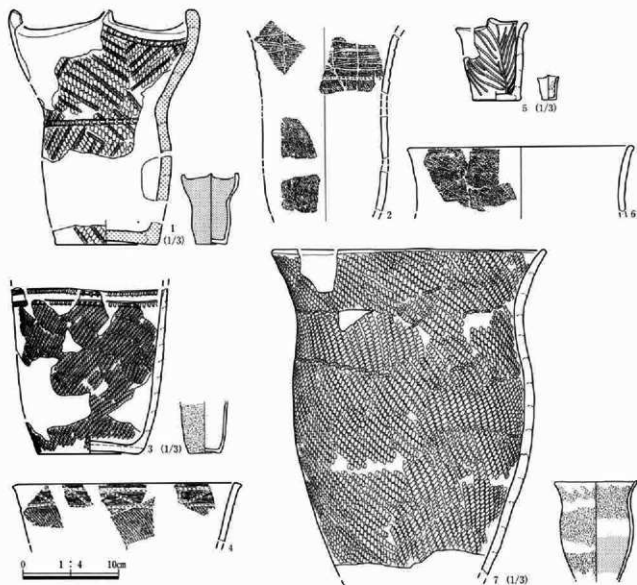
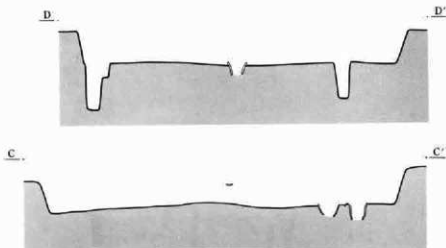


第73図 2区49号住居

である。

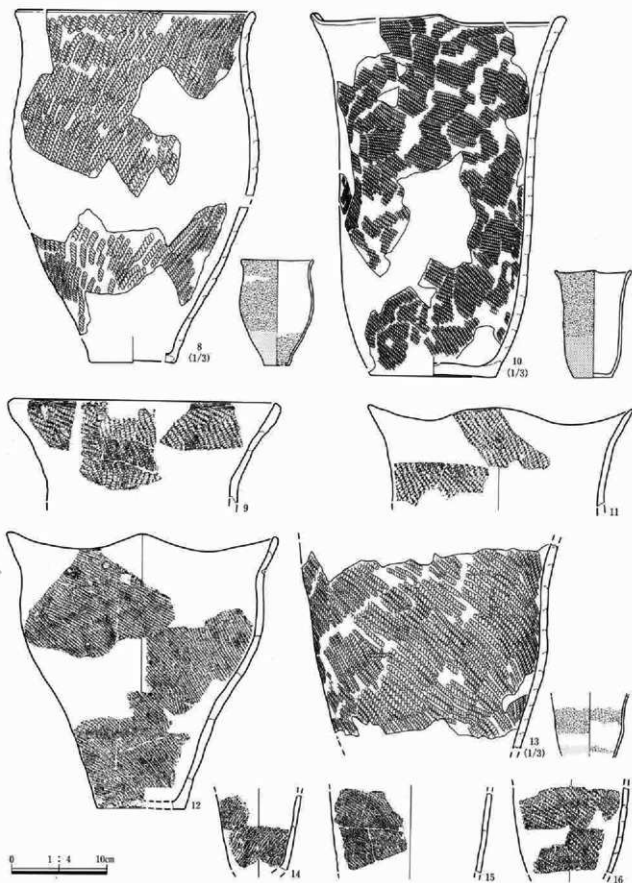
(遺物観察表：204頁)

備 考 明確に炉と認定できるような掘り込みや、焼土を伴った痕跡は検出されなかったが、二次焼成時の被熱による剥離や風化の認められるNo13の埋設土器は、埋め窯炉の可能性もある。

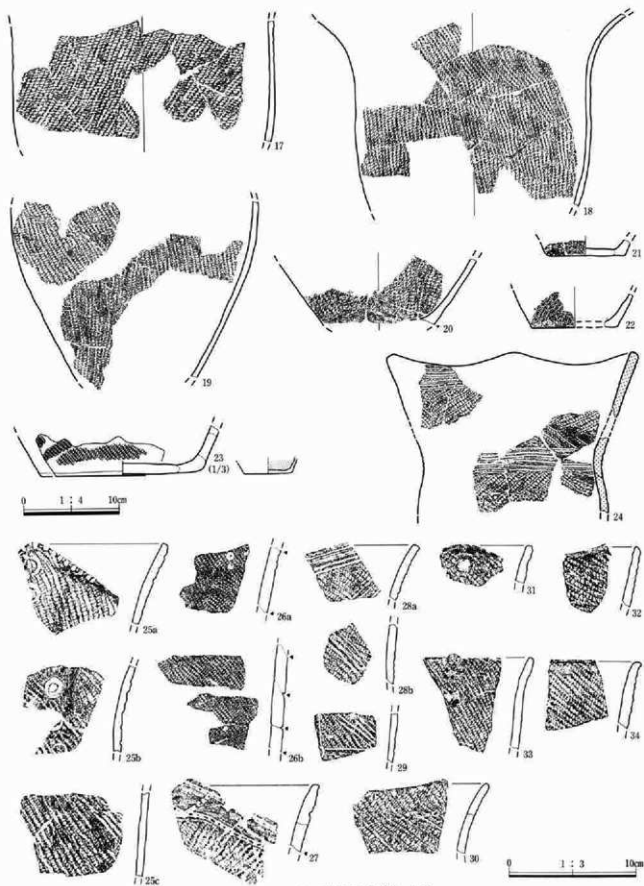


第74図 2区49号住居と出土遺物

II 検出した遺構と遺物

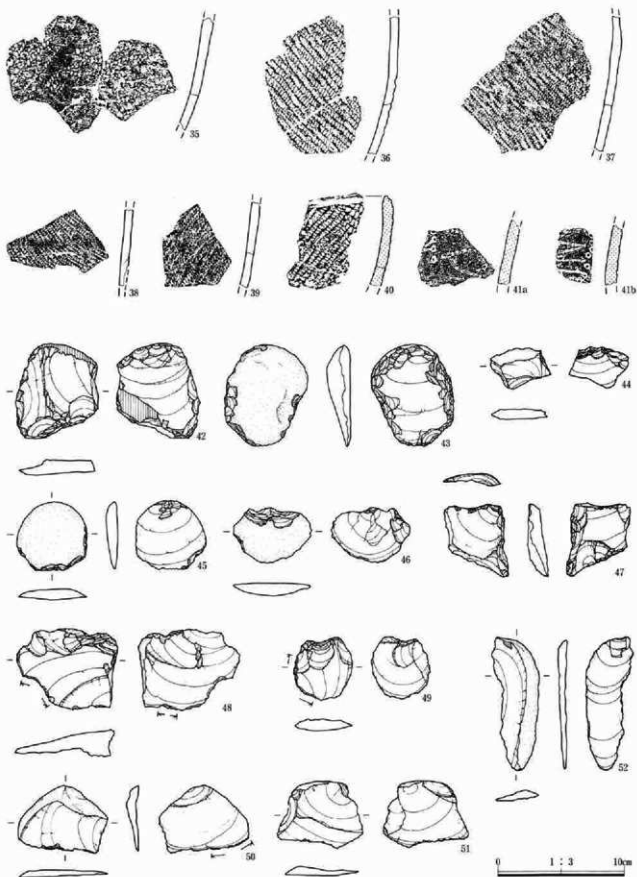


第75図 2区49号住居出土遺物(1)

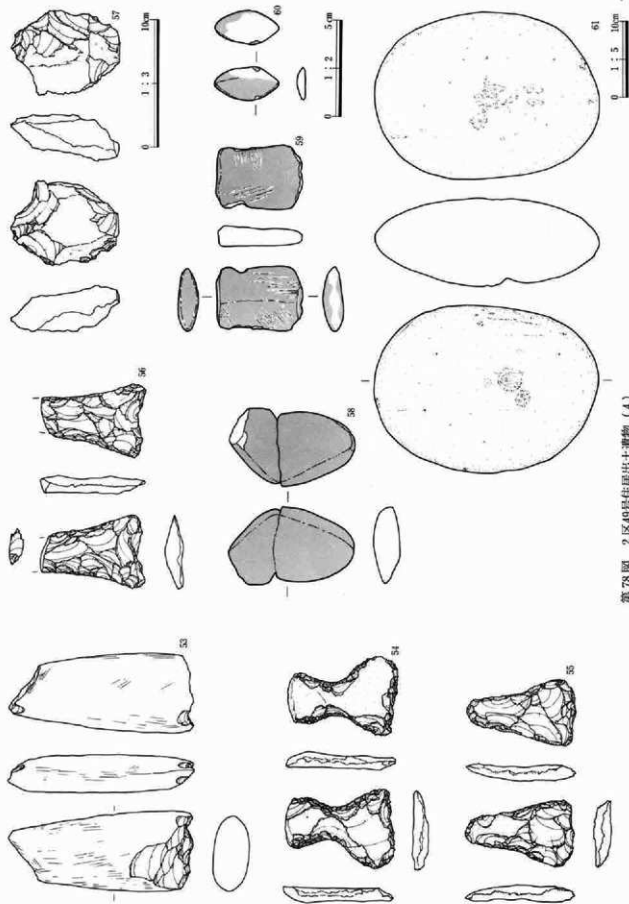


第76图 2区49号住居出土遗物(2)

II 検出した遺構と遺物



第77图 2区49号住居出土遺物(3)



第78图 2区49号住居出土遗物(4)

## 2区54号住居

位置 P-5 写真 PL 6-4・39

重複 古墳時代の2区22号住居により、南側の大半を切られている。

面積 不明。 方位 不明。

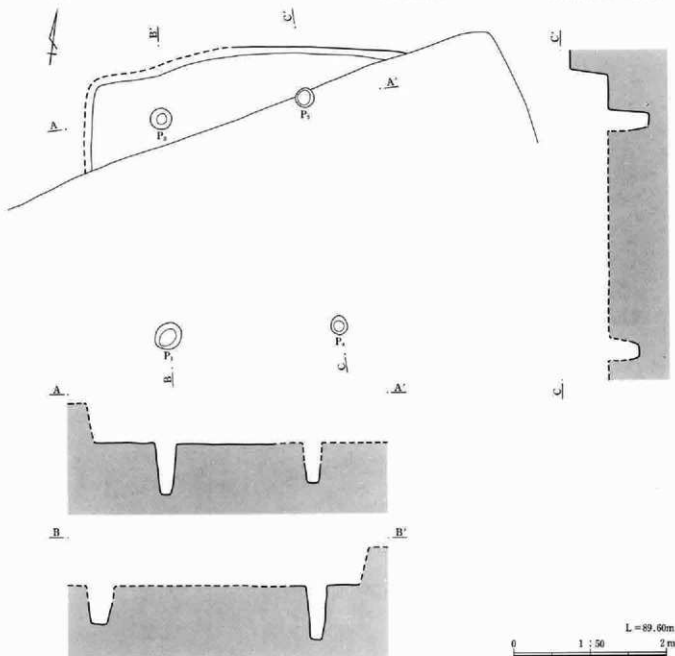
形状 22号住居との重複により形状・規模ともに不明であるが、残存している壁面や隅部からみて方形を呈すると想定される。

床面 ロームを48~53cm掘り込んで床面としている。

柱 穴 主柱穴と想定されるものが、4本検出された。

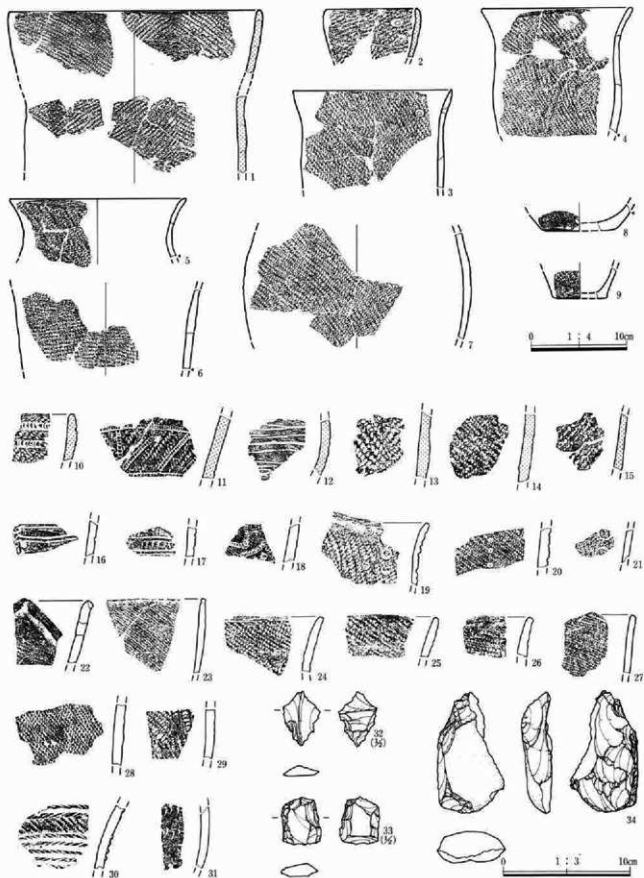
各柱穴の心々間を結んだ形状は、長軸を南北方向にもつ台形状を呈する。各柱穴間の距離は、 $P_1 \sim P_2$  : 2.85m、 $P_2 \sim P_3$  : 1.95m、 $P_3 \sim P_4$  : 3.00m、 $P_4 \sim P_5$  : 2.30mである。また各柱穴の規模(直径×深さ)は、 $P_1$  : 38×50cm、 $P_2$  : 27×70cm、 $P_3$  : 24×54cm、 $P_4$  : 22×39cmである。

遺物 土器片を中心とした遺物が若干認められるが、そのほとんどが22号住居の埋没土中より出土したものである。(遺物観察表: 205頁)



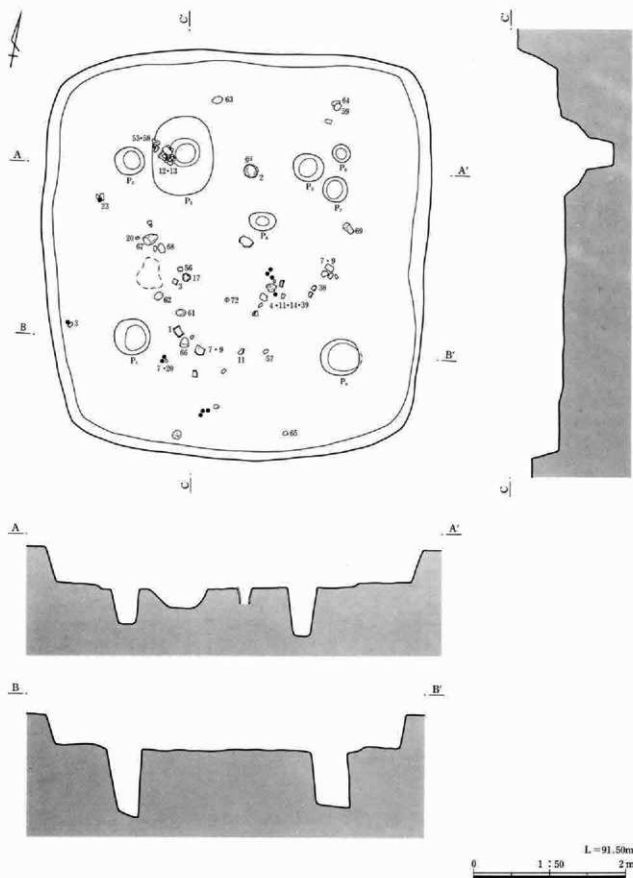
第79図 2区54号住居





第 80 图 2 区 54 号住居出土文物

II 検出した遺構と遺物



第81図 3区4号住居

## 3区4号住居

位置 d-17 写真 PL7・8・40~42

形状 長軸を南北にもつが、正方形に近似した隅丸形状を呈する。規模は長辺5.40×短辺5.18mで、各辺は外側に若干の膨らみをもつ。

面積 25.73m<sup>2</sup> 方位 N79°E

床面 ロームを34~57cm掘り込んで床面としている。中央部が周壁際に比べてすり鉢状に10cm前後低くなるが、全体的には凹凸の少ない床面である。また、支柱穴ラインの外側から周壁際にかけては、堅緻に踏み固められて叩き床状となっている。

埋没土 上層に黒色土、中層から下層にかけて黒褐色土と褐色土との混土层が、それぞれレンズ状に自然堆積をしている。

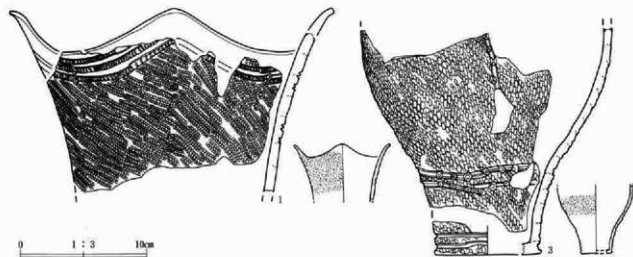
炉 深鉢土器(No.2)を使用した埋め燂炉であり、柱穴P<sub>5</sub>とP<sub>3</sub>のほぼ中間に位置する。土器内部には焼土ブロックを含んだ黄褐色土が堆積していた。また、P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>の中間付近の床面には、40×20cmの範囲に焼土が認められるが、上面が叩き床状となっていることから、埋め燂炉よりも前段階の炉であった可能性もある。

柱穴 8本の柱穴が検出されている。住居の対角線上に位置するP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴と考えられ、また位置的にそれらと近接するP<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>も時間的な前後関係は不明であるが、建て替えに伴う主柱穴の可能性が高い。各支柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形と相似

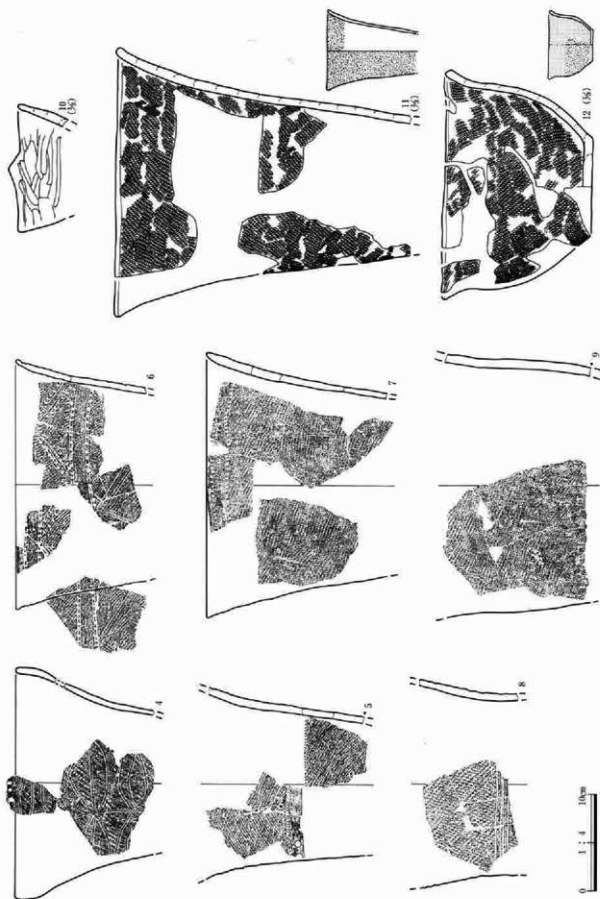
形を呈し、その距離はP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>:2.35m、P<sub>3</sub>~P<sub>5</sub>:2.35m、P<sub>5</sub>~P<sub>4</sub>:2.55m、P<sub>4</sub>~P<sub>1</sub>:2.80mである。また各柱穴の規模(直径×深さ)は、P<sub>1</sub>:48×90cm、P<sub>2</sub>:40×48cm、P<sub>3</sub>:40×65cm、P<sub>4</sub>:50×70cm、P<sub>5</sub>:40×65cm、P<sub>6</sub>:23×19cm、P<sub>7</sub>:35×67cm、P<sub>8</sub>:36×40cmである。

遺物 土器片を中心に、かなり多量の遺物が出土しているが、その大半が住居中央部付近の埋没土中より出土したものである。床面に密着してNo.20の土器片やNo.61の凹み石、No.69の石皿、No.72の軽石製品が出土した。また、No.1の土器は柱穴P<sub>3</sub>に近接して床面より6cm浮いた位置に、横転して潰れた状態で出土した。

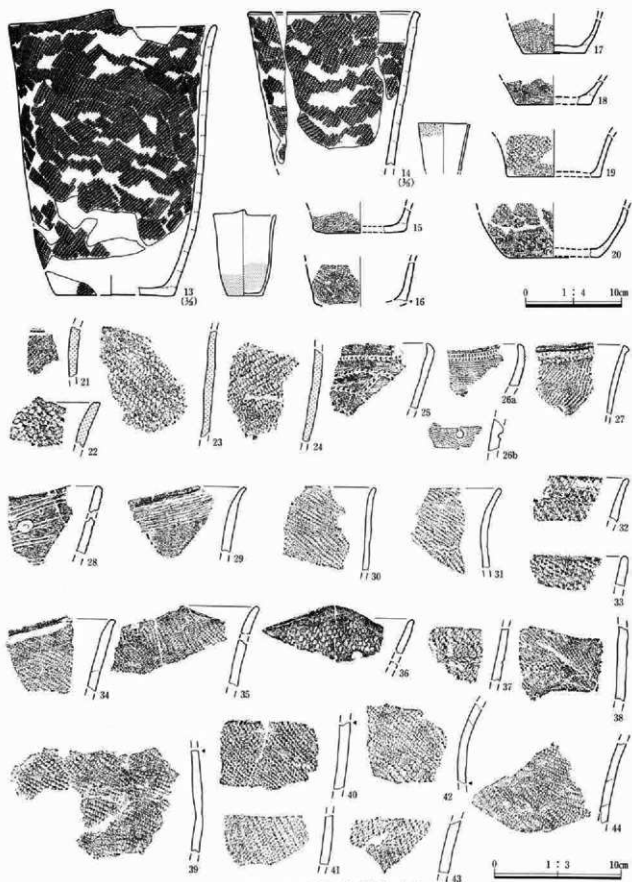
埋没土中の石器の器種別出土数は、打製石斧1点、削器6点、石核1点、使用痕ある銅片5点、凹み石・磨り石・敲き石類8点、石皿1点、砥石1点、スタンブ形石器1点である。(遺物観察表:205・206頁)



第82図 3区4号住居出土遺物(1)



第83圖 3区4号住居出土遺物(2)

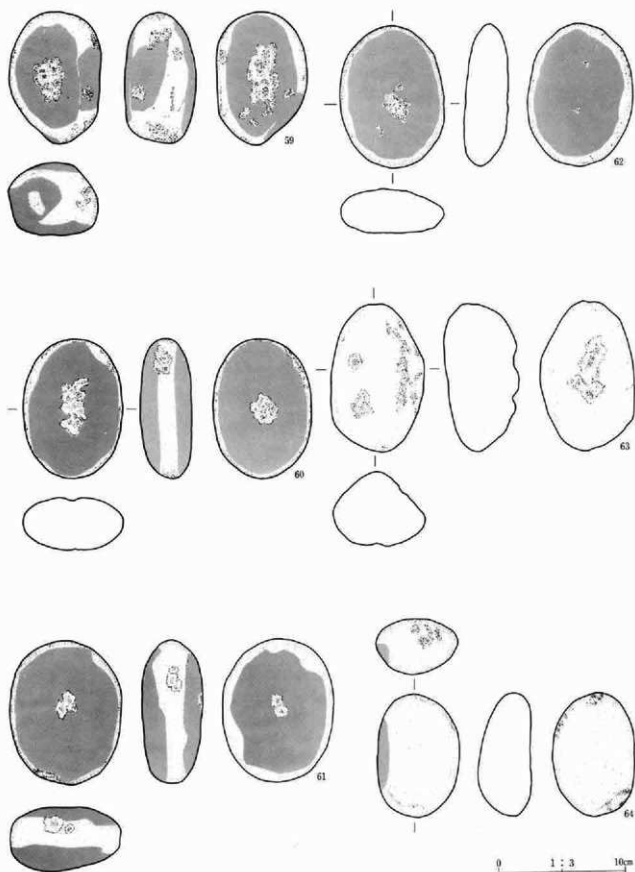


第 84 图 3 区 4 号住居出土遗物 (3)

II 検出した遺構と遺物

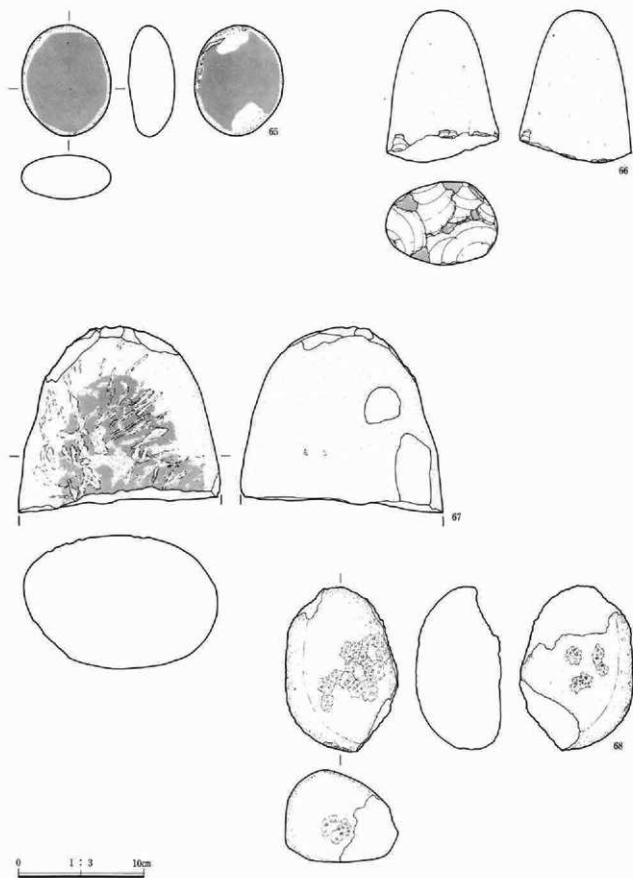


第85図 3区4号住居出土遺物(4)



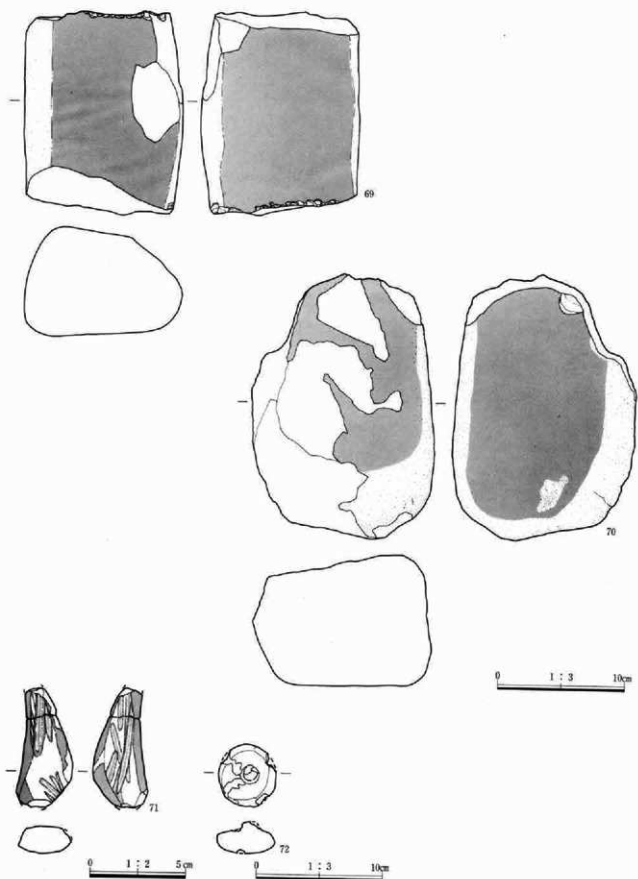
第 86 图 3 区 4 号住居出土遗物 (5)

II 検出した遺構と遺物



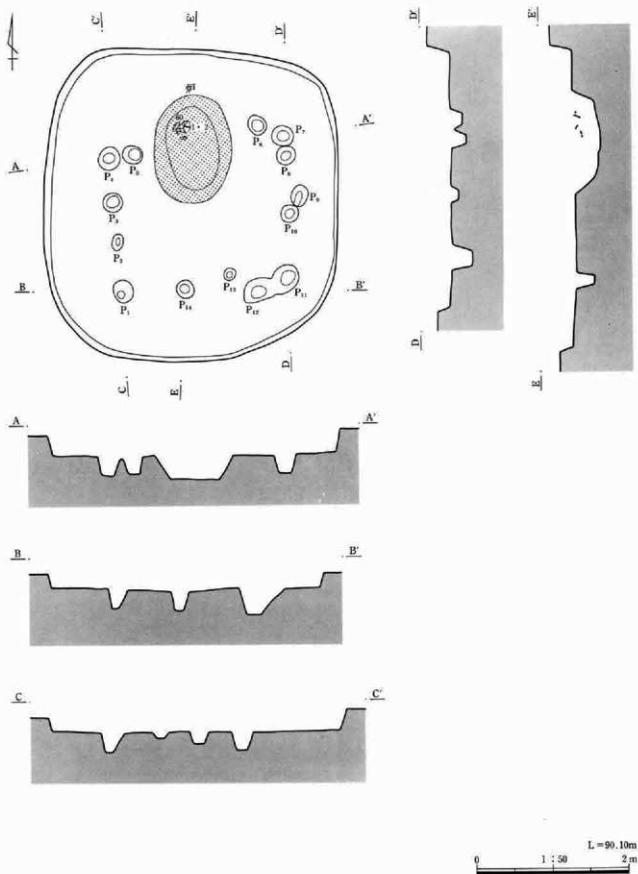
第87図 3区4号住居出土遺物(6)





第88图 3区4号住居出土遗物(7)

II 検出した遺構と遺物



第89図 4区2号住居

## 4区2号住居

位置 U-13 写真 PL 8・43~45

形状 一辺が約4.1mの隅丸正方形を呈する。

重複 床面中央部のやや北寄りに、土壌が掘り込まれている。新旧および共時関係を明確に把握することはできなかったが、土壌上面は埋燧炉が存在することから、本住居に後出する可能性が高い。

面積 14.10㎡ 方位 N86°W

床面 ロームを16~31cm掘り込んで床面としている。かなりの凹凸が認められるが、全体的には勾配の少ない平坦な床面である。柱穴ラインの内側は、踏み固められて叩き床状の堅緻な床面となっている。

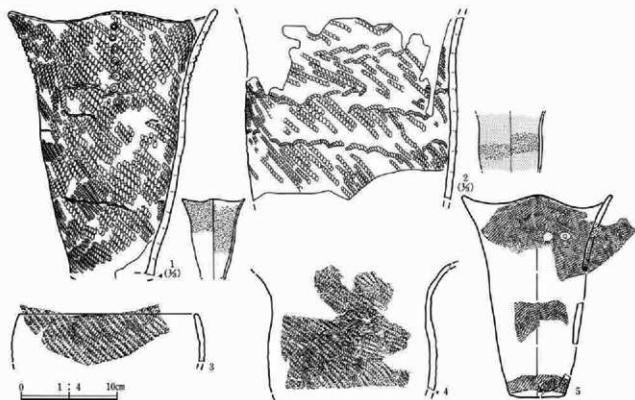
炉 P<sub>1</sub>とP<sub>7</sub>の柱穴を結んだラインの中間のやや北側に位置する。口縁部および胴部下半を欠損する深鉢土器(No.1)を正位に埋設した埋め燧炉で、土器内には僅かに焼土が堆積し、器面は被熱による若干の風化が認められる。No.2は炉内の埋設土中より出土した。

柱穴 14本の柱穴が存在するが、これらは周壁の50~80cm内側に配されている。各柱穴の心々間を結んだ形状は、住居外形と同様の正方形を呈する。隅部

に位置する柱穴間の距離はP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>:1.80m、P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>:2.35m、P<sub>7</sub>~P<sub>11</sub>:1.85m、P<sub>11</sub>~P<sub>4</sub>:2.25mで、それらの間には50cm前後の間隔で2~3本の柱穴が配されている。各柱穴の規模(直径×深さ)は、P<sub>1</sub>:30×26cm、P<sub>2</sub>:22×7cm、P<sub>3</sub>:25×16cm、P<sub>4</sub>:30×24cm、P<sub>5</sub>:27×21cm、P<sub>6</sub>:27×10cm、P<sub>7</sub>:30×16cm、P<sub>8</sub>:26×22cm、P<sub>9</sub>:28×46cm、P<sub>10</sub>:28×12cm、P<sub>11</sub>:35×27cm、P<sub>12</sub>:30×34cm、P<sub>13</sub>:17×5cm、P<sub>14</sub>:25×24cmである。

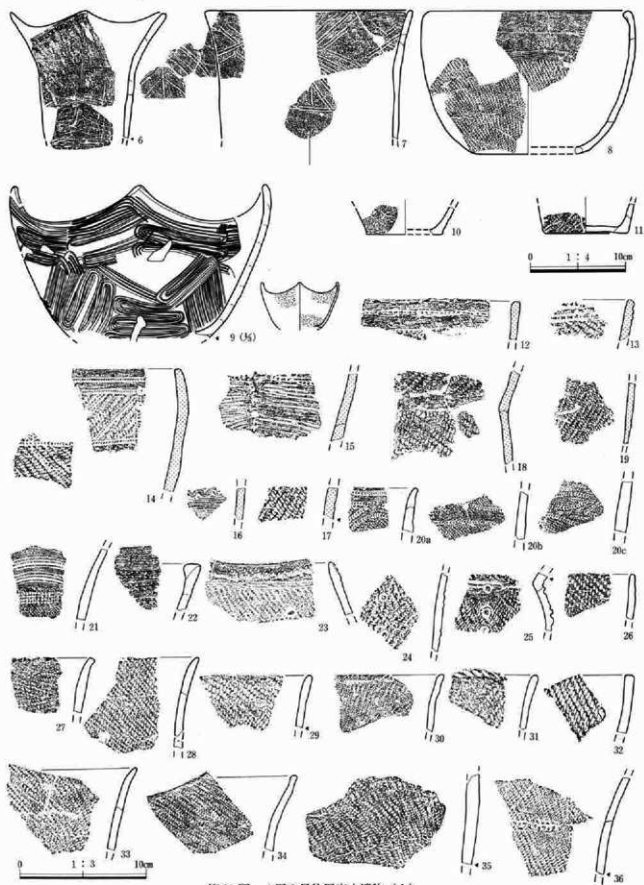
遺物 炉埋設土器や炉内より出土したNo.60の打製石斧を除いて、全て埋設土中より出土したものである。なお、No.5・6・9の土器は、古墳時代の2区22号住居の埋設土中より出土した破片と接合および同一個体の関係にある。石器の器種別出土数は、打製石斧3点、石匙1点、加工・使用痕ある刮片7点、調整刮片1点、凹み石・磨り石・蔽き石類14点、石皿4点、砥石1点である。(遺物観察表:206頁)

備考 住居中央部の北寄りに位置し、炉と重複する土壌状の掘り込みは平面形が楕円形状を呈し、長軸1.45×短軸1.05m、深さ30cmの規模をもつ。

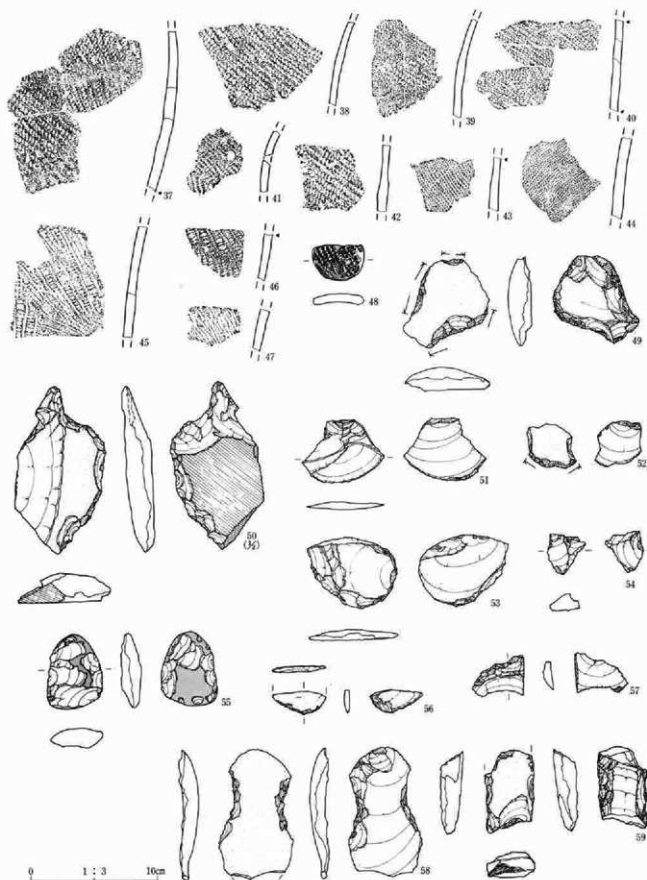


第90図 4区2号住居出土遺物(1)

II 検出した遺構と遺物

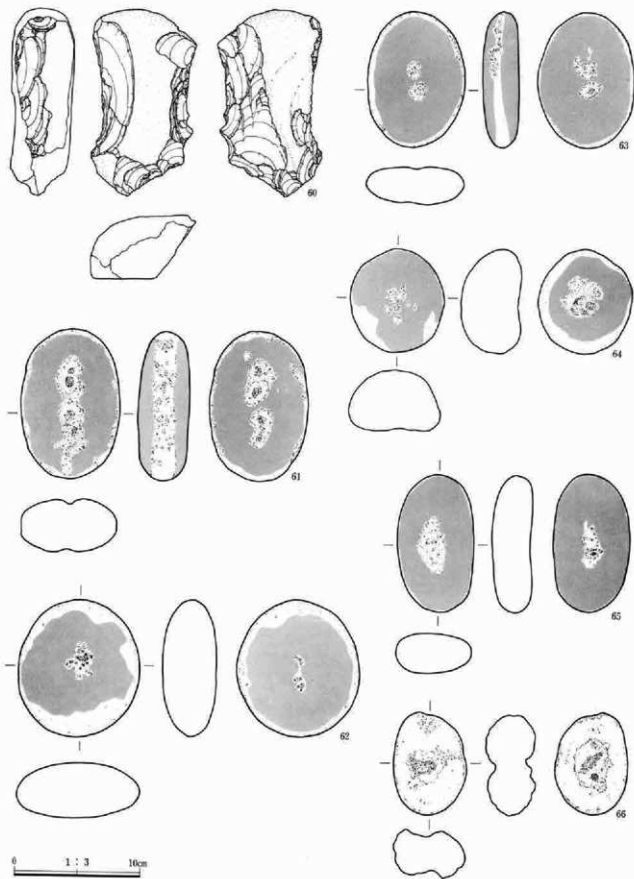


第91図 4区2号住居出土遺物(2)

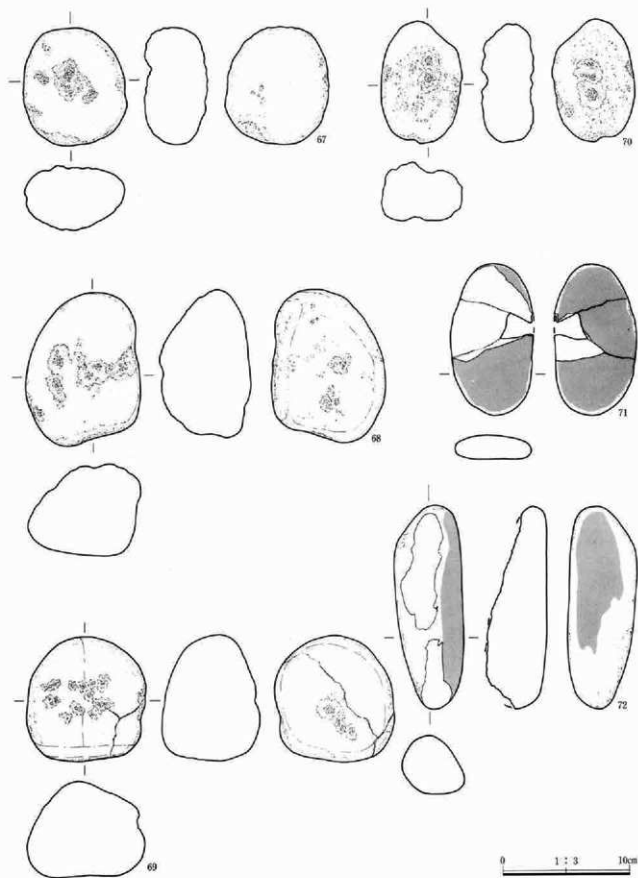


第 92 图 4 区 2 号住居出土遗物 (3)

II 検出した遺構と遺物

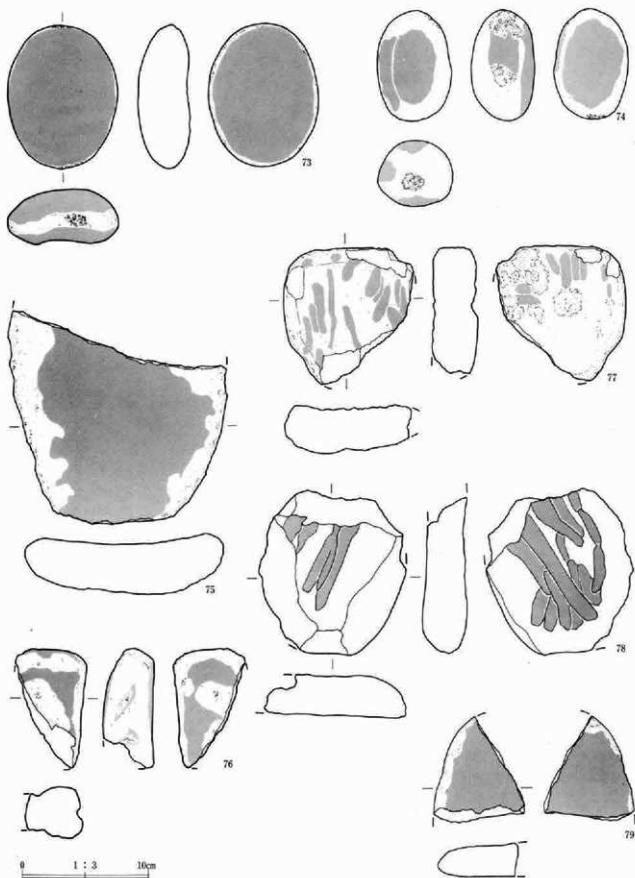


第93図 4区2号住居出土遺物(4)



第94图 4区2号住居出土遺物(5)

II 検出した遺構と遺物



第95図 4区2号住居出土遺物(6)

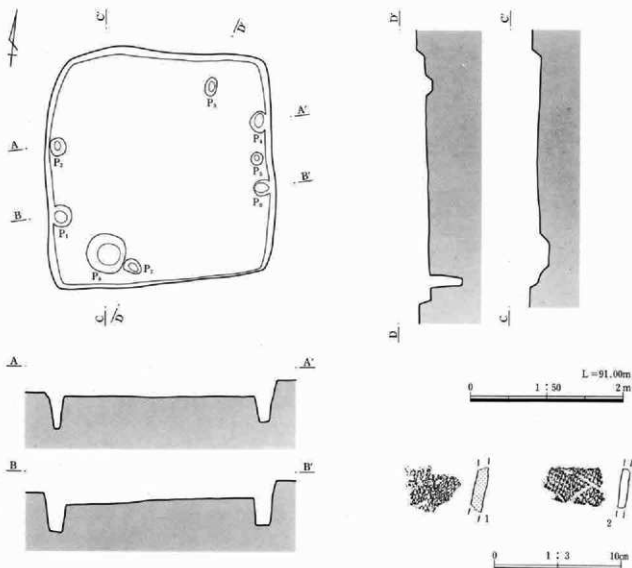


## 4区3号住居

位置 B-1 写真 PL9・45  
 形状 上層からの擾乱により、北東隅付近の壁面の掘り込みが不明瞭であるが、一辺の長さが約3mの正方形形状を呈すると想定される。北東隅を除いた各隅部は、直角に近い状態で掘り込まれている。  
 面積 8.99㎡ 方位 N80°E  
 床面 ソフトロームを9~24cm掘り込んで床面としている。かなりの凹凸が認められるが、全体的に傾斜の少ない平坦な床面である。叩き床状の特に堅緻な部分は認められず、概して軟弱な状態であった。  
 柱 穴 7本の柱穴が検出されたが、周壁際のP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>

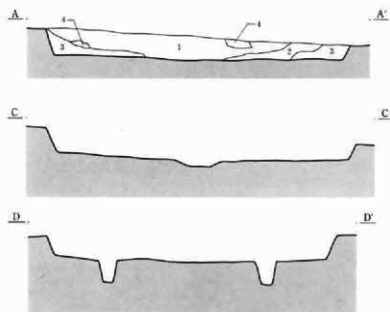
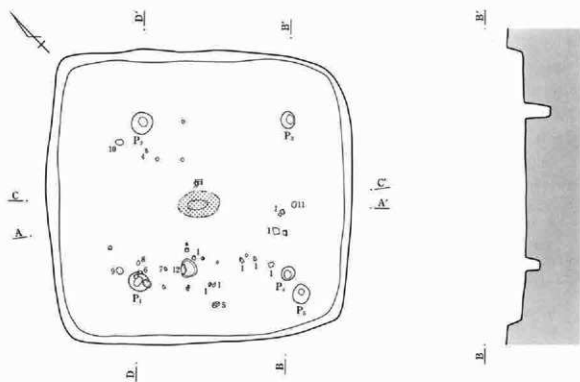
がその位置や規模の面からみて主柱穴に該当すると考えられる。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の心々間を結んだ距離は、P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>: 0.93m、P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>: 2.73m、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>: 0.87m、P<sub>4</sub>~P<sub>1</sub>: 2.73mである。また各柱穴の規模(直径×深さ)は、P<sub>1</sub>: 28×38cm、P<sub>2</sub>: 25×43cm、P<sub>3</sub>: 26×38cm、P<sub>4</sub>: 24×39cm、P<sub>5</sub>: 24×9cm、P<sub>6</sub>: 16×8cm、P<sub>7</sub>: 25×39cmである。尚、P<sub>7</sub>に近接して平面形が円形で掘り鉢状の掘り込み(直径54×深さ11cm)が検出されたが、その性格については不明である。

遺物 埋没土中より2点の土器片が検出されたのみである。(遺物観察表: 206頁)



第96図 4区3号住居と出土遺物

II 検出した遺構と遺物



5区7号住居

1. 暗褐色土 黄褐色土を斑状に含む、非常に堅く締まる。
2. 暗褐色土 1層より明るい色調を呈し、ローム粒子混入。
3. 黄褐色土 ローム土。
4. 暗褐色土 ローム土を多量に混入する。

0 1:50 L=91.80m  
2m

第97図 5区7号住居

## 5区7号住居

位置 B-3 写真 PL.9・10・45

形状 長辺4.1×短辺3.8mの規模をもち、隅丸正方形に近似した長方形を呈する。各辺はほぼ直線的に掘り込まれている。

面積 14.98㎡ 方位 N45°E

床面 ローム土を17～33cm掘り込んで床面としている。凹凸の少ない平坦な床面であるが、北壁から南壁方向へと比高差9～10cmの傾斜が認められる。全体的に踏み固められているが、叩き床状の特に堅緻な部分は認められなかった。

埋没土 住居中央部には黄褐色土を斑点状に含む締まりの強い黒褐色土が、また周壁際にはソフトロームに似た黄褐色土がそれぞれレンズ状に堆積しており、自然埋没の様相を示す。

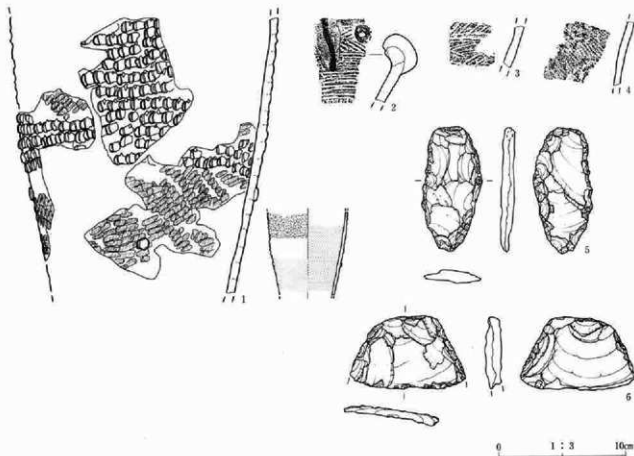
炉 床面のほぼ中央部に位置する。平面形が楕円形状を呈し、長軸56×短軸34cm、深さ6cmの規模をも

つ掘り込み炉である。底面や壁面の被熱による赤色化は、僅かに認められる程度である。

柱穴 住居の対角線上に主柱穴4本と、補助柱穴あるいは建て替え時の柱穴を思わせる1本の計5本が検出された。各主柱穴の心々間を結んだ形状は、住居の外形とほぼ相似形を呈し、その距離は $P_1 \sim P_2 : 2.08$  m、 $P_2 \sim P_3 : 2.00$  m、 $P_3 \sim P_4 : 2.03$  m、 $P_4 \sim P_1 : 2.03$  mである。また各柱穴の規模(直径×深さ)は、 $P_1 : 26 \times 28$  cm、 $P_2 : 31 \times 32$  cm、 $P_3 : 23 \times 34$  cm、 $P_4 : 17 \times 18$  cm、 $P_5 : 26 \times 45$  cmである。

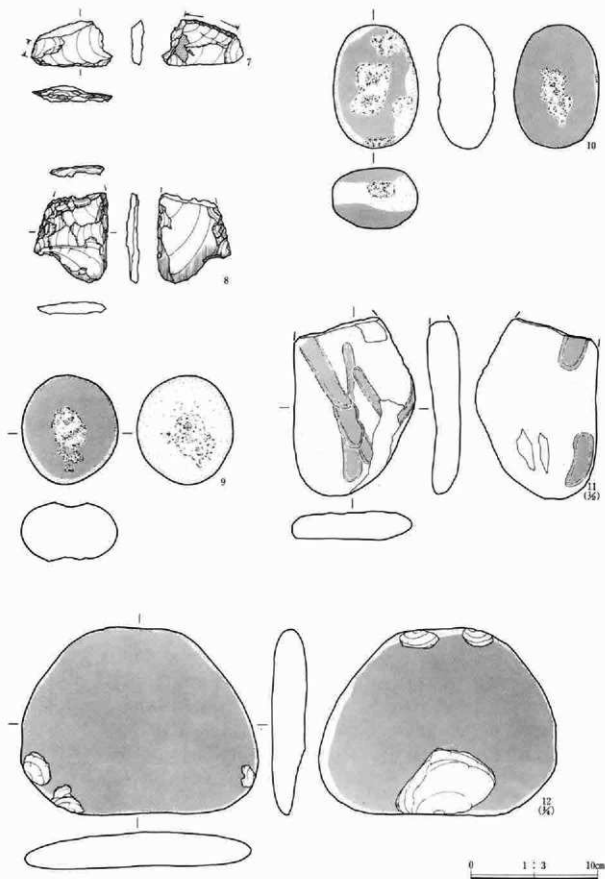
遺物 少量の土器片と石器が、埋没土を中心に出土している。No.1の土器は、 $P_1$ 付近の床面上や埋没土中に散在していたものが接合した例である。石器ではNo.8の打製石斧が床面に密着して出土し、埋没土中より加工・使用痕ある石器4点、凹み石・磨り石・敲き石類2点、石皿1点、砥石1点が出土している。

(遺物観察表：206頁)



第98図 5区7号住居出土遺物(1)

II 検出した遺構と遺物



第99図 5区7号住居出土遺物(2)

## 5. 土 壇

22基の土壇を検出した。土壇は円形に近い形状を呈するもの（Ⅰ類）と楕円形状を呈するもの（Ⅱ類）に大別されよう。Ⅰ類の土壇はU状の断面形状を呈するもの（Ⅰ-a類）と、フラスコ状に近い断面形状を呈するもの（Ⅰ-b類）に二分して扱えた。前者には深さ1mを越える土壇も見られ、更に細分が可能な要素を残している。Ⅱ類の土壇はピットの有無で二分され、壇底にピットを持つ土壇（Ⅱ-a類）と壇底にピットの見られない土壇（Ⅱ-b類）に扱えた。通常、この地域では縄文時代の住居や土壇は地山のローム土に極めて似た暗褐色土で埋設しているため確認が難しく、ハードロームの上面まで遺構が確認できない場合も多い。土壇が列状に分布する3区を除き、この遺跡でもハードロームまで下げて土壇を確認しているわけではなく、決して充分とはいえない。寧ろ、検出した土壇以外にも確認できない土壇が相当量に達する、と想定している。また、Ⅱ類の土壇に関する調査も充分とは思われない。壇底を縦に断ち截る同種遺構の調査では、単に上から掘り下げる以上の詳細な情報が読み取れる。そこでは通常上面では確認が難しい隠れたピットや先端の尖る棒状底も確認され、さらには逆茂木を押し込んだ状態も確認され、群在する土壇の使用状況を良く示している。検出した土壇の下部構造には以上の状況を暗示する情報は確認されないため、断定できない要素を多分に含む。確認した限り土壇の埋設状態は通常自然堆積状態を示しており、概してⅠ類の土壇には前期の土器が多出する傾向を示していた。

### 2 区 の 土 壇（第100図）

4基を検出した。4基とも台地東側縁辺の住居周辺に分布している。概して、土壇は円形に近い平面形状を呈しており（1号・2号・11号）、長方形に近い平面形態を呈する土壇（13号）は異質に思える。前者の土壇には前期・諸磯段階の土器が出土しており、住居に伴う可能性を残している。土壇はU状の断面形状を呈し、Ⅰ-a類の土壇に分類されよう。

### 3 区 の 土 壇（第100～105図）

15基の土壇を検出した。6基がⅠ類の土壇に、9基がⅡ類の土壇に属す。Ⅰ類の土壇はa類（5号・8号・10号・13号・15号土壇）が主体で、深さ0.5m～0.8mを測る土壇（5号・8号・13号・15号）が多い。深さ1.9mを測る土壇（10号）は異質な土壇と見られ、検出した土壇の中には類例は確認できない。このほか、a類の土壇を1基（1号）確認している。a類の土壇は住居の周辺に分布する場合が多く、貯蔵穴タイプの典型的な例だが、台地南側縁辺の周辺には住居は確認できない。Ⅱ類の土壇は壇底にピットを持つa類（6号・7号・9号・11号・12号・16号～18号土壇）が主体を占めている。土壇は概して漏斗状の断面形状を呈しており、上面では広く口を開けている。土壇底面のピットは1ヶ所～3ヶ所とバラツキ、多様性に富む。確認した限り、土壇は自然堆積状態を示し、埋設していた。概して遺物出土は乏しく、土壇の構築時期を特定できない例が多数を占める中で、1号土壇には遺存状態の良好な前期・諸磯段階の土器（第106図）が出土しており、唯一土壇の構築時期が判明する例である。土壇の形態的特徴も前期に多いタイプであり、周辺に住居の存在も想定されよう。このほかには、7号土壇・11号土壇の埋設土中より燃余文土器が出土している。

3区の土壇は南北に長い台地の尾根部分に分布する傾向が著しい。各類の土壇には一定の分布傾向が看取され、Ⅰ類の土壇は3区南側の台地縁辺や北側の台地西側斜面に、Ⅱ類の土壇は部分的にⅠ類の土壇分布と重なりつつ、概ね尾根上を選び列状に土壇を構築する傾向が指摘されよう。また、Ⅱ類の土壇には、言わば土壇の群在傾向が指摘され、数基の土壇が群在し機能していた可能性を暗示している。なかでも、10号土壇と11号土壇の2基や6号土壇・7号土壇・17号土壇の3基には、列状分布の状態を明確に示している。とはいえ、列状に分布するⅡ類の土壇は決して一律に分布していたわけでも、また、全く同じ構造を有していた

## II 検出した遺構と遺物

わけでもないのであり、同時存在したとは思われないのである。言い換えるなら、列状分布する極めて同時存在した可能性の高い上記二群の土壌の他にも、長軸方向の異なる土壌（16号土壌）や単独状態で分布する土壌（18号土壌）も見られ、配置状況からみて全部が同時に機能していた可能性は薄いと考えるのである。以上に述べた通り、配置状況からみた土壌の構築時期は、多時期に互る可能性を示唆するわけだが、土壌の構築時期を示すデータは極めて乏しく構築時期の特定は難しい。最近の調査でも、同一形式の土壌が多時期に互り存続する事実を確認しており、土壌の構築時期は一概に断定できない。

先に述べた列状に分布する土壌以外にも、検出した土壌の中にはピットの数こそ異なる一方で、位置的に見てピットの配置に規格性を持つ土壌（例えば、18号土壌）も見られ、ピットの「差し替え」も充分想定が可能だが、列状分布する土壌のピットは1～3ヶ所とバラツキが著しく、基本的に土壌の下部構造は大きく異なる。既に述べた通り、最近の調査成果では基本的にピットは規格的に穿たれ、列状分布する土壌の下部構造は一致する例が多い。特に、前期・黒浜段階から諸磯段階に土壌の構築時期が特定可能な前橋市飯土井町の飯土井二本松遺跡では、列状分布する土壌の形態的一致と繰り返し使用する状態を確認している。このことから見れば、3区検出の土壌（II類）は短期間に

構築使用している可能性も全く否定できないわけだが、長軸方向の異なる土壌や単独分布する土壌の存在理由を説明したことにはならないのであり、問題を残している。

### 5区の土壌

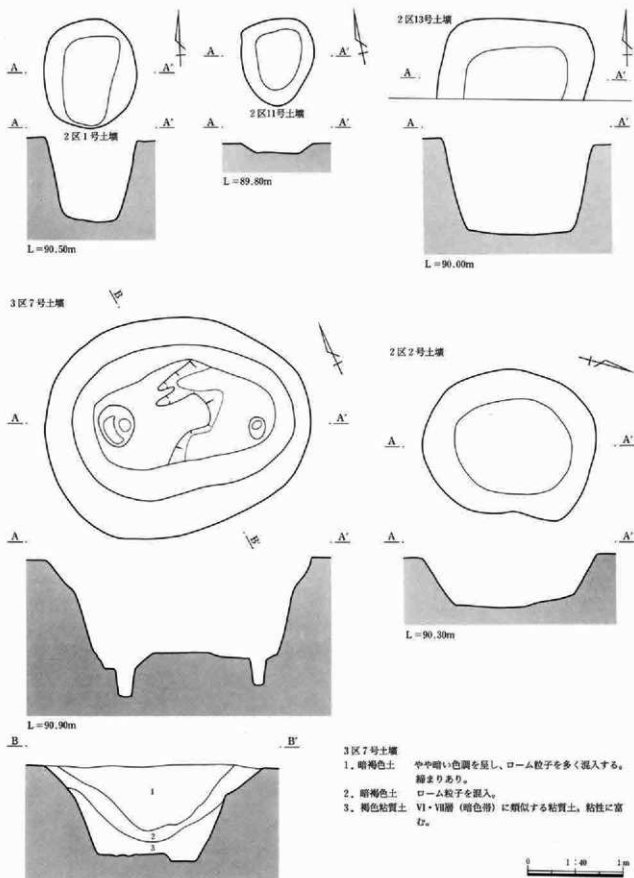
3基を検出した。1基がI類の土壌に、2基がII類の土壌に属す。I類の土壌はU状の断面形状を呈すI-aタイプであり、また、II類の土壌は墳底にピットを持つII-aタイプであり、両者とも浅い沖積地に臨む台地東側縁辺に分布する。I-a類に属す7号土壌は、概ね楕円形状に近い平面形状を呈す。断面形状は皿状に近い。構築時期は不明だが、土壌埋没土中より土器の小片（第106図）が出土している。II-a類に属す5号・8号土壌は漏斗状に開く断面形状を呈し、ピットを2ヶ所に穿つ。長軸方向が大きく異なる一方、台地縁辺を囲み分布するようにもみえ、群に分布する可能性を秘めており、更に調査区外に同種土壌の分布が延びる可能性も否定できない。土壌に伴う、或は、土壌の構築時期を示す土器の出土は見られない。

なお、8号土壌は基本的に2ヶ所にピットを有するものだが、主たるピットの同脇に更に小さなピットを確認している。主たるピットの機能を補う補助的役割を果たしているのか、ピットを差し替えているのか不明だが、両者の可能性が想定されよう。

土壌番号	検出位置	規模		形態	備考	
		長さ	幅深さ			
1	2区R-7G	1.15	0.98	0.89	I-a	諸磯a式期
2	2区S-7G	1.85	1.75	0.58	I-a	
11	2区O-5G	0.90	0.76	0.10	I-a	黒浜～諸磯
13	2区O-5G	1.90	-	1.03	I-a	
1	3区J-5G	1.44	1.25	0.72	I-b	諸磯a式期
5	3区L-13G	0.90	0.75	0.42	I-a	
6	3区D-12G	3.22	2.12	1.12	II-a	小pit 3
7	3区A-12G	2.83	2.78	0.98	II-a	小pit 2
8	3区J-10G	1.25	1.10	0.56	I-a	
9	3区D-7G	2.20	1.55	0.92	II-a	小pit 2
10	3区C-8G	1.35	0.95	1.92	I-a	

土壌番号	検出位置	規模		形態	備考	
		長さ	幅深さ			
11	3区I-7G	2.75	1.50	0.77	II-a	諸磯b式期
12	3区I-16G	2.75	1.88	1.01	II-a	小pit 2
13	3区S-12G	1.33	1.10	0.79	I-a	
14	3区R-12G	2.33	1.15	0.75	II-b	
15	3区M-11G	1.60	1.52	1.27	I-a	
16	3区B-10G	2.25	1.56	0.95	II-a	小pit 2
17	3区B-12G	2.82	2.08	1.00	II-a	小pit 3
18	3区V-15G	2.78	1.25	1.08	II-a	小pit 3
5	5区F-33G	2.76	2.20	1.00	II-a	小pit 2
7	5区A-33G	1.47	1.38	0.20	I-a	
8	5区H-36G	2.22	1.37	0.93	II-a	小pit 4

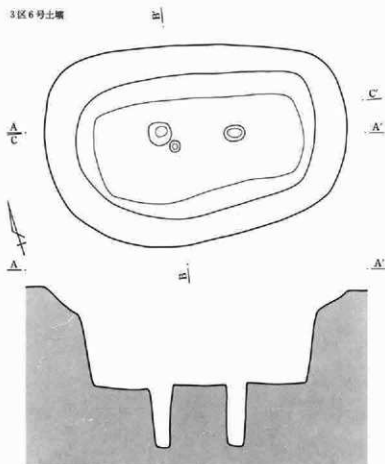
土壌の計測単位はm



第100図 土塙(1)

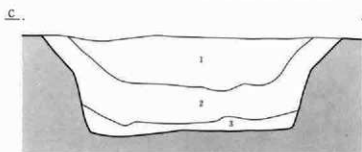
II 検出した遺構と遺物

3区6号土壇



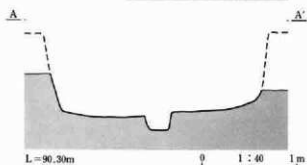
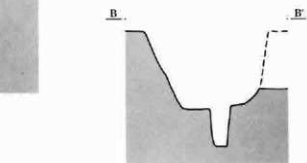
3区6号土壇

1. 暗褐色土 やや暗い色調を呈し、ローム粒子・白色バミスを含む。締まりあり。
2. 暗褐色土 ローム粒子・白色バミスを混入。粘性あり。
3. 褐色粘質土 VI・VII層（暗色帯）に近い粘質土。粘性に富む。



L=91.30m

3区9号土壇



L=90.30m

0 1:40 1m

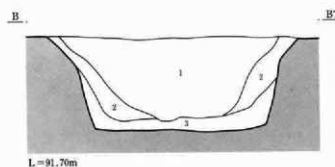
第101図 土壇(2)





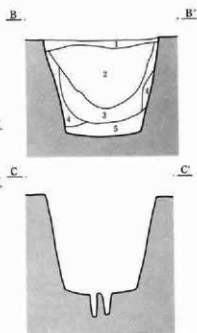
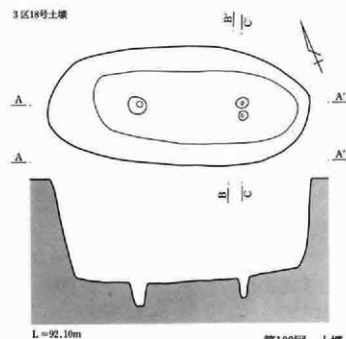
3区12号土墳

1. 暗褐色土 ローム粒子・白色バミスを混入する。
2. 黄褐色土 ローム土。
3. 黄褐色土と褐色粘質土の混土层。



3区18号土墳

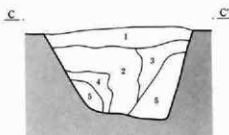
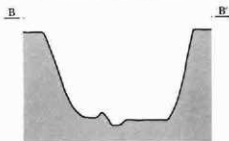
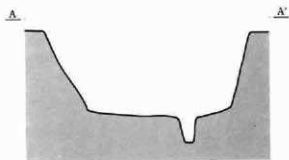
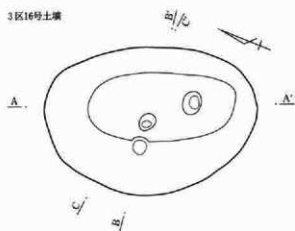
1. 暗褐色土 白色バミスを混入する。
2. 暗褐色土 やや暗い色調を呈し、白色バミス・ローム粒子を含む。締まりあり。
3. 褐色土 ローム土の崩落層。締まりなく、粘性に乏しい。
4. 褐色土 ローム土の崩落層。
5. 褐色粘質土 ロームブロックを含む。粘性に富む。



第102図 土墳(3)

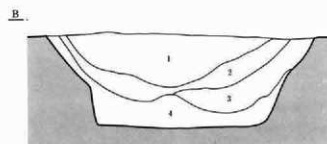
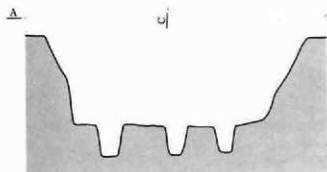
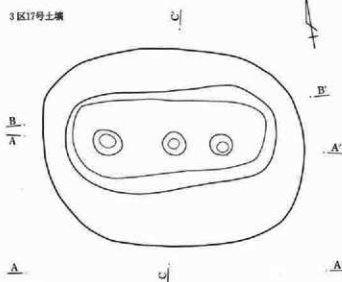
II 検出した遺構と遺物

3区16号土壇



L=91.40m

3区17号土壇



L=91.10m

3区16号土壇

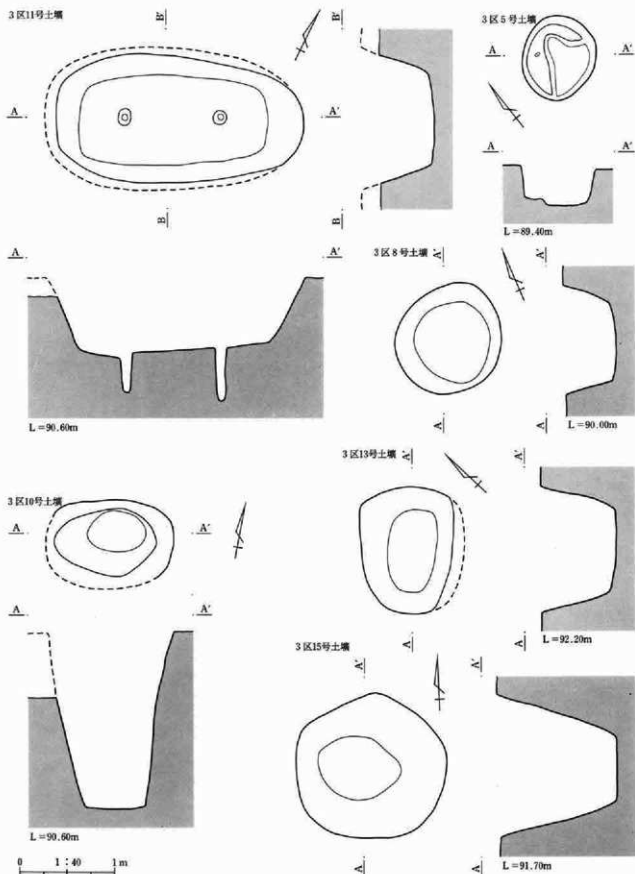
1. 暗褐色土 白色バミスを混入する。
2. 暗褐色土 ハードロームを多く含む。
3. 暗褐色土 白色バミスを混入。1層より明るい色調を呈す。
4. 暗褐色土 白色バミスを多量に混入する。締まりには乏しい。
5. 褐色土 ロームブロックを多く含む。締まりには乏しい。

3区17号土壇

1. 暗褐色土 やや暗い色調を呈す。ロームブロックを含む。
2. 暗褐色土 1層よりやや明るい色調を呈す。
3. 褐色土 やや明るい色調を呈す。ロームブロックを含み、粘性に富む。
4. 褐色土 3と同様やや明るい色調を呈す。締まりには乏しい。

0 1:40 1m

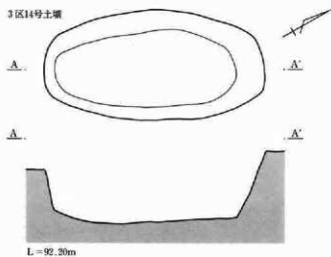
第103図 土壇(4)



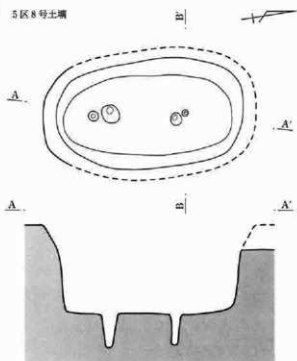
第104图 土壩 (5)

II 検出した遺構と遺物

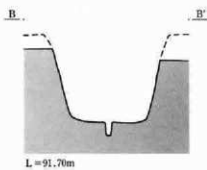
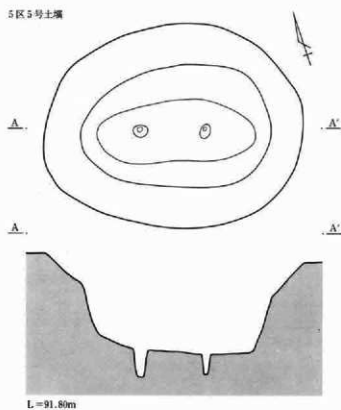
3区14号土壇



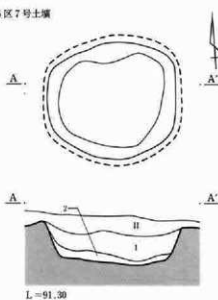
5区8号土壇



5区5号土壇



5区7号土壇

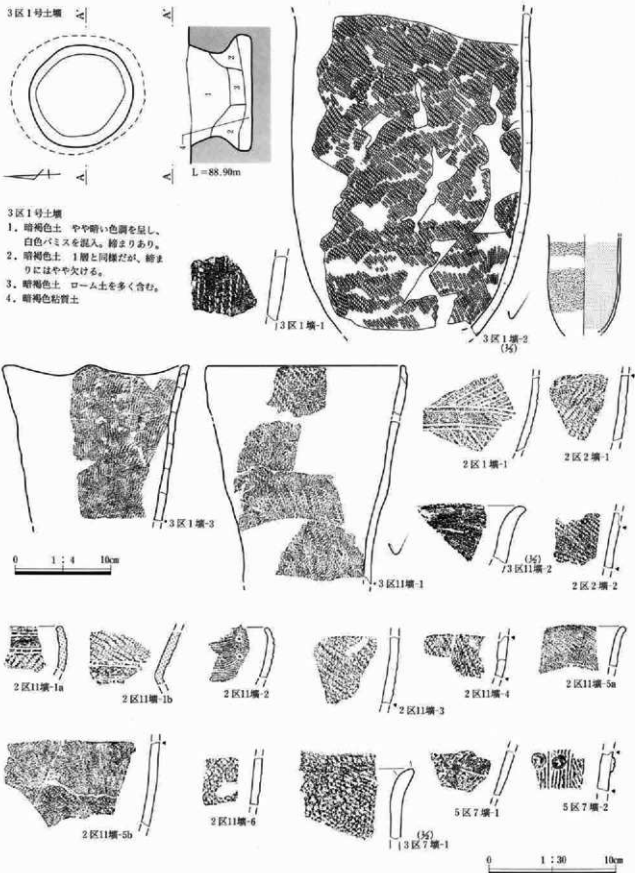


5区7号土壇

1. 暗褐色土 ローム粒子を少量混入。
2. 暗褐色土 1層よりやや明るく、白色パズルを少量混入。

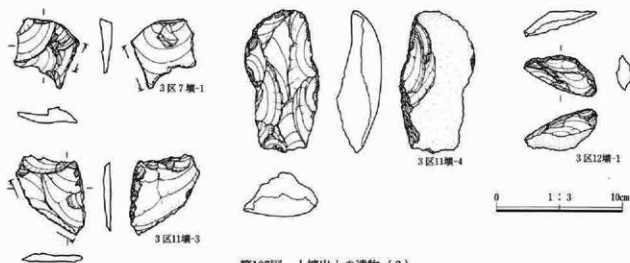


第105図 土壇(6)



第106図 土墳(7)と土墳出土の遺物(1)

## II 検出した遺構と遺物



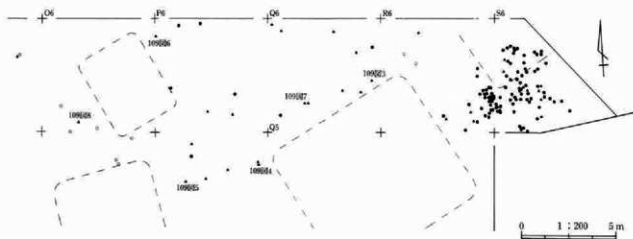
第107図 土壌出土の遺物(2)

## 6. 集石

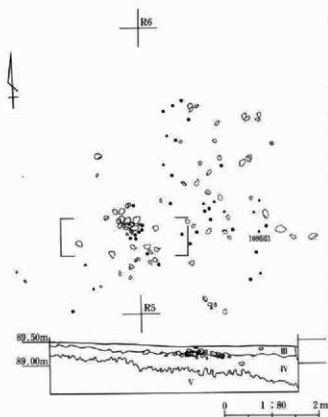
集石は台地の縁辺に近い、調査区の東南隅(2区、Q・R-5)で1基を確認した。台地の縁辺には微妙な凹凸が見られ、凸部が沖積地に張り出す地形感を呈している。地形的に見れば、集石は凸部の尾根部分に位置している。集石は調査区内には確認できないわけだが、集石は南側に広がる可能性を残している。調査は工事工程とも絡み、Nラインより南側に限定され、包含層の調査が不十分な点是否定できないわけだが、この地点以外には礫が多出する地点は見られないことから、調査区内に集石が存在した可能性は低い。ここでは、Mライン以南の遺物分布状況を併せ図示(第

108図)した。礫の集中部分は、現状で長軸6.5m・短軸4.5mの範囲に97点の礫が分布(第109図)している。分布域の北東部が古墳時代の住居(48号)と重複し、この部分の礫は絶て床下より出土している。そのため、正確な礫の分布状況は不明だが、概ね東側では散漫に西側では密集して分布する傾向を示している。

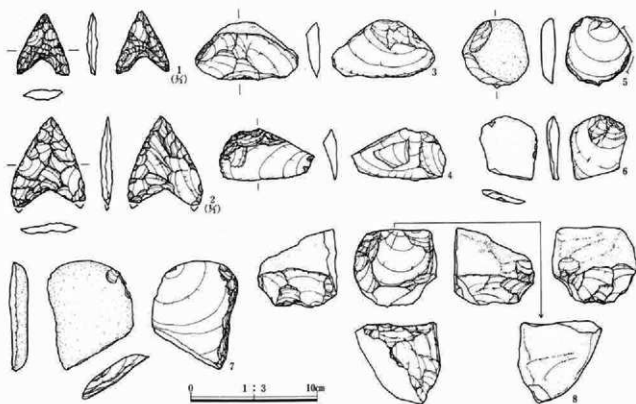
集石は約20点の礫から構成され、径70cmの範囲(R-4G)に密集している。完形礫より欠損礫を多く含まれ、3/4が破損している。個々の重量は500g未満の礫が9点、1,000g未満の礫が4点、1,000gを超える礫が6点(最も大きな礫は3,600gを測る)と概して



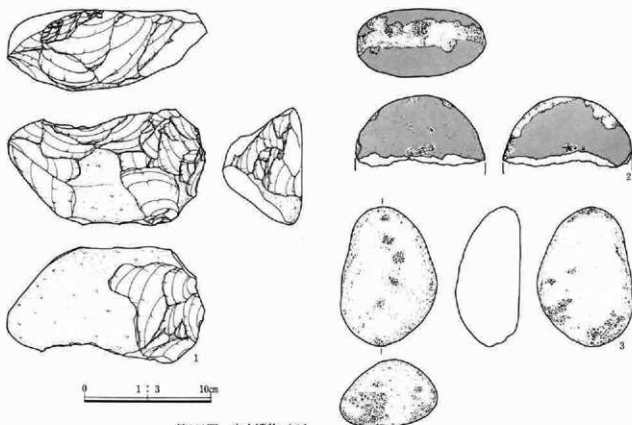
第108図 集石と遺物の分布状態(2区・6ライン以南)



大形の礫を使用する傾向を示している。礫の垂直分布にも「掘り込み」の痕跡を確認できないため、集石下土壌の存在した可能性は低い。礫には明確な赤化礫やタールの付着は見られない反面、破損部分の状態は「礫群」に一致している。また、延べ7例の接合資料を確認しており、集石内部の接合の他にも周辺の礫とも接合関係が有しており、周辺の礫を含め同時存在した可能性が強い。集石はII層上半部分の、より黒味の強いIII層・下部に出土している。集石周辺の出土資料は石鏃(第109図1)・石核(第110図1)が各1点、剥片が11点出土したのにとどまり、土器の出土は見られない。集石の所属時期は不明だが、周辺には前期・諸磯段階の住居が存在すること、包含層の土器類も前期の土器が圧倒的多数を占めており、集石の所属時期を暗示しているようにも思える。



第109図 集石と出土遺物(1)



第110図 出土遺物(2)

## 7. 包含層出土の遺物

### 7-1 3区出土の遺物

3区では、台地南側の先端部分で多量の遺物を検出している。第111・112図の通り、遺物は台地縁辺に弧状分布しており、台地中央付近にはほとんど遺物の散布は見られない。遺物の分布状況を更に詳しく見れば、台地西側の縁辺と南側縁辺の2ヶ所に集中する傾向が指摘され、特に南側の縁辺には遺物の集中分布が著しい。調査は包含層を徐々に掘り下げ、併せて遺構の検出を試みたが、2ヶ所で粘土の散布を確認したのに留まる。遺物は複数型式の土器や石器が混在し、その大半はⅢ・Ⅳ層から出土している。

以下、土器の時期別分布と石器の器種別分布を中心に、接合関係や同一個体の分布を加味して土器と石器の分布を記述していきたい。なお、ここでは5ライン以西・Fライン以北の台地西側縁辺の遺物集地点を

集地点No.1と、11ライン以西・Fライン以南の台地南側の遺物集地点を集地点No.2、遺物の散漫な11ライン以東を集地点No.3と便宜的に呼び説明する。

#### a. 土器の分布(第111図、付図2)

3区出土の土器は408点が出土している。燃糸文系土器や前期(諸磯段階)の土器が主体を占めるほか、沈線文系土器(三戸式・田戸式)や前期(黒浜式)、中期の土器も少量だが出土している。

**燃糸文土器** 燃糸文土器は口唇から口縁内面に縄文を施文する一群、条間隔の粗い燃糸文を施文する一群、燃糸条痕を施文する一群、無文土器の一群からなる。口唇から口縁内面に縄文を施文する一群は、4点(2点は位置不明)が分布の散漫な集地点No.3に出土している。条間隔の粗い燃糸文を施文する一群は集地点



点No1～No3に分布する。後述する前期・諸磯式土器の分布に比べ、全般に散漫な分布状況を示す。燃糸条痕を施す一群は、1点が集中地点No1に、6点がNo2に出土している。無文土器の一群はNo2に多く、No1・No3には数点が分布するのにすぎない。No2の分布状況も条間隔の粗い燃糸文の分布と同様に散漫な分布状況を示す。

**押型文土器** 8点が散漫な状態で集中地点No1に分布する。分布は北側に偏在し、燃糸文系土器や早期（三戸式・田戸式）の土器の分布とは、若干だが異なる。  
**沈線文土器** 集中地点No1・No3に各6点、No2に1点(121)が分布している。No1の分布に比べ、No3の分布は散漫で、4点(124・127・128)はNo2の分布範囲に近い地点に分布している。

**黒浜式土器** 集中地点No2に1点(152)が、No3に4点(145・149・150)が分布している。特定の地点に集中することなく、散漫な分布状況を示す。

**諸磯式土器** No2に集中分布するほか、No3に数点が分布する。No2の分布は密で、同一個体の集中度も高く、L・M-5・6Gに130・132・133・144が、I・J-8・9Gに129が、M・N-8・9Gに137が分布するほか、154～156が分布している。No3の分布状況は散漫で、17点(142・153・162・167・168・177)が出土している。

**その他の土器** 上記資料の他に、草創期前半の土器1点(1)と加曾利E式段階の土器(179・180)、加曾利B式段階の土器(181)が出土している。出土地点の明確な1点(180、集中地点No1より出土)を除き、表層資料が大部分であり、分布の傾向は指摘できない。

**接合資料** 条間隔の粗い燃糸文を施す一群に2例(30・45)、無文土器に2例(86・106)の接合を確認した。集中地点No1とNo2で接合した1例(86)を除き、3例は総てNo2に分布している。

**同一個体** 条間隔の粗い燃糸文を施す一群に11個の同一個体を、無文土器に4個の同一個体を、押形文土器に1個の同一個体を、沈線文系土器に2個の同一個体を確認した。同一個体は下記の通り分布していた。

集中地点No1～No3に分布する個体……32(燃糸文)

集中地点No1・2……31(燃糸文)・77(無文)

集中地点No2・3……55・53(燃糸文)・93(無文)

集中地点No1……110(押形文)

集中地点No2……15・34・50・61・62(燃糸文)・102(無文)

集中地点No3……29・38・41(燃糸文)・92・93(沈線文)

時期別に見た土器の分布は、燃糸文系土器や沈線文系土器が散漫に、より後出の前期・諸磯式土器は密集分布する傾向を示していた。後者の一群には器形復元が可能な資料も多く、概して同一個体は1ヶ所に分布する傾向を示していた。

## b. 石器の分布(第112図、付図3)

3区出土の石器は1,041点を確認している。石器分布は集中地点No1・No3では散漫に、No2では数ヶ所に集中分布する傾向を示している。

**主要器種の分布** 器種別に見た分布域の差は明確ではなく、石鏃や打製石斧・磨製石斧、砥石以外の器種は偏在することなく分布している。主要器種は、下記の通り分布していた。

集中地点No2に分布する主な器種

……石鏃・打製石斧・磨製石斧・砥石

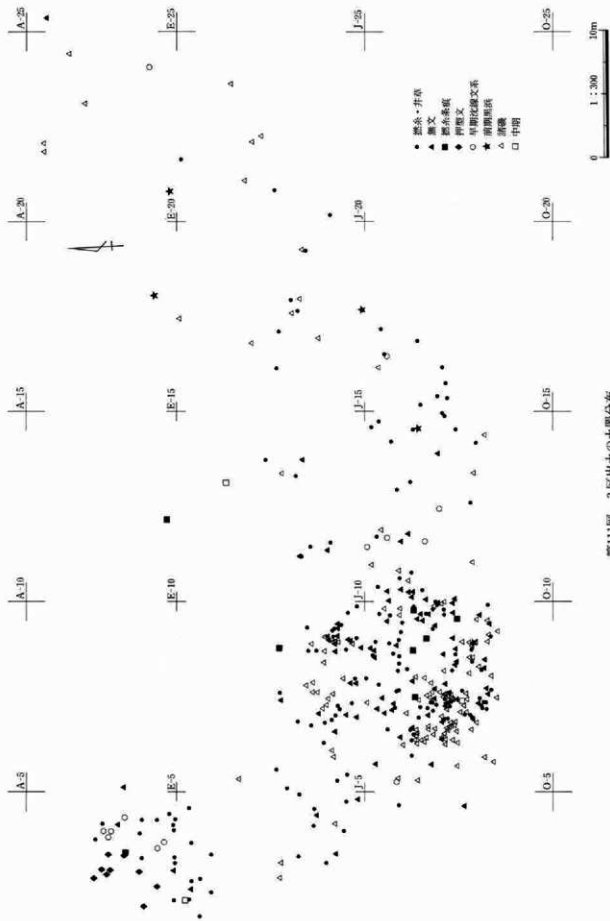
集中地点No1～No3に分布する主な器種

……凹石・磨石・敲石・三角錐形石器・スタンブ形石器

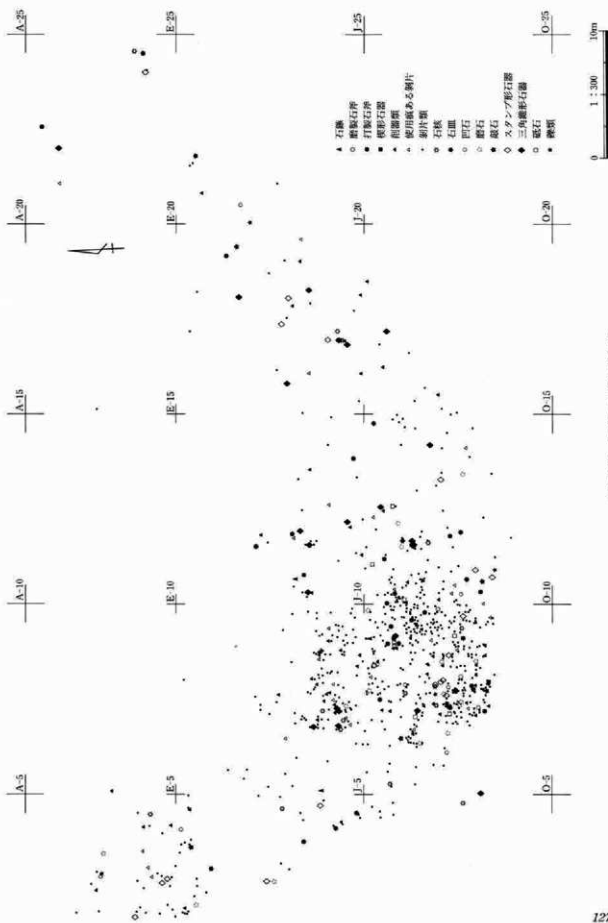
**接合資料の分布** 集中地点No1に3例、No2に10例、No2とNo3に2例の接合を確認している。接合資料の最も多いNo2には打製石斧の製作状況を示す接合資料(第124図3・5・7)や三角錐形石器・機能部(底面部)再生に伴う調整剥片の接合資料(第137図2・4・9)が分布している。No2とNo3には石核と剥片の接合例、三角錐形石器・機能部(底面部)と調整剥片の接合例が分布している。

出土資料には多時期に互る石器の混在が想定され、また、接合状況も複数の石器製作の存在を良く示している。集中地点の細分も可能と思えるわけだが、細分してなお多時期に互る石器の混在は否定できないのであり、現状では石器と土器の伴出関係は判断できない。

II 検出した遺構と遺物

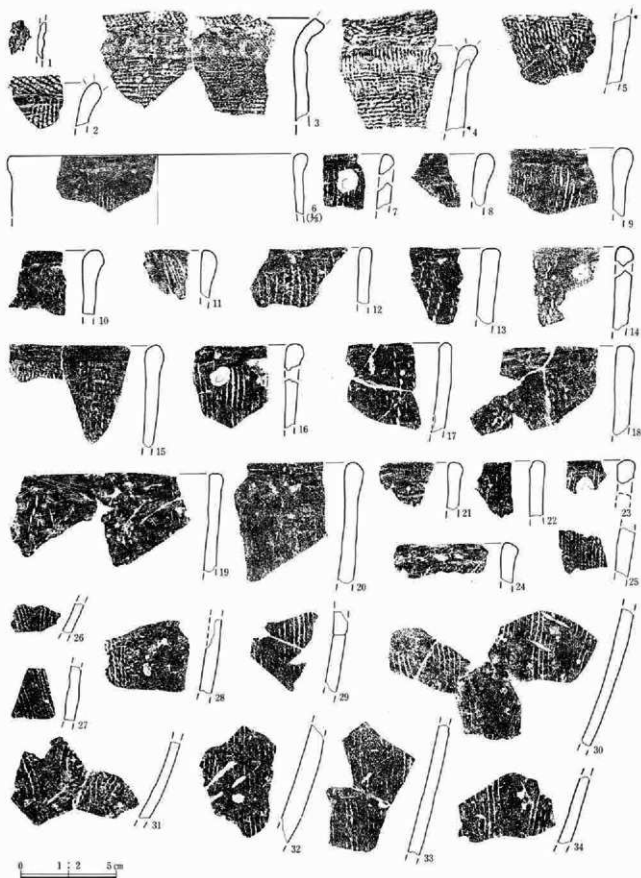


第111図 3区出土の土器分布

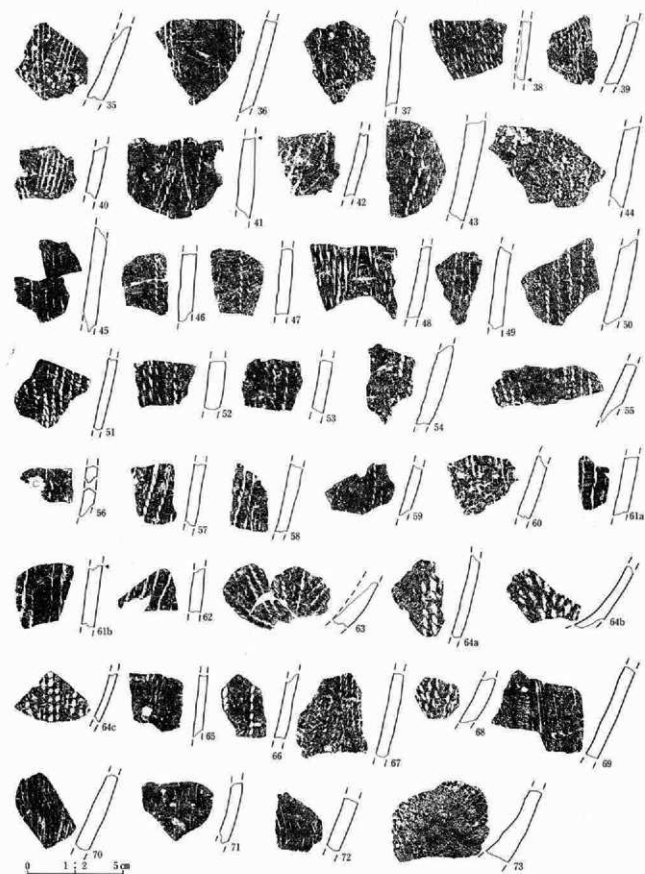


第112図 3区出土の石器分布

II 検出した遺構と遺物

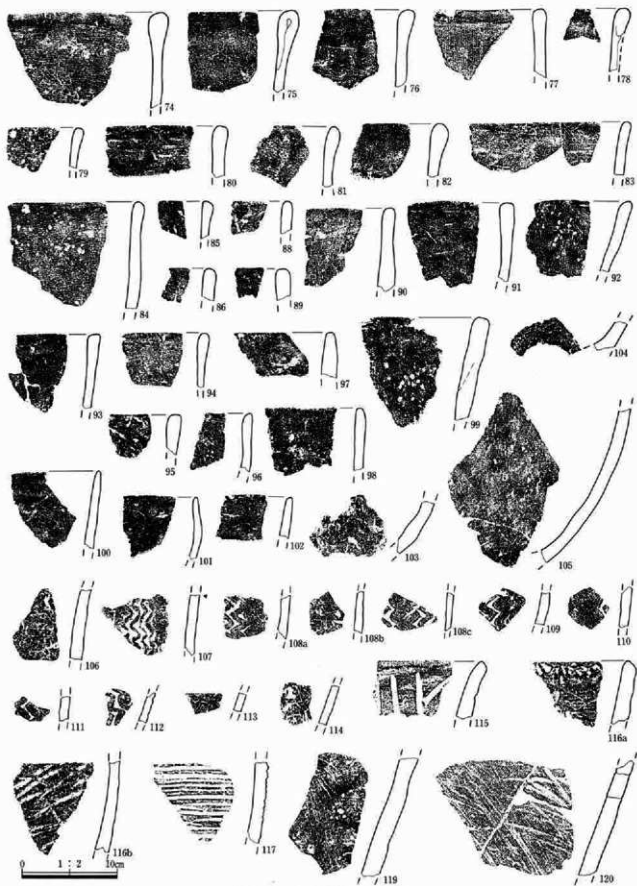


第113図 3区出土の土器(1)

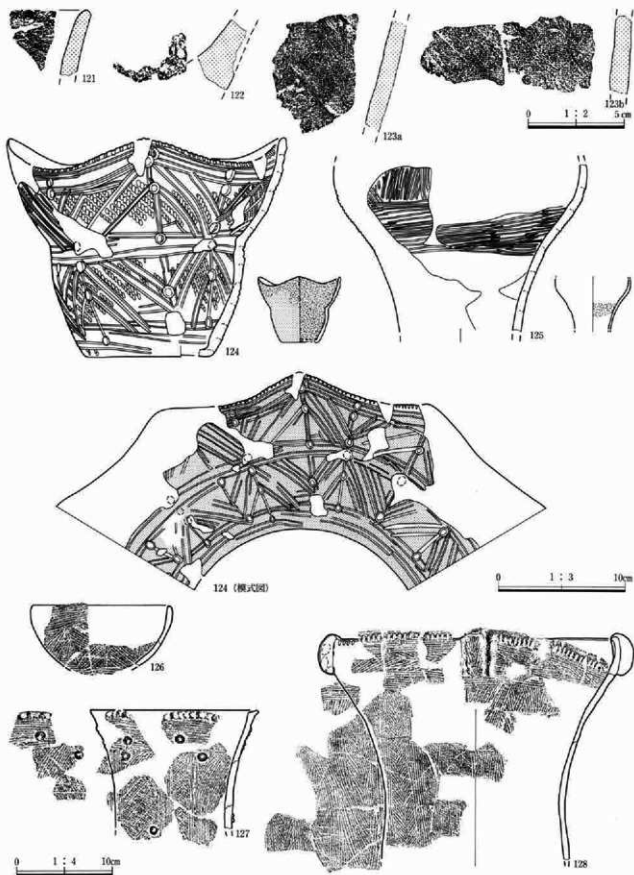


第114図 3区出土の土器(2)

II 検出した遺構と遺物

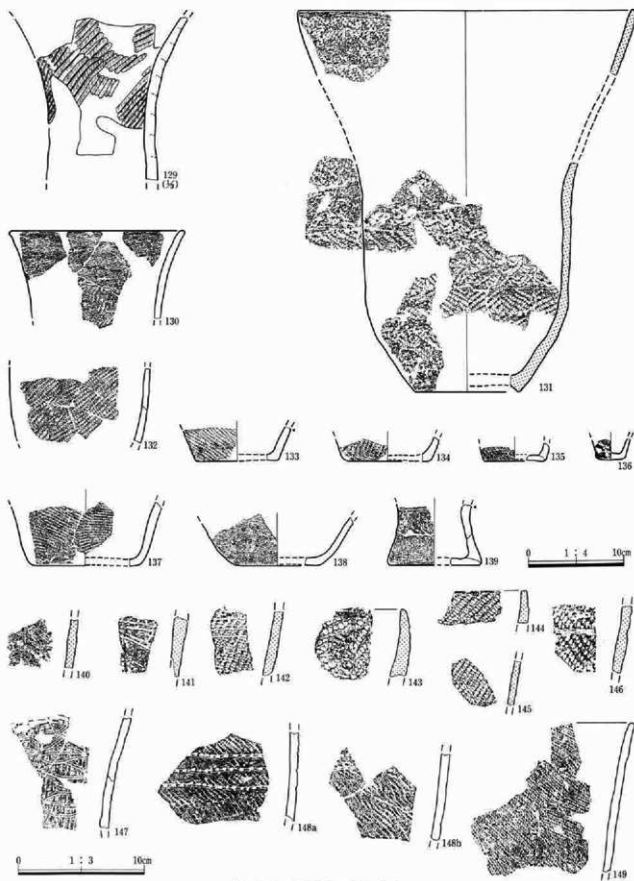


第115図 3区出土の土器(3)



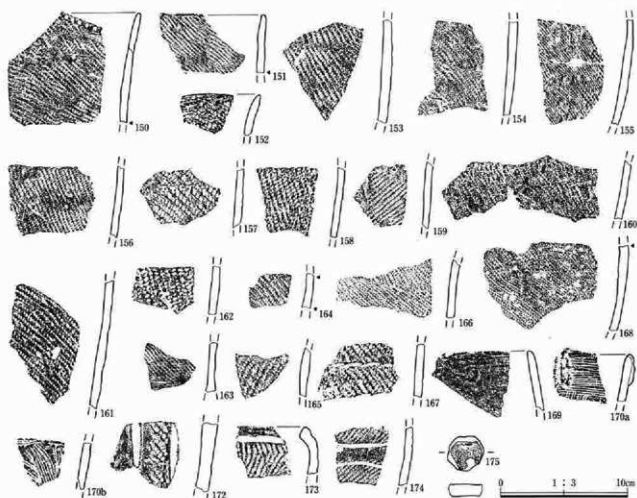
第116図 3区出土の土器(4)

II 検出した遺構と遺物



第117図 3区出土の土器(5)





第118図 3区出土の土器(6)

## c. 出土遺物

3区出土の土器は撚糸文土器や前期・諸磯式土器を主体に出土している。このほかにも沈線文土器や前期・中期の土器も少量だが出土しており、複数型式の土器が混在出土している。出土土器は5群に大別が可能だが、更に詳細に見れば、撚糸文土器には井草式段階の土器や稲荷台式段階の土器が見られ、混在が著しい。また、沈線文土器には沈線で施文するもの、擦痕の著しいもの、繊維を含む無文の土器が見られ、複雑な様相を呈している。個別土器の記載は、巻末の観察一覧に譲り、ここでは以下に出土石器の概要を記していく。

石器は1041点が出土している。このほか、位置不明の資料も出土しているわけだが量的には少なく、全体の傾向を左右するものではない。剝片類(砕片を含む)

が63%と主体を占め、一定の石器製作を暗示している。一応、主な石器は総て出土しており、石鎌4点・楔形石器2点・打製石斧34点・磨製石斧4点(1点は出土位置不明)・礫器6点、三角錐形石器28点・スタンプ形石器23点、磨石・凹石・石皿・砥石が出土しているほか、刮器類も84点と多出している。石器石材は通例に漏れず黒色頁岩が77%と圧倒的多数を占めるほか、火成岩や変成岩も多用している。赤城南麓の当該遺跡では剝片系石器には黒色頁岩が、磨石や凹石などには石英閃緑岩や輝石安山岩が用られ、以上の関係を以て石器と石材の対応関係は把握できる。3区出土の石器と石材の対応関係は多様性に富む反面、大枠では南麓の遺跡に通例の対応関係を示しており、ある意味で複合遺跡の特徴を反映しているともいえよう。詳細は第119・120図を参照されたい。

## II 検出した遺構と遺物

### 石鏃 (第121図1・2・4・5)

4点が出土している。4点とも凹基無茎鏃に属し、概して小形で、「抉り部」の形状は各個体で微妙に異なる。4点とも加工は粗く、完成状態とは思われないため、遺跡製作の可能性が高い。チャート製。

### 横形石器 (第121図3・6)

2点が出土している。2点とも上下両端の対向する剥離が特徴的である。チャート製。

### 打製石斧 (第122~124図)

31例 (3例の接合資料を含む) を図示した。概して短冊状を呈し、周辺に粗い加工を施す例が多い。表皮

#### 3区出土の石器・器種構成 (1,041点)

①	②	③	④
制片 702点 (69.5%)			
① 石 鏃	4点 (0.4%)		
横形石器	2点 (0.2%)		
磨製石斧	3点 (0.3%)		
打製石斧	32点 (3.2%)		
磯 部	6点 (0.6%)		
削 部	76点 (7.3%)		
使用痕ある制片	44点 (4.3%)		
② 石 核	24点 (2.4%)		
三角錐形石器	28点 (2.8%)		
スタンプ形石器	22点 (2.2%)		
③ 磨 石	25点 (2.5%)		
凹 石	9点 (0.9%)		
砥 石	6点 (0.6%)		
石 皿	4点 (0.4%)		
砥 石	13点 (1.3%)		
磯・磯片	9点 (0.9%)		

#### 石鏃 (4点)

チャート 4点 (100%)
----------------

#### 横形石器 (2点)

チャート 2点 (100%)
----------------

#### 磯部 (6点)

黒色頁岩 2点 (33.3%)	①	②	③	④
① 粗粒安山岩	1点 (16.7%)			
② 実質安山岩	1点 (16.7%)			
③ 実質玄武岩	1点 (16.7%)			
④ ホルンフェルス	1点 (16.7%)			

を一部、或は、大きく残す例が圧倒的に多い。刃部は加工を施す例が主体だが、加工することなく刃部に用いる例 (第122図1~3) も目に付く。刃部形状は円刃に近い例と直刃 (第122図13・14) が出土している。この中で、123図7は表裏両面に礫面を残しており、他の剥片素材の石斧とは大きく異なり、礫石斧の範疇で分類されよう。図示した打製石斧の接合資料は3例 (第124図3・5・7) とともに側縁の加工が主体で、刃部再生を示す資料とは思われない。

出土した打製石斧は短冊状を呈す例を主体に、撥状を呈す例 (第124図1・2) や礫石斧の範疇で扱え得

#### 3区出土の石器・石材構成

黒色頁岩 702 (77.3%)	①	②
① 粗粒安山岩	63点 (6.2%)	
② チャート	29点 (2.9%)	
細粒安山岩	19点 (1.9%)	
灰色安山岩	18点 (1.8%)	
砂 岩	15点 (1.5%)	
実質安山岩	13点 (1.3%)	
石英閃緑岩	11点 (1.1%)	
頁 岩	8点 (0.8%)	
黒色安山岩・ホルンフェルス	各7点 (各0.7%)	
実質玄武岩	4点 (0.4%)	
ひん岩・ゲイサイト	各3点 (各0.3%)	
輝緑岩・閃緑岩・凝灰質砂岩	各2点 (各0.2%)	
花崗岩・緑色片岩・黒色片岩・紋晶斑岩	各1点 (各0.1%)	

#### 磨製石斧 (3点)

実質玄武岩 2点 (66.7%)	黒色頁岩 1点 (33.3%)
------------------	-----------------

#### 打製石斧 (32点)

黒色頁岩 21点 (65.6%)	①	②	③
① 灰色安山岩	6点 (18.8%)		
② 細粒安山岩	2点 (6.3%)		
③ 黒色安山岩・実質玄武岩・緑色片岩	各1点 (3.1%)		

#### 磯部 (76点)

黒色頁岩 66点 (86.9%)	①	②
① チャート	5点 (6.6%)	
② 黒色安山岩・細粒安山岩	各2点 (各2.6%)	
輝緑岩	1点 (1.3%)	

第119図 3区出土の石器器種組成と石材構成 (1)

る例も散見され、多時期に互る打製石斧が混在する可能性が高い。また通常、打製石斧は遺跡製作の痕跡を明確には残さず、製作実態の不明な場合が圧倒的に多い。が、出土資料よりえた接合資料には石斧の使用を示す刃部の摩耗が見られないことから、石斧の遺跡製作を示す可能性が高く、石器製作の実態は多様性に富む、といえよう。

#### 磨製石斧 (第125図1~4)

4点が出土している。1~3は前期段階に多い磨製石斧で、部分的に敲打痕を残す。全面に状痕が見られ、特に刃部は丁寧に作出しており、刃部には使用痕が著

##### 使用痕ある割片 (44点)

黒色頁岩 36点 (81.8%)	①
------------------	---

① チャート	4点 (9.1%)
細粒安山岩	3点 (6.8%)
頁岩	1点 (2.3%)

##### 石核 (24点)

黒色頁岩 23点 (95.8%)	①
------------------	---

① 灰色安山岩	1点 (4.2%)
---------	-----------

##### 三角錐形石器 (28点)

黒色頁岩 27点 (96.4%)	①
------------------	---

① 砂岩	1点 (3.6%)
------	-----------

##### スタンプ形石器 (22点)

粗粒安山岩 11点 (50.2%)	①	②	③
-------------------	---	---	---

① 実質安山岩	4点 (18.2%)
② 黒色頁岩	2点 (9.1%)
頁岩・ひん岩・閃緑岩・灰色安山岩	各1点 (4.5%)
石英閃緑岩	

##### 磨石 (25点)

粗粒安山岩 12点 (48%)	石英閃緑岩 10点 (40%)	①
-----------------	-----------------	---

① 砂岩・花崗岩・灰色安山岩	各1点 (4%)
----------------	----------

##### 凹石 (9点)

粗粒安山岩 9点 (100%)
-----------------

しい。4は刃部破片で、上半部分を大きく欠損する。剥離の後に刃部を丁寧に磨き上げており、前期段階の磨製石斧とは異なる。

##### 礫器 (第125図5~8)

4点を図示した。5・6は扁平礫の側縁部に加工を加える例である。5は片側に、6は表裏両面に加工を加え、刃部を作出している。5には使用痕が明確ではなく、使用した状況は見られない。6は側縁が潰れた状態を示している。余り例を見ない資料だが、側縁部に機能部を持つ可能性が高い。7・8には明確な刃部の作出は指摘できない一方、礫の周辺部に剥離と敲打

##### 割片 (702点)

黒色頁岩 618点 (88.1%)	①
-------------------	---

① チャート	14点 (2.0%)
細粒安山岩	12点 (1.7%)
粗粒安山岩	10点 (1.5%)
灰色安山岩	9点 (1.4%)
砂岩・実質安山岩	各7点 (各1.0%)
頁岩・ホルンフェルス	各6点 (各0.9%)
黒色安山岩	4点 (0.6%)
アイサイト	3点 (0.5%)
ひん岩	2点 (0.3%)
閃緑岩・輝緑岩・紋晶斑岩・黒色片岩	各1点 (各0.1%)

##### 磨石 (6点)

粗粒安山岩 4点 (66.6%)	①	②
------------------	---	---

① 黒色頁岩・実質安山岩	1点 (16.7%)
② 実質安山岩	

##### 石皿 (4点)

粗粒安山岩 4点 (100%)
-----------------

##### 磨石 (13点)

粗粒安山岩 6点 (46.1%)	砂岩 5点 (38.5%)	①
------------------	---------------	---

① 凝灰質砂岩	2点 (15.4%)
---------	------------

##### 礫・礫片 (9点)

粗粒安山岩 6点 (66.7%)	①	②
------------------	---	---

① 黒色頁岩	2点 (22.2%)
② 砂岩	1点 (11.1%)

第120図 3区出土の石器器種組成と石材構成 (2)

## II 検出した遺構と遺物

を加える例である。資料には再生の痕跡は乏しく、大きく形状を変えるものではない。8の表裏両面には摩耗が著しいのに対し、7には摩耗が見られない点異なる。機能的に不明瞭だが、側縁を敲打する点で6に類似する。

### 削器類 (第126～129図、第130図1～4)

47点を図示した。刃部の作出が意図的であり、また、形状も整い、確実に削器に分類可能な石器も存在する一方、刃部の作出意図の乏しい石器も多い。石器形状は多様性に富み、分離が難しいため、ここではより広く加工の痕跡を示す資料を削器類と扱った。

出土資料を一瞥して、特徴的形態を探る二三の資料(第126図1・2、同4・6・8など)が指摘されよう。前者は側縁を主体に加工する縦長の石器形状で、後者は求心的剥離を施す円形に近い石器形状を呈しており、明確な製作意図を感じる。このほか、剥片端部や側縁に刃部を作出する例が出土している。通例に漏れず、縦長剥片の場合には側縁に、横長剥片の場合には剥片端部に刃部が作出され、製作意図を強く感じる資料も多い。

### 使用痕ある剥片 (第130図5～14、第131図)

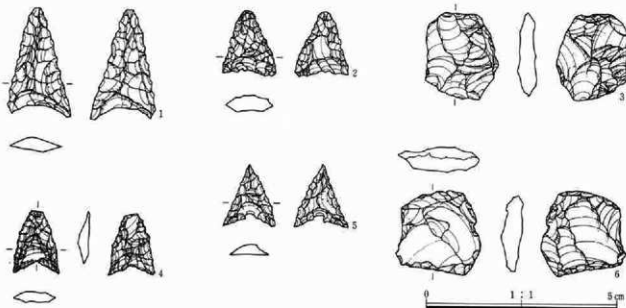
22点を図示した。黒色頁岩を用いる場合が圧倒的に

多く、77%を占める。このほかには黒色安山岩や細粒安山岩も少量だが、出土している。素材には縦長剥片と横長剥片の両者が見られ、表面に礫面を残す剥離の初期段階に生じる剥片を多用する。通例に違わず剥片形状の整う剥片が多用され、削器類と全く同じ傾向を示している。

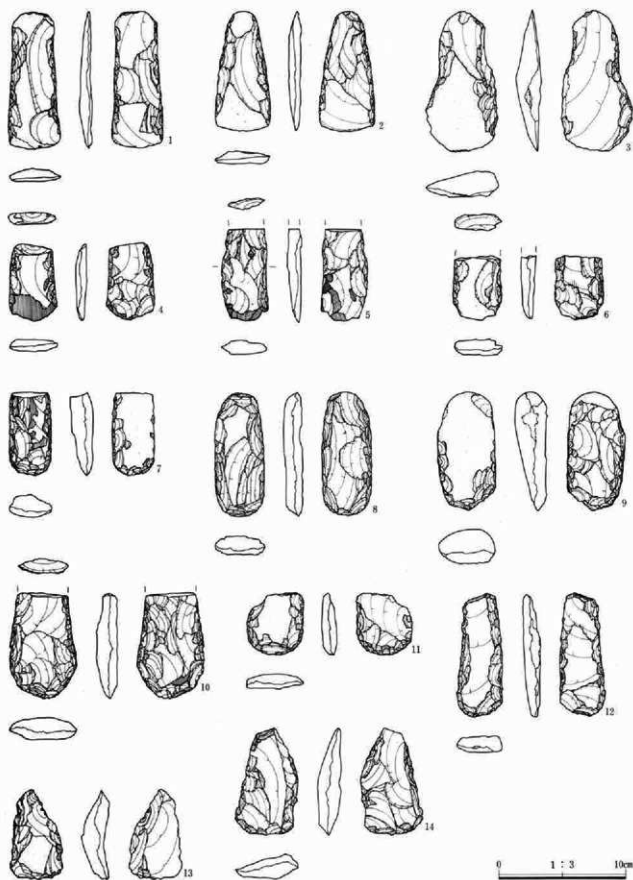
### 石核 (第132図)

8点を図示した。黒色頁岩が23点と圧倒的多数を占め、このほかには灰色安山岩・フォルンフェルスが1点ずつ出土している。概して裏面側に礫表皮を残している。

第132図1・3・4・6・7は、厚手の大形剥片を素材に用いる石核である。剥片剥離は主に剥片の打面部分で行われ、礫面や広い剥離面を打面に小形の幅広剥片を剥離している。5・8は、分割線に近い大形の剥片を素材に用いる石核である。礫面や広い剥離面を打面に横長剥片を剥離している。2は剥離が全周する石核である。礫面を打面に小形剥片を剥離しており、石核素材の形状が不明な程、剥離が進んでいる。

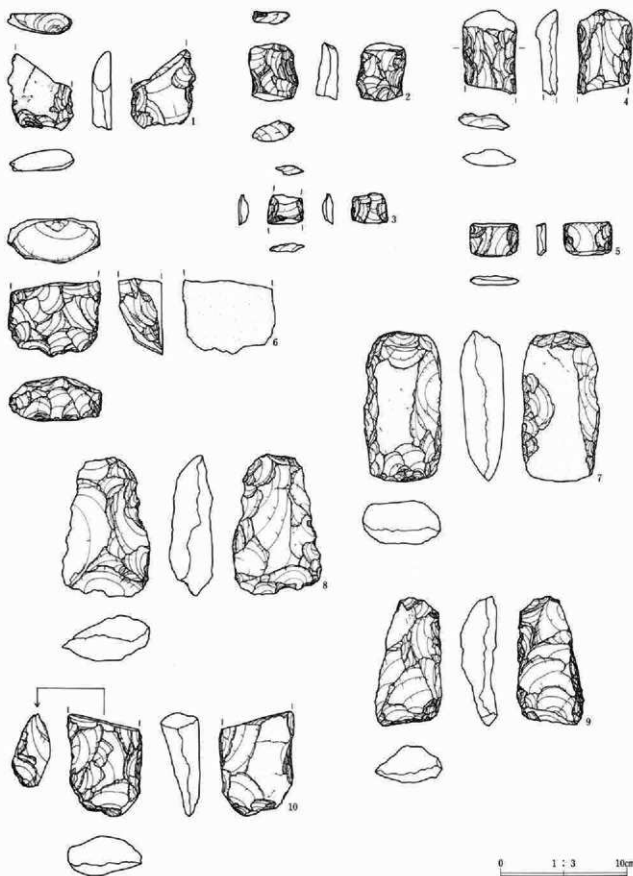


第121図 3区出土の石器(1)

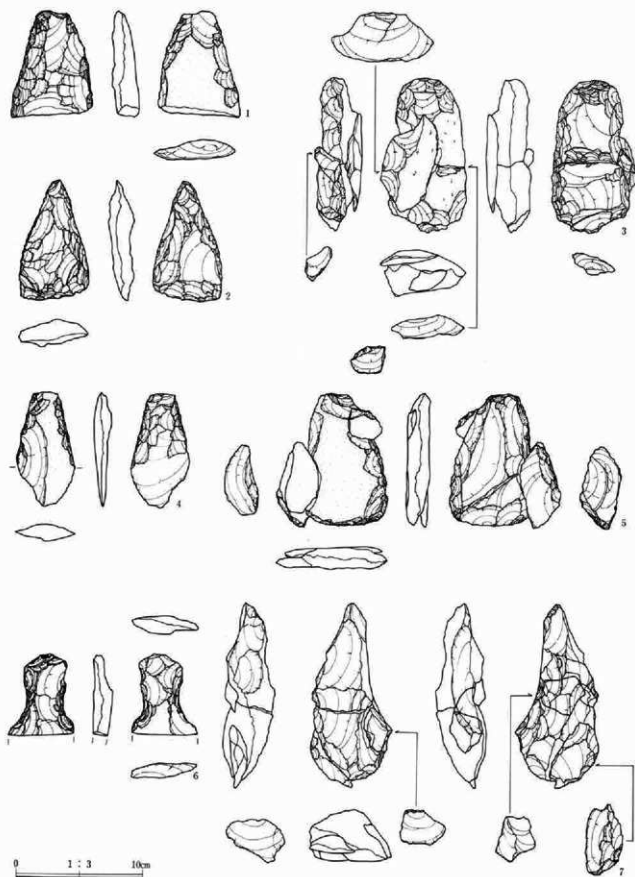


第122図 3区出土の石器(2)

II 検出した遺構と遺物

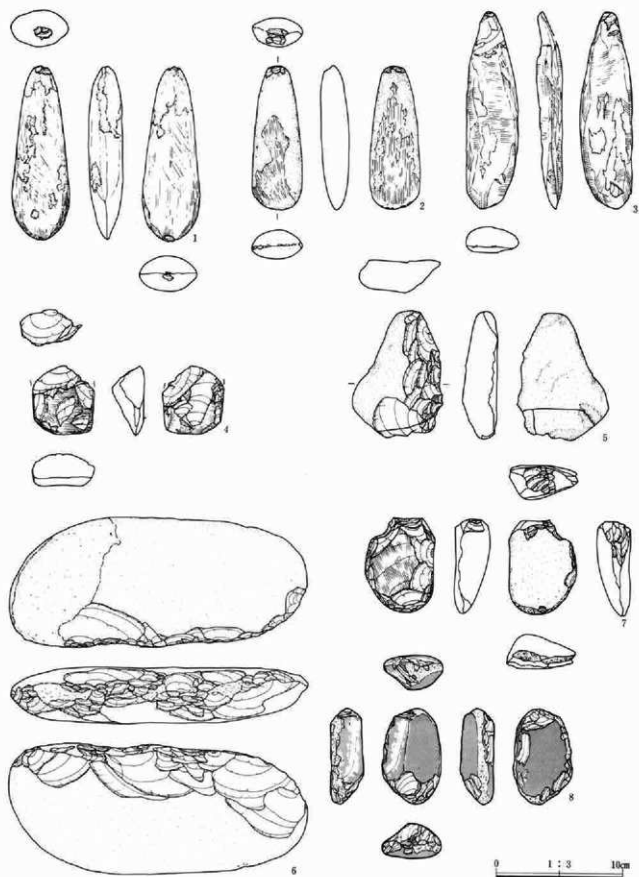


第123図 3区出土の石器(3)



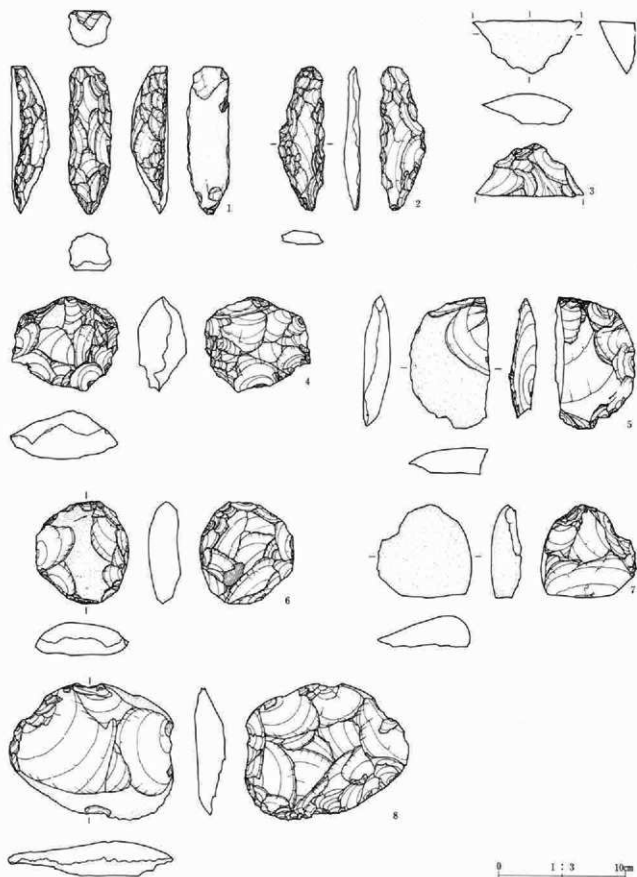
第124図 3区出土の石器(4)

II 検出した遺構と遺物



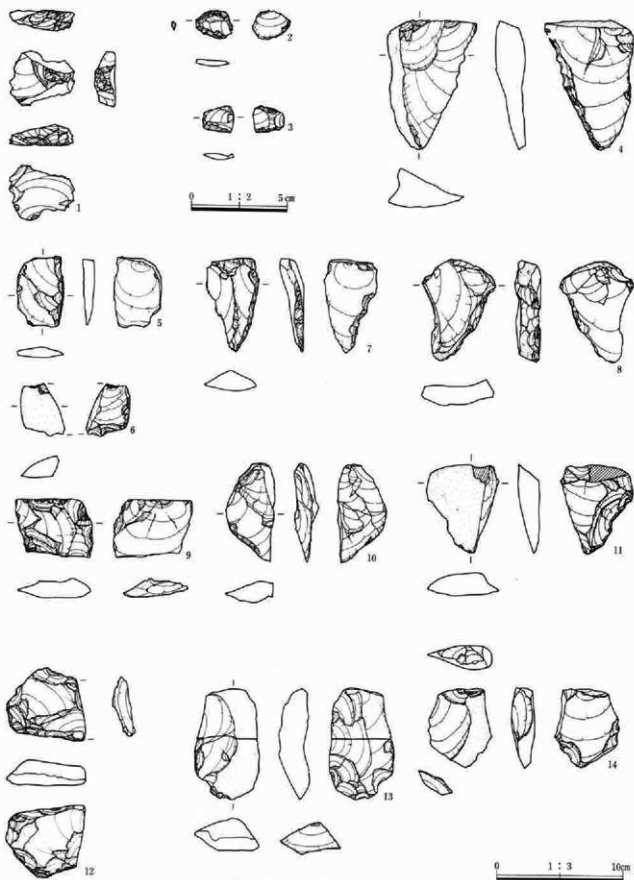
第125図 3区出土の石器(5)



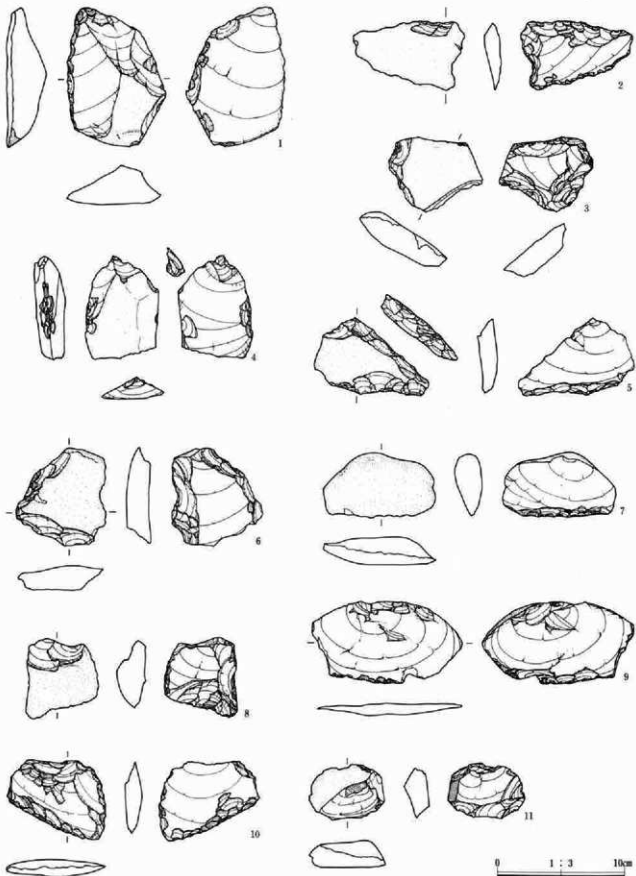


第126図 3区出土の石器(6)

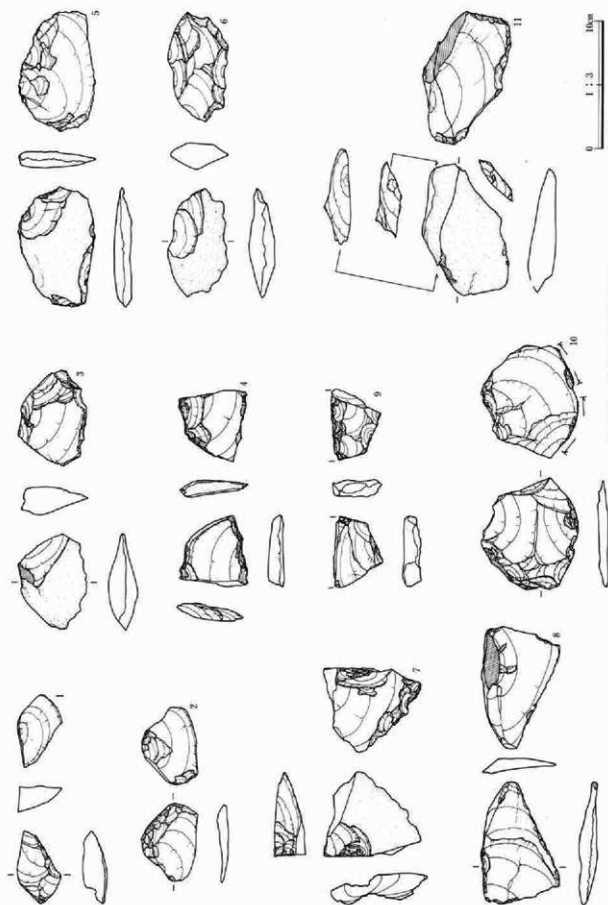
II 検出した遺構と遺物



第127図 3区出土の石器(7)



第128図 3区出土の石器(8)

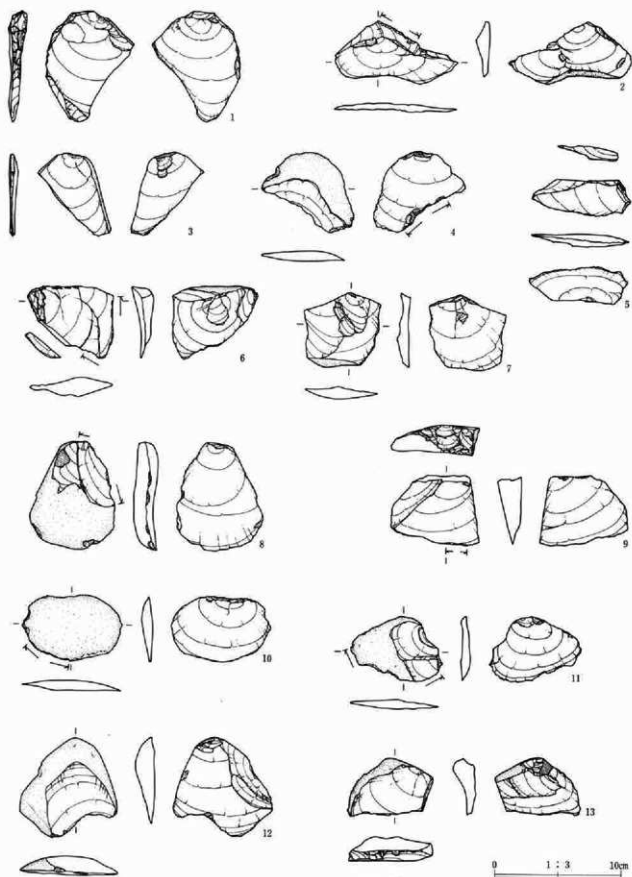


第129図 3区出土の石器(9)

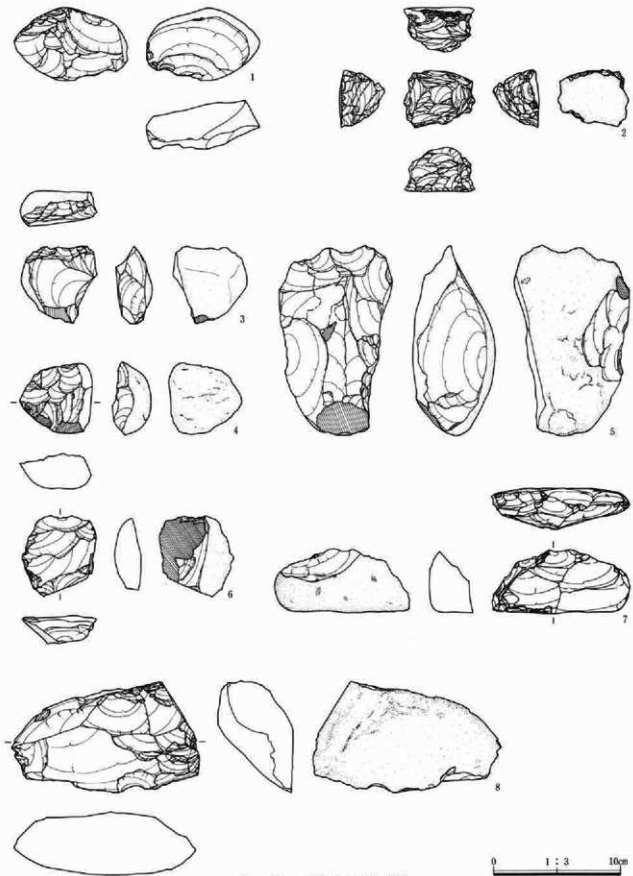


第130図 3区出土の石器 (10)

II 検出した遺構と遺物



第131図 3区出土の石器 (11)



第132図 3区出土の石器 (12)

## 三角錐形石器 (第133～136図)

28点が出土している。この種の石器の場合、一般的に裏面側に広く平坦な礫面を残す例が圧倒的に多い。三角錐状、或は、四角錐状を呈する形態感と、側面や底面の整形に特徴づけられ、概して摺糸文系土器群に伴う例が多い。出土資料には先に述べた典型的特徴を持つ例は少なく、裏面にも剝離が加わるほか、側面に大きく礫面を残す例も目に付く。石器は二群に大別が可能で、三角錐状か、四角錐状に近い形態感を呈し、裏面を除き器体の全面を覆う剝離を施す一群 (第133・134図) と、偏平か棒状の礫を用い、小口部分の一端に機能部を持つ一群の二群からなる。また、底面部・傾斜角の相違で更に細分が可能で、底面部・傾斜角が90°前後を示す例と60°前後を示す例の二群に細別され、石器の機能的分化を暗示している。1点 (第135図1、砂岩) を除き、総て黒色頁岩を用いており、石材の強い選択性を示している。

接合作業の結果、2例の接合資料 (第134図1・6) を確認している。2例とも底面部分に接合関係を有し、側面の接合関係は見られない。以上の接合状況は他の遺跡出土資料とも何ら変わらない。

第133・134図には、三角錐状か、四角錐状の形状を呈し、裏面を除き器体の全面を覆う剝離を加える一群を一括した。大形の例 (第133図) と小形の例 (第134図) が見られ、石器形状には大小の差が著しい。後者の小形例は底面部 (機能部) の再生に伴う石器の変形を示している可能性が高い。底面部・傾斜角は90°に近い例 (第133図1・4) と60°に近い例 (同2・3) の両者が存在している。出土資料からみて、底面部の作出と底面部・傾斜角の間には強い関連性が窺われ、底面部・傾斜角が90°に近い例は周辺部から求心的な剝離を行い、60°に近い例は裏面から剝離を行う傾向が指摘されよう。第135図・第136図1・3には偏平礫か棒状礫を用いる一群を纏めた。石器は素材の形状を大きく変えることなく作出され、側面にも大きく礫面を残している。石器の残存状況からみて、剝離は「握り部」まで達しており、再生の限界を良く示している。また、同時に「握り部」を確保できない例 (第135図5・7、

第136図1・3) も二三散見され、石器の転用も想定されよう。先に述べた通り、ここでも底面部・傾斜角と底面部 (機能部) の作出は有意ある関連性を示しており、90°に近い例は求心的剝離を施し、60°に近い例は裏面から同一方向の剝離を施し、機能部を作出している。第136図2・4～8には、破損するため分類が困難な例を一括した。大部分が偏平礫を用いており、部分的に残る側縁や底面の剝離状況の在り方は当該資料の特徴を良く残している。

出土資料には概して使用痕が乏しい。接合資料に見る石器の再生状況から判断して、頻りに機能再生を試みる状態が見て取れる。

## 調整剥片 (第137図1～9)

9点 (4例の接合資料を含む) を図示した。表面や側面には同一方向の剝離面を取り込んでおり (第137図1・4・5・7)、大部分が三角錐の底面部 (機能部) 再生に伴う剥片と判断されよう。

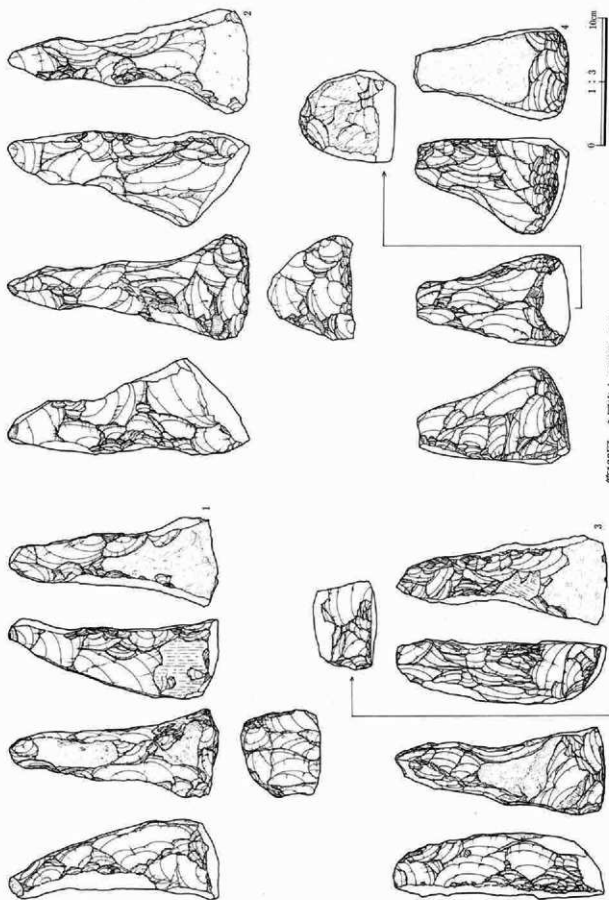
## スタンプ形石器 (第137図10・11、第138～140図)

22点が出土している。粗粒安山岩を用いる例が多く、これ以外には変質安山岩 (4点) や灰色安山岩 (1点)、黒色頁岩 (2点) や頁岩 (1点) の例が出土しており、多様な石材を用いる。機能部 (底面部) は、基本的に手の平に握れる程度の棒状礫を分割して作出している。

第137図10・11、第138図には、棒状に近い礫を分割して機能部を作出する例を一括した。通例に漏れず、底面部には摩耗痕が生じ、また、体部側縁には使用時に生じる微細な剝離が著しい。礫面や小口部分には、摩耗痕や敲打痕も見られ (第138図5・8)、石器用途の多様性を示唆している。第139・140図には「握り部」を作出する例を一括した。礫形状は棒状礫と偏平礫の両者が見られ、特に偏平礫と「握り部」の作出は強く結び付いている。「握り部」の作出に伴う加工は片側の側縁に施され、一種の癖と見られよう。

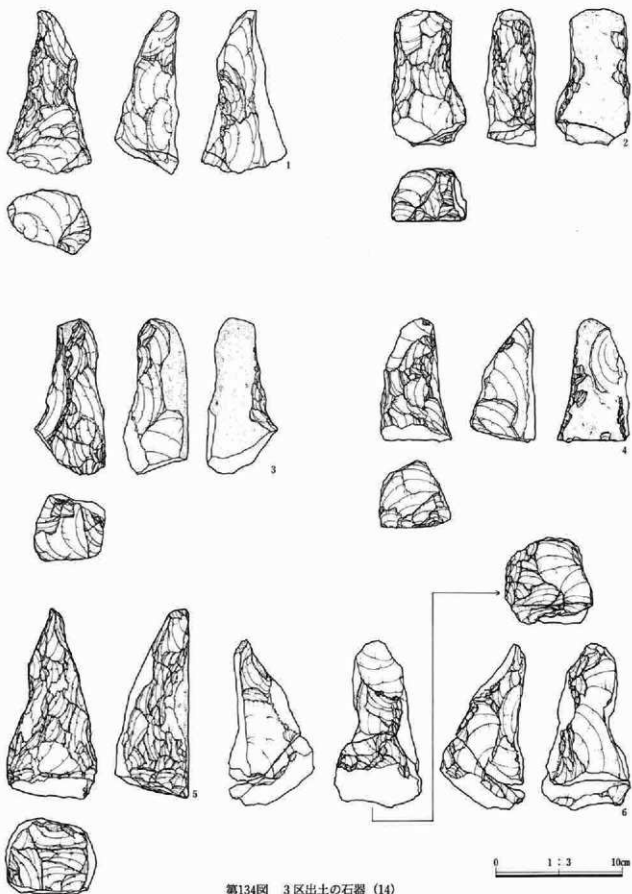
出土資料には欠損例は概して少ない。第139図4の頭部破片や同図7の接合資料も、「握り部」作出段階の破損と見られ、完成後の欠損例は極めて希である。この意味では、極めて高い耐久性を有する石器と判断されよう。





第133図 3区出土の石器 (13)

II 検出した遺構と遺物

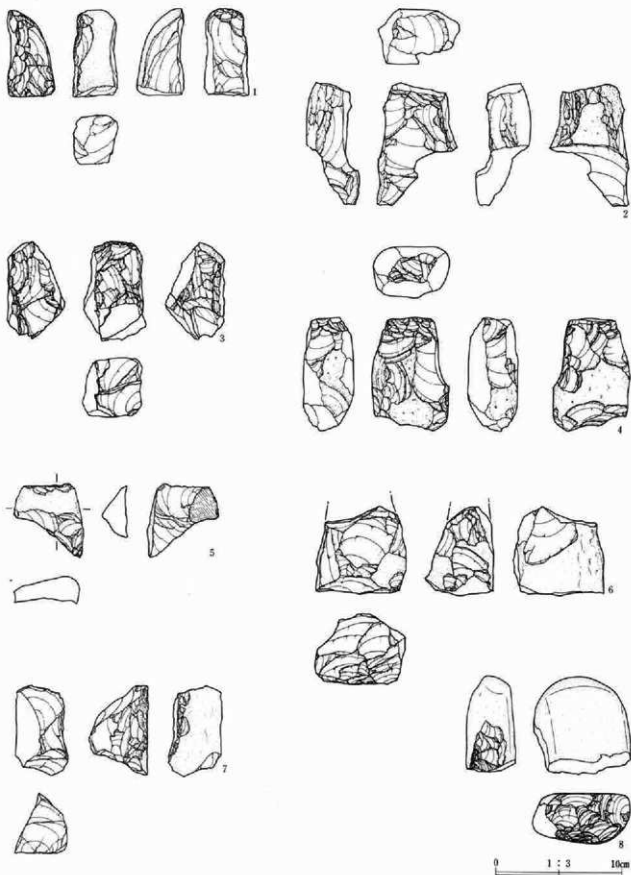


第134図 3区出土の石器(14)

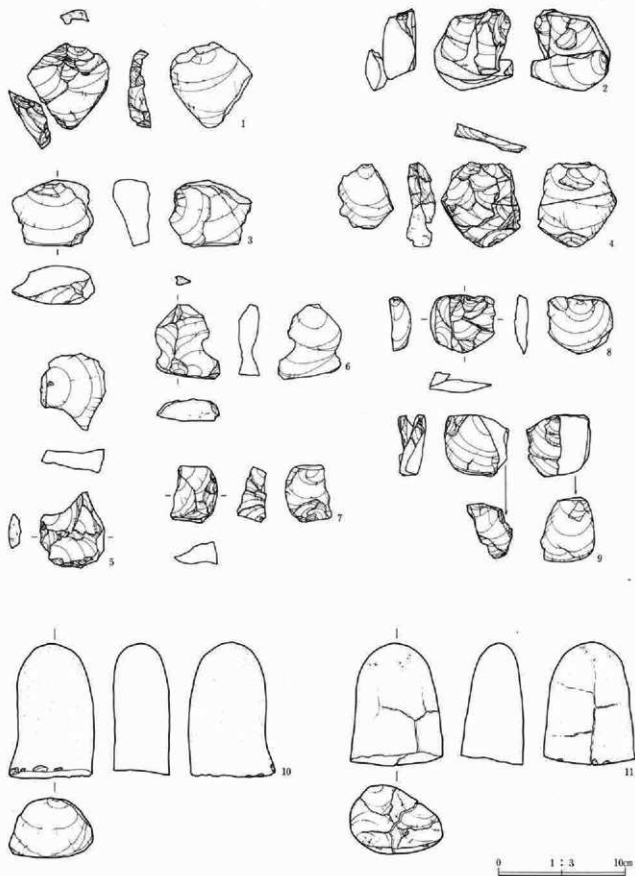


第135図 3区出土の石器 (15)

II 検出した遺構と遺物

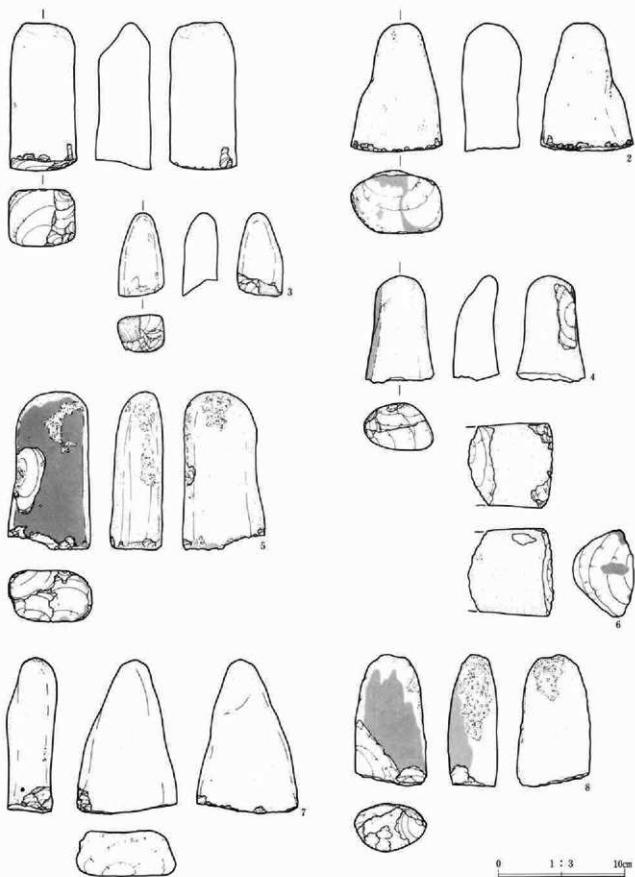


第136図 3区出土の石器 (16)

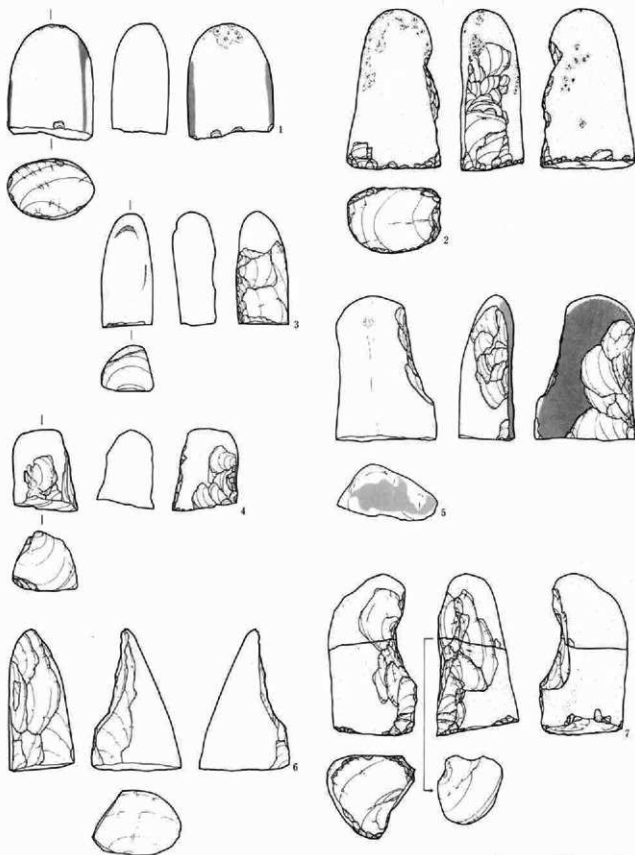


第137図 3区出土の石器 (17)

II 検出した遺構と遺物

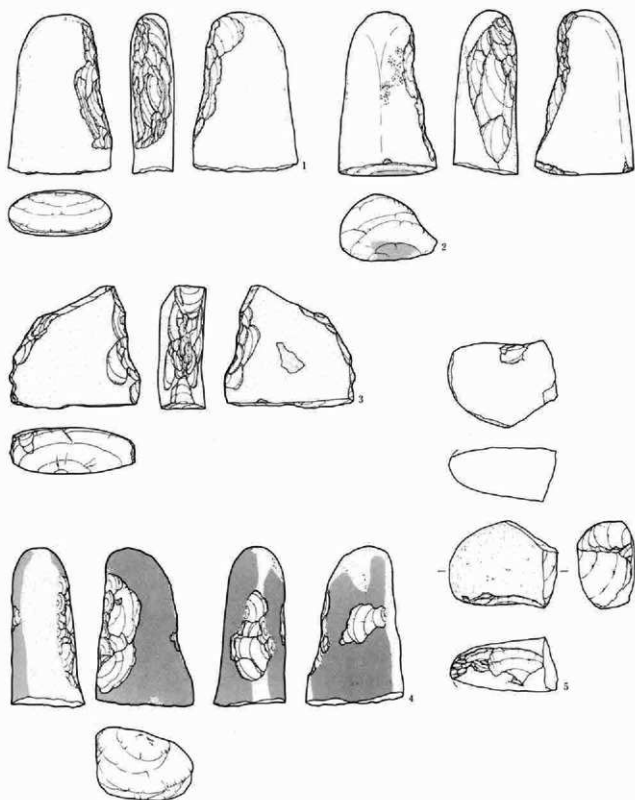


第138図 3区出土の石器 (18)



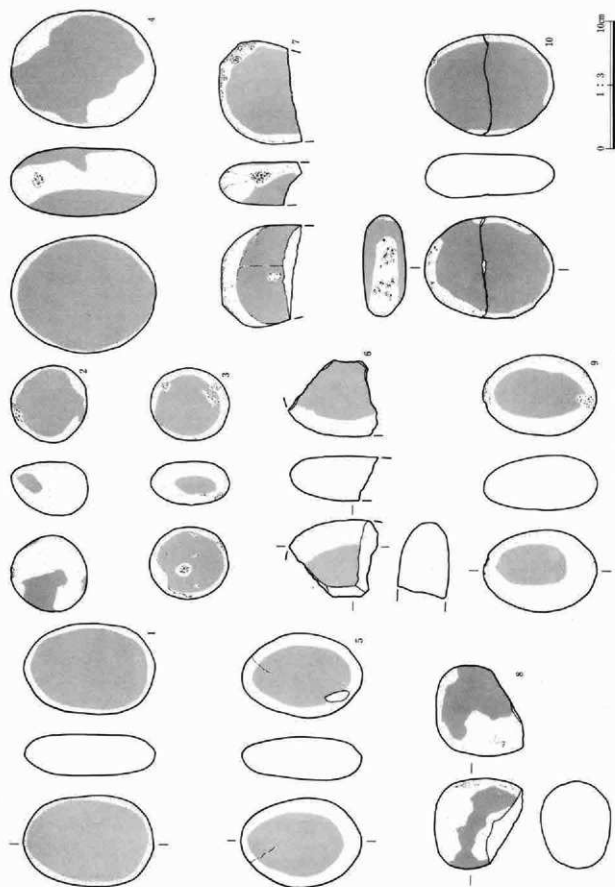
第139図 3区出土の石器(19)

II 検出した遺構と遺物



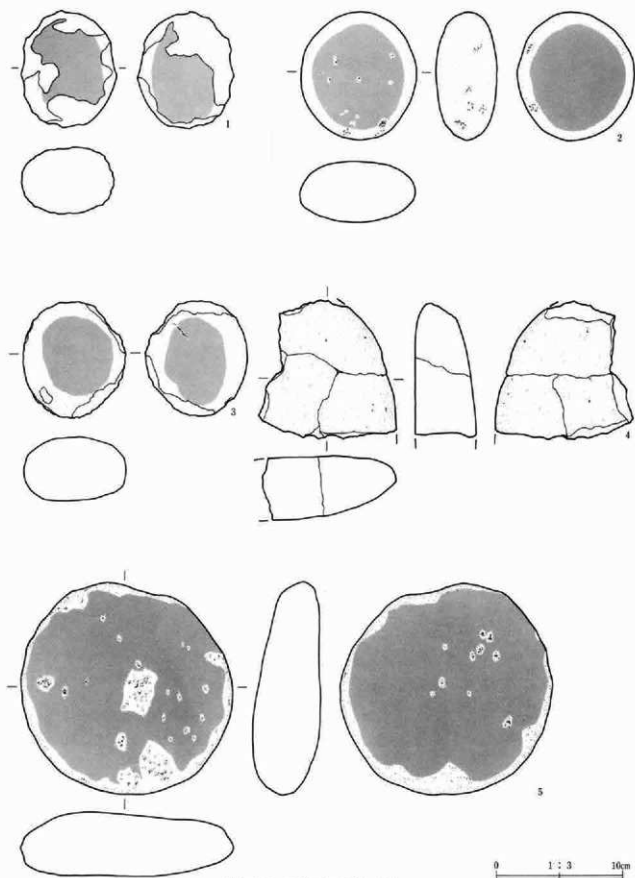
第140図 3区出土の石器 (20)



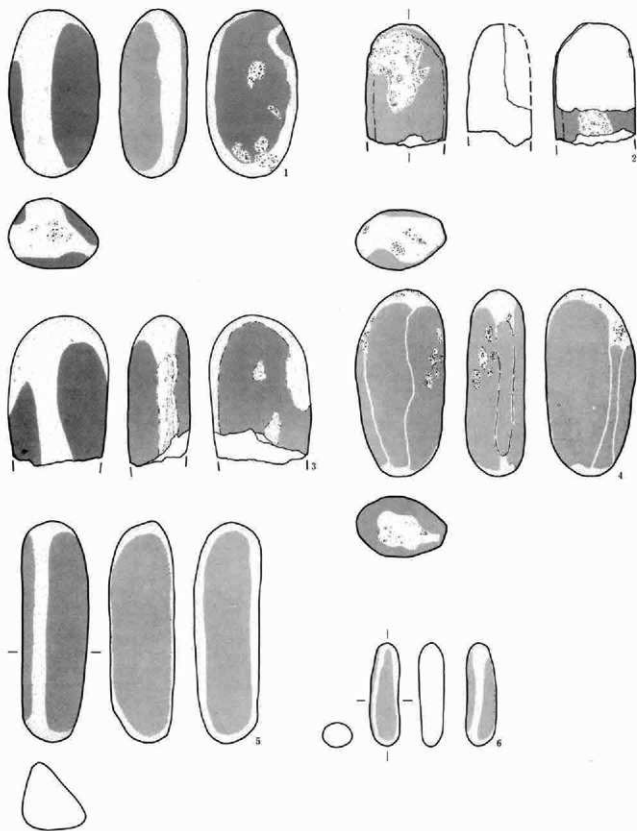


第141圖 3区出土の石器(21)

II 検出した遺構と遺物



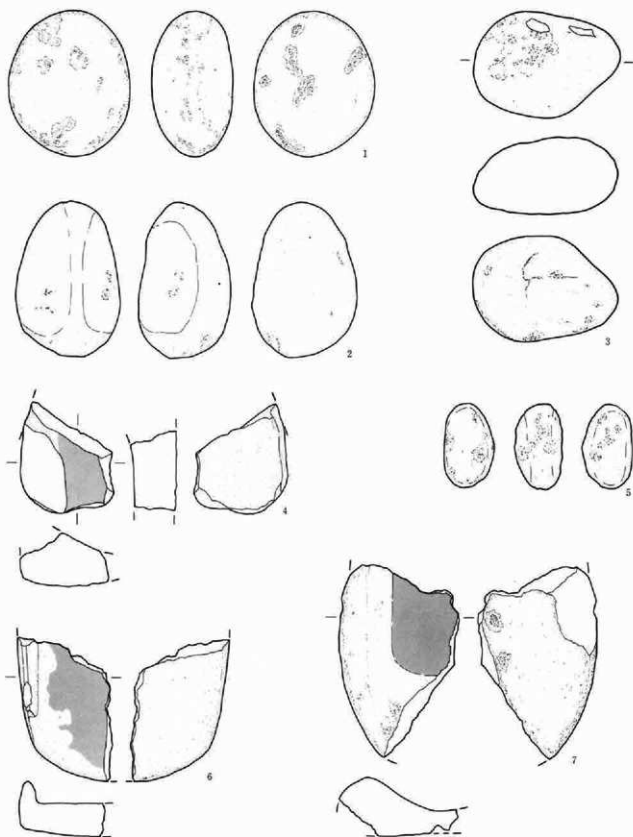
第142図 3区出土の石器 (22)



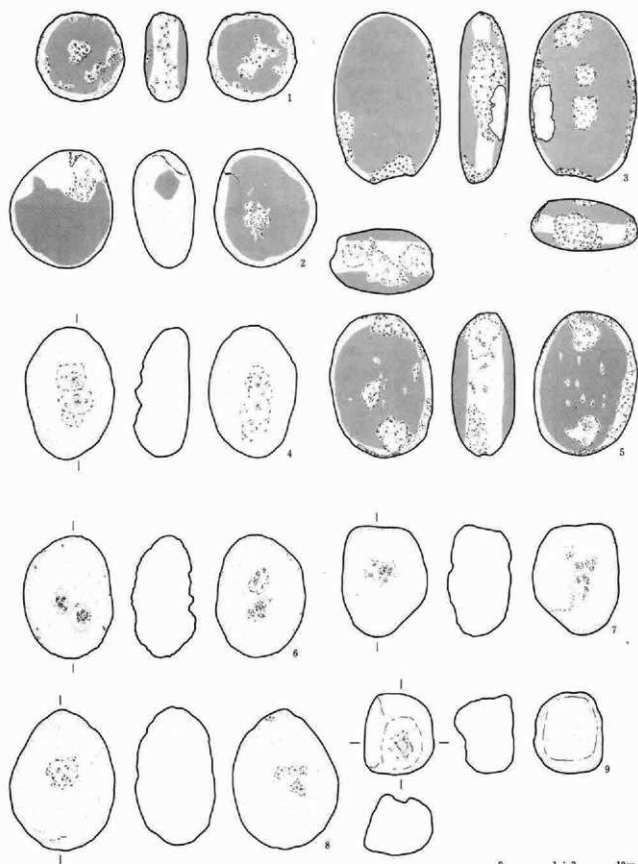
第143図 3区出土の石器 (23)

0 1 : 3 10cm

II 検出した遺構と遺物

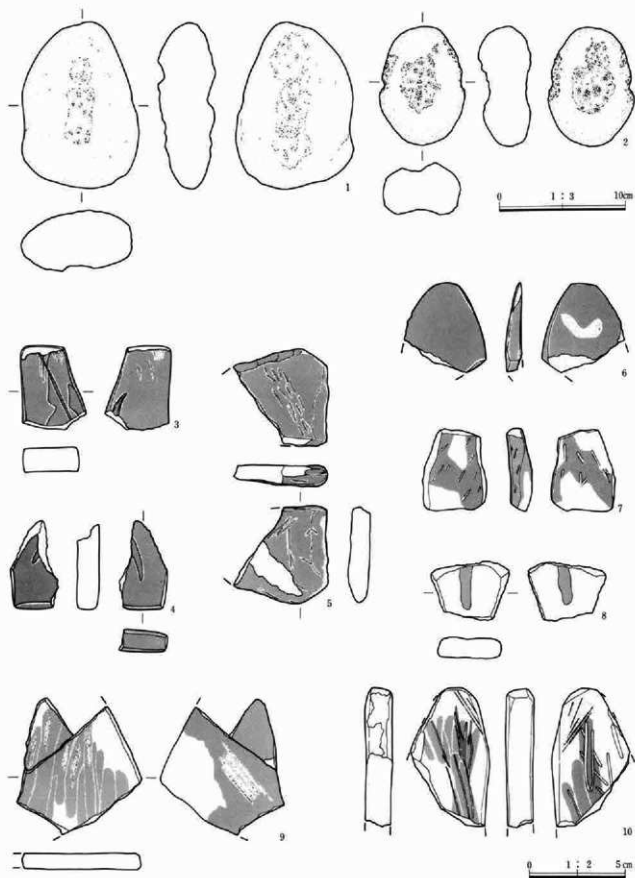


第144図 3区出土の石器 (24)



第145図 3区出土の石器 (25)

II 検出した遺構と遺物



第146図 3区出土の石器 (26)

**磨石** (第141～143図)

28点が出土している。粗粒安山岩や石英閃緑岩を用いる例が圧倒的に多く、全体の約9割を占める。このほかには灰色安山岩や花崗岩、砂岩が各1点ずつ出土しており、使用石材は多様性に富む。磨石には偏平礫を用いる例(第141図、第142図1～3)と、棒状礫を用いる例(第143図)が見られ、二群に分類されよう。両群とも表裏両面の摩耗が著しく、また、側縁や小口部分には敲打痕が著しい。概ね、手の平に入る程度の礫を用いている。

**石皿** (第142図4・5、第144図4・6・7)

6点が出土している。出土資料には「凹み部」の見られない例(第142図)と、明確な「凹み部」を持つ例(第144図4・6・7)の二群からなる。「凹み部」を持つ一群には縁を意図的に作り出す定形的な例(6)や、裏面に孔を穿つ例(7)を含む。資料には破損例が多く、特に明確な「凹み部」を持つ一群は3点とも破損している。出土した石皿は6点とも粗粒安山岩を用いている。

**敲石** (第144図1～3・5)

7点が出土している。粗粒安山岩が5点と主体を占める。1点(5)を除き大形礫を用いる傾向が見られ、長さ10cm・厚さ4cm前後を測る礫を用いる例が多い。側縁や小口部分に敲打痕が著しい。

**凹石** (第145図、第146図1・2)

14点が出土している。やや偏平で楕円形状を呈する礫を多用しており、長軸上に敲打痕を有する。凹石は明確な「凹み」の見られない集合打痕からなる一群とV字状の断面形状を呈する明確な「凹み」を形成する一群の両者が出土している。更には、側縁や小口部分には敲打痕が著しく、石器の用途が多岐に互る実態を良く示している。1点(第145図2、石英閃緑岩)を除き、総て粗粒安山岩を用いている。

**砥石** (第146図3～10)

14点が出土している。粗粒安山岩・砂岩が各6点、凝灰質砂岩が2点と、概して目の粗い石材を選択している。出土資料は殆ど破損状態を示しており、不明な点が多い。全般的に小破片が多く、概して板状に近い

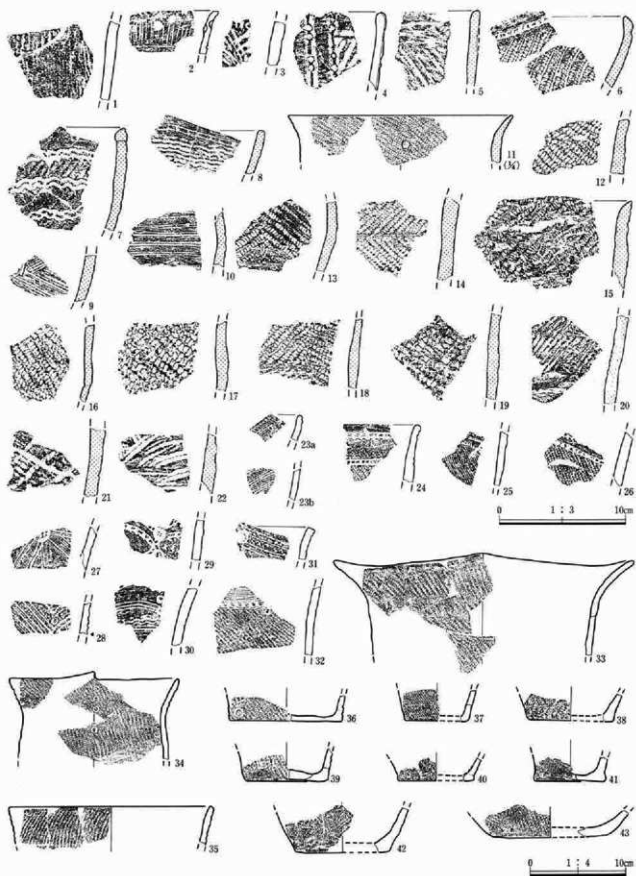
全体形状を呈する傾向が指摘されよう。第146図3は短冊状を呈す砥石である。表裏両面・側面とも研磨が著しい。下半部分は摩耗が見られ、欠損後も再使用を試みている。4と同一の石材を使用しており、本来は同一個体と見られよう。5・6の2点は器体上半部分を欠損するため全体の形状は不明だが、概ね下端が開く短冊状に近い全体形状を呈しており、器面には明瞭な研磨面が生じている。7・8の2点も概ね似た形状を呈している。7は目の粗い粗粒安山岩を用いるものだが、8と同様に側面は丁寧な面取され、特定形態の砥石を志向する状態が指摘されよう。9は板状剥片を用いる例である。7とは異なり、やや目の詰んだ粗粒安山岩を用いている。他の砥石とは違い、明確な摩耗や側面の面取は見られない。10は短冊状に近い形状を呈す砥石と思える。やや下端が開いており、出土資料の中では最も大形の部類に属し、また、最も定形的な形状を示している。側面の面取も丁寧で、線状痕に近い使用痕も著しい。器体の下半部分を欠損する。

**7-2 その他の出土遺物**

既に述べた通り、調査区は5地点(1区～5区)に及んでいる。調査は決して充分とはいえないわけだが、それでも諸磯段階の住居や列状に並ぶ土壌を確認しており、沖積地を挟む台地の遺構分布状況は把握できたと判断している。このほか、遺構に伴う遺物以外にも多量の遺物を検出しており、既に記した3区以外にも少量だが縄文前期段階を主体に遺物が出土している。遺物の分布状態や量的把握は不十分であり、不明な点も多々あるわけだが、ここでは土器や石器に関して、概要を述べていきたい。

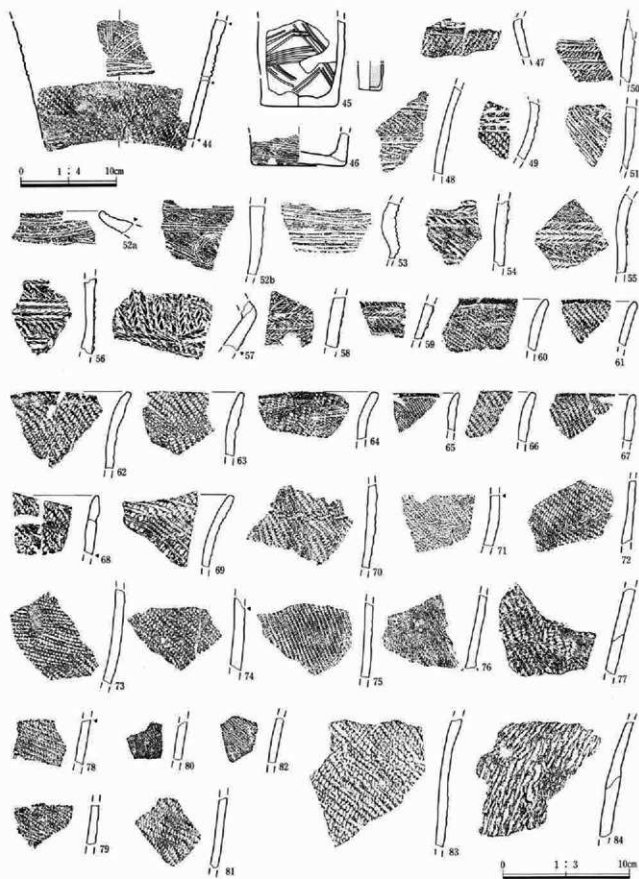
まず、土器からみていきたい。各区とも前期・諸磯段階の土器を主体に出土しており、住居の構築時期に概ね一致する傾向を示している。通常、住居周辺には多量の遺物が出土する 경우가多く、このことからみて前期段階の土器は住居周辺より出土した可能性が高い、と想定されよう。その他の時期の土器の出土は極めて少なく、徳米土器や沈線文土器、条痕文土器、

II 検出した遺構と遺物



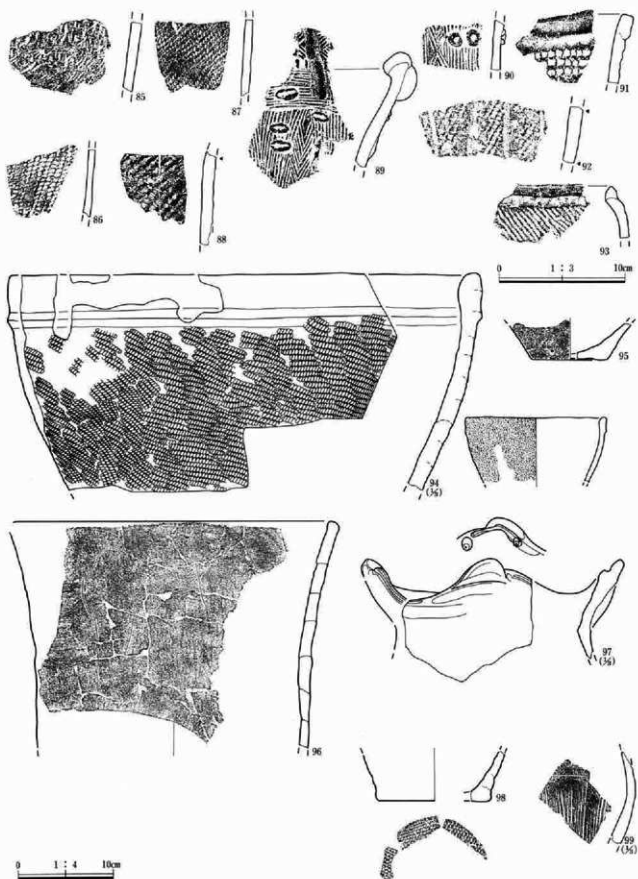
第147図 1・2・4・5区出土の土器(1)





第148図 1・2・4・5区出土の土器(2)

II 検出した遺構と遺物



第149図 1・2・4・5区出土の土器(3)

前期の黒浜式土器、中期・加曾利B式土器が少量出土しているのにすぎない。

石器も分布状態は不明だが、多分に住居周辺に出土している可能性が高い。石器は各区とも満遍なく出土しており、1区で18点、2区で107点、4区で4点、5区で17点を確認している。区毎に見た器種構成も極めて類似しており、また、石器と使用石材の対応関係も、打製石斧や削器には黒色頁岩を、磨石や凹石には粗粒

安山岩を用いる傾向が見られ、石器と石材の関係は良く一致している（第150図を参照）。以下に、出土した石器の概要を記していきたい。

#### 打製石斧（第151図）

12点を図示した。短冊状を呈し、周辺に加工を施す例が主体を占めるほか、撥状や分銅状に近い形状を呈す打製石斧も若干点が出土している。

#### 礫器（第152図1・2）

##### 1区・器種構成（18点）

削器 9点 (56%)	①	②
① 石製品	1点 (5.5%)	
使用痕ある削片	1点 (5.5%)	
石核	3点 (16.5%)	
打製石斧	1点 (5.5%)	
② 磨石	1点 (5.5%)	
凹石	2点 (11.0%)	

##### 2区・器種構成（107点）

①	削器 30点 (28.1%)	使用痕ある削片 31点 (29.0%)	②	③
① 打製石斧			7点 (6.5%)	
礫器			2点 (1.9%)	
② 石核			10点 (9.3%)	
不明石製品			5点 (4.7%)	
スタンピング形石器			2点 (1.9%)	
③ 磨石			10点 (9.3%)	
凹石			3点 (2.8%)	
石皿			5点 (4.7%)	
敲石			1点 (0.9%)	
砥石			1点 (0.9%)	

##### 4区・器種構成（4点）

削器 2点 (50%)	磨石 2点 (50%)
-------------	-------------

##### 5区・器種構成（17点）

①	削器 10点 (33.4%)	②	③	④
① 打製石斧				2点 (11.7%)
② 削片				3点 (17.6%)
③ 凹石				3点 (17.6%)
④ 砥石				2点 (11.7%)
敲石				1点 (5.9%)
石皿				1点 (5.9%)
石製品				1点 (5.9%)
多孔石				1点 (5.9%)

##### 1区・石材構成

黒色頁岩 13点 (72.4%)	①	②
① 粗粒安山岩		2点 (11.2%)
② 珪質頁岩・砂岩・輝石		各1点 (各5.5%)

##### 2区・石材構成

黒色頁岩 70点 (65.4%)	①	②	③
① 粗粒安山岩			13点 (12.2%)
② 黒色安山岩			4点 (3.8%)
頁岩			2点 (1.9%)
輝石			5点 (4.7%)
③ 変玄武岩			2点 (1.9%)
灰色安山岩			2点 (1.9%)
細粒安山岩			2点 (1.9%)
点紋頁岩・珪質頁岩			1点 (0.9%)
ひん岩・文象斑岩			1点 (0.9%)
ホルンフェルス			1点 (0.9%)
変質安山岩・石英閃緑岩			1点 (0.9%)

##### 4区・石材構成

黒色頁岩 3点 (75%)	石英閃緑岩 1点 (25%)
---------------	-------------------

##### 5区・石材構成

黒色頁岩 6点 (35.3%)	粗粒安山岩 7点 (41.1%)	①
① 頁岩		各1点 (各5.9%)
細粒安山岩		
玄武岩質凝灰岩		

第150図 1・2・4・5区出土の石器器種組成と石材構成

## II 検出した遺構と遺物

2点を図示した。2点とも棒状鏢の小口部分に剝離を加え、刃部を作出している。1は刃部の再生に失敗しており、また、2の刃部には明確な使用痕が生じている。

### 削器類 (第152図3～9、第153図)

17点を図示した。出土資料には面的な加工を施す例(第152図3・5)や全周する加工を施す例(第152図4・6)、側縁に加工を施す例(第153図4)、剥片端部に加工を施す例(第153図5・8)が多出しているほか、加工意図の不明な資料も出土している。

### 使用痕ある剥片 (第154図1～8)

8点を図示した。側縁形状の整う縦長剥片や幅広い剥片を用いている。縦長剥片の場合には側縁に、幅広い剥片の場合には剥片端部に使用痕が生じている。剥片には礫面を残す例も多く、剝離の初期に生じる剥片を用いる例が半数を占める。

### 石核 (第154図9～12)

4点を図示した。4点とも裏面に礫面を残している。同一打面から連続して剥片を剝離する資料(9～11)が主体を占める一方、周辺から求心的剝離を行う資料(12)も出土している。

### スタンプ形石器 (第155図1・2)

2点を図示した。1は棒状鏢を分割し、そのまま使用するのに対し、2は偏平鏢を用い、側縁に加工を加え、「握り部」を作出する。「握り部」の作出に伴う加工は片側に限られ、3区出土の資料に一致している。

### 磨石 (第155図3～8、第156図1・2・4～7、第157図1～5)

15点を図示した。楕円形に近い形状を呈す偏平鏢を用いる一群と、棒状鏢を用いる一群からなる。前者の一群は表裏両面が摩擦している場合が圧倒的に多く、なかには側縁に顕著な敲打痕を有す例(第155図7)も存在している。後者の一群は側縁が顕著に摩擦する他、表面や側縁に敲打の著しい例(第156図7・8)が出土している。

### 凹石 (第157図6～8、第158図1)

4点を図示した。手の平に入る程度の、楕円形状を呈す偏平鏢を用いる。表裏両面に1～2ヶ所の「凹み

部」を有す。「凹み部」はアバタ状を呈す例(第158図1)と明確な凹む例(第157図6～8)の2種類が出土している。

### 敲石 (第158図2)

1点を図示した。本例は楕円形に近い偏平鏢を用い、小口部分に打痕を有している。磨石に似た鏢形状を用いる反面、表裏両面の明確な摩擦は見られない。

### 多孔石 (第158図3)

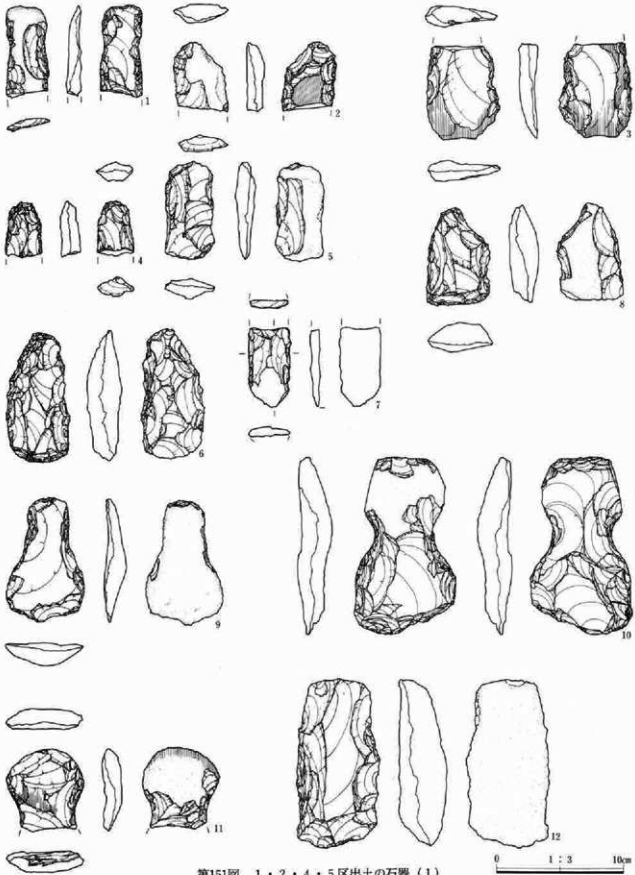
1点を図示した。明確な孔は1ヶ所に限られ、それ以外の明確な孔は確認できない。規模的に見て、凹石とは考え難い。

### 石皿 (第158図4・5、第159図1～3)

5点を図示した。大形で偏平な円鏢を用いる例(第158図4・5、第159図1)と、明確な「凹み部」を持つ例(第159図2・3)が出土している。2は小片で不明だが、3の裏面には意図的な孔を7ヶ所に穿つ。

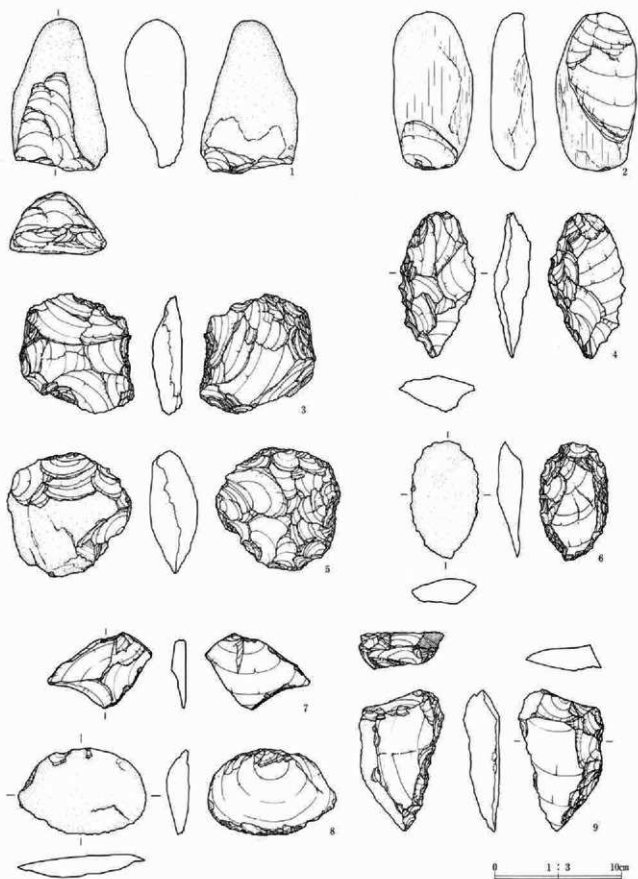
### 砥石・垂飾・不明石製品・扶杖耳飾 (第159図4～10)

砥石1点(5)、垂飾1点(8)、扶杖耳飾2点(9・10)を図示した。5の側面には明確な摩擦が見られ、砥石と認定した。類例の少ない珪質頁岩を用いる。8は砥石の周辺を整形し、孔を穿つ。6・7の用途は全く不明だが、或は8と関連するかもしれない。9・10は中央付近で欠損する。2点とも孔を1ヶ所に持つ。なお、4は表裏両面とも研磨が著しい。機能的には不明だが、部分的に意図的な加工を施す。

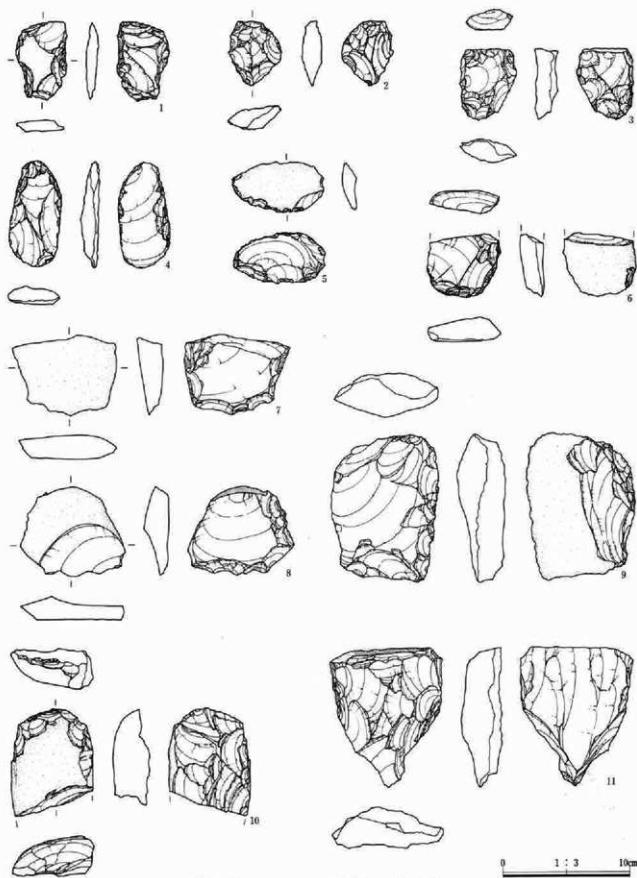


第151図 1・2・4・5区出土の石器(1)

II 検出した遺構と遺物

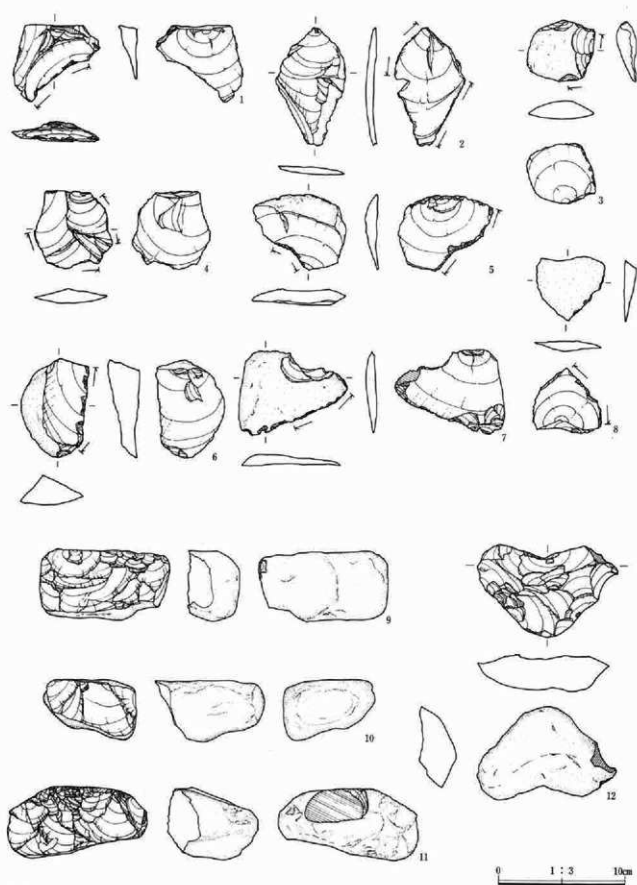


第152図 1・2・4・5区出土の石器(2)



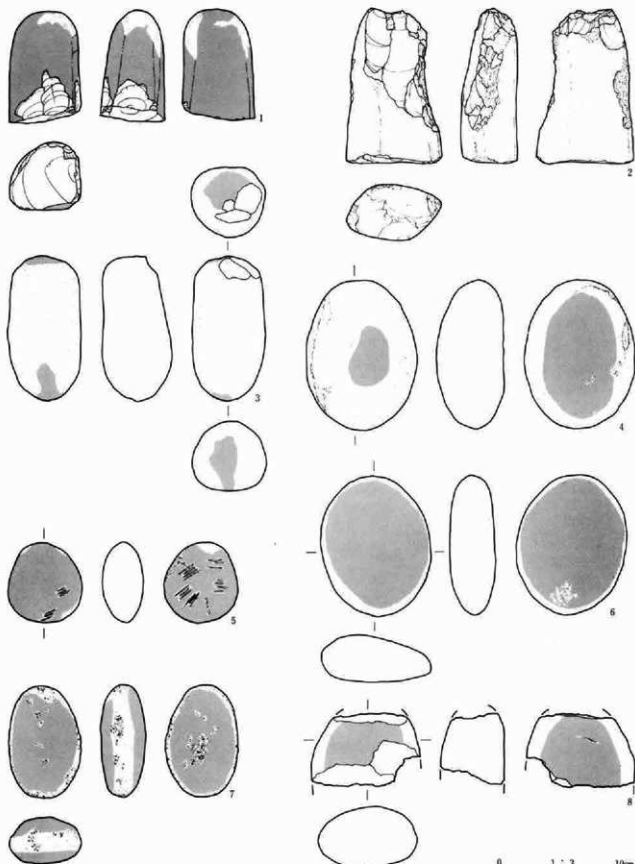
第153図 1・2・4・5区出土の石器(3)

II 検出した遺構と遺物



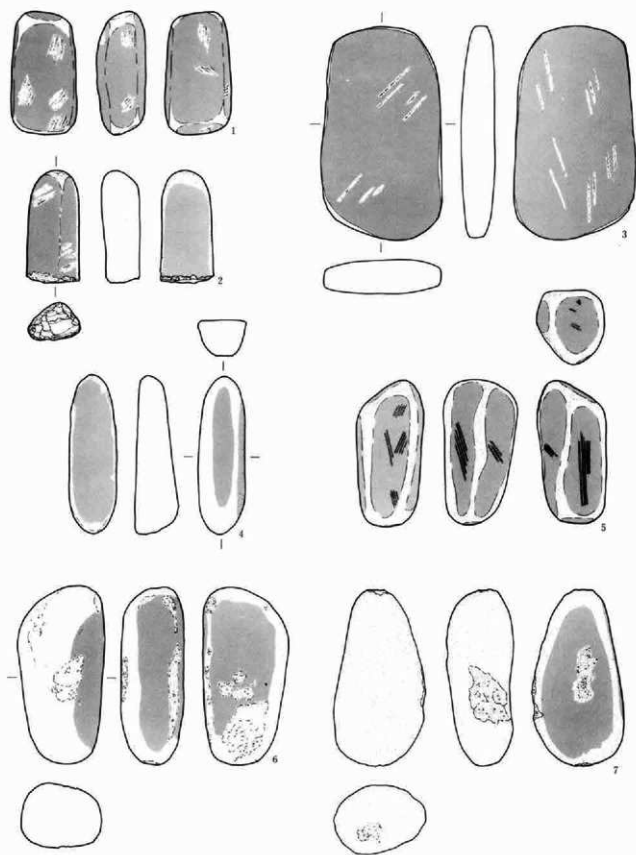
第154図 1・2・4・5区出土の石器(4)



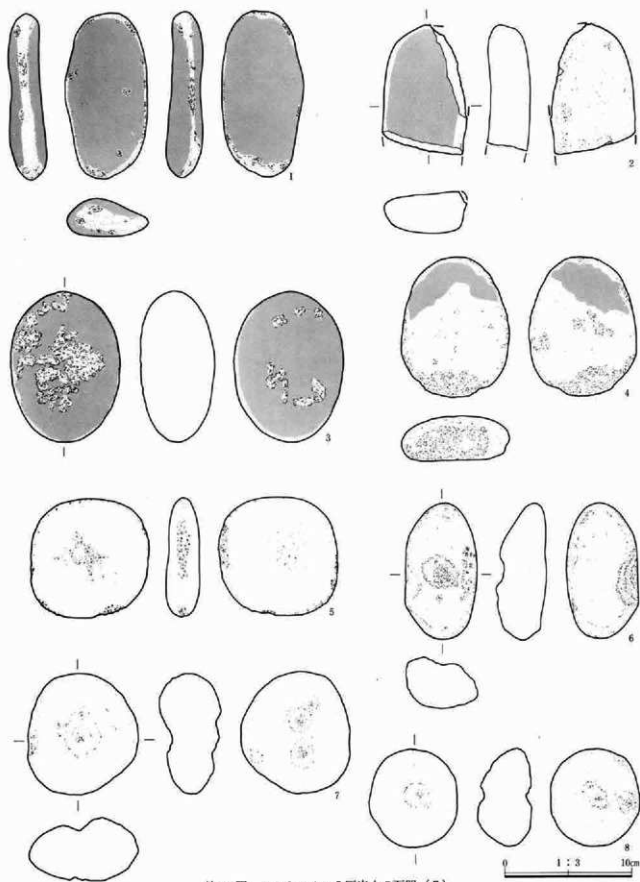


第155図 1・2・4・5区出土の石器(5)

II 検出した遺構と遺物

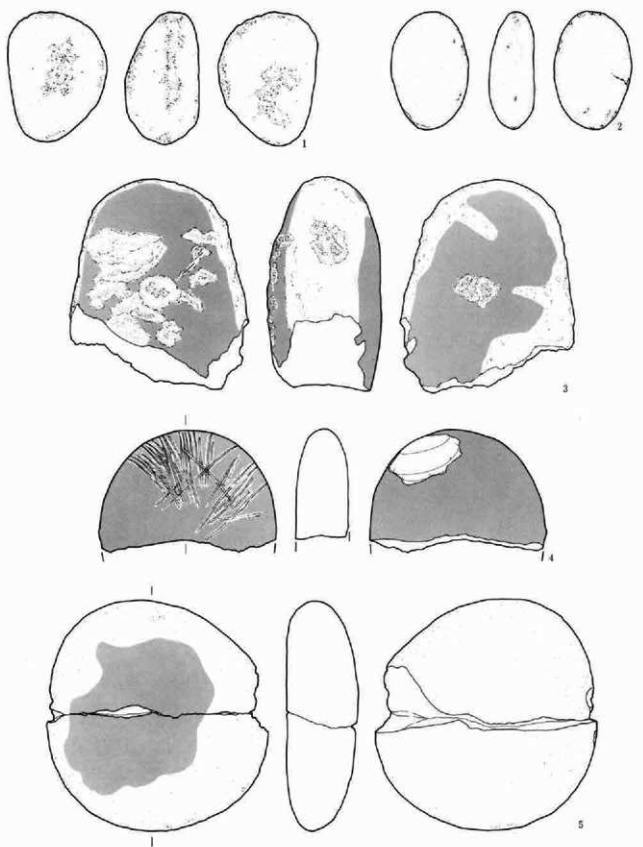


第156図 1・2・4・5区出土の石器(6)

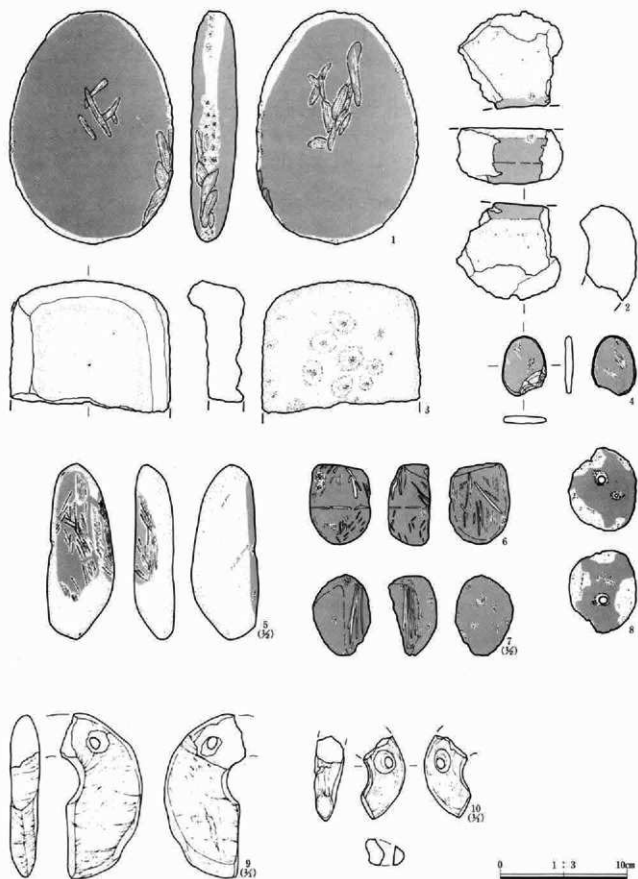


第157図 1・2・4・5区出土の石器(7)

II 検出した遺構と遺物



第158図 1・2・4・5区出土の石礫(8)



第159図 1・2・4・5区出土の石器(9)

## III 科学的分析

### 1. 出土土器の胎土分析

(株) 第四紀地質研究所 井上 巖

#### 1. X線回折試験及び電子顕微鏡観察

##### (1) 実験条件

###### a. 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{m/m}$ の試料台にシルバークーパーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

###### b. X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製JDX-8020X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target: Cu, Filter: Ni, Voltage: 40Kv, Current: 30mA, ステップ角度: 0.02°, 計数時間: 0.5SEC。

###### c. 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物、及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率は、35・350・750・1500・5000の5段階で行い、写真撮影をした。35~350倍は胎土の組織、750~5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

##### (2) 実験結果の取扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。第1表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物、及び造岩鉱物の組成が示してあり、左側には各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に見える各鉱物に特有のピークの高さ(強度)をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト(Mullite)、クリストバライト(Cristobalite)等の組成上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

###### a. 組成分類

###### 1) Mo-Mi-Hb三角ダイアグラム

第161図に示すように三角ダイアグラムを1~13に分割し、位置分類を各胎土につい

第1表 胎土性状表

群別No	遺跡名	タイプ分類	焼成ラック	組成成分			粘土鉱物			分析値			ガス	備考								
				Mo	Al	Hb	Mo	Ch	Mf	Hb	Mica	Mont			Hb	Ch(Fe)	Cu(Mg)	Kaol	K-fels	Hy	Qt	PI
1	北三木窯	F	III	7			396	112	284							103	5611	192			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
2	北三木窯	E	III~IV	6	10		140	141	213								2552	413			細粒	粗粒砂、砂質性粘土
3	北三木窯	E	III	6	10		159	271	173								2982	1119			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
4	北三木窯	D	III	5	20			89									3122	771			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
5	北三木窯	F	III	7	9		395	368	339			128					1987	964			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
6	北三木窯	D	III	5	20			154									1368	405			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
7	北三木窯	E	III	6	10		268	523	157								2477	1139			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
8	北三木窯	F	III	7	9		177	145	236			64					782	1434			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
9	北三木窯	E	III	6	10		137	223	182								3233	505			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
10	北三木窯	D	III~IV	5	20			88									3328	452			細粒	粗粒砂、砂質性粘土
11	北三木窯	L	III	14	20												565	412			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
12	北三木窯	L	III	14	20												1018	650			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
13	北三木窯	A	III	1	16	159											1971	918			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
14	北三木窯	F	III	7	9		224	145	178								2150	909			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
15	北三木窯	F	III	7	9		343	95	166								2845	495			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
16	八木窯	C	III	5	11			176	210			91					1455	699			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
17	八木窯	C	III	5	11			339	180								1438	491			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
18	八木窯	B	III	3	19	169											2995	531			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
19	中野谷	G	III	7	20		288	75									3029	893			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
20	中野谷	K	III	10	18		212	132				210					2472	376			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
21	石畑岩輪	V	III	7	20		178	127									1251	1832			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
22	石畑岩輪	J	III~IV	10	17		137	103									1719	984			細粒	細粒で均質な凝水性粘土
23	下地牛次	C	III	5	11			137	244								795	739			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
24	飯土井中央	I	III	12	18		216	88									3219	624			中粒	粗粒砂、砂質性粘土
25	飯土井中央	H	III	8	8		124										2514	378			中粒	粗粒砂、砂質性粘土

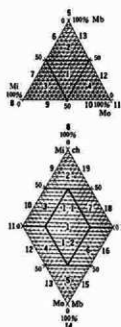
凡例

焼成ラック Mo: I Mu-Cr: II Cr-glass: III glass: IV 原土: V

Mont: モンモロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 Ka: カオリナイト

Hy: 雲母類石 Qt: 石英 PI: 結核行 Cr: クラストパートライト Mu: ムライト

て行い、各胎土の位置を数字で表した。Mo・Mi・Hbの三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント (%) で表示する。モンモリロナイトは $Mo / (Mo + Mi + Hb) * 100$ でパーセントとして求め、同様にMi, Hb, も計算し、三角ダイアグラムに記載する。三角ダイアグラム内の1~4はMo・Mi・Hbの3成分を含み、各辺は2成分より、各頂点は1成分よりなることを表している。位置分類についての基本原則は第160図に示すとおりである。



第160図 三角 (A)・菱形 (B) ダイアグラム位置分類図

## 2) Mo-Ch, Mi-Hb菱型ダイアグラム

第161図に示すように菱型ダイアグラムを1~19に区分し、それぞれ位置分類を数字で記載した。記載不能な場合は、20として別に検討した。モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) のうち、a) 3成分以上含まれない、b) Mont・Chの2成分が含まれない、c) Mi・Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱型ダイアグラムはMont-Ch, Mica-Hbの組合せを表示するものである。Mont-Ch, Mica-HbのそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、 $Mo / (Mo + Ch) * 100$ と計算し、Mi・Hb・Chも各々同様に計算し、記載する。

菱型ダイアグラム内にある1~7はMo・Mi・Hb・Chの4成分を含み、各辺はMo・Mi・Hb・Chのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。位置分類についての基本原則は第160図に示すとおりである。

## b. 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト (Mullite) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストパーライト (Cristobalite) はムライトより低い温度、ガラスはクリストパーライトより更に低い温度で生成する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI~Vの5段階に区分した。

- 焼成ランクI：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発泡している。
- 焼成ランクII：ムライトとクリストパーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
- 焼成ランクIII：ガラスの中にクリストパーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
- 焼成ランクIV：ガラスのみが生成し、原土(素地土)の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
- 焼成ランクV：原土に近い組織を有し、ガラスは殆どできていない。

以上のI~Vの分類は原則であるが、胎土の材質、すなわち、粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占め



る。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

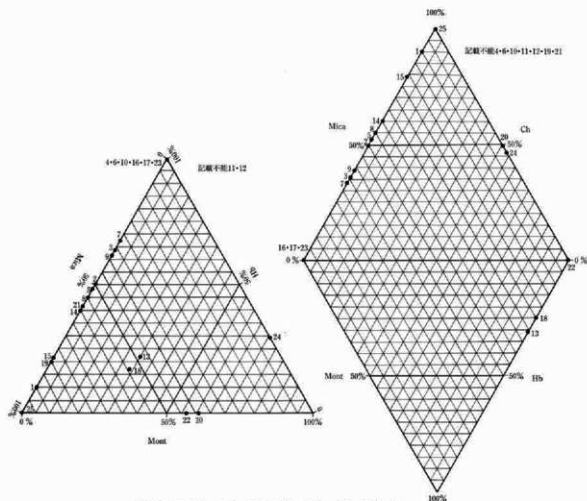
### c. タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合にである。なお、タイプ分類のA・B・Cなどは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

## 2. 実験結果

### (1) タイプ分類



第161図 Mo-Mi-Hb 三角、Mo-Ch・Mi-Hb 菱形ダイアグラム位置分類図

### Ⅲ 科学的分析

註1. 荒砥北三木堂遺跡出土の土器は図版番号(第162図)の後にタコで本文中の図版番号を付した。

註2. 八木沢清水遺跡出土資料は部分的に群馬県史・資料編1に掲載している。ここでは順位に著状論文する山形理堂文の一群を分析資料に供した。

註3. 中野谷遺跡出土の資料は未報告資料である。安中市教育委員会・大工原豊氏の御好意で資料提供を受けた。

註4. 石畑岩陰遺跡の出土資料は、群馬県史・資料編1の掲載資料の内、「金銀母」を特徴的に含む第Ⅶ類土器と同一胎土の資料を分析資料に供した。

註5. 飯土井中央遺跡(24・25)、及び、下触牛伏遺跡の分析資料(23)は、報告書には未掲載の小破片である。既に報告した資料と分析資料が同一個体か否か、は不明だが、胎土には大きな差は見られない。

荒砥北三木堂遺跡出土の草創・早期(燃糸文土器・押型文土器)、前期の土器、及び、県内遺跡出土の類似土器を対象に分析を試みた。分析した土器は25個で、三木-1~14は荒砥北三木堂遺跡、八木沢-15~18は八木沢清水遺跡、中野谷-19・20は中野谷遺跡、石畑岩陰-21・22は石畑岩陰遺跡、下触牛伏-23は下触牛伏遺跡、中央-24・25は飯土井中央遺跡から出土した土器である。土器胎土は第1表・胎土性状表に示す通り、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づき、A~Lの12タイプに分類された。

電子顕微鏡による分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはⅢと幾分低い。

#### Aタイプ…三木-13

Mont・Mica・Hbの3成分を含み、Ch1成分にかける。

#### Bタイプ…八木沢-18

Mont・Mica・Hbの3成分を含み、Chにかける。組成的にはAタイプと類似するが、検出強度が異なるためにタイプが違っている。

#### Cタイプ…八木沢-16・17、牛伏-23

Hb・Chの2成分を含み、Mont・Micaの2成分にかける。個体数は3個である。

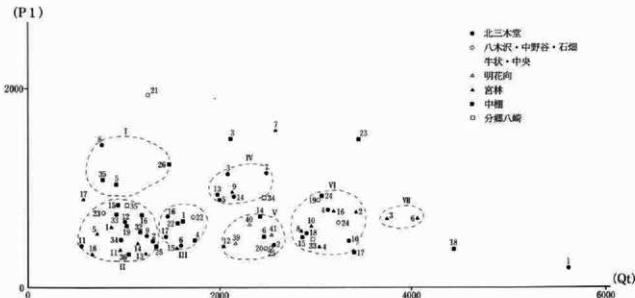
#### Dタイプ…三木-4・6・10

Hb1成分を含み、Mont・Mica・Chの3成分にかける。個体数は3個である。

#### Eタイプ…三木-2・3・7・9

Mica・Hb・Chの3成分を含み、Mont1成分にかける。個体数は4個で、Fタイプについて多い。個体数の多いことから判断して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

#### Fタイプ…三木-1・5・8・14、八木沢-15



第162図 Q t - P 1 相関図

Mica・Hb・Chの3成分を含み、Mont 1成分にかける。個体数は5個と最も多い。組成的にはEタイプと同じであるが、検出強度が異なるため、位置分類が違っているものである。個体数の多いことから判断して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

Gタイプ…中野谷-19・石畑-21

Mica・Hbの2成分を含み、Mont・Chの2成分にかける。

Hタイプ…中央-25

Mica・Chの2成分を含み、Mont・Hbの2成分にかける。

Iタイプ…中央-24

Mont・Hb・Chの3成分を含み、Mica 1成分にかける。

Jタイプ…石畑-22

Mont・Micaの2成分を含み、Hb・Chの2成分にかける。

Kタイプ…中野谷-20

Mont・Mica・Chの3成分を含み、Hb 1成分にかける。

Lタイプ…三木-11・12

Mont・Mica・Hb・Chの4成分にかける。

おもに、 $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$  (アルミナゲル) で構成される。

25個の分析に対して12タイプに分かれ、タイプとしては多過ぎる。その理由は、他の遺跡の土器が多く含まれているためである。荒砥北三木堂遺跡の土器は他遺跡出土の土器を除くと5タイプとなる。この5タイプの中で、EとFの2タイプは組成的にも類似しており、これらと同じタイプとすれば4タイプとなる。Eタイプは4個、Fタイプは5個と個体数が多く、両者を併せると9個となり、全体の65%に達する。個体数の多いことから判断して、両タイプは在地あるいは在地近傍の可能性が高いと判断される。八木沢、中野谷、石畑岩盤、下触牛伏、飯土井中央の5遺跡からの土器11個は8タイプに分かれ、各々の遺跡の土器が組成的特徴を示しているため、タイプが多いものと判断される。

(2) 石英(Qt) - 斜長石(P1)の相関について

土器胎土に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英-斜長石比を有しているといえる。この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、前記のように各々の集団の有する個有の技術の一端である。

第5図Qt-P1相関図には北三木堂遺跡の土器と併せて昭和村の中棚遺跡、北橋村分郷八崎遺跡、埼玉県明花向遺跡、宮林遺跡の土器が記載してある。図から明らかに、土器はI~VIIの7グループと、その他。に分類された。

註6. 比較材料に供した昭和村中棚遺跡、北橋村分郷八崎遺跡、埼玉県明花向遺跡、埼玉県宮林遺跡の出土資料に関するデータの詳細は、それぞれ報告書を参照されたい。

【中棚遺跡】昭和村教育委員会 1985

【分郷八崎遺跡】北橋村教育委員会 1986

【明花向遺跡】埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第35集 1984

【宮林遺跡】埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集 1985

I グループ…三木-8、中棚-5・26・35

石英の強度が低く、斜長石の強度が高いグループで、分散傾向にある。稲荷台、無文、諸磯、押型文と土器のタイプが異なる。

II グループ…三木-9・11・12、牛伏-23、中棚-2・15・16・19・25・32・33・34・36、分郷八崎-34、宮林-1・5・11・13・14・18

このグループはF、G、Lの3タイプの胎土で諸磯a・b・cが集中するグループである。宮林遺跡の土器は多縄文土器3個、爪形文土器2個で構成される。幾分タイプが異なっている。特に中棚遺跡の諸磯が集中することで特徴づけられる。縄文時代前期の土器が集中する。

III グループ…三木-6、八木沢-16・17、石畑岩陰-22、中棚-1・4・22

八木沢-16・17、中棚-1の3個は摺糸文、他は無文、稲荷台、沈線文、表裏縄文が各々1個で構成され、縄文時代早期の土器が集中する。八木沢清水遺跡の土器が多く含まれる。

IV グループ…三木-3・5・7・13・14、分郷八崎-34、宮林-9

三木-5と7は稲荷台式、三木-13・14、分郷八崎-34は諸磯式土器、三木-3は押型文土器で構成される。諸磯式土器と稲荷台式土器が混在するグループ。特に、寛弘北三木堂遺跡の土器が集中することで特徴づけられる。個体数が多いことから推察して、在地か在地近傍の可能性が高い。

V グループ…三木-2、中野谷-20、中央-25、中棚-6、14、明花向-39・40・41、宮林-12

三木-2、中野谷-20の2個は押形文の土器、中棚-6は縄文、14は諸磯a、明花向-39・40・41は第I群土器、中央-25は押型文、宮林-12は爪形文の土器である。このグループには押型文が集中することで特徴づけられる。

VI グループ…三木-4・10、八木沢-15・18、中野谷-19、中央-24、中棚-17・24、分郷八崎-33、宮林-2・4・8・10・16

三木-4と10はDタイプの稲荷台式と浮島式、八木沢-15は摺糸文式、八木沢-18と中野谷-19は押型文式、中棚-17は諸磯b、中棚-24は無文、分郷八崎-33は縄文早期の土器で構成される。中央-24と宮林-2は爪形文、4・8・10・16の4個は多縄文である。

VII グループ…宮林-3・6

宮林-3は爪形文、6は沈線文で、石英の強度が高いことで特徴づけられる。

“その他”…三木-1、石畑岩陰-21、中棚-3・18・23、宮林-7

三木-1は縄文草創期の土器で、石英の強度が異常に高く、異質である。石畑岩陰-21は斜長石の強度が高い表裏縄文の土器で、明らかに異質である。この2個はどのグループにも属さず、異質なタイプとして特徴づけられる。中棚-3と23は無文の土器で、斜長石の強度が高く、また、18は諸磯bの土器で、石英の強度が高く異質である。

II グループは中棚遺跡の諸磯式土器が集中するグループで、北三木堂遺跡の諸磯式

土器と分郷八崎遺跡の諸磯式土器も含まれ、諸磯式土器が集中するグループとして特徴づけられる。

IIIグループは北三木堂の稲荷台式土器、八木沢清水の燃糸文、石畑岩陰の表裏縄文、中樫遺跡の辻縄文、燃糸文、無文の土器で構成され、縄文時代早期の土器が中心となっているグループである。

IVグループは北三木堂遺跡の稲荷台と諸磯で構成されるグループで、分郷八崎遺跡の諸磯式土器も混在する。北三木堂遺跡の土器が集中することで特徴づけられ、在地在近傍の可能性が高いグループである。

Vグループは北三木堂と中野谷遺跡の押型文土器が集中するグループで、中樫遺跡の縄文土器と諸磯式土器が混在する。

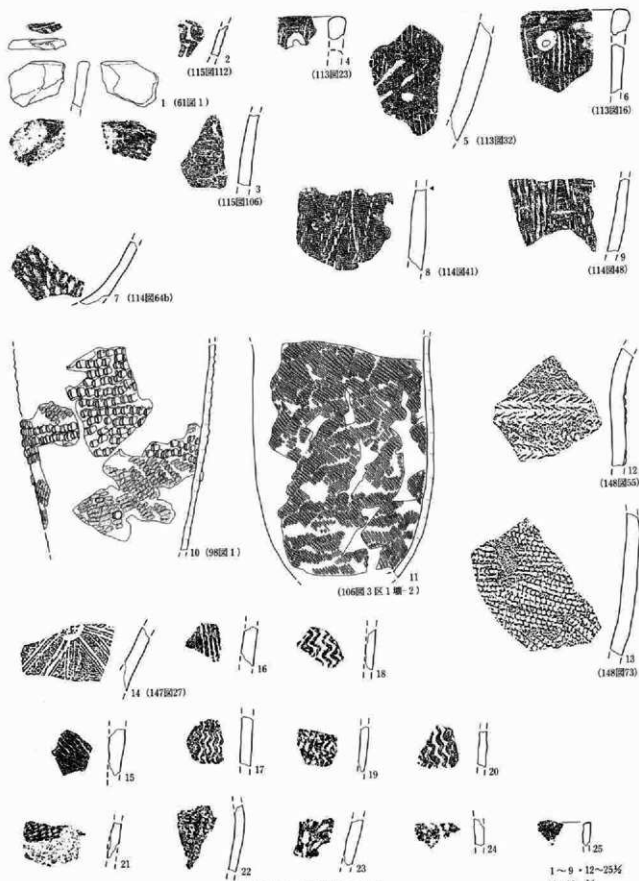
VIグループは北三木堂、八木沢清水、中野谷の各遺跡の稲荷台式、押型文、爪形文、中樫遺跡の無文、分郷八崎遺跡の縄文早期の土器で構成され、縄文早期の土器が集中するグループである。

“その他”のうち、三木-1は縄文時代草創期の土器で、石英の強度が高く異質である。石畑岩陰-21は表裏縄文で、斜長石の強度が高く、胎土もGタイプで、明らかに異質である。

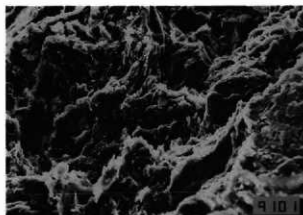
### 3. まとめ

- I) 土器は荒砥北三木堂遺跡の土器14個と異なる遺跡の土器11個とを分析した。異なる遺跡の土器は8タイプに分かれ、そのため、タイプ分類では全体でA～Lの12タイプに分類された。北三木堂遺跡の土器はEタイプが4個、Fタイプが5個で、検出強度が異なるが両者は組成が類似しており、ひとつのグループとすると、両者で全体の65%を占めることになり、個体数の多いことから判断して、在地在近傍の可能性が高い。
- II) 電子顕微鏡によりガラスの分析では、ガラスは中粒で、焼成ランクはIIIと幾分低い傾向にある。
- III) Qt-P $\ell$ 相関によると、I～VIIの7つのグループと“その他”に分類された。IIグループは中樫遺跡の諸磯を主体に、北三木堂と分郷八崎遺跡の諸磯式土器が集中するグループ、IIIは八木沢清水遺跡の燃糸文式土器で特徴づけられる。IVは北三木堂遺跡の稲荷台式と諸磯が共存するグループ、特に北三木堂遺跡の土器が集中することで特徴づけられ、在地在近傍の可能性が高いグループ。Vは北三木堂、中野谷の各遺跡の押型文が集中するグループとして各々特徴づけられる。VIは北三木堂遺跡の稲荷台式と諸磯、八木沢清水遺跡の押型文と燃糸文、中野谷遺跡の押型文、飯土井中央遺跡の爪形文土器で構成され、各遺跡の土器が混在する。“その他”のうち、三木-1は縄文時代草創期の土器で、石英の強度が他と比較して高く異質である。石畑岩陰-21は表裏縄文の土器で、胎土も異なり、斜長石の強度が高く、異質である。

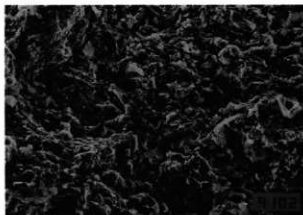
III 科学的分析



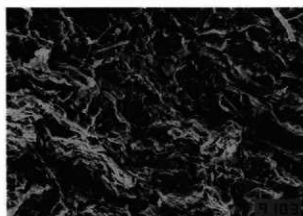
第163図 分析対象の土器



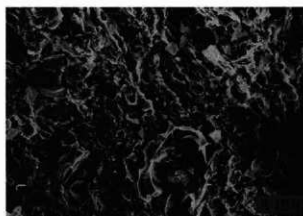
北三木堂 1. 粗粒砂を混入する砕屑性粘土  
 No 1 2. 原土の組織を残す  
 3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
 4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



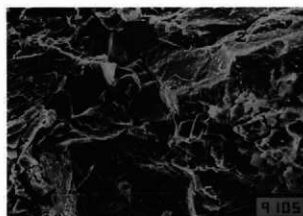
北三木堂 1. 粗粒砂を含む砕屑性粘土  
 No 2 2. 原土の組織を残す  
 3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
 4. grassは細粒で、焼成ランクはIII~IV



北三木堂 1. 粗粒砂を混入する砕屑性粘土  
 No 3 2. 原土の組織を残す  
 3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
 4. grassは細粒で、焼成ランクはIII



北三木堂 1. 粗粒砂を混入する砕屑性粘土  
 No 4 2. 原土の組織を残す  
 3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
 4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



北三木堂 1. 細粒砂を含む砕屑性粘土  
 No 5 2. 原土の組織を残す  
 3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
 4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



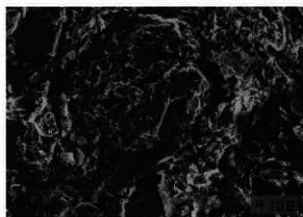
北三木堂 1. 細粒砂を含む砕屑性粘土  
 No 6 2. 原土の組織を残す  
 3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
 4. grassは中粒で、焼成ランクはIII

第164図 分析対象土器の電子顕微鏡写真(1)

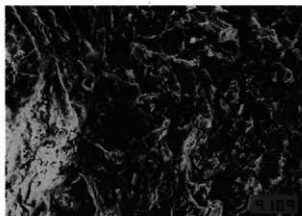
### III 科学的分析



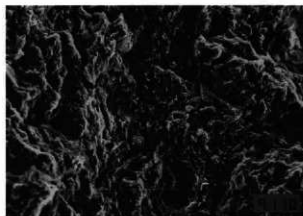
- 北三木堂  
No 7
1. 細粒砂を含む砕屑性粘土
  2. 原土の組織を残す
  3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
  4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



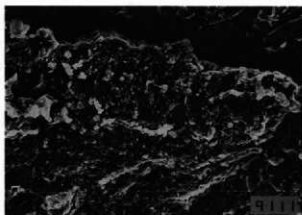
- 北三木堂  
No 8
1. 細粒砂を含む砕屑性粘土
  2. 原土の組織を残す
  3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
  4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



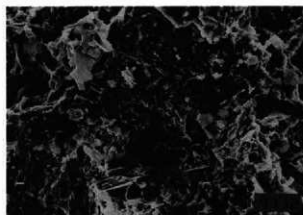
- 北三木堂  
No 9
1. 中粒砂を混入する砕屑性粘土
  2. 原土の組織を残す
  3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
  4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



- 北三木堂  
No 10
1. 中粒砂を混入する砕屑性粘土
  2. 原土の組織を残す
  3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
  4. grassは中粒で、焼成ランクはIII~IV



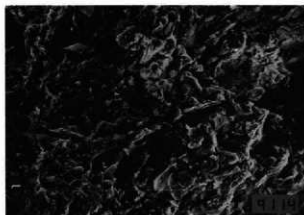
- 北三木堂  
No 11
1. 中粒砂を混入する砕屑性粘土
  2. 原土の組織を残す
  3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
  4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



- 北三木堂  
No 12
1. 細粒砂を混入した砕屑性粘土
  2. 原土の組織を残す
  3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$
  4. grassは中粒で、焼成ランクはIII

第165図 分析対象土器の電子顕微鏡写真(2)

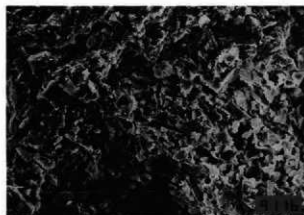




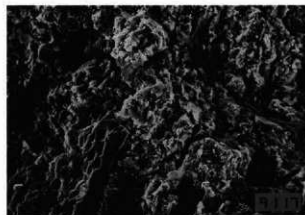
北三木堂  
No14 1. 細粒砂を含む砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



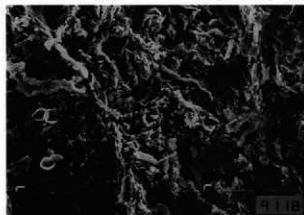
八木沢  
No15 1. 粗粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



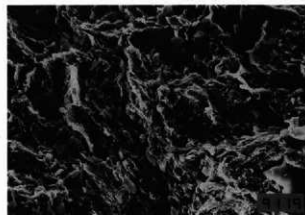
八木沢  
No16 1. 細粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



八木沢  
No17 1. 中粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



八木沢  
No18 1. 細粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $\text{Mont} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



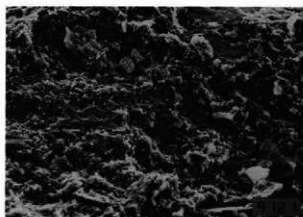
中野谷  
No19 1. 細粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII

第166図 分析対象土器の電子顕微鏡写真(3)

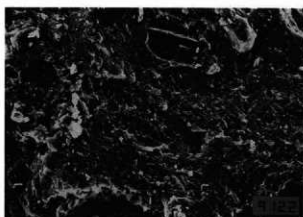
### III 科学的分析



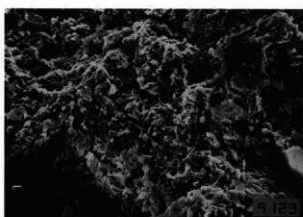
中野谷  
No.20  
1. 細粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスはMont+grass  
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



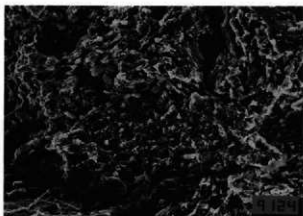
石畑岩館  
No.21  
1. 粗粒砂を含む砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



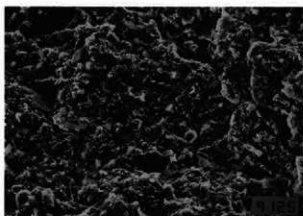
石畑岩館  
No.22  
1. 細粒で、均質な砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスはgrass+Mont  
4. grassは細粒で、焼成ランクはIII~IV



下触牛伏  
No.23  
1. 細粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



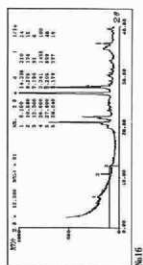
飯土井中央  
No.24  
1. 細粒砂を含む砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスはMont+grass  
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII



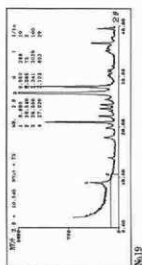
飯土井中央  
No.25  
1. 中粒砂を混入する砕屑性粘土  
2. 原土の組織を残す  
3. マトリックスは $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O} + \text{grass}$   
4. grassは中粒で、焼成ランクはIII

第167図 分析対象土器の電子顕微鏡写真(4)

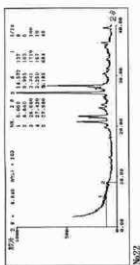




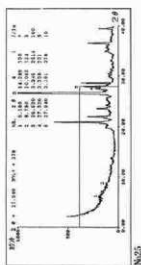
No.16



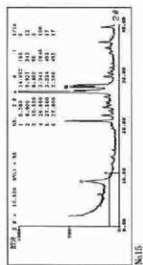
No.19



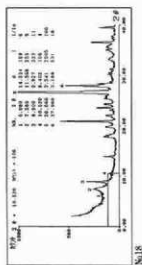
No.22



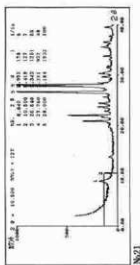
No.25



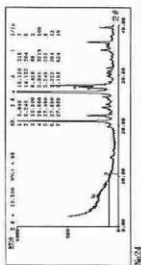
No.15



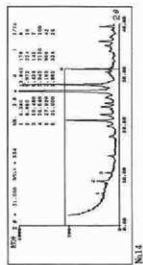
No.18



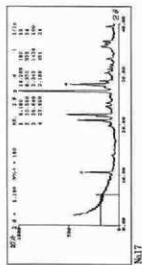
No.21



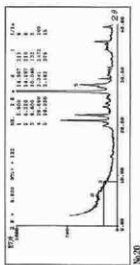
No.24



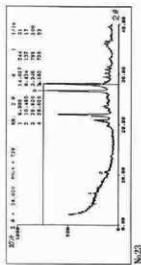
No.14



No.17



No.20



No.23

第169図 分析対象土器のチャート図 (2)

## 2. 石材の産地同定

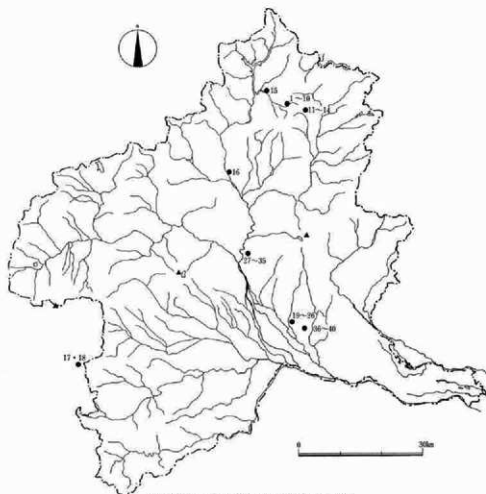
## パリノ・サーヴェイ (株)

## 1. 目的および試料

群馬県内遺跡出土の旧石器のうち、安山岩製石器の原産地推定を行うための基礎試料として、原産地の可能性があると思われる各地点の18試料、群馬県内遺跡出土石器22試料、計40試料について岩石薄片を作成し、顕微鏡観察によって各試料の鉱物組成・組織・岩石名を明らかにし、比較検討を行った。対象試料は以下の通りである。本稿では写真図版との対照の便から1~40の通し番号を、薄片番号として付した。

「原産地」試料 18試料

- a) 群馬県内 武尊山北斜面 10試料 試料番号1-1~7 (薄片番号1~10)  
 武尊山東斜面 4試料 試料番号8~9-3 (薄片番号11~14)  
 木の根沢川砥沢橋付近 1試料 試料番号10 (薄片番号15)  
 関越道下牧PA付近 1試料 試料番号11 (薄片番号16)



第170図 遺跡の位置と原石採集地点

- b) 長野県内 八風山南西麓、香坂川流域 2 試料 試料番号12-1~12-2  
(薄片番号17,18)

「遺跡出土石器」試料 22試料

- a) 前橋市今井町荒砥北三木堂遺跡 (A三) 8 試料 (薄片番号19~26)  
試料番号1640, 759, 1646, ソフト218, 205, 635, 2190, 745
- b) 勢多郡赤城村勝保沢中ノ山遺跡 (KK32) 9 試料 (薄片番号27~35)  
試料番号 3-543, 2-365, 2-832, 2-529, 3-458, 2-73,  
3-546, 2-869, 2-124
- c) 佐波郡赤堀町下触牛伏遺跡 5 試料 (薄片番号36~40)  
試料番号L-34・13, L-35・73, L-39・39, L-40・1  
M-33・5

なお、本稿は平成3年度に提出した「岩石薄片作製鑑定業務報告書」の抜粋であり、紙数の関係でデータの一部を割愛した。詳細は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている同報告書に譲る。

## 2. 原産地試料の顕微鏡観察結果

観察結果を第1表に示す。

## 3. 遺跡出土石器の顕微鏡観察結果

遺跡から出土した石器岩石試料を顕微鏡観察した結果(第2表)、出土地に関係なく同質の輝石安山岩で次の特徴を有しており、原産地試料とは異なる岩質である。岩石型は①~④の特徴の組み合わせで分類した。石基は基本的に①と④の性質を有するAS型である。

①石基の火山ガラスは淡褐色の特徴的な色調を有する。

②石基中に濃褐色を呈するガラス集合体が斑点状に存在する。

③斑晶鉱物として微~少量の斜長石・単斜輝石・斜方輝石を有する。

④石基中の輝石はほとんど単斜輝石で、おおむね斜長石・火山ガラスとほぼ等量存在する。

ただし、薄片を製作した岩片が小さいため、②と③は普遍的ではなく、斑点状の濃褐色ガラス集合体が見られないものや、斑晶の輝石類を欠くことがある。

以下に述べる記載の「特徴・その他」の項では岩石型を次のように細分し、略号で表記した。

AS-0型: 上記の①~④の特徴が全て観察されるもの。

AS-1型: ①・③・④の特徴を有するが、②が見られないもの。

AS-2型: ①・④の特徴を有し、斜長石・単斜輝石斑晶が存在するもの。

AS-3型: ①・④の特徴を有し、斜長石・斜方輝石斑晶が存在するもの。

AS-4型: ①・④の特徴を有し、斑晶として斜長石のみが存在するもの。

AS-5型: ①・④の特徴を有し、斑晶として輝石類のみが存在するもの。

#### 4. まとめ

##### 4.1 「原産地」の試料

###### 4.1.1 武尊山北斜面

10試料中の6試料が斜方輝石単斜輝石安山岩、2試料がホルンフェルス、2試料が堆積岩（粘板岩とシルト岩）である。ホルンフェルス・粘板岩・シルト岩はいずれも火山の基盤となる古期岩層のものである。

###### 4.1.2 武尊山東斜面

4試料はすべて岩種が異なる。試料No 8-1は多孔質の斜方輝石単斜輝石安山岩で、武尊山北斜面の試料No 7と同質で、同一溶岩の可能性もある。また、試料No 9-1は関越道下牧PA付近の試料No 11と共通した特徴を有し、同一岩体に属す岩石の可能性もある。

試料No 9-2の玄武岩は40試料中では唯一個であった。

試料No 9-3はシルト岩を原岩とするホルンフェルスで、武尊山北斜面の変成岩および堆積岩と同様に基盤の古期岩層を構成するメンバーである。

###### 4.1.3 木の根沢川氾濫橋付近

木の根沢川氾濫橋付近の試料は単斜輝石斜方輝石安山岩で、石基の火山ガラスの色調の濃淡と斜長石で流理組織が明瞭である。石器原料の安山岩とは石器の構成鉱物量比が異なり異質である。

###### 4.1.4 関越道下牧PA付近

関越道下牧PA付近で得られた試料は斜方輝石単斜輝石安山岩で、顕微鏡下の岩相は武尊山東斜面の試料No 9-1と類似している。

###### 4.1.5 長野県八風山南西麓香坂川流域

八風山南西麓香坂川流域の2試料はいずれも斜方輝石単斜輝石安山岩であるが、他地域の同種岩石と共通する特徴はみられない。石器原料の安山岩とは石器の鉱物量比が異なり、異質である。

##### 4.2 石器に用いられた輝石安山岩

群馬県内の3遺跡から出土した石器試料は、出土地や推定される年代に関係なく同質の輝石安山岩であった。典型的には次の特徴を有し、「原産地」岩石試料とは異なる岩質である。

- 1) 火山ガラスを多く含む斑晶に乏しく、程度の差はあるが、流理組織を有する溶岩である。
- 2) 石基を構成する鉱物は斜長石・単斜輝石（稀に斜方輝石を含む）・火山ガラスで、原産地試料の安山岩類と比較すると輝石類の含有量がきわめて多い。

- 3) 石基中の火山ガラスの色調は特徴的な淡褐色～褐色で、原産地試料の安山岩類と異なる。
- 4) 斑晶として斜長石・単斜輝石・斜方輝石が存在するが、いずれも微量で、試料によってはこれらの鉱物の一部を欠如している。
- 5) 一般に空隙は認められず、緻密質である。

以下に遺跡別に各岩石型の試料を整理した。最も多い岩石型はAS-0型であった。

石器岩石の型	荒砥北三木堂	勝保沢中ノ山	下触牛伏
AS-0	759, ソフト218, 745	3-543, 2-832	L-35.73, L-39.39, L-40.1
AS-1	1640, 635		M-33.5
AS-2	1640, 1646, 205, 2190	3-458	
AS-3		2-365, 3-546, 2-869, 2-124	
AS-4			L-34.13
AS-5		2-529, 2-73	

石器として利用される理由は、岩質が緻密で斑晶に乏しくガラス質であることから、他岩石と比較して成形が容易であったことによると考えられ、地域や年代を超えて同種の岩石を選択・使用しているものと思われる。

本文中に述べた通り、岩石型を石基および斑晶の鉱物組み合わせの特徴からAS-0型からAS-5型に細分した。しかし、これらの岩石型は岩石学的な立場からは同岩質で、全て同一岩体（同一溶岩流）に由来するとみなせる範囲の変化である。

今後さらに、これらの石器の原料を供給した原産地を推定するためには、地質構造図などを参考に地質学・鉱床学的観点から現地調査を行い、同様の分析事例を重ねる必要がある。また、さらに今回試料とした3遺跡以外にも流域・山麓を異にする遺跡の出土試料についても検討を行い、これらの安山岩原料の流通状況を確認する必要がある。





III 科学的分析

第4表 遺跡出土石器試料の岩質一覧表

薄片番号 資料番号	岩石名	量比 粒度	珪 晶 品			石					基 G Ap	岩石型
			Pl	Cpx	Opx	Pl	Cpx	Opx	Op			
No19	単斜輝石	A	△	※		○	○		△	○		As-2
1640	安山岩	B	0.65	0.28		0.41	0.02		0.15			
No20	閃輝石	A	※	※	※	○	○		※	○		As-0
759	安山岩	B	0.60	0.58	0.12	0.27	0.12		0.19			
No21	単斜輝石	A	※	※		○	○		※	○		As-2
1646	安山岩	B	0.25	0.59		0.19	0.64		0.20			
No22	閃輝石	A	△	※	※	○	○		※	○		As-0
ツフト218	安山岩	B	0.57	0.51	0.34	0.16	0.10		0.52			
No23	単斜輝石	A	※	※		○	○		※	○		As-2
205	安山岩	B	0.49	0.16		0.21	0.07		0.16			
No24	閃輝石	A	※	※	※	○	△	○	※	○		As-1
635	安山岩	B	0.92	0.29	0.24	0.24	0.13		0.12			
No25	単斜輝石	A	※	※		○	○		※	○		As-2
2190	安山岩	B	0.31	0.81		0.30	0.08		0.25			
No26	閃輝石	A	※-△	※	※	○	○		※	○		As-0
745	安山岩	B	0.88	0.65	0.11	0.14	0.07	0.06	0.32			
No27	閃輝石	A	※	※	※	○	○		※	○		As-0
3-543	安山岩	B	0.33	0.11	0.29	0.23	0.03		0.26			
	斜方輝石	A	△	※		○	○		※	○		As-3
2-365	安山岩	B	0.84	0.25		0.24	0.20		0.20			
No29	閃輝石	A	※-△	※	※	○	○		※	○		As-0
2-832	安山岩	B	0.55	0.35	0.21	0.28	0.07		0.15			
No30	閃輝石	A	※	※	※	○	○		※	○		As-5
2-529	安山岩	B	0.51	0.25		0.33	0.09		0.23			
No31	単斜輝石	A	※-△	※		○	○		※	○		As-2
3-458	安山岩	B	1.18	0.16		0.26	0.02		0.15			
No32	単斜輝石	A	※			○	○		※	○		As-5
2-73	安山岩	B	0.37			0.22	0.18		0.09			
No33	斜方輝石	A	※	※		○	○		※	○		As-3
3-546	安山岩	B	0.05	0.15		0.20	0.03		0.13			
No34	斜方輝石	A	※	※	※	○	○		※	○		As-3
2-869	安山岩	B	0.42	0.25		0.22	0.06		0.12			
No35	斜方輝石	A	※	※		○	○		※	○		As-3
2-124	安山岩	B	0.32	0.22		0.16	0.11		0.14			
No36	安山岩	A	※			○	○	※	※	○		As-4
L-34.13		B	0.25			0.23	0.33	0.12	0.09			
No37	閃輝石	A	※	※	※	○	○		※	○		As-0
L-35.73	安山岩	B	0.59	0.58	0.12	0.25	0.05		0.09			
No38	閃輝石	A	※-△	※	※	○	○		※	○	※	As-0
L-39.39	安山岩	B	0.82	0.39	0.51	0.23	0.22		0.22		0.21	
No39	閃輝石	A	※	※	※	○	○		※	○		As-0
L-40.1	安山岩	B	0.69	0.61	0.60	0.19	0.64	0.14	0.22			
No40	閃輝石	A	△	※	※	○	○		※	○		As-1
M-33.5	安山岩	B	1.15	0.47	0.45	0.29	0.12		0.20			

A. 量比

○少量 ○中量 △少量

※微量

B. 最大粒径

鉱物の略号

Pl斜長石 Cpx単斜輝石

Opx斜方輝石 Gガラス

Op不透明鉱物 Apアバタイト

単斜輝石斜方輝石安山岩は閃輝石  
安山岩と略記した。岩石名は既品  
となる有色鉱物名を本来の岩石名  
の前に付している。

## IV ま と め

### 1. 第I～III文化層出土の石器について

本遺跡では、3枚の文化層（石器群）を検出した。調査は制約条件も多く、不明な点も多い。ここでは、整理作業を通じ得た第III文化層に関する所見を述べていきたい。

第III文化層は主たる構成器種に槍先形尖頭器を持つ石器群であり、その他には有茎尖頭器や打製石斧・搔器・削器が組成している。石器群の同時性は確実と思えたわけだが、石器群の一括性に若干の疑問も生じてきている。以下に、整理作業を通じた所見を踏まえ、問題点を記していきたい。

接合資料や同一母岩からみた場合、まず槍先形尖頭器に関して言えば、出土資料は木葉形状を呈すI類、柳葉形状を呈すII類とも多様な製作段階を示していることから、遺跡製作の石器と判断されよう。同様に便宜的にIII類と扱った槌状刺離を施す槍先形尖頭器にも2例の接合資料（第42図）を確認しており、遺跡製作の蓋然性は高い。他の器種では1点のみ出土した打製石斧も石器の再生を試みていること、削器や搔器も槍先形尖頭器の製作に伴い生じる可能性が強い剥片を用いていることから槍先形尖頭器に伴う、と考えている。一方、有茎尖頭器（第20図2）は形態的に完成度が高く、石器製作の痕跡は極めて乏しい。また、接合資料—53も接合状態からみて遺跡製作の石器とも言えるわけだが、槍先形尖頭器に同一の母岩を確認しているわけではなく、現状では両者が確実に組成するとはいきれない状態を示していた。

石器群を技術的な側面からみた場合、石器群に指標的な槍先形尖頭器にはIII群と扱った槌状刺離を施す特徴的な例が見られ、ある意味では癖の強い石器群ともいえよう。即ち平面形状からみた分類とは別に、器体先端部分に槌状刺離を施すタイプや、器体中央付近の折れ面から側縁に槌状刺離を施すタイプが存在するのである。槌状刺離を施す手法は初期の槍先形尖頭器に特徴的であり、一般的に細石刃石器群より以後には極めて少ない。とはいえ、この段階にも同様な刺離を施す手法は全く見られないわけではなく、ある程度類例の指摘も可能と思える。県内で類例を辿れば、房谷戸遺跡・第I文化層に器体先端に槌状刺離を施す例が出土している。房谷戸の例は刺離作業を終える間際に先端部分から槌状刺離を施す例で刺離の後も、この部分を打面に器体の調整を試みている。このことからみて、房谷戸の例に見る槌状刺離は更に薄い器体を意識しているともいえ、「男女倉型尖頭器」の先端部・処理法とは大きく異なる。一方、本遺跡の槍先形尖頭器・III類には先端部分の片側に槌状刺離を施す以外にも、同・刺離面を打面に再び槌状刺離を施す例や側縁に槌状刺離を施す例（第18・19図を参照）が見られ、単なる製作上の癖とはいえない刺離意図を示唆している。男女倉タイプの尖頭器の場合、槌状刺離は石器製作の最終段階に施す例が通例だが、本遺跡の槍先形尖頭器・III類の場合には大部分が完成状態には遠い、未だ石器製作途上に槌状刺離を

註1 第61図に示した古い様相を呈す土器の分布域は、槍先形尖頭器の分布域に重なる。この地点には他の時期の縄文土器や土師器も混在出土している。分布から断じるのは困難だが、上記・2点の土器出土は他の縄文土器とは胎土が大きく異なり、槍先形尖頭器に伴う可能性も全く否定できない。

註2 石器群は第II層より出土している。石群分布も1ヶ所に集中しており、大部分が槍先形尖頭器の製作に伴い生じる剥片類であり、概ね、同時存在した可能性が高い、と思えた。

施しており、この点を重視するなら男女倉タイプの尖頭器ともまた房谷戸の例とも異なるのであり、同等に評価するわけにはいかない。

また、石核と見た資料の中には、槍先形尖頭器の製作とは直接関連の想定できない資料（接合資料—53、第42図）も見られ、注意しておきたい。側縁部分に剥離が集中する接合資料—53は既出の槍先形尖頭器を伴う石器群の中には見られない例であり、剥離は二次加工と考えるより、寧ろ小形剥片の剥離を意識しているようにも見える。現状では、出土資料には積極的に細石刃と言える資料は見られないわけだが（第36・37図を参照）、側縁の剥離状態から見れば細石核と把えるべき資料と考えている。以上は、接合資料・一例を通じ技術的側面からみた見解で、現状では類例に乏しいため多分に判断できないわけだが、当該資料を瞥見した限り、大形の槍先形尖頭器を主たる組成器種に持つ石器群には上記接合資料に類する例は見られないのであり、寧ろ類例は細石刃接合群の中に求めるべき<sup>註3</sup>、と想定している。

通例に従えば、大別二群に分類が可能な槍先形尖頭器は縄文時代・草創期の石器群に位置づく可能性が高い。また、先の接合資料—53を細石核と把える見解が妥当なら、石器群に指標的な槍先形尖頭器の一群とは切り離して理解すべきである。実際、出土資料の器種組成は多様性に富み、接合作業や母岩分類の結果も石器群の同時性を直接証明しているわけではない。が、一方では両者は技術的な面で多分に共通性を有していることから、石器群の同時性を全く否定できない要素を残しているようにも思える。即ち、I類～III類の槍先形尖頭器は同一の技術基盤に作出され、共に遺跡製作の石器と見られ、また、出土状態にも差は見られないのであり、石器群の同時性を支持しているようにも思えるためでもある。更に言えば、槍先形尖頭器・III類に特徴的な槌状剥離は尖らずべき石器の先端や側縁を自ら放棄しているようでもあり、槍先形尖頭器の製作に失敗し再生を試みているようには思われないのである。器種の転用<sup>註4</sup>（彫器や石核など）を試みている可能性も否定できないため断定は避けるべきだが、槍先形尖頭器・III類と接合資料—53には技術的な接点<sup>註5</sup>が見い出せる余地を残しているようにも思われ、両者の同時存在した可能性も否定できない。

現在、槍先形尖頭器と細石刃の伴出関係の是非に関する見解は大きく異なり一致を見ないわけだが、テフラを挟み槍先形尖頭器が出土した長野県下茂内遺跡の例は両者の関係を考える上で良好な資料と言え、より明確な時間的尺度を与えている。下茂内のテフラは大窪沢バミスと認定され、同バミスは浅間白糸バミスと浅間黄色バミスの中間に位置するテラスと聞いている。群馬県内の層位的な出土例に従えば、浅間白糸バミスの降下以後は細石刃石器群の段階に位置づけられ、少なくとも両者は時間的に並行関係に位置づく可能性を有している。これまで述べた通り第III文化層は極めて華の強い石器群であり、評価は難しい。が、下茂内の例が示す尖頭器と細石刃の並行性は両者の関係に明確な指標を与えるものでもあり、この点も考慮に入れた上で本遺跡の石器群は評価・位置づけねばならない、と考えている。（岩崎）

註3 類ど加工を加えず石核を作り出す接合資料—53と同様な例は全く指摘できないわけではない。より近々の地域に類例を求めるなら、同じ京浜地区の上西原遺跡の例（松村 1986）が最も近い形態的特徴を有している。上西原の例は、大形剥片を二分して石核を得る点で一致する反面、打面調整や側縁調整の在り方は大きく異なり、また、単独で出土しており、明確には位置づけられない。

註4 Ⅲ類に特徴的である槌状剥離は彫器とも採れる剥離手法だが、同・機能部の作出とは思われないほど剥離回数が多い。ここでは石核と考えておきたい。

註5 Ⅲ類に見る槌状剥離は極めて限定的であり、小形剥片の剥離を目的に石核を計画的に消費するものではない。このことから考えて、ここでは尖頭器と細石刃の同時性を示唆する痕跡的証拠と把え得る可能性を指摘しておきたい。類例に極めて乏しいことから、大枠では細石刃石器群に於ける技術的適用の一種とも思える。

## 2. 縄文土器について

北三木堂遺跡から出土している縄文土器の主体をなしているのは、竪穴住居や土壇等の遺構を伴う前期の諸磯Ⅱ式であるが、他に3区の第Ⅲ～Ⅳ層の包含層より出土した草創期後半の燃糸文土器や早期の押型文土器についても特筆すべきものがある。

本稿では、これらの土器について若干の型式論的な分析を加え、抽出される問題点について述べてみたい。

### (1) 草創期後半と早期の土器

3区では今井沼に望む台地先端部を中心として、第Ⅲ～Ⅳ層のソフトローム中より389点に及び燃糸文土器と11点の押型文土器が出土している。この内の燃糸文土器は、①口唇下に1～2cmの無文部をおいてその下位に筋や条間隔の粗い燃糸文Rをまばらに施文する ②丸頭状に肥厚する口唇部や口縁部の内外面は横位研磨の器面調整が施される等の共通点を有している。こうした特徴は、草創期後半の稲荷台式に合致するものであり、かつ①のような燃糸文のあり方を重視すれば、これらは新段階に位置付けられるものであろう。これらの燃糸文土器は、肉眼的な観察による胎土の特徴から見るとA・B・C型の3つに分類することができ<sup>註1</sup>、使用する胎土あるいは混入される混和材に差異が存在すると思われる。この内のA型は、胎土に県南西部の神流川や菊川水系の河床に存在する結晶片岩の砂礫を混入する点で特徴的である。この結晶片岩を混入する技法は、県内では早期の野島式から茅山上層式にかけてほぼ普遍的に認められるものであり、それが稲荷台式段階にまで系統的に溯ると考えることもできるが、その間の沈線文系土器群の段階で全く存在しないことを考慮すれば、系統的な連続性は考えられない。また、この結晶片岩を鉱物的な組成で見ると、雲母の他に石英や長石・緑泥石等を含むが、肉眼的にはこの雲母の含有が目につく。胎土に雲母を混入するのは、草創期前半に属すると推定される無文土器(第61図1・2)をはじめ、押型文土器(第115図106)にも認められるものであり、前段階や平行段階の土器群との相関性についても検討を要するものであろう。

註1 209頁の凡例を参照。

一方、押型文土器については、いずれも小破片であることや口縁部の資料が欠落するために全体的な文様構成は不明であるが、第115図107・108・110等の胴部の破片資料では山形文が縦位に帯状施文されているのが確認できる。この施文原体は、直径6mm、長さ20～22mmの軸棒に一周2単位に3～4条を横刻みしたもので、やや大ぶりの山形文である。胎土には燃糸文土器と類似したA・C型の2つがあるが、結晶片岩を含むA型は1点のみと少ない。

こうした特徴を有する押型文土器は、県内の普門寺遺跡をタイプ・サイトとした「普門寺式」に見いだすことができ、これと併行段階に位置付けられることは間違いない。しかし、これらの押型文土器が「普門寺式」として型式設定できるような地域的な様相を示しているのかと言えば、そうではなく、むしろ中部地方の押型文土器との関係において種別Ⅱ式として把握されるものであることは、既に明らかにされている通り

註2 中島 宏「関東地方における押型文土器の様相」『縄文早期を考える—押型文文化の諸問題—』帝塚山考古学研究所 1988

註3 註2の中島論文、宮崎朝雄・金子直行「燃糸文土器群と押型文土器群の関係（素部）」『縄文時代』1 縄文時代文化研究会 1990

註4 本稿では山内清男の大別区分に従って燃糸文土器と押型文土器とを区分した。両者の併行関係がほぼ確定的な現時点で見れば、この大別区分に準拠することは時代誤差のなからしめない。しかし、山内の編年体系は全国的な土器型式の動向を配列して編まれたものであり、今なお関東地方以外の地域での平行段階の土器型式が明確化されていない状況の中で、この大別区分を手直しするには少なからず問題があるように思われる。まずは、空白となっている土器型式を確定し、その後に見全国的な次元からの大別区分の見直しを図るべきであろう。

註5 奥野史生の編分案に準拠すれば、黒浜式に該当しよう。奥野史生「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』第13号 1989

註6 羽生淳子「福岡丸北遺跡出土の縄文時代前期土器について」『福岡丸北遺跡』ニューサイエンス社 1983、川名広文「縄文前期後期の土器について」『筑前遺跡の調査』埼玉県上福岡市教育委員会 1987、谷口康浩「諸縄文土器様式」『縄文土器大観』小学館 1989

であろう。ただ、県内における押型文土器の存在は決して客体的なものではなく、かなり濃密な分布が認められるようであり、中部地方との密接な関係が想定される。

近年の研究では、稲荷台式の燃糸文土器に帯状施文の押型文土器が時間的に平行することが指摘され、山内清男の大別区分に対して見直しを迫るものとなっている。当遺跡でも、燃糸文土器と押型文土器が同一の地点および層位より出土しており、三戸式などの沈線文土器や前期の黒浜式・諸磯式なども混在していて確定はできないものの、両者が時間的に共存した可能も否定できない。この両者の共存関係が確定であるとすれば、当遺跡では稲荷台式新段階と櫛Ⅱ式との併行関係が認定されることになる。

また、燃糸文土器と押型文土器とは胎土中の混和材でも類似した内容を有しており、これも両者の併行関係を指示するとも考えられるが、これについてはX線回折試験の分析結果とも関連するので、後段にて再述したい

## (2) 前期の土器

当遺跡では前期の5軒の竪穴住居が存在するが、そのうちの2区49・52号住居と3区4号住居、それに4区2号住居の4軒からは、比較的良好な黒浜式や諸磯a式に比定される資料が検出されている。

黒浜式土器については、①縄文の全面施文が菱形構成をとるもの(2区54住1)②①と同様の菱形構成の縄文施文をもち、口縁部と胴肩部に平行沈線文や爪形文を施すもの(2区49住1・24、2区54住10、4区2住12)③菱形構成される縄文の条や施文変換部に沿って、斜位→縦位→横位の順で爪形文や刺突文を施すもの(2区54住11・4区2住14)、④斜縄文が全面施文されるもの(2区54住2)⑤細い半軟竹管による平行沈線文や刺突文により肋骨文を構成するもの(2区49住41、4区2住15)等の類型が認められる。これらの土器は、いずれも黒浜式の中でも新段階に比定されるものである<sup>註5</sup>。

また、諸磯a式では主なものとして①葉脈状肋骨文(2区49住5)②肋骨文(2区49住2、2区54住16、3区4住4・5・26)③対角線文(2区49住28・29、3区4住6、4区2住7)④三角形文(2区49住4)⑤波状文(4区2住8)などにより文様構成されるものの他に、⑥縄文地に縦位の円形竹管文が4単位に構成されるもの(2区49住25、3区4住1・2、4区2住1)⑦斜縄文を全面施文し、口縁部の2条の爪形文間を磨消するもの(2区49住27、3区4住7)⑧斜縄文のみが全面施文されるもの(2区49住7～19、2区54住3～5、3区4住11・12・23・24、4区2住2～5)などの類型が認められる。

諸磯a式については現在議論が進行中であり、その型式的な内容についても確定されていない状況にあるが、おおよそ2～3段階の変遷が想定されるようである。こうした分析を参考とすれば、上記の諸磯a式土器は古段階から中段階に比定されるものであろう。②の中で3区4住4・5のように縄文地の上に施文するものや、③の3区4住6のように縦位区画線を消失したり、4区2住7のように口縁部の横位区画線が消失して雑然となった対角線文、それに⑤の波状文などはより新しい様相をもつも

のと考えられる。

古段階に分類される類型について見てみると、③の対角線文の系譜については黒浜式の②にたどれるとされており、当遺跡では住居内からの出土ではないものの第116図124が諸磯a式の古段階に比定される典型的な類型と考えられる。この沈線文の施文は横位→縦位→斜位の順で行われ、4区2住14のような黒浜式の施文順序とは異なっているが、これはすでに指摘されているように黒浜式段階で羽状(菱形)に構成される縄文施文に規定されていたものが、羽状縄文の消失によってその施文順序にも変化をもたらしたものであろう。

①の2区49住5は、柏市鴻ノ巣遺跡6住や蓮田市天神前遺跡18住例での比較的古段階の黒浜式にみられる葉脈状助骨文と類似した文様を有している。5は棒状工具の単沈線で2単位の文様構成となる点で異なり、かつ片屋根状の口縁形態や胎土が2~4のような土器と共通することから、諸磯a式の古段階に比定することに問題はないと思われる。このことは、前記のような葉脈状助骨文が黒浜式に限定されることなく、諸磯a式にまでその命脈を保つものとして注目される。

前述の類型には入っていないが、4区2住9は第74図1のような黒浜式の深鉢形土器の胴上半部を切り取った感じのやや内湾の強い浅鉢形土器で、織維を含まず、櫛歯状工具により菱形状の文様を構成する。埋没土中からの出土であり他の類型との共存関係の有無は判断としないが、やはり諸磯a式の古段階に比定されると思われ、文様構成は「大形菱形状系土器」<sup>註11</sup>との系譜的關係を窺わせる。また⑦の2区49住27は波状口縁下に爪形文によるV字状のモチーフを施しており、これも同様の系譜的關係においてとらえられるものであろう。

⑧の全面縄文施文の土器は、胴中位にかなり大きな膨らみをもち、頸部にて一旦括れて外反ぎみに開口する菱形の器形を呈している。この土器には平口縁と波状口縁の両者が存在するが、屈曲の強い器形と撚りの緩いややための原体を使用する点は特徴的である。これらの土器の縄文は、僅かにLRを含むものの圧倒的にRLがその主体を占め、横位施文を基本としている。また、10例と僅かではあるが、1段撚りの結節縄文を横位施文しているものも認められる。この結節縄文については、他の報告書例で自縄の末端結縛としているものが間々認められるが、この場合2段撚りにする前段階でオープン・エンド側を結縛したと理解するのが妥当と思われ、当然のことながらこの結節の撚りはその原体の1段時の撚り方向に規制されるはずである。しかし、当遺跡例で観察した限りでは、4例に斜縄文の原体の1段撚りとは異なるものが使用されている。また、結節縄文の施文は、斜縄文の条や節を切るように行われており、結節縄文に接する部位の斜縄文の施文がかすめるような状態は認められない。こうしたことは、自縄の結縛による結節では生じ得ないものであり、斜縄文を施文した後に各施文変換部に他縄による結節を横位施文したことを示すものであろう。このことは結節縄文の施文が意識的であることを示すものであり、同時にそれが斜縄文の施文帯を横位に区画する効果をもっている点も見逃せない。黒浜式では羽状縄文の施文によって横帯の効果をもたせているが、諸磯a式では羽状縄文から斜縄文への置換によって

註7 諸磯a式については、特に古段階の認識に多くの問題点が存在している。それは、黒浜式終末と諸磯a式を区別する形式的な指標が不明確なことや、諸磯a式を構成する各類型の系譜について、黒浜式からの系統的な連続性が明確化されていない等の点である。また、胎土の有無と無織維とが両者を区別する指標とならないことが明確にされる中で、かつて江坂輝弥が設定した「水子式」の再認識とも絡んで混乱・複雑化の様相を呈している。本稿でこれらの問題点について解決の糸口を示すことは可能でないが、「山内清男氏の諸磯a式は、パンシオン台貝塚の資料を例にされ、「第一次文様帯」の広域的な文化編年と、羽状縄紋の消滅を考慮しつつ設定されたものと考えられることができるのである。」(鈴木雄雄「1989」という学史的論理に立つならば、少なくとも羽状縄文の有無は黒浜式と諸磯a式とを区分する指標となるはずである。また「水子式」についても、鈴木の主張するように確固とした型式内容を具備していると思えるにはできないであろう。

鈴木雄雄「諸磯a式土器研究史」【1】型式論的研究の基本的問題を探る上「土壘考古」第13号(1989)

註8 田中和之「縄文時代前期中葉の土器群の問題点」【埼玉考古】第27号(1990)

註9 「柏市鴻ノ巣遺跡」房総考古資料刊行会(1974)

註10 「天神前遺跡」蓮田市教育委員会(1985)、「天神前遺跡-第3地点-」蓮田市教育委員会(1988)

註11 金子直行「縄文前期中葉における大形菱形状系土器群の成立と展開」【埼玉考古】第25号埼玉考古学会(1989)

註12 2区49住7、4区2住1・8・35の斜縄文はRLとなるが、結節はRである。

註13 2段撚りのオープン・エンドを1段撚りの他端で結縛した結節縄文でも同じことが言えるが、この場合には結節縄の頸部のみ認められる。

横帯の表現効果が希薄になる中で、こうした結節縄文の追加施文によって前段階の意識を止めようとしたものではないだろうか。

このような全面縄文施文土器が、諸磯a式の中で一類型を構成するものであることは明白であるが、この系譜については釈迦堂Z3式（黒浜式併行）と関係するとみる向きもある<sup>註14</sup>。この釈迦堂Z3式の系譜や型式内容についてはもう1つ不明確であるものの、黒浜式の共伴や縄文施文が菱形や羽状構成をとるものが顕著に認められる点では、当遺跡例に前出する段階のものであることは明らかであろう。ただ、釈迦堂Z3式には第74図7のような単純な横位施文の斜縄文も含まれており、これが同一型式内でのバラエティなのかそれとも時期的に異なるものとして型式細分し得るものなのかの検討を必要としている。また、その系譜については、縄文施文の在り方が見立瀬井遺跡196号土壇出土例のように器面全面に縄文によって菱形構成をとる「大形菱形文系土器」とも類似することや、さらに器形的な面でも両者が極めて近似していることから、この「大形菱形文系土器」との関係の中で把握できるものと想定される。

3区4号住居でも11～14のような全面縄文施文の土器が存在するが、2区49号住居の例に比べて器形の屈曲が弱く、縄文も繊細なものが多く、他の有文土器が2区49号住居に比べて新しい様相をもつことから、第74図7の縄文土器の新段階の変化様相としてとらえられるものであろう。

ところで、この全面縄文施文土器には波頂部の片側を垂直にそぎ落としたような小突起を1か所にのみ構成するものが、2区49号住居5、3区4号住居13、2区包含層34などにみられ、3区4号住居10もこれに類する可能性がある。このような口縁形態をもつものは、管見に触れた範囲では県内の粕川村月田遺跡<sup>註16</sup>と埼玉県蓮田市江ヶ崎貝塚1号住居<sup>註17</sup>に類似のみであり、いずれも諸磯a式に限定されている。この系譜が何に求められるのか明らかではないが、先の分析が正しいとすれば、これも「大形菱形文系土器」との関係においてとらえられる可能性が高い。また同時に、関東地方北部地域における諸磯a式の深鉢土器の一形態をなすものとも考えられ、地域的な様相を示すものとして注目しておきたい。

上記の住居内から出土した黒浜式や諸磯a式土器は、そのほとんどが埋没土中からの出土であり一括性に乏しいために共伴関係については不明確であるが、おおよその傾向とすれば2区54号住居は黒浜式、2区49号住居は諸磯a式古段階、3区4号住居と4区2号住居は諸磯a式中段階の土器を主体にしており、各住居の時期をある程度指示しているものと思われる。

### (3) 胎土分析と土器型式との関係について

当遺跡から出土した縄文土器の産地同定を主な目的として、時期的に関連する八木沢清水遺跡（北群馬郡小野子村）、中野谷遺跡（安中市）、石畑岩除遺跡（吾妻郡長野原町）、下触牛伏遺跡（佐波郡赤堀町）、飯土井中央遺跡（前橋市）の5遺跡から出土した縄文土器を加えて、井上 巖氏にX線回折試験と電子顕微鏡観察による胎土分析をお願いした。草創期や早期の土器の分析が主体となったため、前期についてはやや手薄となってしまったが、提示された分析結果と土器型式との関係について、若干の

註14 大塚孝司『榛山遺跡—第5次調査—』蓮田市教育委員会 1988

註15 『見立瀬井遺跡・見立大久保遺跡』赤松村教育委員会 1985

註16 『粕川村の遺跡—遺跡群総合調査報告書—』群馬県勢多郡粕川村教育委員会 1985

註17 『江ヶ崎貝塚・柳坂場遺跡・荒川附遺跡』蓮田市教育委員会 1983



意見を述べてみたい。

まず、胎土組成のタイプ分類と土器型式との関係である。草創期前半の無文土器の1はFタイプであるが、このタイプには5・8の稲荷台式や14の諸磯a式も見られる。草創期後半の稲荷台式は、先のFタイプ(第163図5・8)の他にDタイプ(4・6)、Eタイプ(7・9)の3タイプが存在するが、Dタイプは10の浮島Ⅲ式に、Eタイプは稲荷台式と並行関係にあるとされる2・3の押型文土器にも認められ、稲荷台式の固有の組成とはならない。早期の押型文土器はEタイプのみ限定されている。前期の諸磯式は先のF(5・8)の他にAタイプ(13)とLタイプ(11・12)の3タイプが存在し、このA・Lタイプは諸磯式にのみ認められる組成である。Dタイプとなる10の浮島Ⅲ式は関東地方東部地域を主体とする土器で、当遺跡では客体的な存在であるが、並行関係にある緒磯c式土器の分析がなされていないために、同式をはじめ11~14などのA・F・Lタイプとなる緒磯a・b式との関係は明らかではない。しかし、4・10の稲荷台式とも共通する点は、10の浮島Ⅲ式が非在産地とは言えない一要素とも考えられる。

こうしてみると、Eタイプは稲荷台式の燃糸文土器と種沢Ⅱ式の押型文土器に共通する点で両者の並行関係を示唆するとも言えるが、D・Fタイプは特定の型式に固有のものではなく草創期から前期にかけての複数型式にまたがるものであり、かなり大きな時間的な幅を有する組成であることが理解される。井上氏は各タイプの量的多寡により、E・Fタイプを在産地および在地近傍で生産されたものと推定しているが、時期の異なる複数型式にまたがるDタイプも、E・Fタイプと同様の扱いが可能なのではないだろうか。また、これ以外のA・Lタイプも他の5遺跡の資料中に存在しない点で、考慮を要するように思われる。

ところでこの5遺跡での分析結果をみると、1の無文土器とともに草創期前半に属する21・22(表裏縄文)、23・24(爪形文)、25(押圧縄文)の土器は、個々に異なった組成となるが、このような傾向は早期の2・3などの縦位帯状施文を有する押型文土器と同様の特徴をもつ17~29にも認められる。各遺跡とも資料点数が少なく、かつ各々の在産地を特定できない中では、こうした在り方が何を意味するのか不明であるが、先の押型文土器が同一の型式の特徴をもちながらも異なった胎土組成となることを重視すれば、各遺跡単位での異なった粘土の使用を指示する可能性が高い。ただ、5・9の稲荷台式などと同じ特徴をもつ八木沢清水遺跡の15はFグループに分類されており、当遺跡との関係において考慮すべきなのか、あるいは類似した素地土が広域に存在するのかの検討を要する。

次に、混和材混合比によるグループ分類と土器型式との関係である。当遺跡例のみをみれば、草創期前半の1はI~VIIグループの分類から大きく外れるが、稲荷台式はI(8)・II(9)・III(6)・IV(5・7)・VI(4)グループ、押型文土器はIV(3)・V(2)グループ、諸磯a・b式はII(11・12)・IV(13・14)グループ、浮島式はVIグループ(10)に分類される。稲荷台式や押型文土器の場合、相互の個体間ではほとんど型式的差異を見いだすことはできないにもかかわらず複数のグループに分かれる

が、諸磯式の場合はa・b式の差がありながらも同じIIグループに属する11・12のような例もある。また、稲荷台式と諸磯a・b式はII・IVグループを含む点で共通するが、同様に稲荷台式と押型文土器とはIVグループを、稲荷台式と浮島III式はVIグループを含む点で共通している。こうしたことは、1つの型式が複数のグループにより構成されることを示すばかりでなく、先の胎土組成のタイプ分類での理解と同様に、II・IV・Vグループにみられる混和材の混入技法が長期的な時間幅を有して存在していることを示すものではないだろうか。言い換えるならば、II・IV・Vグループは在地的なグループと推定することができると思われるが、井上氏はタイプ分類における認定と同様の方法でIVグループのみを在地産もしくは在地近傍産のものとしている。

ところで、このグループ分類では県内の分郷八崎遺跡と中標遺跡、埼玉県の明花向遺跡と宮林遺跡のデータを加えての分析も行われている。前2遺跡は前期の諸磯式を、後2遺跡は草創期前半の爪形文や多縄文系土器を主体とするもので、当遺跡との比較がなされているが、各遺跡あるいは各型式単位で一定のグループにまとまるような傾向を読み取ることはできない。ただ、I・IIIグループは特定の時期に限定されることはないものの、ともに県内の遺跡のみで占められており、何らかの有機的な関係を示唆しているのかもしれない。

ここで、井上氏によって北三木堂遺跡の在地および在地近傍で生産されたと認定された土器を整理してみると、胎土組成のタイプ分類ではE・Fタイプの1～3・5・7～9・14・15が、混和材の混合比によるグループ分類ではIVグループの3・5・7・13・14がそれぞれ該当する。これらのうちで、胎土組成と混和材混合比の両方を満たしているのは3・5・7・14であり、それらのいずれも北三木堂遺跡出土の資料に限定されることを考慮すれば、より在地産の可能性が高いものと言えよう。またそれを土器型式別によれば、草創期後半の稲荷台式(5・7)や早期の榎沢II式に比定できる押型文土器(3)、更に前期の諸磯a式(14)にまで及んでおり、類似した粘土使用や混和材混入技法が型式を越えて時間的にかなり継続して存在したとみることできる。このことは、(1)の項で留保した撚糸文土器と押型文土器の胎土の類似性が、即ち両者の併行関係を指示することの一つの根拠にはならないことを教えるものでもあろう。

しかし、その一方でこれらの土器を在地産と認定するには、次の2つの問題点があるように思われる。①在地産とされる全ての土器の胎土には、当遺跡の周辺では産出しない結晶片岩の砂礫が混和材として混入されている。②結晶片岩を含む土器は、当遺跡から出土している縄文土器の総体から見ればそれらはむしろ客体的、主体をなすのは結晶片岩を含まないD・Lタイプである。①については、X線回折試験でサンプル化する際に、原土としての粘土と混和材としての結晶片岩とを分離せずに粉砕してしまうところから派生する問題である。つまり、この結晶片岩には石英・長石・緑泥石等の他に雲母が多量に含まれており、これを合せて粉砕したならば少なからず胎土組成や混和材の定量的なカウントに影響を与えることは免れない。例えば、胎土組成のタイプ分類で在地とされる8点のE・Fタイプはいずれも雲母や緑泥石を含むが、

註18 土器観察表内の胎土の観察項目では、記述を簡便にするためにA～Hまでの8つの「型」に分類したが、これを井上の石英と長石の混合比によるタイプ分類の分析結果と照合させると、おおよそA・E型としたものがE・Fタイプに、C・G型としたものがD・Lタイプに相

1・2・9を除いた他の土器には全て結晶片岩が含まれている。また、石英と斜長石との比率による混和材のグループ分類で、在地産とされたIVグループは斜長石の比率が高くなる傾向を有しているが、このIVグループの土器のいずれの胎土にも結晶片岩が含まれているのである。こうしたことは、結晶片岩による影響を端的に示すものと考えられるが、このほかにも結晶片岩を含むものが石英と斜長石の混合比率によりIグループ(8)とIVグループ(3・5・7・13・14)に分かれる現象も、結晶片岩中に含まれる両鉱物の割合や混和材として混入する時点での量的な多寡が反映している可能性がある。

もちろん、こうした結晶片岩を含むことが即ち非在地産の証明となる訳ではないが、土器胎土を構成する粘土と混和材とを分離してのX線回折試験ができたならば、また異なった結果となることも想定される。例えば、E・Fタイプに分類されたものから結晶片岩を除去したならば、雲母や緑泥石を含まないDタイプとは同一の胎土組成となる可能性もあり、この場合には先述したような一型式が複数タイプの胎土により構成される現象も、混入する混和材の種類が在地産と非在地産とに分かれて、素地土としての粘土はとも在地産ということも充分に有り得るのではなかろうか。

②に関しては、分析対象として選定された資料が全体の量的な比率を反映していない可能性が高いにもかかわらず、タイプおよびグループ分類での個体数として最も多いものを在地とすることの問題である。今回の分析では、遺跡周辺での原土サンプルのX線回折試験がなされていないために比較する材料がないことから、暫定的な結論としては至当なものであるのかもしれないが、全土器資料を分析対象とすることが現実的に不可能である以上、統計的な分析に耐え得る最低限のサンプル数がどれくらいなのかの検討も必要かと思われる。

結論的に言えば、井上氏が在地産あるいは近傍産とみたE・FタイプやIVグループは、必ずしもそうとは言えない問題を含んでいるのであり、形式的な分析との照合も妥当な結論を得るには至っていない。

上記のような問題点は、基本的には依頼者としての考古学サイドでX線回折試験に対する初歩的な認識の欠如と、分析者との事前の意志疎通が不十分であったことに起因するものであろう。しかしその一方で、これまで行われてきた胎土組成の三角・菱形ダイヤグラム上での位置分類と石英・斜長石の混合比分類によって、果して産地同定が可能であるのかという疑問も残っている。今後へ向けて検討すべき課題は多々あるように思われるが、土器の産地同定を可能にする分析方法の再検討も重要な課題の一つではないだろうか。

尚、縄文時代の石器については触れる余裕がなかったが、燃赤土器に伴出するスタンピング形石器および三角錐形石器等の特徴的な石器や、削器等の割片石器を主体とする石器組成の在り方については、既に分析結果を発表してある。この論考の段階では幾つかの未解明の問題点を残したままとなっているが、現時点でも新たに付け加えるほどの新知見もないことから、当論考をもって石器に関してのまとめにかえておきたい。

(石 坂)

当する。ちなみに、桶筒式では389点の中にA・E型が740点、C・G型が249点であり、押型文では11点中にA・E型が1点、C・G型が10点である。また遺跡AではA・E型が51点存在するのみで、他の263点がC・G型である。

註19 石坂 茂・岩崎善一「燃赤土器文化における石器群の一種相—スタンピング形石器と三角錐形石器を中心として—」『研究紀要』5 朝鮮馬場埋蔵文化財調査事業団 1988



# 土器の観察一覧表

## 石器の計測値一覧表

### 凡 例

- 土器の観察基準および記載方法は以下のとおりである。
  - 土器の大きさにかかわる略語は、高=器体の高さ、□=口縁の直径、高=高部の直径をそれぞれ表すが、( )内の数値は推定値を示す。また各数値の単位はcmである。
  - 縄文土器の胎土については、時期によって使用する粘土や夾雑物のあり方により一性が認められることから、A~Hの8タイプに分類して記載した。各タイプの内容は以下のとおりである。胎土中の砂粒の大きさは、 $> 2\text{mm}$ =粗、 $2\sim 0.2\text{mm}$ =粗砂、 $0.2\sim 0.02\text{mm}$ =細砂とした。
    - A: 結晶片岩の礫や、乳白色の石英の礫・粗砂を多量に含む。
    - B: 長石や透明度の高い石英の礫・粗砂を多量に含む。
    - C: かなり多量の輝石や凝灰岩質の礫・粗砂と、少量の透明度の高い石英や赤色スコリアを含む。
    - D: Cタイプに類似するが輝石は微量であり、黒灰色の石英礫・粗砂を少量含む。
    - E: Aタイプと同様に結晶片岩を含むが、より粗粒の粗砂状であり、石英・長石・輝石も少量含む。
    - F: 輝石・石英・長石を微量に含む緻密な胎土。
    - G: Cタイプに類似するが、夾雑物の粒径が細かいより緻密な胎土。
    - H: Dタイプに類似するが、微量の結晶片岩の粗・細砂を含む。
  - 土器の色調については、農林省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色研研究所色標監修の「新版標準土色帖」に基づいている。
  - 出土状態については、住居の床面に密着して出土したものは「床面直上」、床面から若干浮いていたものは床面からの高さ、埋没土中より出土したものは「埋没土中」とそれぞれ記載した。また遺構以外の包含層より出土したものは、主にグリッド名を記載してその出土位置を示した。
- 出土石器に関する記載は、下記の要領に基づき記載した。
  - 長さ・幅は、小数点第2位を四捨五入し、cm単位で表示した。
  - 遺物重量の計測には電磁式ばかり(EY-2200A)を使用し、小数点第3位を四捨五入しmm単位で表示した。
  - 「副標」の欄の略号は次の事を示す。  
ナイフ: ナイフ形石器 槌: 槌形石器 加刺: 加工痕ある刺片 使刺: 使用痕ある刺片 打棒: 打製石斧  
磨斧: 磨製石斧 調刺: 調製刺片 三角錐: 三角錐形石器 スタンプ: スタンプ形石器
  - 「石材」の欄の略号は次の事を示す。  
黒頁: 黒色頁岩 珉頁: 珉質頁岩 黒安: 黒色安山岩 滑礫: 滑結凝灰岩 石閃: 石英閃緑岩  
点頁: 点紋頁岩 緑片: 緑色片岩 実玄: 実質玄武岩 細安: 細粒安山岩 灰安: 灰色安山岩  
ダ礫: デイサイト凝灰岩 チ: チャート ホ: ホルンフェルス

## 土器の観察一覧表

2区49号住居出土土器 (第74~77図、P.L. 35~38)

(単位: cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1	口 15.0 底 8.0	+22 埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④口縁部~底部凡	1~4は細い半截竹管の内側を使用して、口縁部や胴部に平行沈線文や連続爪形文を施文するもの。1は口縁部と胴部に爪形文を、2は肋骨文とその交点に円形竹管の刺突文を、3は胴部に2列の爪形文を、4は口縁部に爪形文を縦条状に施す。施文は1が附加条第1種RL+1とLR+rの別状構成、2・4はRL、3はLRの横位施文。1は4単位の波状口縁で微量の縦線を含む。1・3は内外面に残存。	高(18.7)。 黒灰式。 清透H式。 清透H式。
2		埋没土中	①C胎土良好③鈍い黄褐色④破片		清透H式。
3	底 8.0	埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④完形		清透H式。
4	口(24.4)	埋没土中 2区35住埋土中	①G胎土良好③暗色④胴部~底部完存	口縁部~底部に整形工具による縦位の沈線文や羽状の沈線文を2単位に施す。口唇部に小突起を1個配する。内面に煤状炭化物が少量付着する。	清透H式。
5	口 5.7 底 3.9 高 6.5	+2 4区2埋没土中	①G胎土良好③暗色④口縁部破片	口縁部~底部に整形工具による縦位の沈線文や羽状の沈線文を2単位に施す。口唇部に小突起を1個配する。内面に煤状炭化物が少量付着する。	清透H式。
6	口(24.0)	埋没土中	①C胎土良好③鈍い赤褐色④破片		清透H式。
7	口 21.8	埋没土器	①C胎土良好③明赤褐色④口縁部~胴部1位完存	6~9は平口縁。10~12は4単位の波状口縁であるが共に施文以外の文様をもたない。施文自体は8のLRを除いて全てRLであり、横位施文を基本とするが、10は斜位方向の施文となっている。また、7は部分的に話部LRを横位に施文している。7は内外両面に、8・10は外面に煤状炭化物が付着し、8の内外両面は被熱による死れが認められる。12は胴部部の両側に内面まで貫通しないで中断された一対の補修孔がある。	清透H式。 清透H式。
8	口(19.5) 底(6.6)	+19 埋没土中	①D胎土良好③暗色④口縁部~底部凡		高(28.0)。 清透H式。
9	口(29.2)	埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④口縁破片		清透H式。
10	口(20.3) 底(10.0)	床面直上 +17	①G胎土良好③明赤褐色④口縁部~底部凡		高28.7。 清透H式。
11	口(29.0)	+12・14	①F胎土良好③黄色④口縁部破片		清透H式。
12	口(28.4) 底(9.0)	+5~19	①C胎土良好③明赤褐色④口縁部~底部凡		高(29.0)。 清透H式。
13		埋没土器	①D胎土良好③暗色④胴部完存		清透H式。
14	底(9.0)	埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④胴部凡	13~23は文様構成の不明な胴部および底部の破片である。施文自体は14・22がLRの他は全てRLで、横位施文を基本としているが、17は縦位に、18~20は全体的に斜位方向の施文となる。やや太めの肋帯が大部分を占める中で、14・15・22などは細いものを使用している。13・14・16・17・19は外面に、18は内外両面に煤状炭化物が付着している。	清透H式。 清透H式。
15		埋没土中	①C胎土良好③鈍い暗色④破片		清透H式。
16		埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④胴部凡		清透H式。
17	+13		①C胎土良好③鈍い暗色④破片		高29.9埋没土中。 2区29埋没土中。
18	+17		①C胎土良好③明赤褐色④破片		清透H式。
19	+14		①C胎土良好③暗色④破片		清透H式。
20		床面直上	①C胎土良好③鈍い黄褐色④破片		清透H式。
21			①D胎土良好③暗色④破片		清透式。
22	底(9.0)	埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④破片		清透式。
23	底 13.0	埋没土中	①C胎土良好③暗色④底部完存		清透式。
24	口(26.0)	+5 2区27・30住 埋没土中	①C胎土良好③暗褐色④破片	口縁部と胴縁部に半截竹管による集合沈線文を施す。施文は附加条第1種のLR+rとRL+1による菱形構成をもつ。4単位の波状口縁で、胎土に縦線を含む。	黒灰式。
25		埋没土中	①E胎土良好③明赤褐色④破片	25・26は縦位の円形竹管文を有する。25は波状口縁で、口唇に棒状工具の刻目文を施す。施文は共にRL。	清透H式。
26		埋没土中	①E胎土良好③暗色④破片		清透H式。
27		埋没土中	①H胎土良好③鈍い黄褐色④破片	口縁部に半截竹管内側の爪形文を2条並らせ、波頂下に菱形の意匠を描く。波状口縁。LR施文を横位施文。	清透H式。
28		埋没土中	①C胎土良好③鈍い赤褐色④破片		清透H式。
29		埋没土中	①C胎土良好③暗色④破片	29は米字状の意匠文を構成し、文様交点に円形竹管文を施す。28は波状口縁で、29と同様の意匠をもつと思われる。共にRL施文を横位施文する。	清透H式。
30		埋没土中	①D胎土良好③暗色④破片		清透式。
31		埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④破片	30~32は波状口縁を有し、共にRL施文を横位施文する。31は波頂部に指頭状工具による坪圧を施す。	清透式。
32		埋没土中	①D胎土良好③赤褐色④破片		清透式。
33		埋没土中	①C胎土良好③暗色④破片	33・34は平口縁を有し、RL施文を横位施文。33は口唇部に小突起を有する。共に外面に煤状炭化物が付着。	清透式。 清透式。
34		埋没土中	①C胎土良好③明赤褐色④破片		清透式。
35		埋没土中	①D胎土良好③明赤褐色④破片		清透式。
36		埋没土中	①D胎土良好③赤褐色④破片	35~39は胴部に施文を施文するもので、35・39がLR、他はRLを横位に施文する。35・37は内外両面に、38は外面に煤状炭化物が付着する。	清透式。 清透式。
37	+14		①D胎土良好③暗色④破片		清透式。
38		埋没土中	①C胎土良好③暗色④破片		清透式。
39		埋没土中	①H胎土良好③鈍い黄褐色④破片		清透式。
40		埋没土中	①F胎土良好③暗褐色④破片	LRとRL施文の菱形構成で、口唇下を凹線状に整形。	黒灰式。
41		埋没土中	①C胎土良好③鈍い黄褐色④破片	縦位の円形竹管文と横位の爪形文・平行沈線文で肋骨文状の意匠を描く。胎土に縦線を含む。	清透H式。

## 2区54号住居出土土器 (第80回、P.L-39)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1	口(27.0)	埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片	1・2は縄文のみを施文するもの。1はLR・RLにより菱形構成を、2はLを横位に施文する。共に平口縁で、外面に煤状炭化物付着。2は補修孔を有する。	黒灰式。
2	口(9.0)	埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		黒灰式。
3	口(17.0)	埋没土中 4区2住埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④口縁部へ割部片	3～5は縄文のみを施文するもの。共に縄文はRLで平口縁を呈し、外面に煤状炭化物や焼痕による風化・荒れが認められる。3は補修孔を有する。	滑瀝式。
4	口(16.0)	埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
5	口(19.0)	埋没土中	①E胎②良好③褐色④破片		滑瀝式。
6		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片	6～9は文様構成が不明なもの。縄文は共にRLで横位施文を基本とするが、6は斜位方向の施文となる。6は内外両面に煤状炭化物が付着し、7の内面は焼痕による割部が認められる。	滑瀝式。
7		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
8	底(8.0)	埋没土中	①E胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
9	底(6.0)	埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
10		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片	10・11は半縦竹管内側の爪形文を有し、10は口縁部に2条、11は横位施文間に縦・斜位に施す。共にLR縄文の横位施文で、胎土に織線を含む。10は外面に付着。	黒灰式。
11		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		黒灰式。
12		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片	半縦竹管による集合状施文を施す。外面に付着。	黒灰式。
13		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片	13～15は胎土に織線を含む文様構成不明のもの。縄文は13がLRとRLの羽状構成、14がRL、15がLRの横位施文である。	黒灰式。
14		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		黒灰式。
15		埋没土中	①G胎②良好③明赤褐色④破片		黒灰式。
16		埋没土中	①D胎②良好③明赤褐色④破片	半縦竹管により肋骨文を構成し、交点に刺突文を施す。	滑瀝式。
17		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片	半縦竹管による平行状施文を施す。LRの斜位施文。	滑瀝式。
18		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片	半縦竹管内側の爪形文により木葉文を構成し、円形竹管文を施す。細かいRL縄文を横位に施文する。	滑瀝式。
19		埋没土中	①C胎②良好③褐色④破片	19～21は縦位の円形竹管文を施すもの。共にRL縄文を横位に施文する。19は4単位の波状口縁を呈すと想定され、外面に煤状炭化物が付着する。	滑瀝式。
20		埋没土中	①C胎②良好③褐色④破片		滑瀝式。
21		埋没土中	①E胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
22		埋没土中	①C胎②良好③褐色④破片	22～29は縄文以外の文様構成が不明のもの。縄文は29が附加条第1種RL+L、2は他は全てRLの横位施文である。22は波状口縁で、口端が外側へ折り返し状となる。	滑瀝式。
23		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片		滑瀝式。
24		埋没土中	①A胎②良好③明赤褐色④破片		滑瀝式。
25		埋没土中	①A胎②良好③明赤褐色④破片	27は口唇部に小突起が付され、内外両面に煤状炭化物が付着する。	滑瀝式。
26		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
27		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片		滑瀝式。
28		埋没土中	①C胎②良好③明赤褐色④破片		滑瀝式。
29		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
30		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片	横位の浮線文により文様構成。縄文はRLの横位施文。	滑瀝式。
31		埋没土中	①D胎②良好③赤褐色④破片	篋状工具による幅広い横位爪形文を数段に施す。	黒白川下式?

## 3区4号住居出土土器 (第82～84回、P.L-40・41)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1	口 26.0	+15	①C胎②良好③赤褐色④口縁部へ割部上半片	1～3は縦位の円形竹管文を有するもので、1は口縁部に半縦竹管外側の爪形文を3条並らせ、3は縦・横位の平行波線文内に円形竹管文を施す。縄文は共にRLの横位施文で、2はLの結節縄文を有する。1は4単位の波状口縁。1は外面に、2・3は内外面に煤状炭化物が付着し、1・2の内面は焼痕割部が存在。	滑瀝式。
2	底 8.8	埋没土中	①A胎②良好③褐色④割部中位へ底部残存		滑瀝式。
3	底 8.4	+12・21	①C胎②良好③明赤褐色④割部中位へ底部片		滑瀝式。
4	口(24.0)	+13	①C胎②良好③褐色④破片	4～6は半縦竹管の平行波線により肋骨文や何れも施す。4は口唇に棒状工具の刻目文を施し、5は斜・縦位の波線文の交点と割部中位の磨消残部に円形竹管文を施す。6の横位爪形文間の縄文は磨消される。4～6の外側は一部に煤状炭化物付着。縄文は横位施文で、4がLR、5がRL、6が0段3条のRL。	滑瀝式。
5		埋没土中	①C胎②良好③赤褐色④破片		滑瀝式。
6	口(26.0)	埋没土中	①A胎②良好③明赤褐色④口縁部片		滑瀝式。
7	口(27.0)	+13・20・23	①C胎②良好③赤褐色④口縁部片	口縁部に2条の爪形文を施し、その間の縄文は磨消される。RL縄文の横位施文。外面の一部に付着。	滑瀝式。
8		埋没土中	①D胎②良好③赤褐色④破片	割部割れに平行波線文を施す。RL縄文の横位施文。	滑瀝式。
9		+13・23	①C胎②良好③褐色④破片	縄文以外の文様は不明。RLの横位施文である。	滑瀝式。
10	口 9.8	埋没土中	①D胎②良好③赤褐色④口縁部へ割部上位片	縄文土器であり、内外両面は横位の磨消。4単位の波状口縁を有する。	滑瀝式。
11	口 16.3	+13・17	①C胎②良好③褐色④口縁部へ割部下位片	11～14は縄文以外の文様を施さないもの。縄文は12がRLの他は全てLRの横位施文で、13はRLの結節縄文を有	滑瀝式。

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
12	口 18.0 高 11.7	+6	①C型②良好③褐色④口縁部~底部瓦	している。12は残片で、13は口唇部に1単位の小突起を有する。11・12・14は外面に煤状炭化物が付着し、12の外外面には被熱による割離が認められる。	高7.6。 諸説あり式。
13	口 16.5 高 22.5	+6	①D型②良好③褐色④ほぼ完成		底(9.5)。 諸説あり式。
14	口 13.0	+13	①C型②良好③褐色④口縁部~胴部中央瓦		諸説あり式。
15	底(10.0)	埋没土中	①C型②良好③褐色④底面瓦	15~20は文様構成が不明な底部破片である。縄文は15がL Rの他は全てR Lで、横位施文を基本とするが、16は縦位施文となっている。また、15の縄文は繊細な感じであるが、19は節が大きく粗雑である。13・16・18・19の器形は底部が外側へ張り出すが、17・20は湾曲している。	諸説あり式。
16	底(10.0)	埋没土中	①D型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
17	底(6.8)	+14	①C型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
18	底(8.0)	埋没土中	①D型②良好③明赤褐色④破片		諸説あり式。
19	底(10.0)	埋没土中	①D型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
20	底(9.8)	床面直上	①E型②良好③褐色④高部瓦	15は内外面に、17・20は内面に埋付着。	諸説あり式。
21		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	21~24は胎土に繊維を含むもの。21は胴縁部に平截竹管の平行沈線文を施す。縄文は共に横位施文であるが、21がL R、22・23がR L、24がL R Lである。22は波状口縁を呈する。	諸説あり式。
22		埋没土中	①C型②良好③灰褐色④破片		諸説あり式。
23		+17	①C型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
24		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		諸説あり式。
25		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	25~27は平截竹管による平行沈線文や彫形文で文様構成するもの。26は更に彫形竹管文を付加している。27の縄文はL Rの横位施文。共に波状口縁を呈する。25は内外面に、26は外面に煤状炭化物が付着。	諸説あり式。
26		埋没土中	①F型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
27		埋没土中	①D型②良好③灰褐色④破片		諸説あり式。
28		埋没土中	①C型②良好③灰褐色④破片	28・29は平截竹管により集合沈線文を描くもの。29はR L縄文を横位に施文。共に波状口縁を呈する。	諸説あり式。
29		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		諸説あり式。
30		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片	30~36は縄文施文される口縁部破片である。縄文はともにR Lの横位施文であるが、31・32はLの横位施文に縄文を施す。30~33は平口縁。34~36は波状口縁で、34は口唇直下を凹線状に無している。35~36は補修孔を有する。32・33は外面に煤状炭化物が付着する。	諸説あり式。
31		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
32		埋没土中	①E型②良好③赤褐色④破片		諸説あり式。
33		埋没土中	①D型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
34		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		諸説あり式。
35		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
36		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
37		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片	37~44は縄文施文しか確認できない別部破片である。縄文はともにR Lの横位施文で、37はLの横位施文に縄文を施す。38の原体は他に比べて細いものを使用する。38・39の内外面の一部には、煤状炭化物が付着する。	諸説あり式。
38		+18	①C型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
39		+13	①C型②良好③赤褐色④破片		諸説あり式。
40		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
41		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
42		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
43		埋没土中	①E型②良好③褐色④破片		諸説あり式。
44		埋没土中	①C型②良好③赤褐色④破片		諸説あり式。

## 4区2号住居出土土器 (第90~92図、P L-43・44)

(単位: cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1	口 16.9	炉内埋没	①C型②良好③褐色④高部欠損	被頂部の口唇に平截竹管の刻目文を、その下位を縦位の彫形竹管文を4単位に施す。縄文はR Lと結節Rの横位施文。4単位の波状口縁で内面に幅1.5cmの輪縁のみが残存。内外面に煤状炭化物が付着する。	諸説あり式。
2		+21	①C型②良好③明赤褐色④胴部中央位ほぼ完成	文様構成は不明だがR L縄文とLの結節を横位に施文する。内外面は若干の被熱割離と煤状炭化物が付着。	諸説あり式。
3		埋没土中	①G型②良好③灰褐色④破片	3~5は縄文のみを施すもので、3・4はR Lを5はLを横位に施文する。3は平口縁。5は4単位の波状口縁で、1対の補修孔を有する。4は胴部下半に被熱による瓦れ。4・5は外面の一部に煤状炭化物が付着。	諸説あり式。
4		埋没土中	①D型②良好③赤褐色④破片		諸説あり式。
5		埋没土中 2区22住埋土中	①G型②良好③灰白色④破片		諸説あり式。
6		埋没土中	①D型②良好③明赤褐色④破片	6・7は菱形や三角形などの幾何学字状の沈線文を有するが、6は髹状工具による浅く粗雑な沈線文である。ともに縄文を施さない。6は4単位の波状口縁で、内外面は広い凹線状で整形。	諸説あり式。
7		埋没土中	①D型②良好③明赤褐色④破片		諸説あり式。
8		埋没土中	①A型②良好③褐色④破片	口縁部に多截竹管による平行線文と波状文とを2段に重畳させ、以下にR L縄文と結節Rを横位に施文。内外面に被熱割離と煤状炭化物が認められる。	諸説あり式。
9		埋没土中 2区54住埋土中	①A型②良好③褐色④口縁部~胴部下位瓦	多截竹管により彫形状の幾何学文を施す。直線的な沈線文の端部をループ状に反転させて、蛇行したモチーフを描く。4単位の波状口縁で、外面の一部に埋付着。	諸説あり式。
10		埋没土中	①C型②良好③赤褐色④破片	10・11は縄文施文の底部破片で、10は真東のR Lを、	諸説あり式。



番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
11		埋没土中	①D型②良好③明赤褐色④破片	11はLRを横位に施す。11の内面に煤状炭化物付着。	諸議式。
12		埋没土中	①G型②良好③灰褐色④破片	12～19は胎土に繊維を含む一群。12～15は平載竹管の爪	黒灰式。
13		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片	形文により文様構成し、さらに14・15は円形竹管文や沈	黒灰式。
14		埋没土中	①C型②良好③鈍い褐色④破片	線文を付加する。16はコンパス文や平行沈線文を施す。	諸議式。
15		埋没土中	①G型②良好③黒褐色④破片	縄文はともに横位に施され、13はRL、14・18はRL	黒灰式。
16		埋没土中	①E型②良好③明赤褐色④破片	とLRの羽状構成、17・19はLRである。13は内面に、	黒灰式。
17		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片	18・19は内外面に煤状炭化物が付着。	黒灰式。
18		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片		黒灰式。
19		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片		黒灰式。
20		埋没土中	①D型②良好③鈍い赤褐色④破片	平載竹管による爪形文が入組木葉文を構成する。細かい	諸議式。
				RL縄文を横位に施す、区画文外を磨り消す。内外両	
				面に良好に研磨する。	
21		埋没土中	①C型②良好③暗赤褐色④破片	21・22は平載竹管による平行沈線文と押し引き状の連続	諸議式。
22		埋没土中	①G型②良好③鈍い黄褐色④破片	刺突文を施す。22は口唇上にも刺突文を付加する。21の	諸議式。
				縄文はRLの横位施す。	
23		埋没土中	①E型②良好③鈍い赤褐色④破片	23～25は縦位の円形竹管文と縄文施文を有する。23は口	諸議式。
24		埋没土中	①C型②良好③暗赤褐色④破片	縁部、25は割落れ部に平行沈線文を施す。縄文はともに	諸議式。
25		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	RLの横位施文を基とするが、24はやや乱れている。	諸議式。
				23は口唇外縁の割落れ部の下地に縄文が存在し、口縁彫形	諸議式。
				以前の施文が窺える。25の内面に煤付着。	
26		埋没土中	①G型②良好③鈍い赤褐色④破片	26～34は縄文を有する口縁部破片。30・31がLRの他は	諸議式。
27		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片	全てRLの横位施文であるが、33は割落れも施文される。	諸議式。
28		埋没土中	①D型②良好③鈍い赤褐色④破片	31は口唇部に棒状工具による斜位の刻目文を施す。	諸議式。
29		埋没土中	①E型②良好③鈍い赤褐色④破片	32～34は波状口縁で、28には補修孔が存在する。27は内	諸議式。
30		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片	外面に、29は内面に、30・34は外面に煤状炭化物が付着	諸議式。
31		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片	する。	諸議式。
32		埋没土中	①G型②良好③灰褐色④破片		諸議式。
33		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		諸議式。
34		埋没土中	①C型②良好③灰褐色④破片		諸議式。
35		埋没土中	①E型②良好③鈍い赤褐色④破片	35～47は縄文を有する割部破片である。縄文は44がLR、	諸議式。
36		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片	45・46は真東のRL、47がLRの他は全てRLである。35	諸議式。
37		埋没土中	①D型②良好③明赤褐色④破片	は割部Rも施文されている。43・44は細い原体を使用す	諸議式。
38		埋没土中	①E型②良好③鈍い赤褐色④破片	る。41は補修孔が存在する。38は29の割部破片。37・45	諸議式。
39		埋没土中	①D型②良好③鈍い褐色④破片	は内外面に、38・43・44・47は外面に、39は内面に煤状	諸議式。
40		埋没土中	①A型②良好③鈍い赤褐色④破片	炭化物が付着し、43の内面には被熱による割傷が認めら	諸議式。
41		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片	れる。	諸議式。
42		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片		諸議式。
43		埋没土中	①D型②良好③鈍い褐色④破片		諸議式。
44		埋没土中	①D型②良好③明赤褐色④破片		諸議式。
45		埋没土中	①G型②良好③明赤褐色④破片		諸議式。
46		埋没土中	①G型②良好③鈍い赤褐色④破片		諸議式。
47		埋没土中	①D型②良好③鈍い赤褐色④破片		諸議式。
48	径 4.8	埋没土中	①E型②良好③明赤褐色④片	土器片の断面を研磨して円形に二次加工したもので、欠が欠損する。	

#### 4区3号住居出土土器 (第96図、P.L-45)

(単位: cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	1・2ともにRL縄文を横位に施す。1は胎土に	黒灰式。
2		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	繊維を含む。	諸議式。

#### 5区7号住居出土土器 (第98図、P.L-45)

(単位: cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		床面直上 埋没土中	①C型②良好③赤褐色④割部上位 ～下位片	L縄文を横位施文後に、割部上平に平載竹管状工具による	浮島田式。
				横位の連続刺突文を重畳させる。下半部には円形貼付	
				文が付加する。外面に被熱風化と煤が存在する。	
2		埋没土中	①C型②良好③鈍い黄褐色④破片	2・3は平載竹管による集合平行沈線文を有し、2は口	諸議式。
3		埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	縁部に耳状や円形状の貼付文を付す。	諸議式。
4	-18		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片	RL縄文を横位に施す。内外面に被熱割傷が存在。	諸議式。

## 2区1号土壇出土土器 (第106図、P.L-45)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①D型②良好③鈍い赤褐色④破片	R.L縄文を施文後に半蔵竹管による平行沈線文を施し、横位沈線文間を磨り消す。内面に被熱剝離が存在する。	譲渡 <sup>9</sup> 式。

## 2区2号土壇出土土器 (第106図、P.L-45・46)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①G型②良好③鈍い赤褐色④破片	1はL.R、2はR.L縄文を横位に施文する。	譲渡式。
2		埋没土中	①G型②良好③鈍い赤褐色④破片		譲渡式。

## 2区11号土壇出土土器 (第106図、P.L-46)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①D型②良好③赤褐色④破片	口縁部と割れ部に半蔵竹管の外側を使用した爪形文を施す。縄文は0段3条のR.LとL.Rとで羽状を構成し、爪形文間を磨り消す。胎土に繊維を含む。	黒沢式。 外面の一部に帯状炭化物が付着。
2		埋没土中	①G型②良好③鈍い赤褐色④破片	2本の半蔵竹管による平行沈線と肋骨文を構成し、縦位の円形竹管文を付す。波状口縁を呈する。	譲渡 <sup>9</sup> 式。
3		埋没土中	①G型②良好③褐色④破片	3～6は縄文を有する破片で、5は波状口縁を呈する。	譲渡式。
4		埋没土中	①H型②良好③褐色④破片	縄文は6のL.Rを除いて全てR.Lの横位施文である。ともに外面に帯状炭化物が付着する。	譲渡式。
5		埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		譲渡 <sup>9</sup> 式。
6		埋没土中	①G型②良好③鈍い褐色④破片		譲渡式。

## 3区1号土壇出土土器 (第106図、P.L-45)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片	傘形が粗く、部のやや大きな断糸文を縦位に施文。	稲荷台式。
2		埋没土中	①C型②良好③赤褐色④割断上位～下位欠	R.L縄文を横位に施文する。外面に帯状炭化物が多量に付着し、内面は被熱による風化が認められる。	譲渡 <sup>9</sup> 式。
3	口(20.0)	埋没土中	①C型②良好③赤褐色④破片	L.R縄文を斜位に施文する。4単位は波状口縁。外面に被熱剝離と帯状炭化物が存在する。	譲渡 <sup>9</sup> 式。

## 3区7号土壇出土土器 (第106図、P.L-46)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①C型②良好③赤褐色④破片	R.L縄文を内面口縁部と外面に横位施文する。	井草11式。

## 3区11号土壇出土土器 (第106図、P.L-45・46)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1	口(20.8)	埋没土中	①C型②良好③赤褐色④破片	R.L縄文を横位に施文する。	
2		埋没土中	①C型②良好③鈍い褐色④破片	外面に横位の楕円状の整形痕を有する。経直な感じの胎土である。	大浦山式?

## 5区7号土壇出土土器 (第106図、P.L-46)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		埋没土中	①A型②良好③鈍い褐色④破片	断糸文Rを縦位に施文し、下位では割断せずに引きずって糸痕文状を呈する。内外面に被熱剝離が存在する。	稲荷台式。
2		埋没土中	①H型②良好③褐色④破片	半蔵竹管の集合平行沈線文と円形貼付文を施す。	譲渡 <sup>9</sup> 式。

## 3区包含層の出土土器 (第113～118図、P.L-47～54)

(単位:cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1		表探	①C型②良好③鈍い褐色④破片	植物茎状の工具により器面に垂直に刺突文を施す。器内は3mmと薄く、内面には指面圧痕が残る。	高文土器。
2		表探	①C型②良好③明赤褐色④破片	2・3は口縁部が外反・肥厚し、R.L縄文を施文。2の口唇部上端と内面は横位、外面は斜位に施文。3の口唇上端は横位、口縁部は斜位に施文し、外反部を軽く無消す。	井草1式。
3		A-20グリッド	①D型②良好③褐色④破片		井草1式。
4		1-17グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片	4・5は唇の密な断糸文Rを施文する。4は肥厚・外反する口唇の上端と内面に横位施文し、外面口縁部は縦位施文後に横位施文する。内面はともに丁家二期で、6～24は口唇部下に若干の無文部を置いて、傘形周や唇の粗い断糸文Rを縦位に施す。6は無文部の幅が広く、稲荷台式。	井草1式。
5		H-20グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片		井草1式。4と同一個体。
6	口(24.0)	表探	①B型②良好③明黄褐色④破片	6～24は口唇部下に若干の無文部を置いて、傘形周や唇の粗い断糸文Rを縦位に施す。6は無文部の幅が広く、稲荷台式。	稲荷台式。
7		1-8グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片	18～21は極めて散漫な施文である。各土器の口縁部の形	稲荷台式。
8		L-6グリッド	①B型②良好③明褐色④破片		

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
9		N-7グリッド	①B型②良好③鈍い褐色④破片	文様と成・整形技法の特徴 状は丸頭あるいは丸脚状を呈し、口唇部は横位に研磨され、内面は丁寧な横撫で整形である。7・14・16・23は補修孔を有する。	稲荷台式。
10		J-11グリッド	①B型②良好③鈍い褐色④破片		
11		I-19グリッド	①B型②良好③褐色④破片		
12		J-11グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片		
13		M-7グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片		
14		J-7グリッド	①B型②良好③黄褐色④破片		
15		N-7グリッド	①B型②良好③鈍い褐色④破片		
16		K-17グリッド	①C型②良好③褐色④破片		
17		K-9グリッド	①C型②良好③褐色④破片		
18		I-9グリッド	①C型②良好③褐色④破片		
19		L-14グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片		
20		J-9グリッド	①B型②良好③明黄褐色④破片		
21		M-15グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片		
22		J-5グリッド	①C型②良好③赤褐色④破片		
23		E-4グリッド	①D型②良好③褐色④破片		
24		H-16グリッド	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片		
25		J-7グリッド	①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		
26		H-13グリッド	①C型②良好③褐色④破片		
27		I-8グリッド	①C型②良好③鈍い褐色④破片		
28		L-9グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片		
29		I-11グリッド	①B型②良好③褐色④破片		
30		N-9グリッド盤	①B型②良好③褐色④破片		
31		E-3グリッド盤	①B型②良好③浅黄色④破片		
32		H-7グリッド盤	①A型②良好③明赤褐色④破片		
33		L-5グリッド盤	①C型②良好③褐色④破片		
34		K-6グリッド盤	①B型②良好③明黄褐色④破片		
35	表探	①A型②良好③明赤褐色④破片	25～67は6～24と同様の胎土を施した胴部破片である。65～67がLの他は全てRの縦位施文である。概して筋が細く条間隔の広い胎土文が主体を占めているが、25～27の胎土文は筋が細かくて条間隔もかなり密である。30～33の胎土文も筋の粗かい原体を使用しているが、条間隔はやや広めである。61・62は摺りの緩い原体を使用する。64は他に比べて筋の粗大な胎土文であり、かつ器内の薄い点で特徴的である。内面は焼熱あるいは風化により荒れているものが多いが、28・29・40・50・51・65・66などでは丁寧に撫で整形が施されている。49の内面には指痕凹が明確に残り、撫で整形は認められない。56は補修孔を有する。38は41と、40は12と、50は13と各々同一個体である。	稲荷台式。	
36	M-8グリッド	①C型②良好③褐色④破片			
37	K-4グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
38	K-14グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
39	表探	①A型②良好③鈍い褐色④破片			
40	J-11グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
41	K-14グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
42	M-16グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
43	K-10グリッド	①C型②良好③褐色④破片			
44	F-21グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
45	L-7グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片			
46	M-7グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片			
47	I-8グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片			
48	G-23グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片			
49	K-8グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
50	M-7グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
51	K-7グリッド	①C型②良好③褐色④破片			
52	表探	①B型②良好③明黄褐色④破片			
53	M-7グリッド盤	①B型②良好③褐色④破片			
54	M-12グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片			
55	L-13グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
56	表探	①C型②良好③明赤褐色④破片			
57	L-16グリッド	①C型②良好③明褐色④破片			
58	J-7グリッド	①C型②良好③褐色④破片			
59	K-9グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
60	F-2グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
61	L-7グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片			
62	表探	①C型②良好③褐色④破片			
63	M-6グリッド	①A型②良好③明赤褐色④破片			
64	K-9グリッド盤	①A型②良好③鈍い褐色④破片			
65	F-1グリッド	①C型②良好③鈍い褐色④破片			
66	表探	①A型②良好③明赤褐色④破片			
67	L-15グリッド	①B型②良好③黄褐色④破片			
68	表探	①C型②良好③明赤褐色④破片	R L 縦文を斜位に施文し、縦の兼走向となる。	稲荷台式。	
69	E-12グリッド	①C型②良好③褐色④破片		稲荷台式。	

## 付 土器の観察一覧

番号	大きさ	出土状態	①粘土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
70		表採	①C 整②良好③褐色④破片	69~73は粘糸帯を器面に押し当てて引きずるように施した、いわゆる粘糸帯来成文を有する。糸の深さは浅く、その間隔も広いものが多い。各土器の内面は風化により荒れている。	桶形台式。
71	L-7グリッド		①C 整②良好③明赤褐色④破片		
72	L-9グリッド		①C 整②良好③浅黄褐色④破片		
73	L-9グリッド		①C 整②良好③褐色④破片		
74	J-7グリッド	他	①A 整②良好③美しい赤褐色④破片	74~89・91~102は無文土器の口縁部破片であり、口縁部の内外両面は横位の研磨帯で装飾される。78は内面に横位の、99は外面に斜位のそれぞれ規則的に類似した捺痕状の整形痕が認められる。口縁部の形状は丸頭状を呈するものが主体を占めるが、96~102のように丸棒状のものも見られる。丸頭状の整形は、75のように内側に折り返すものと、78のように外側に折り返すもの二者が観察できる。90は口唇下に幅2cm程度の無文部を置いて、筋の細かい燃糸文を縦位に施文する。	桶形台式。
75	B-25グリッド		①A 整②良好③美しい赤褐色④破片		
76	J-11グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
77	K-5グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
78	J-3グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
79	J-9グリッド		①A 整②良好③美しい赤褐色④破片		
80	表採		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
81	I-11グリッド		①D 整②良好③美しい褐色④破片		
82	表採		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
83	D-4グリッド	他	①A 整②良好③美しい赤褐色④破片		
84	E-2グリッド		①A 整②良好③美しい褐色④破片		
85	I-9グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
86	L-10グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
88	M-7グリッド		①A 整②良好③美しい赤褐色④破片		
89	J-7グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
90	表採		①A 整②良好③美しい赤褐色④破片		
91	M-9グリッド	他	①C 整②良好③美しい褐色④破片		
92	M-6グリッド		①C 整②良好③美しい赤褐色④破片		
93	表採		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
94	L-6グリッド	他	①A 整②良好③美しい赤褐色④破片		
95	L-10グリッド		①C 整②良好③美しい赤褐色④破片		
96	K-11グリッド		①C 整②良好③美しい赤褐色④破片		
97	表採		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
98	K-10グリッド		①C 整②良好③褐色④破片		
99	L-5グリッド		①B 整②良好③美しい褐色④破片		
100	L-7グリッド	他	①C 整②良好③美しい褐色④破片		
101	M-7グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
102	L-7グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
103	表採		①C 整②良好③美しい褐色④破片	103~105は無文土器の胴部破片で、ともに縦方向の撫でや研磨の整形痕が認められる。内面は風化により荒れている。	桶形台式。
104	J-4グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
105	L-11グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
106	表採		①A 整②良好③明赤褐色④破片	106~114は縦位施文の山形研型文である。各土器ともに小破片であるが、いずれも若干の無文部を置くことから、縦位帯状の文様構成と判断される。110では、無文部が最低12mmの幅を有する。施文部を107で観察すると、長さ20~22mm、直径6mmの棒軸に1周2単位の山形文を4条配している。山形文は、107を除いて縦幅の大きなものである。器面の内側は風化による剥落や荒れが目立つ。	桶形台式。
107	表採		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
108	D-2グリッド	他	①C 整②良好③美しい褐色④破片		
109	D-3グリッド		①C 整②良好③美しい赤褐色④破片		
110	D-2グリッド		①C 整②良好③明赤褐色④破片		
111	C-2グリッド		①C 整②良好③明赤褐色④破片		
112	D-3グリッド		①C 整②良好③美しい赤褐色④破片		
113	E-2グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
114	D-2グリッド		①C 整②良好③美しい褐色④破片		
115	K-16グリッド		①C 整②良好③浅黄褐色④破片	棒状工具による縦・斜位の沈線文を施す。口唇部は外周がざつと、横位に研磨される。焼成は堅緻。	三戸式。
116		3区3位埋没土中	①B 整②良好③美しい褐色④破片	外周がざつと口唇部に棒状工具による斜突文を施す。外周は凹線状の粗い糸線文が横・斜位に、内面は捺痕状の横位研磨が施される。	田戸下層式。
117	K-5グリッド		①B 整②良好③美しい黄褐色④破片	手藁竹管による横位集合沈線文を施す。内面は研磨。	田戸下層式。
119	H-7グリッド		①C 整②良好③黄褐色④破片	無文土器で、内外面に厚肉状の捺痕を有する。	
120	L-11グリッド		①C 整②良好③褐色④破片	116に類似した凹線状の糸線文が横・斜位に施される。内面は風化により荒れている。	
121	表採		①C 整②良好③浅黄褐色④破片	121~123は粘土に微量の繊維を含む無文土器である。	
122	表採		①C 整②良好③浅黄褐色④破片	122は器面が荒れているために不明であるが、他は斜位の捺痕状の整形痕を有する。	
123	K-11グリッド		①C 整②良好③黄褐色④破片		
124	口 22.0 底 10.6 高 17.2	不明	①D 整②良好③明赤褐色④口縁部~胴部下位%	手藁竹管により口縁部と胴部中央・下位に横位平行沈線文を、また口縁部の表面・波底部に縦位平行沈線文を施した後に、斜位の沈線文を重ねさせて糸字状のモチーフを抽出する。沈線文の交点には、同一工具の先端部を回転させて円形竹管文的な文様を施す。口唇部は棒状工具に	講義 8式。

番号	大きさ	出土状況	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
125	L-6グリッド	他	①D型②良好③褐色④割部上位～中位	よる羽目文を指す。縄文はR.Lの横位施文。4単位の波状口縁。内面全面と外面上半部は煤状炭化物が付着し、外面全面に被熱割離が認められる。	諸磯c式。
126	□(14.2)	d-18グリッド	①H型②良好③赤色④口縁部～胴部	半蔵竹管により124と同様の三角形や変形した意匠を描くが、刺突文や口唇部の刻目文は見られない。	諸磯b式。
127	□(17.8)	L-6グリッド	①C型②良好③鈍い赤褐色④口縁部～割部中位	半蔵竹管の平行波線文により口縁部は縦位の、割部は斜格子目状や双弧状の意匠が描かれ、各部位に円形貼付文が付される。口唇部外縁は篋状工具により斜方向からの刻目文が施される。	諸磯c式。
128	□(30.0)	L-6グリッド	①D型②良好③鈍い黄褐色④口縁部～割部中位	127と類似した文様構成であるが、口縁部は矢羽状の集合波線文で、2個1単位の縦位の耳状貼付文が推定4カ所に付される。口唇部外縁の刻目文は棒状工具による、外面の一部に煤状炭化物が付着する。	諸磯c式。
129	I-9グリッド	他	①D型②良好③浅黄褐色④割部上位～下位	129～131は縄文のみが施文されるもの。縄文は横位施文で、129がL、130がL.R、131がL.RとR.Lの結束と、の結節を交互に施文。130の口縁部は縄文も無文。131は胎土に繊維を含み、底部は上げ気味になる。	諸磯式。
130	□(18.8)	K-11グリッド	①C型②良好③黄褐色④破片		諸磯式。
131	□(33.6) 底(11.0)	S-13グリッド	①B型②良好③黄色④口縁部破片と割部中位～底部		黒沢式。 器高は推定40cm。
132		N-9グリッド	①H型②良好③明赤褐色④破片	縄文以外の文様は不明。L.R縄文の横位施文で、内面の一部に煤状炭化物が付着する。	諸磯式。
133	底(9.0)	2区(1)埋没土中	①E型②良好③明赤褐色④破片	133～135・137～139は縄文以外の文様は不明の底部破片。	諸磯式。
134	底(9.2)	M-9グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片	縄文は横位施文を基本とし、134がL.Rの他は全てR.L。	諸磯式。
135	底(6.6)	表探	①C型②良好③赤色④破片	内面整形は133が横位波切筋、137が横・斜位波切筋。138は内面に被熱割離が、139は内面に煤状炭化物の付着が認められる。136は無文土器で、内外面に無て整形痕を残す。ミニチュア土器の可能性もある。	諸磯式。
136	底 3.0	M-11グリッド	①E型②良好③明赤褐色④底部残存		諸磯式。
137	底(12.0)	H-22グリッド	①C型②良好③褐色④破片		諸磯式。
138	底(9.4)	J-11グリッド	①C型②良好③褐色④破片		諸磯式。
139	底(10.0)	K-6グリッド	①C型②良好③褐色④破片		諸磯式。
140		L-14グリッド	①C型②良好③明赤褐色④破片	140～142は半蔵竹管により文様を構成し、胎土に繊維を含む。141・142はR.L縄文を施すが、141は斜位に、142は縦位に施文する。また両者の内面に煤物が付着。	黒沢式。
141	表探		①C型②良好③鈍い褐色④破片		黒沢式。
142	L-18グリッド		①C型②良好③明赤褐色④破片		黒沢式。
143	E-20グリッド		①C型②良好③鈍い赤褐色④破片	143～146は縄文以外の文様は不明で、胎土に繊維を含むもの。縄文はともに横位施文で、146がR.Lの他はL.Rである。内面はともに良好に研磨され、146の外縁は被熱により荒れている。	黒沢式。
144	J-17グリッド		①C型②良好③明赤褐色④破片		黒沢式。
145	表探		①C型②良好③鈍い赤褐色④破片		黒沢式。
146	M-8グリッド		①H型②良好③褐色④破片		黒沢式。
147	G-5グリッド		①D型②良好③褐色④破片	半蔵竹管の平行波線より肋骨文を構成。内面は研磨。	諸磯a式。
148	H-13グリッド		①C型②良好③褐色④破片	半蔵竹管の内側爪形文とR.L縄文を横位に施文する。	諸磯a式。
149	I-7グリッド		①D型②良好③明赤褐色④破片	R.L縄文を横位に施文。波状口縁で内面は横位の無で。	諸磯a式。
150	A-20グリッド		①C型②良好③褐色④破片	150・151は縄文以外の文様不明なもの。縄文は共にR.Lの横位施文。150は波状口縁で、口唇部に棒状工具による羽目文を施す。151は内外面に煤状炭化物が付着。	諸磯a式。
151	L-10グリッド		①C型②良好③明赤褐色④破片		諸磯a式。
152	d-18グリッド		①A型②良好③明赤褐色④破片	半蔵竹管による平行波線文を施すが、モチーフは不明。縄文はR.Lの横位施文。内面は縦位の研磨。	諸磯a式。
153	表探		①C型②良好③褐色④破片	153～168は縄文以外の文様は不明な胴部破片である。縄文は159・165がL.R、163が9段3条のR.L、166・167がR.Lと結節L、168が附加糸頭1個R.L+Lの他は、全てR.Lの横位施文である。各土器の内面は良好に研磨されている。157・160・163・168は外面に煤状炭化物が付着し、159・168は内面に被熱による割離が認められる。	諸磯式。
154	表探		①C型②良好③褐色④破片		諸磯式。
155	I-19グリッド		①D型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
156	L-18グリッド		①C型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
157	T-11グリッド		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		諸磯式。
158	d-18グリッド		①E型②良好③鈍い黄褐色④破片		諸磯式。
159	表探		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		諸磯式。
160	F-17グリッド		①C型②良好③褐色④破片		諸磯式。
161	M-13グリッド		①C型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
162	表探		①A型②良好③鈍い赤褐色④破片		諸磯式。
163	K-11グリッド		①C型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
164	表探		①E型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
165	d-18グリッド		①C型②良好③赤褐色④破片		諸磯式。
166	K-5グリッド		①D型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
167	e-16グリッド		①E型②良好③明赤褐色④破片		諸磯式。
168	I-17グリッド		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		諸磯式。

## 付 土器の観察一覧

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
169	表採		①C型②良好③明赤褐色④破片	無文の浅鉢土器で、内外面は横位に研磨される。	器式式。
170	G-20グリッド		①C型②良好③鈍い褐色④破片	半截竹管により口縁部に横位、以下に縦位の集合沈線文を施す。口縁部には耳状貼付文も付される。	器式式。
172	M-7グリッド		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片	沈線器文間に縦位施文のLR横文を充塞する。	加曾利E3式。
173			①G型②良好③鈍い黄褐色④破片	口縁部に沈線文を巡らせ、その直下には逆U字状の懸垂文を施す。横文は0段3条のLRで、口縁下を横位に施す。以下を縦位に施す。	加曾利E3式。
174	表採		①C型②良好③鈍い褐色④破片	対置状の沈線文を施し、その間の横文を磨り消す。横文はLRの横位施文である。	加曾利B式。
175	表採		①C型②良好③浅黄褐色④一部欠損	加曾利E3式の土器片の周囲を敲打し、円形状に整形するが、研磨は認められない。	

## 1・2・4・5区包含層の出土土器 (第147～149図、P.L—66～70)

(単位: cm)

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
1	2区表採		①E型②良好③褐色④破片	然余文Rを縦位に施し、下位は引きずって条痕文状となる。内外面ともに被熱による風化が認められる。	器式台式。
2	2区46住埋土中		①A型②良好③明赤褐色④破片	半截竹管により口縁部に縦位の集合沈線文を施し、横位沈線文で区画した下位に刺歯状のモチーフを施す。口唇部は平酒状を呈し、内面は横位で整形。内外両面からの不貫通の補修孔が存在。	野島式。
3	4区表採		①C型②良好③鈍い褐色④破片	半截竹管により前面状の集合沈線文を施す。	三戸式。
4	5区R-18 グリッド		①B型②良好③褐色④破片	細線形線文の区画内に棒状工具による沈線文を充塞し、縁起線文にも刻目文を施す。内面は風化で荒れるが、僅かな条痕文を施す。口唇部は取面状を呈する。	黒浜式。
5	5区表採		①B型②良好③鈍い黄褐色④破片	粗い条痕文を横・斜位に施す。内面は被熱剥離により条痕文の有無は不明。胎土に繊維を含む。	
6	不明		①G型②良好③褐色④破片	口唇下に半截竹管内側の爪形文を施す。横文は附加条第1種LR+。波状口縁で、胎土に繊維を含む。	黒浜式。
7	2区表採		①G型②良好③明赤褐色④破片	7・8は半截竹管によりコンパス文の乱れた波状文を施すが、8は口唇下に竹管内側の爪形文を施す。横文は7がLの横位施文。7は口唇部に小突起を付し、8は波状口縁を呈する。共に胎土に繊維を含む。	黒浜式。
8	2区H-1-13 グリッド		①C型②良好③鈍い褐色④破片		黒浜式。
9	2区表採		①D型②良好③褐色④破片	9・10は半截竹管により沈線文を施し、胎土に繊維を含む。9の沈線文端部はコンパス文状に折返す。	黒浜式。
10	2区37住埋土中		①D型②良好③褐色④破片	R.L横文の横位施文。胎土に繊維含有。内面は横研磨。	黒浜式。
11	2R-IIグリッド		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		黒浜式。
12	5区表採		①G型②良好③明赤褐色④破片	12～22は横位以外の文様不明なもので、胎土に繊維を含む。横文は12・16・17がR.Lの横位施文。13・18・19はL.RとR.Lとの差形構成で、13は0段3条縄を使用。14・19はL.RとR.Lとの別状構成。15は反折の可能性がある。10は0段多条L.Rの横位施文。21は附加条第2種L.R+R。22の輪軸は不明だが、R22本の附加条。各土器の内面は丁寧に研磨され、18の外側には輝状炭化物が付着している。	黒浜式。
13	2区35住埋土中		①D型②良好③褐色④破片		黒浜式。
14	4区1住埋土中		①C型②良好③浅黄褐色④破片		黒浜式。
15	2区表採		①C型②良好③明赤褐色④破片		黒浜式。
16			①C型②良好③黄褐色④破片		黒浜式。
17	2区56住埋土中		①D型②良好③明赤褐色④破片		黒浜式。
18	2区表採		①D型②良好③鈍い褐色④破片		黒浜式。
19	2区13住埋土中		①D型②良好③鈍い赤褐色④破片		黒浜式。
20	2区37住埋土中		①C型②良好③褐色④破片		黒浜式。
21	2区表採		①C型②良好③褐色④破片		黒浜式。
22	2区37住埋土中		①D型②良好③褐色④破片		黒浜式。
23	2区35住埋土中		①G型②良好③赤褐色④破片	23～26は半截竹管内側による爪形文を施すもので、23は円形竹管文や平行沈線文を有する。横文はともにR.Lの横位施文で、23～25は細い縦位の刺歯状の全体。内面は丁寧に研磨されている。	器式式。
24	1区36住埋土中		①C型②良好③褐色④破片		器式式。
25	不明		①C型②良好③明赤褐色④破片		器式式。
26	不明		①E型②良好③明赤褐色④破片		器式式。
27	2区表採		①E型②良好③褐色④破片	半截竹管や竹管を使用して、27・28は三角形や菱形の幾何学文と円形竹管文、29・30は内側凹文・平行沈線文や円形竹管文による助文、31・32は平行集合沈線文と円形竹管文や結節沈線文状の内側爪形文などを構成。横文を有する28・31・32はR.Lの横位施文。	器式式。
28	1区4住埋土中		①E型②良好③明褐色④破片		器式式。
29	2区46住埋土中		①D型②良好③鈍い赤褐色④破片		器式式。
30	4区1住埋土中		①C型②良好③明赤褐色④破片		器式式。
31	2区表採		①C型②良好③明赤褐色④破片		器式式。
32	2区10住埋土中		①E型②良好③明赤褐色④破片		器式式。
33	口(32.6)	2区5・35住埋土中	①C型②良好③明赤褐色④破片	横文のみを施す。R.Lの横位施文。4単位に波状口縁。内面は横位研磨され、外面の一部に煤付。	器式式。
34	口(18.0)	2区表採	①G型②良好③明赤褐色④破片	縦位の円形竹管文を4単位に施す。横文はR.Lの横位施文。口唇部は片側を断面にそぎ落とししたような波頭部が1カ所に認められる。内面は横位に研磨される。	器式式。

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
35	口(22.0)	2区23住埋土中	①C型②良好③鈍い赤褐色④破片	0段多糸のLR縄文を横位施文する口縁部破片。	清燻a式。
36	底(12.0)	2区29住埋土中	①C型②良好③褐色④破片	半縦竹管による縦位の平行沈線文と円形竹管文を施文する。縄文はRLの横位施文。	清燻b式。
37	底(6.8)	2区12住埋土中	①F型②良好③鈍い褐色④破片	37~40・42・43は縄文以外の文様不明の底部破片である。	清燻式。
38	底(9.0)	2区A表探	①C型②良好③鈍い褐色④破片	縄文は37・39・43がRLの横位施文、38はRLの新・斜位施文、40・42がLRの横位施文である。41は無文で、内外両面とも丁寧に研磨されている。37の内面の一部に煤状炭化物が付着し、39・40の内外両面は焼熱による割離が認められる。	清燻式。
39	底(9.0)	2区29住埋土中	①C型②良好③鈍い褐色④破片		清燻式。
40	底(8.0)	2区A表探	①C型②良好③赤褐色④破片		清燻式。
41	底(7.6)	2区36住埋土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
42	底(10.0)	4区1住埋没土中	①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
43	底(12.0)	4区A表探	①C型②良好③明黄褐色④破片		清燻式。
44		5区K18ブリード	①C型②良好③鈍い褐色④破片	半縦竹管により弧状や縦・横位の平行沈線文を施す。縄文はRLの横位施文。内面は被熱による僅かな割離。	清燻b式。
45	底(6.2)	2区12住埋土中	①G型②良好③明赤褐色④割部下位一面面片	半縦竹管により横位や斜位の平行沈線文を施す。内外両面ともに煤状炭化物が付着。	清燻b式。
46	底(10.2)	2区5住埋没土中	①C型②良好③褐色④破片	半縦竹管により横位の平行沈線文を施す。RL縄文を横位に施文する。	清燻b式。
47	不明		①C型②良好③褐色④破片	多縦竹管外側による横位階梯沈線文を施す。縄文はLRの横位施文。内外両面ともに煤状炭化物が付着。	清燻b式。
48	2区43住埋土中		①C型②良好③鈍い褐色④破片	半縦竹管による平行沈線文を多数に施す。縄文はRLの横位施文。	清燻b式。
49	2区21住埋土中		①G型②良好③褐色④破片	半縦竹管内側による爪形文を施す。縄文はRLの横位施文。外面に煤状炭化物が少量付着。	清燻b式。
50	2区43住埋土中		①C型②良好③明黄褐色④破片	半縦竹管により斜位の集合型沈線文と平行沈線文を施す。縄文はLRの横位施文。内面に煤状炭化物が付着。	清燻b式。
51	2区11住埋土中		①H型②良好③明赤褐色④破片	51~53は半縦竹管により横位や斜位の平行沈線文を施すが、52の割部は渦巻状の意匠を帯く。縄文は51・52がRLの横位施文で、53は平口縁。内面は共に研磨。	清燻b式。
52	2区4住埋没土中		①C型②良好③褐色④破片		清燻b式。
53	1区4住埋没土中		①C型②良好③鈍い褐色④破片		清燻b式。
54	2区43住埋土中		①A型②良好③明褐色④破片	54~59は厚縄文により文様構成するもの。57は渦巻状のモチーフを描くが、他は平行状である。54は刻目の粗い厚縄文。縄文は58がLRの横位施文の他は、全てRLの横位施文である。56の内面には煤状炭化物が付着する。	清燻b式。
55	2区36住埋土中		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		清燻b式。
56	不明		①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻b式。
57	不明		①H型②良好③明褐色④破片		清燻b式。
58	不明		①C型②良好③明黄褐色④破片		清燻b式。
59	2区A表探		①H型②良好③鈍い褐色④破片		清燻b式。
60	4区1住埋没土中		①E型②良好③褐色④破片	60~69は縄文を施文する口縁部破片である。縄文は64がLRの横位施文、69が附加糸第1種RL+Lの横位施文の他は、全てRLの横位施文である。器形は68・69が液状口縁の他は、全て平口縁である。内面はともに丁寧に研磨が施される。63・65・68・69の外面には、煤状炭化物が付着する。	清燻式。
61	4区1住埋没土中		①E型②良好③褐色④破片		清燻式。
62	2区A表探		①E型②良好③鈍い褐色④破片		清燻式。
63	2区35住埋土中		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
64	2区23住埋土中		①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
65	2区A表探		①C型②良好③鈍い褐色④破片		清燻式。
66	2区35住埋土中		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
67	2区A表探		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
68	不明		①H型②良好③黄褐色④破片		清燻式。
69	2区0-7ブリード		①C型②良好③鈍い褐色④破片		清燻式。
70	2区27住埋土中		①C型②良好③褐色④破片	70~88は縄文以外の文様不明の割部破片であるが、77は部分的に多縦竹管により横位平行沈線文が施される。縄文は70~72がRLの横位施文に結節縄文を施すが、70は結節Lで他は不明である。82はR、84・85・88はL、86・87はLRの横位施文であり、残りの全てはRLの横位施文である。各土器ともに、内面は丁寧に研磨されている。71・72・77・83・85は外側に、84は内面にそれぞれ煤状炭化物が付着している。	清燻式。
71	2区A表探		①H型②良好③鈍い褐色④破片		清燻式。
72	2区11住埋土中		①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
73	2区11住埋土中		①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
74	2区1住埋没土中		①E型②良好③鈍い黄褐色④破片		清燻式。
75	2区H-13ブリード		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
76	2区A表探		①C型②良好③赤褐色④破片		清燻式。
77	不明		①C型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
78	4区1住埋没土中		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
79	4区A表探		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
80	4区1住埋没土中		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
81	4区1住埋没土中		①E型②良好③鈍い褐色④破片		清燻式。
82	4区A表探		①C型②良好③褐色④破片		清燻式。
83	5区A表探		①H型②良好③明赤褐色④破片		清燻式。
84	5区E-32ブリード		①C型②良好③鈍い黄褐色④破片		清燻式。
85	5区O-32ブリード		①C型②良好③灰褐色④破片		清燻式。
86	2区46住埋土中		①D型②良好③鈍い赤褐色④破片		清燻式。
87	2区35住埋土中		①E型②良好③褐色④破片		清燻式。

## 付 土器の観察一覧

番号	大きさ	出土状態	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様と成・整形技法の特徴	備考
88		2区表採	①E 胎②良好③褐色④破片		踏碇式。
89		5区表採	①D 胎②良好③浅黄褐色④破片	89・90は平縁竹管により縦・横位や斜位の集合平行沈線文を施す。89は耳状や栴形状の貼付文を、90は円形貼付文をそれぞれ付している。	踏碇C式。
90		2区表採	①D 胎②良好③鈍い黄褐色④破片		踏碇C式。
91		2号溝川遺址土中	①B 胎②良好③明褐色④破片	折り返し状の口縁下に多数竹管外側の角押文を3条巡らせ、以下にR L 縦文を横位に施文。波状口縁。	踏碇式。
92		4区1住埋没土中	①D 胎②良好③浅黄褐色④破片	沈線垂直文と縦位施文のR L 縦文を有する。	加曾利E 3式。
93		不明	①D 胎②良好③褐色④破片	口唇下に凹線を巡らせ、0段3条R L 縦文を横位施文。	加曾利E 3式。
94	口 37.8	2区51住埋没土中	①D 胎②良好③浅黄褐色④口縁部～胴部上位迄	口唇下に無文帯を置いて横位の微隆起線文を施す。縦文はL R の縦位施文。外面に塚状炭化物が付着。	加曾利E 4式。
95	底( 8.0)	不明	①B 胎②良好③鈍い褐色④破片	外面は無文で、内面は被熱によるかなりの剥離。	加曾利E 3式。
96	口(35.6)	2区8住埋没土中	①D 胎②良好③鈍い黄褐色④口縁部～胴部上位迄	無文土器で、内外面ともに口縁部は横位に、胴部は縦位に研磨されている。	堀之内1式。
97	口(21.2)	2区7住埋没土中	①C 胎②良好③浅黄褐色④破片	無文土器。4単位の波状口縁で、波頂部は内外面で交互に折り重なり、実文連続沈文が施される。外面は横位の置無状の整形痕が認められる。	堀之内1式。
98	底(10.0)	2区30・40住埋没土中	①G 胎②良好③明褐色④破片	外面は無文で、底面に1本超え1本潜りのアジロ痕が存在する。内面は横位に研磨される。	堀之内式。
99		1区13住埋没土中	①D 胎②良好③鈍い褐色④破片	横位の沈線区画文の下位に縦位の条線文を施す。内面は横位に研磨され、外面に塚状炭化物が付着。	加曾利B式。



## 石器の計測値一覧表

### 第1文化層

検出番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第5図-1	鯨貝剣	9.1	4.9	51.81	黒安	
	2 使 剣	7.1	3.9	21.60	黒安	

### 第II文化層

検出番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第6図-1	ナイフ	3.1	1.7	1.85	黒曜石	

### 第III文化層

検出番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第10図-1	尖 a	5.4	3.6	28.73	黒 頁	8住埋土
	2 尖 a	5.4	3.6	13.46	黒 頁	8住埋土
	3 尖 a	6.7	2.3	15.25	黒 頁	8住埋土
	4 尖 a	5.5	2.8	19.32	黒 頁	
	5 尖 b	9.3	3.8	52.63	黒安	
	6 尖 a	4.8	2.6	11.35	黒 頁	
第11図-1	尖 a	8.0	2.9	25.10	黒 頁	
	2 尖 a	7.7	3.2	31.27	黒 頁	
	3 尖 a	7.4	2.9	27.55	黒 頁	
	4 尖 a	5.9	3.3	24.80	黒 頁	8住埋土
	5 a	6.0	2.9	15.91	黒 頁	
	6 尖 a	5.4	3.0	15.10	黒 頁	8住埋土
第12図-1	尖 a	8.7	2.9	23.50	黒 頁	8住埋土
	2 尖 a	8.6	3.6	39.60	黒 頁	2点接合
	3 尖 a	8.5	3.1	38.92	黒安	2点接合
	4 尖 a	7.3	3.0	18.36	黒 頁	8住埋土
第13図-1	尖 a	2.9	2.7	6.02	黒 頁	
	2 尖 a	2.4	2.4	1.82	黒 頁	
	3 尖 a	1.5	1.9	2.09	黒 頁	
	4 尖 a	1.3	1.5	0.87	黒 頁	
	5 尖 a	5.0	3.6	23.84	黒安	
	6 尖 a	4.6	2.7	11.15	黒 頁	
	7 尖 a	7.1	3.9	37.23	黒 頁	8住埋土
	8 尖 a	5.3	4.0	34.04	黒 頁	8住埋土
第14図-1	尖 a	11.9	4.3	62.70	黒 頁	3点接合
	2 尖 a	10.0	4.8	84.17	黒 頁	
	3 尖 a	6.1	3.7	28.19	黒 頁	8住埋土
	4 尖 a	8.0	4.1	24.04	黒 頁	
第15図-1	尖 a	12.0	3.6	98.18	黒 頁	2点接合
	2 尖 a	4.8	2.9	23.67	黒 頁	
	3 尖 a	9.6	4.8	98.45	黒 頁	
	4 尖 a	8.9	4.2	85.92	黒 頁	
	5 尖 a	8.4	4.1	71.34	黒 頁	
第16図-1	尖 a	7.5	4.4	53.52	黒 頁	8住埋土
	3 尖 a	7.0	5.4	61.52	黒 頁	
	4 尖 a	7.7	4.6	67.96	黒 頁	
	1 尖 a	5.8	10.5	185.62	黒安	
第17図-1	尖 a	14.5	5.9	268.40	黒 頁	
	2 尖 b	13.9	4.3	104.43	黒 頁	2点接合
第18図-1	尖 b	4.2	3.9	26.77	黒 頁	
	3 尖 b	6.8	4.7	77.28	黒 頁	8住埋土
	2 尖 b	9.3	4.6	116.24	黒 頁	
第19図-1	尖 b	6.9	4.7	74.49	黒 頁	

検出番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第20図-1	打 弁	8.2	4.2	118.13	黒 頁	
	2 有基尖	4.3	1.8	4.13	黒 頁	
第21図-1	操 器	5.5	3.6	42.44	黒安	
第22図-1	削 器	8.4	7.1	97.24	黒 頁	
	2 削 器	9.5	5.1	61.31	黒 頁	
	3 削 器	9.1	7.9	132.82	黒 頁	
第23図-1	削 器	10.7	8.5	261.20	黒 頁	
	2 削 器	6.2	7.8	139.37	黒 頁	8住埋土
第24図-1	削 器	6.1	12.1	135.59	黒 頁	
	2 削 器	6.7	3.8	55.69	黒 頁	8住埋土
	3 削 器	6.6	7.5	105.71	黒 頁	
第25図-1	削 器	4.2	7.2	47.62	黒 頁	
	2 加 刺	3.9	8.4	44.99	黒 頁	
	3 加 刺	3.4	5.9	15.34	黒 頁	
	4 加 刺	4.6	3.8	16.30	黒 頁	
	5 加 刺	4.5	6.4	83.74	黒 頁	8住埋土
第26図-1	加 刺	5.9	2.5	26.66	黒 頁	
	2 加 刺	2.6	1.9	2.53	黒 頁	
	3 加 刺	2.7	2.4	9.86	黒 頁	
	4 加 刺	7.0	2.4	44.36	黒 頁	
	5 加 刺	7.7	6.5	80.36	黒 頁	
第27図-1	加 刺	8.2	6.2	157.99	黒 頁	8住埋土
	2 加 刺	4.9	5.5	62.82	黒 頁	
第28図-1	使 刺	7.8	6.0	69.99	黒 頁	
	2 使 刺	7.3	6.4	26.82	黒 頁	
	3 使 刺	4.7	4.7	16.99	黒 頁	
	4 使 刺	6.3	7.1	50.50	黒 頁	
第29図-1	使 刺	3.6	5.4	15.60	黒 頁	
	2 使 刺	2.6	5.7	11.04	黒 頁	
	3 使 刺	3.7	4.6	6.98	黒 頁	
	4 使 刺	4.1	5.8	16.10	黒 頁	
	5 使 刺	2.3	4.2	89.75	黒 頁	
	6 使 刺	5.5	8.7	60.59	黒 頁	
第30図-1	使 刺	4.2	5.7	17.55	黒 頁	
	2 使 刺	4.5	7.1	35.06	黒 頁	
	3 使 刺	4.1	7.8	42.82	黒 頁	
	4 使 刺	1.6	2.5	2.27	黒 頁	
	5 使 刺	5.9	7.8	49.69	黒 頁	
第31図-1	使 刺	2.5	2.6	4.20	黒 頁	
	2 使 刺	2.2	2.2	2.18	黒 頁	
	3 使 刺	4.9	2.3	10.03	黒 頁	
第32図-1	使 刺	4.8	2.5	6.17	黒 頁	
	5 使 刺	5.9	4.0	12.46	黒 頁	
	6 使 刺	5.8	4.8	15.11	黒 頁	
	7 使 刺	5.2	4.0	24.36	黒 頁	
	8 使 刺	7.9	3.6	25.12	黒 頁	8住埋土
	削 片	5.5	6.3	55.13	黒安	
第33図-1	削 片	4.9	7.5	52.10	黒 頁	
	削 片	8.4	4.7	52.88	黒安	
	削 片	5.5	6.3	55.13	黒安	
第34図-1	石核 b	10.3	7.3	323.80	黒 頁	
	2 石核 b	9.1	5.3	156.32	黒 頁	8住埋土
第35図-1	石核 b	12.4	8.0	415.40	黒 頁	
	2 石核 b	8.9	8.5	279.60	黒 頁	8住埋土
第36図-1	石核 a	13.4	8.7	807.80	黒 頁	

石器の計測値一覧表

採掘番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考	
第36回	1	砂片	1.4	1.6	0.98	黒頁	
	2	砂片	1.6	1.5	1.17	黒頁	
	3	砂片	1.6	1.3	0.45	黒頁	
	4	砂片	1.8	2.8	1.52	黒頁	
	5	砂片	1.7	1.8	0.83	黒頁	
	6	砂片	1.6	1.5	0.64	黒頁	
	7	砂片	2.0	1.4	0.79	黒頁	
	8	砂片	1.7	1.9	0.65	黒頁	
	9	砂片	2.1	1.2	0.45	黒頁	
	10	砂片	2.0	1.4	0.68	黒頁	
	11	砂片	1.9	1.3	0.62	黒頁	
	12	砂片	1.3	2.0	0.99	黒頁	
	13	砂片	2.3	1.2	0.48	黒頁	
	14	砂片	2.3	1.8	0.89	黒頁	
	15	砂片	2.0	1.4	0.81	黒頁	
	16	砂片	2.4	1.3	0.78	黒頁	
	17	砂片	2.1	1.0	0.52	黒頁	
	18	砂片	2.0	1.3	0.86	黒頁	
	19	砂片	2.2	1.3	0.83	黒頁	
	20	砂片	2.2	1.6	1.68	黒頁	
	21	砂片	2.4	1.2	0.68	黒頁	
	22	砂片	2.4	1.3	0.96	黒頁	
	23	砂片	2.7	1.8	1.70	黒頁	
	24	砂片	2.4	1.8	1.05	黒頁	
第37回	1	砂片	3.1	1.2	1.22	黒頁	
	2	砂片	2.9	1.4	1.27	黒頁	
	3	砂片	3.3	2.0	2.09	黒頁	
	4	砂片	3.0	1.5	1.26	黒頁	
	5	砂片	2.1	1.4	0.56	黒頁	
	6	砂片	3.1	1.4	0.86	黒頁	
	7	砂片	3.5	2.2	3.27	黒頁	8住埋土
	8	砂片	4.5	1.5	3.31	黒頁	8住埋土
第38回	1	礫	8.2	6.8	141.79	溶凝	2点接合
	2	礫石	6.1	4.6	84.64	粗安	2点接合
	3	礫石	13.3	6.5	623.50	石閃	
	4	礫石	7.4	3.8	70.84	頁岩	2点接合
	5	礫石	11.7	8.2	978.90	粗安	
第39回	1	礫石	10.1	6.5	377.90	粗安	
	2	礫石	12.0	11.5	959.90	粗安	
	3	礫石	8.6	6.9	184.10	粗安	
	1	磨石	15.2	8.7	1435.8	粗安	

第III文化層 (接合資料)

採掘番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
接合資料-64 (第40回)						
1	割片	3.5	1.6	5.00	黒頁	8住埋土
2	割片	4.2	4.5	11.32	黒頁	8住埋土
3	尖 a	8.4	4.0	71.34	黒頁	
接合資料-66 (第40回)						
1	砂片	4.5	1.8	4.97	黒頁	
2	尖 a	9.6	4.8	71.34	黒頁	
接合資料-65 (第40回)						
1	砂片	3.2	1.8	1.45	黒頁	
2	尖 a	10.0	4.8	84.17	黒頁	
接合資料-69 (第40回)						
1	砂片	3.2	2.6	4.02	黒頁	
	加刺	4.0	3.3	17.87	黒頁	
	尖 a	8.0	4.3	40.80	黒頁	8住埋土
接合資料-70 (第41回)						
1	割片	2.7	2.1	2.87	黒安	
2	尖 a	5.8	10.5	185.62	黒安	
接合資料-52 (第41回)						
	石核	5.6	6.6	68.81	黒頁	
	加刺	6.8	7.0	97.23	黒頁	
接合資料-51 (第41回)						
1	割片	3.6	4.6	10.00	黒頁	
	石核	8.5	10.0	348.00	黒頁	
	石核	8.2	6.6	182.36	黒頁	
接合資料-68 (第42回)						
	尖 b	7.4	4.4	55.11	黒頁	
	尖 b	7.0	3.9	49.32	黒頁	
接合資料-5 (第42回)						
1	砂片	2.3	2.1	2.49	黒頁	
2	尖 a	5.4	4.0	34.04	黒頁	8住埋土
3	尖 a	6.8	4.7	77.28	黒頁	8住埋土
接合資料-53 (第42回)						
	石核 c	4.3	6.9	67.53	黒頁	
	石核 c	5.3	6.1	83.21	黒頁	8住埋土
接合資料-15 (第43回)						
1	加刺	4.1	9.3	37.08	黒頁	
2	割片	2.9	4.2	5.71	黒頁	
3	割片	4.2	2.7	5.74	黒頁	8住埋土
4	砂片	2.2	3.3	3.12	黒頁	
5	尖 a	8.0	4.1	24.04	黒頁	
6	尖 a	6.1	7.3	28.19	黒頁	8住埋土
接合資料-16 (第44回)						
1	割片	7.3	8.8	60.24	黒頁	8住埋土
2	割片	3.5	8.7	28.77	黒頁	8住埋土
3	割片	4.9	6.8	64.04	黒頁	
4	割片	2.5	4.7	7.94	黒頁	8住埋土
5	割片	1.6	3.2	3.14	黒頁	
6	尖 a	7.9	4.6	67.94	黒頁	
接合資料-1 (第45回)						
1	割片	3.7	5.5	15.31	黒頁	
2	割片	3.7	3.6	9.37	黒頁	
3	割片	4.2	8.4	39.88	黒頁	
4	割片	2.3	4.3	6.32	黒頁	
5	砂片	2.2	2.8	2.25	黒頁	
接合資料-19 (第45回)						
1	加刺	4.1	6.2	26.03	黒頁	8住埋土
2	割片	4.1	4.9	15.37	黒頁	8住埋土
接合資料-9 (第46回)						
1	便割	5.4	6.0	35.42	黒頁	

標図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
	2 剥片	3.2	5.7	15.50	黒頁	8住埋土
	3 使剥	6.9	5.5	80.72	黒頁	8住埋土
接合資料-73 (第46図)	1 剥片	6.1	5.2	26.11	黒安	
	2 使剥	5.2	5.0	23.08	黒安	
	3 砕片	2.3	3.2	3.50	黒安	
接合資料-60 (第47図)	1 剥片	6.3	4.9	54.27	黒頁	8住埋土
	2 剥片	2.1	3.4	3.76	黒頁	
	剥片	3.8	4.1	10.68	黒頁	
	3 剥片	4.5	4.6	13.77	黒頁	
接合資料-40 (第47図)	1 剥片	3.0	3.1	6.97	黒頁	
	剥片	4.7	5.0	14.58	黒頁	8住埋土
	2 使剥	4.9	8.0	27.75	黒頁	
	3 剥片	3.2	4.8	6.52	黒頁	
接合資料-10 (第48図)	1 砕片	3.2	1.6	1.75	頁岩	
	2 砕片	1.6	2.7	1.57	頁岩	8住埋土
接合資料-8 (第48図)	1 砕片	3.2	2.4	4.34	黒頁	
	2 剥片	3.9	5.0	16.96	黒頁	
	3 剥片	6.6	5.1	33.99	黒頁	
接合資料-50 (第48図)	1 剥片	3.7	4.9	9.01	黒頁	
	2 剥片	3.2	3.9	6.26	黒頁	
接合資料-41 (第49図)	1 剥片	2.5	2.9	2.69	黒頁	
	2 剥片	3.9	4.6	15.61	黒頁	
	3 剥片	3.9	5.0	15.40	黒頁	
	4 砕片	1.8	2.8	1.84	黒頁	
	5 剥片	4.4	5.9	16.75	黒頁	8住埋土
接合資料-30 (第49図)	1 剥片	4.2	7.2	41.41	黒頁	
	2 使剥	4.7	7.6	35.15	黒頁	
	3 砕片	1.5	2.1	0.63	黒頁	
接合資料-3 (第50図)	1 砕片	2.2	2.0	2.36	黒頁	
	2 剥片	2.7	4.3	8.05	黒頁	8住埋土
	3 剥片	3.7	4.4	15.64	黒頁	
	4 剥片	2.4	3.0	2.08	黒頁	8住埋土
	5 剥片	4.8	3.9	11.57	黒頁	
	6 剥片	4.2	3.1	6.60	黒頁	
接合資料-18 (第50図)	1 剥片	2.3	3.7	7.61	黒頁	
	2 加剥	2.8	4.4	10.11	黒頁	
接合資料-24 (第50図)	1 剥片	3.1	3.0	3.74	黒頁	
	2 砕片	2.6	2.7	2.43	黒頁	
接合資料-31 (第51図)	1 剥片	3.8	4.5	9.32	黒頁	
	2 剥片	3.6	3.2	9.15	黒頁	
	3 砕片	1.7	1.9	1.28	黒頁	
接合資料-23 (第51図)	1 磨器	6.3	4.0	24.79	黒頁	
	2 剥片	5.5	4.3	18.11	黒頁	
接合資料-22 (第51図)	1 剥片	6.0	2.7	8.53	黒頁	
	2 剥片	5.2	2.2	4.57	黒頁	
	3 使剥	5.8	2.2	6.12	黒頁	

標図番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
接合資料-61 (第52図)	1 剥片	4.0	4.2	7.66	黒頁	
	2 剥片	4.3	4.9	14.39	黒頁	
接合資料-28 (第52図)	1 剥片	3.7	7.7	34.80	黒頁	8住埋土
	2 剥片	3.5	6.4	29.73	黒頁	
接合資料-38 (第52図)	1 剥片	4.0	6.0	11.60	黒頁	
	2 剥片	5.4	5.4	28.26	黒頁	8住埋土
接合資料-39 (第53図)	1 剥片	3.5	8.5	17.86	黒頁	
	2 剥片	5.3	7.4	29.18	黒頁	
	3 剥片	5.0	6.5	40.85	黒頁	
接合資料-20 (第53図)	1 使剥	5.4	6.6	29.56	黒頁	
	2 砕片	4.1	3.8	3.07	黒頁	
接合資料-21 (第54図)	1 剥片	3.1	4.2	6.59	黒頁	
	2 剥片	3.9	4.1	7.04	黒頁	
接合資料-34 (第54図)	1 剥片	3.0	3.1	7.65	黒頁	
	剥片	3.7	3.0	7.08	黒頁	
	2 剥片	5.0	4.9	19.21	黒頁	
接合資料-45 (第54図)	1 剥片	4.9	4.7	19.14	黒頁	8住埋土
	2 剥片	3.5	6.8	11.09	黒頁	
	3 剥片	5.2	4.6	11.47	黒頁	
接合資料-4 (第55図)	1 使剥	6.3	6.3	31.91	黒頁	8住埋土
	2 加剥	5.7	6.1	55.03	黒頁	
接合資料-33 (第55図)	1 剥片	3.3	3.9	9.33	黒頁	8住埋土
	剥片	2.8	4.1	5.31	黒頁	
	2 剥片	3.7	4.0	14.58	黒頁	
接合資料-56 (第55図)	1 剥片	3.7	4.7	13.35	黒頁	
	2 剥片	3.9	4.4	11.04	黒頁	
	剥片	2.7	3.3	4.12	黒頁	
接合資料-29 (第56図)	1 剥片	5.0	5.4	19.14	黒頁	
	2 剥片	3.6	6.8	11.09	黒頁	
	3 剥片	5.2	4.6	11.47	黒頁	
接合資料-47 (第56図)	1 剥片	5.2	4.6	16.00	黒頁	
	2 剥片	4.9	4.2	15.74	黒頁	
	3 剥片	4.0	2.3	7.98	黒頁	8住埋土
接合資料-62 (第57図)	1 剥片	6.6	4.2	39.35	黒頁	
	2 剥片	5.6	4.0	17.01	黒頁	
接合資料-2 (第57図)	1 剥片	1.9	1.3	2.58	黒頁	
	砕片	2.1	1.6	0.81	黒頁	
接合資料-25 (第57図)	剥片	2.1	4.6	6.49	黒頁	
	砕片	0.8	1.7	1.32	黒頁	
接合資料-27 (第57図)	使剥	6.6	4.7	33.26	黒頁	
	使剥	5.8	2.1	7.44	黒頁	
接合資料-32 (第57図)	使剥	6.4	4.6	33.26	黒頁	

石器の計測値一覧表

標記番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
接合資料-86 (第58図)	使 剣	5.8	2.1	7.44	黒 頁	
	製 片	2.3	4.0	9.26	黒 頁	
	加 剣	0.9	2.9	1.22	黒 頁	
接合資料-14 (第58図)	1 砕 片	2.3	2.4	2.70	黒 頁	
	削 器	7.5	5.8	94.45	黒 頁	
接合資料-74 (第58図)	1 製 片	8.2	4.6	96.42	黒 安	8住埋土
	2 製 片	6.5	4.0	45.30	黒 安	
	3 石 核	3.2	5.2	35.97	黒 安	
接合資料-11 (第59図)	1 製 片	5.2	2.6	9.89	点 頁	8住埋土
	2 製 片	4.0	3.5	9.78	点 頁	8住埋土
	3 石 核	6.5	6.6	98.41	点 頁	8住埋土
接合資料-26 (第59図)	1 製 片	3.0	3.9	9.73	黒 頁	
	石 核	5.7	9.0	241.41	黒 頁	
	製 片	3.2	3.8	29.46	黒 頁	8住埋土
接合資料-100 (第60図)	1 製 片	5.0	4.9	29.13	黒 頁	8住埋土
	石核 <sup>a</sup>	5.2	13.7	549.70	黒 頁	

縄文時代の石器 (住居)

標記番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考	
第72図-1	加 剣	3.5	2.6	5.00	珉 頁	(19住埋土)	
第77図-9	加 剣	7.4	6.6	74.00	頁 岩	(49住埋土)	
	加 剣	7.9	6.5	101.60	頁 岩	(49住埋土)	
	加 剣	3.2	4.8	14.10	黒 頁	(49住埋土)	
	加 剣	5.4	5.6	33.00	頁 岩	(49住埋土)	
	加 剣	4.3	6.2	25.00	頁 岩	(49住埋土)	
	加 剣	5.7	5.1	39.00	黒 頁	(49住埋土)	
	使 剣	6.3	8.0	79.00	黒 頁	(49住埋土)	
	使 剣	4.9	4.6	21.00	黒 頁	(49住埋土)	
	使 剣	10.4	3.8	21.00	黒 頁	(49住埋土)	
	使 剣	5.3	7.1	25.00	黒 頁	(49住埋土)	
	使 剣	5.2	6.7	25.00	黒 頁	(49住埋土)	
	第78図-1	磨 弁	14.6	6.3	436.00	黒 安	(49住埋土)
		打 弁	8.2	5.8	59.00	黒 頁	(49住埋土)
		石 核	8.5	6.7	193.00	黒 頁	(49住埋土)
打 弁		8.6	6.2	64.00	黒 頁	(49住埋土)	
5 打 弁	8.6	5.2	55.00	黒 頁	(49住埋土)		
6 砥 石	6.7	4.1	35.00	砂 岩	(49住埋土)		
7 砥 石	4.6	3.4	14.00	砂 岩	(49住埋土)		
8 砥 石	3.4	1.8	3.70	砂 岩	(49住埋土)		
9 大凹石	30.0	22.3	930.00	粗 安	(49住埋土)		
第80図-32	加 剣	2.9	2.0	2.50	黒 頁	(54住埋土)	
	加 剣	2.5	2.1	4.20	黒 頁	(54住埋土)	
	打 弁	9.4	5.3	113.00	黒 頁	(54住埋土)	
第85図-1	削 器	9.5	7.6	243.00	輝緑岩	(4住柱礎)	
	削 器	5.7	7.5	41.00	黒 安	(4住埋土)	
	削 器	4.4	1.5	2.10	黒曜石	(4住埋土)	
	削 器	8.1	5.2	63.00	点 頁	(4住埋土)	
	削 器	3.6	4.9	25.00	赤 珉	(4住埋土)	
	削 器	3.7	5.1	14.00	頁 岩	(4住埋土)	
	削 器	5.6	6.0	93.00	黒 頁	(4住埋土)	
	使 剣	3.8	2.7	6.30	頁 岩	(4住埋土)	
	使 剣	8.9	5.0	38.00	頁 岩	(4住埋土)	
	使 剣	7.5	6.9	55.00	黒 頁	(4住埋土)	

標記番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考	
第86図-1	11 使 剣	5.3	4.6	21.00	黒 頁	(4住埋土)	
	12 使 剣	6.0	6.1	31.00	頁 岩	(4住埋土)	
	13 石 核	9.0	9.2	316.00	黒 岩	(4住埋土)	
	14 打 弁	18.0	6.3	192.00	輝緑岩	(4住床直)	
	2 磨 石	11.1	8.3	487.00	石 閃	(4住床直)	
	3 凹 石	10.9	7.9	505.00	石 閃	(4住埋土)	
	4 凹 石	11.7	7.5	549.00	粗 安	(4住埋土)	
	5 凹 石	11.3	9.0	784.00	粗 安	(4住床直)	
	6 磨 石	9.6	6.5	328.00	粗 安	(4住埋土)	
	第87図-1	1 磨 石	8.7	7.1	298.00	粗 安	(4住埋土)
		2 スタンブ	11.9	9.0	853.00	粗 安	(4住埋土)
		3 凹 石	14.7	16.5	353.00	粗 安	(4住埋土)
		4 砥 石	12.9	9.0	862.00	粗 安	(4住埋土)
第88図-1	1 石 皿	15.2	12.8	309.00	粗 安	(4住床直)	
	2 石 皿	21.1	14.5	520.00	粗 安	(4住埋土)	
第92図-13	3 砥 石	6.3	3.0	25.00	砂 岩	(4住埋土)	
	4 粗石製品	5.0	4.6	10.90	輝 石	(4住床直)	
	加 剣	6.9	6.8	82.00	黒 頁	(2住埋土)	
	14 石 匙	8.7	4.9	54.00	黒 頁	(2住埋土)	
15 加 剣	4.9	6.5	19.00	黒 頁	(2住埋土)		
16 加 剣	3.5	3.8	15.00	黒 頁	(2住埋土)		
17 加 剣	5.6	7.1	39.00	頁 岩	(2住埋土)		
18 加 剣	3.2	3.0	10.00	チ	(2住埋土)		
19 加 剣	5.8	4.4	47.00	砂 岩	(2住埋土)		
20 使 剣	1.8	4.3	4.00	頁 岩	(2住埋土)		
21 製 片	3.1	4.1	7.50	黒 頁	(2住埋土)		
22 打 弁	10.2	5.8	85.00	黒 頁	(2住埋土)		
23 打 弁	6.5	3.8	51.00	黒 頁	(2住埋土)		
第93図-1	1 打 弁	14.6	8.3	742.00	黒 頁	(2住室内)	
	2 凹 石	10.6	7.8	404.00	粗 安	(2住埋土)	
	3 凹 石	11.7	8.0	522.00	粗 安	(2住埋土)	
	4 凹 石	8.1	7.5	373.00	粗 安	(2住埋土)	
	5 磨 石	10.7	9.9	690.00	粗 安	(2住埋土)	
	6 凹 石	10.8	6.2	342.00	粗 安	(2住埋土)	
	7 凹 石	8.0	5.8	189.00	粗 安	(2住埋土)	
	第94図-1	1 凹 石	9.2	8.3	443.00	粗 安	(2住埋土)
		2 凹 石	9.5	6.5	304.00	粗 安	(2住埋土)
		3 凹 石	12.0	9.1	786.00	粗 安	(2住埋土)
4 磨 石	11.7	6.6	135.00	粗 安	(2住埋土)		
5 凹 石	9.9	9.5	869.00	粗 安	(2住埋土)		
6 磨 石	16.0	5.6	570.00	輝緑岩	(2住埋土)		
第95図-1	1 磨 石	11.2	8.9	612.00	石 閃	(2住埋土)	
	2 磨 石	8.6	6.0	402.00	粗 安	(2住埋土)	
	3 石 皿	16.9	17.2	1583.00	粗 安	(2住埋土)	
	4 石 皿	10.6	10.4	455.00	粗 安	(2住埋土)	
	5 砥 石	8.0	7.8	162.00	粗 安	(2住埋土)	
6 石 皿	9.2	5.8	171.00	粗 安	(2住埋土)		
7 石 皿	8.2	7.3	168.00	粗 安	(2住埋土)		
第98図-5	加 剣	9.7	4.7	50.00	黒 安	(7住埋土)	
	6 加 剣	5.7	9.2	74.00	粗 安	(7住床直)	
第99図-1	1 使 剣	3.6	6.4	27.00	かんら	(7住埋土)	
	2 打 弁	7.0	5.7	45.00	頁 岩	(7住床直)	
	3 凹 石	9.6	6.8	455.00	石 閃	(7住床直)	
	4 凹 石	8.5	7.7	366.00	粗 安	(7住埋土)	
	5 砥石(赤)	9.6	6.4	130.00	砂 岩	(7住埋土)	
	6 石 皿	19.7	25.5	320.00	ひん岩	(7住埋土)	

縄文時代の石器（土壌）

探検番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第107図-1	1 使 刺	5.4	5.2	23.00	黒頁	(7土壌)
	2 使 刺	6.2	5.6	23.00	黒頁	(11土壌)
	3 打 弁	11.1	5.8	191.00	黒頁	(11土壌)
	4 加 刺	3.2	5.7	18.00	頁岩	(12土壌)

縄文時代の石器（集石）

探検番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第109図-1	1 石 鏃	1.6	1.4	0.48	黒曜石	(集石)
	2 石 鏃	2.3	2.0	1.17	黒曜石	(N-5 G)
	3 使 刺	4.5	8.2	37.87	黒頁	(P-5 G)
	4 刺 片	4.1	7.6	26.04	黒頁	(O-4 G)
	5 使 刺	5.4	5.2	39.89	頁岩	(N-4 G)
	6 刺 片	5.0	4.5	21.73	黒頁	(N-5 G)
	7 削 器	8.5	6.8	112.24	灰安	(O-5 G)
	8 石 核	6.1	6.8	287.00	黒頁	(M-5 G)
第110図-1	1 石 核	15.3	10.1	991.20	黒頁	(集石)
	2 礫 石	10.9	7.7	571.70	石閃	(P-5 G)
	3 磨 石	5.6	10.3	378.80	粗安	(N-4 G)

包含層出土の石器（3区）

探検番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第121図-1	1 石 鏃	2.8	1.7	1.50	チ	
	2 石 鏃	1.6	1.4	0.93	チ	
	3 楔 形	2.3	2.0	3.10	チ	
	4 石 鏃	1.6	1.2	0.50	チ	
	5 石 鏃	1.6	1.5	0.40	チ	
	6 楔 形	2.2	2.2	3.30	チ	
第122図-1	1 打 弁	10.8	4.1	49.00	黒頁	
	2 打 弁	9.4	4.4	44.00	黒頁	
	3 打 弁	11.0	5.9	110.00	灰安	
	4 打 弁	6.1	3.8	27.00	黒頁	
	5 打 弁	7.2	3.6	38.77	灰安	
	6 打 弁	5.1	3.8	35.00	灰安	
	7 打 弁	2.4	3.4	52.00	黒頁	
	8 打 弁	9.7	3.9	85.00	灰安	
	9 打 弁	9.3	4.6	131.00	細安	
	10 打 弁	8.2	5.3	93.00	黒頁	
	11 打 弁	4.8	1.5	27.00	黒頁	
	12 打 弁	9.7	3.6	63.00	緑片	
	13 打 弁	7.1	4.2	55.00	黒頁	
	14 打 弁	8.5	4.6	71.00	黒頁	
第123図-1	1 打 弁	6.1	5.1	55.00	黒頁	
	2 打 弁	4.5	3.9	36.00	黒頁	
	3 打 弁	2.4	2.7	6.00	灰安	
	4 打 弁	6.6	5.8	53.83	黒頁	
	5 打 弁	2.6	3.8	13.00	黒頁	
	6 打 弁	5.8	7.3	187.00	黒頁	
	7 打 弁	11.7	6.1	379.00	細安	
	8 打 弁	10.9	7.0	259.00	黒頁	
	9 打 弁	10.0	5.3	146.00	黒頁	
	10 打 弁	7.9	5.7	139.00	黒頁	
第124図-1	1 打 弁	8.4	6.4	107.00	黒頁	
	2 打 弁	9.5	5.4	89.00	黒頁	
	3 打 弁	12.2	6.1	238.50	灰安	2点接合
	刺 片	3.9	8.1	33.46	灰安	

探検番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考	
第125図-1	刺 片	1.8	3.3	3.57	灰安		
	刺 片	2.2	2.7	3.25	灰安		
	4 打 弁	9.0	4.6	41.00	黒頁		
	5 打 弁	10.2	6.9	142.24	黒頁		
	刺 片	6.5	3.2	14.38	黒頁		
	刺 片	5.5	2.6	8.63	黒頁		
	刺 片	2.5	2.7	2.97	黒頁		
	6 打 弁	6.4	5.1	39.00	黒頁		
	7 打 弁	13.6	6.1	299.40	黒頁	2点接合	
	刺 片	5.9	3.0	22.94	黒頁		
	刺 片	2.7	3.6	7.73	黒頁		
	刺 片	3.6	3.1	9.90	黒頁		
	第125図-1	磨 石	13.6	4.6	245.00	灰安	
	2 磨 石	11.3	3.9	157.00	灰安		
3 磨 石	15.4	4.2	185.00	灰安			
4 磨 石	5.4	4.9	69.00	黒頁			
5 磨 石	10.9	7.2	134.00	黒頁			
6 磨 石	24.0	10.2	1727.00	灰安			
7 磨 石	7.3	5.4	134.00	黒頁			
8 磨 石	7.5	4.7	123.00	赤			
第126図-1	1 削 器	11.6	3.4	131.00	黒頁		
	2 削 器	11.4	3.6	48.00	黒頁		
	3 削 器	4.2	8.6	67.00	黒頁		
	4 削 器	7.4	8.4	207.00	黒頁		
	5 削 器	10.3	6.3	162.00	黒頁		
	6 削 器	8.0	7.3	176.00	黒頁		
	7 削 器	7.3	7.5	141.00	黒頁		
	8 削 器	10.7	12.9	345.00	黒頁		
第127図-1	1 削 器	2.9	3.5	9.10	チ		
	2 削 器	1.5	2.0	1.20	チ		
	3 削 器	1.5	1.7	1.00	チ		
	4 削 器	10.2	7.1	161.00	黒頁		
第128図-1	5 削 器	5.5	3.7	27.00	黒安		
	6 削 器	4.1	3.5	21.33	黒頁		
	7 削 器	7.3	4.2	39.00	黒頁		
	8 削 器	7.9	5.9	87.00	黒頁		
	9 削 器	4.5	6.2	58.00	黒頁		
	10 削 器	7.7	3.9	47.00	黒頁		
	11 削 器	6.9	5.8	62.00	黒頁		
	12 削 器	5.7	6.7	72.00	黒頁		
	13 削 器	11.7	5.1	126.00	黒頁	2点接合	
	14 削 器	6.2	5.1	67.00	黒頁		
	第128図-1	1 削 器	10.9	7.9	234.00	黒頁	
	2 削 器	5.4	8.9	68.00	黒頁		
	3 削 器	5.8	7.4	93.00	黒頁		
	4 削 器	8.1	5.9	115.00	黒頁		
5 削 器	6.0	9.1	87.86	黒頁			
6 削 器	7.6	7.1	123.00	黒頁			
7 削 器	5.1	8.9	111.00	黒頁			
8 削 器	6.2	5.8	78.00	黒頁			
9 削 器	6.4	12.0	90.00	黒頁			
10 削 器	6.2	7.9	62.00	黒頁			
11 削 器	4.3	6.0	54.00	黒頁			
第129図-1	1 削 器	3.4	5.7	30.00	黒頁		
	2 削 器	4.4	6.1	22.00	黒頁		
	3 削 器	5.4	7.5	78.00	黒頁		
	4 削 器	5.3	5.6	40.00	黒頁		
	5 削 器	6.0	9.4	80.00	黒頁		
	6 削 器	4.7	8.5	77.00	細安		

石器の計測値一覧表

押出番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備 考
7	削器	7.6	6.6	122.00	黒頁	
8	削器	6.2	9.6	58.00	黒頁	
9	削器	4.0	5.5	34.00	黒頁	
10	使刺	7.7	8.8	62.00	黒頁	
11	削器	6.8	10.4	148.00	黒頁	2点接合
第130図-1	削器	8.5	9.5	69.00	黒頁	
2	削器	8.6	9.5	287.00	黒頁	
3	削器	11.0	5.6	135.00	黒頁	3点接合
4	削器	6.0	9.7	104.00	チ	
5	使刺	2.1	2.6	2.40	黒頁	
6	使刺	5.7	3.5	30.00	黒頁	2点接合
7	使刺	7.7	6.7	2.90	チ	
8	使刺	2.5	1.4	2.00	チ	
9	使刺	7.5	3.9	45.00	黒頁	
10	使刺	5.6	6.2	51.00	黒頁	
11	使刺	4.5	2.2	4.90	チ	
12	使刺	7.3	5.0	43.00	黒頁	
13	使刺	6.3	5.3	46.00	黒頁	
14	使刺	5.7	5.7	51.00	黒頁	
第131図-1	使刺	8.7	7.0	59.00	黒頁	
2	使刺	4.9	9.7	35.00	黒頁	
3	使刺	6.5	5.8	16.89	黒頁	
4	使刺	6.3	7.3	33.00	黒頁	
5	使刺	2.9	7.8	19.12	黒頁	
6	使刺	5.7	6.8	46.00	黒頁	
7	使刺	5.9	6.1	39.00	黒頁	
8	使刺	8.4	6.8	106.18	黒頁	
9	使刺	3.5	7.0	78.00	黒頁	
10	使刺	5.2	7.9	36.00	黒頁	
11	使刺	5.1	7.2	29.00	黒頁	
12	使刺	7.8	7.8	74.00	黒頁	
13	使刺	4.5	6.7	48.00	黒頁	
第132図-1	石核	5.7	9.1	176.00	黒頁	
2	石核	4.5	5.7	89.00	黒頁	
3	石核	6.0	6.0	119.00	黒頁	
4	石核	5.5	5.8	109.00	黒頁	
5	石核	148.5	9.0	933.00	黒頁	
6	石核	6.4	5.8	80.00	黒頁	
7	石核	5.0	10.8	196.00	黒頁	
8	石核	8.6	14.7	788.00	黒頁	
第133図-1	三角鏃	16.5	7.0	635.00	黒頁	
2	三角鏃	19.0	8.3	826.00	黒頁	
3	三角鏃	16.4	7.0	650.00	黒頁	
4	三角鏃	12.1	7.3	693.00	黒頁	
第134図-5	三角鏃	12.7	6.7	350.00	黒頁	
6	三角鏃	10.6	6.0	373.00	黒頁	
7	三角鏃	12.1	5.7	381.00	黒頁	
8	三角鏃	9.7	5.7	281.00	黒頁	
9	三角鏃	14.8	7.3	655.00	黒頁	
10	三角鏃	11.0	6.6	323.60	黒頁	
11	調刺	6.8	6.9	163.39	黒頁	
第135図-1	三角鏃	11.0	7.0	518.00	砂岩	
2	三角鏃	10.0	8.0	260.00	黒頁	
3	三角鏃	9.9	6.5	281.00	黒頁	
4	三角鏃	9.0	6.8	437.00	黒頁	
5	三角鏃	8.5	6.3	374.00	黒頁	
6	三角鏃	5.4	7.8	186.00	黒頁	
7	三角鏃	8.1	5.4	280.00	黒頁	
8	三角鏃	10.2	6.2	268.00	黒頁	
第136図-1	三角鏃	6.8	3.3	124.31	黒頁	

押出番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備 考
2	三角鏃	9.6	6.4	201.71	黒頁	
3	三角鏃	7.8	5.0	221.00	黒頁	
4	三角鏃	8.8	6.1	304.20	黒頁	
5	三角鏃	5.8	5.4	56.00	黒頁	
6	三角鏃	6.9	7.2	344.00	黒頁	
7	三角鏃	7.1	4.7	141.91	黒頁	
8	三角鏃	7.8	7.7	351.00	黒頁	
第137図-1	調刺	6.7	6.5	88.00	黒頁	
2	調刺	5.3	5.1	66.02	黒頁	
3	調刺	6.1	3.2	22.72	黒頁	
4	調刺	5.1	2.9	15.36	黒頁	
5	調刺	5.2	6.5	105.00	黒頁	
6	調刺	6.6	6.3	73.67	黒頁	2点接合
7	調刺	5.0	4.3	22.92	黒頁	
8	調刺	6.0	5.1	49.00	黒頁	
9	調刺	5.9	5.1	42.00	黒頁	
10	調刺	4.5	3.7	25.00	黒頁	
11	調刺	4.6	5.2	26.30	黒頁	
12	調刺	4.2	1.6	8.10	黒頁	
13	調刺	5.1	4.2	31.55	黒頁	
14	調刺	4.3	3.5	15.78	黒頁	
15	スタンプ	10.5	6.9	507.00	灰安	
16	スタンプ	9.6	7.3	481.00	石閃	
第138図-1	スタンプ	11.5	5.3	557.00	黒頁	
2	スタンプ	10.0	7.4	502.00	粗安	
3	スタンプ	6.6	3.7	100.00	粗安	
4	スタンプ	8.4	5.5	223.00	粗安	
5	スタンプ	12.4	6.6	585.70	粗安	
6	スタンプ	6.7	6.9	336.00	粗安	
7	スタンプ	12.1	8.2	544.00	粗安	
8	スタンプ	10.3	5.8	344.00	粗安	
第139図-1	スタンプ	9.1	6.9	442.00	粗安	
2	スタンプ	12.7	7.6	366.00	ひん岩	
3	スタンプ	9.0	4.2	210.00	粗安	
4	スタンプ	6.4	5.3	215.00	粗安	
5	スタンプ	11.4	8.0	515.00	粗安	
6	スタンプ	11.1	7.1	420.00	閃緑岩	
7	スタンプ	12.6	7.0	694.00	頁岩	2点接合
第140図-1	スタンプ	12.6	8.3	599.00	粗安	
2	スタンプ	12.8	7.8	648.00	粗安	
3	スタンプ	9.7	10.6	650.00	粗安	
4	スタンプ	12.5	7.9	780.00	粗安	
5	スタンプ	8.6	6.9	368.00	粗安	
第141図-1	磨石	10.4	7.3	390.00	粗安	
2	磨石	6.1	6.1	224.00	粗安	
3	磨石	6.3	5.8	194.00	石閃	
4	磨石	11.5	9.5	872.00	粗安	
5	磨石	9.5	7.3	341.00	粗安	
6	磨石	7.0	6.2	176.00	粗安	
7	磨石	6.4	8.1	261.00	石閃	
8	磨石	6.9	7.2	302.00	粗安	
9	磨石	9.0	6.5	371.00	粗安	
10	磨石	10.1	8.1	419.00	石閃	2点接合
第142図-1	磨石	9.1	7.7	517.00	花崗岩	
2	磨石	10.0	9.4	661.00	粗安	
3	磨石	9.1	8.3	534.00	石閃	
4	石皿	11.1	10.8	689.00	粗安	3点接合
5	石皿	16.9	16.7	1880.00	粗安	
第143図-1	磨石	13.1	7.3	796.00	石閃	
2	磨石	9.7	6.5	380.00	粗安	

押戻番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第144図	3 甃石	11.7	8.1	585.60	粗安	
	4 磨石	15.0	7.1	778.00	石閃	
	5 磨石	17.3	5.4	737.00	石閃	
	6 磨石	8.6	2.5	68.00	石閃	
	1-1 凹石	11.4	9.6	877.40	粗安	
	2 甃石	12.2	8.5	800.00	粗安	
	3 甃石	11.6	8.5	697.00	粗安	
第145図	4 石皿	8.7	7.5	276.00	粗安	
	5 甃石	6.6	4.1	163.00	粗安	
	6 石皿	11.2	7.8	214.00	粗安	
	7 石皿	15.0	9.5	612.00	粗安	
	1-1 磨石	7.0	7.2	236.00	粗安	
	2 磨石	9.3	8.3	565.00	石閃	
	3 磨石	11.7	8.2	677.00	粗安	
第146図	4 凹石	8.7	7.5	396.00	粗安	
	5 凹石	11.3	8.3	778.00	粗安	
	6 凹石	9.6	7.2	360.00	粗安	
	7 凹石	8.7	7.0	447.00	粗安	
	8 凹石	11.0	8.6	587.00	粗安	
	9 凹石	6.4	5.6	221.00	粗安	
	1-1 凹石	13.1	9.5	616.00	粗安	
	2 凹石	9.3	6.8	280.40	粗安	
	3 砥石	4.5	3.5	35.00	凝砂	
	4 砥石	4.7	2.6	24.00	凝砂	
第147図	5 砥石	5.2	5.1	29.00	砂岩	
	6 砥石	4.7	4.4	17.00	粗安	
	7 砥石	4.3	3.4	17.00	粗安	
	8 砥石	3.1	4.2	21.00	砂岩	
	9 砥石	7.1	6.6	45.00	粗安	2点接合
	10 砥石	7.3	4.2	51.00	砂岩	

包含層出土の石器 (1.2.4.5区)

押戻番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考
第151図	1-1 打斧	7.1	3.4	29.00	黒頁	
	2 打斧	5.3	4.3	38.00	黒頁	
	3 打斧	7.3	5.7	58.00	黒頁	
	4 打斧	4.3	2.9	18.00	頁岩	
	5 打斧	7.6	3.9	44.00	黒頁	
	6 打斧	10.1	5.0	131.00	黒頁	
	7 打斧	6.2	3.2	19.00	黒頁	
	8 打斧	7.6	5.1	93.00	黒頁	
	9 打斧	9.7	6.2	84.00	黒頁	
	10 打斧	13.8	8.1	288.00	粗安	
	11 打斧	6.4	4.1	71.00	黒頁	
	12 打斧	13.2	6.6	349.00	黒頁	
第152図	1 礮器	11.9	7.7	492.00	黒頁	
	2 礮器	12.2	6.3	396.00	夾支	
	3 加刺	9.4	9.2	219.00	黒頁	
	4 加刺	11.3	6.1	159.00	黒頁	
	5 加刺	9.7	9.9	388.00	黒頁	
	6 加刺	9.1	5.4	103.00	黒頁	
	7 加刺	6.0	8.2	36.00	黒頁	
	8 加刺	6.7	10.1	135.00	点頁	
	9 加刺	10.9	6.7	179.00	黒頁	
第153図	1-1 加刺	6.1	4.0	26.00	黒頁	
	2 加刺	5.0	4.2	32.00	黒頁	
	3 加刺	5.5	4.5	48.00	黒頁	
	4 加刺	8.2	4.1	49.00	文斑	

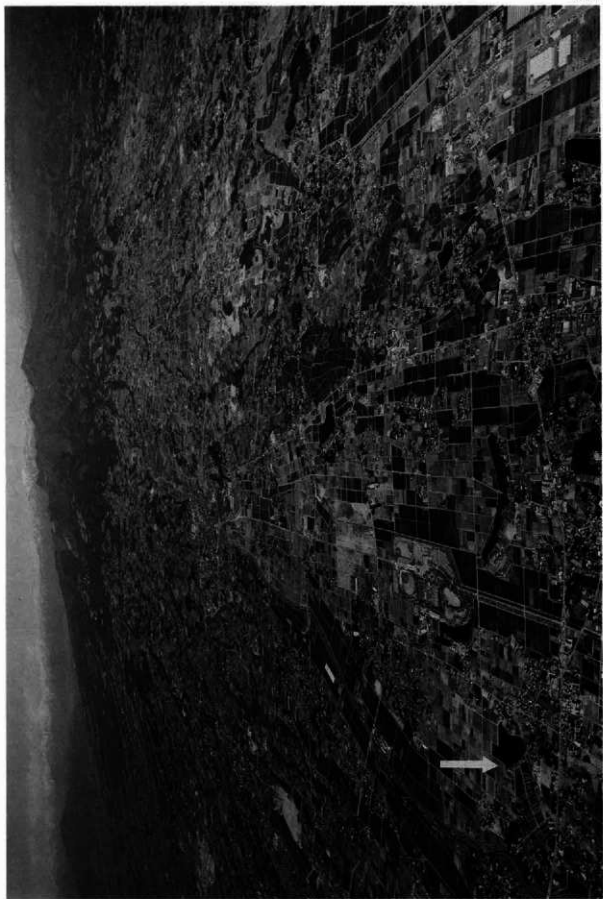
押戻番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	石材	備考	
第148図	5 加刺	4.0	7.5	32.00	黒頁		
	6 加刺	5.0	5.8	59.00	黒頁		
	7 加刺	6.3	8.2	133.00	細粒		
	8 加刺	6.9	8.3	126.00	粗頁		
	9 加刺	11.5	8.5	379.00	黒頁		
	10 加刺	8.3	6.5	209.00	黒頁		
	11 加刺	10.8	8.9	289.00	黒頁		
	第149図	1-1 使刺	6.0	6.9	32.00	黒頁	
		2 使刺	9.2	5.5	28.00	黒頁	
		3 使刺	4.7	5.3	36.00	黒頁	
		4 使刺	6.1	6.2	40.00	黒頁	
		5 使刺	5.9	7.4	48.00	黒頁	
6 使刺		7.5	5.5	99.00	黒頁		
7 使刺		6.6	8.6	46.00	黒頁		
8 使刺		5.0	5.5	20.00	黒頁		
第150図	9 石核	5.5	10.3	333.60	黒頁		
	10 石核	4.8	7.2	411.00	黒頁		
	11 石核	5.6	11.1	420.00	黒頁		
	12 石核	7.2	11.0	218.00	黒頁		
	第155図	1 スタンプ	8.7	5.8	393.00	石閃	
		2 スタンプ	12.0	7.6	564.00	粗安	
		3 磨石	11.5	5.8	592.00	粗安	
	第156図	4 磨石	11.7	8.8	481.00	粗安	
		5 磨石	6.3	6.0	176.00	頁岩	
		6 磨石	10.9	8.8	514.00	粗安	
		7 磨石	8.8	5.8	228.00	粗安	
		8 磨石	5.8	8.8	269.00	粗安	
1-1 磨石		9.6	5.3	385.00	黒頁		
2 磨石		9.0	4.2	181.00	黒頁		
3 砥石		11.2	6.4	181.00	牛砂		
第157図	4 磨石	12.3	3.8	250.00	砂岩		
	5 磨石	11.3	6.0	554.00	黒頁		
	6 凹石	14.0	7.0	820.00	粗安		
	7 凹石	13.8	7.4	498.00	粗安		
	1-1 磨石	13.0	6.6	350.00	ひん岩		
	2 磨石	10.1	6.6	356.00	ホ		
	3 凹石	11.8	8.9	911.00	粗安		
第158図	4 磨石	10.9	8.6	507.00	石閃		
	5 敲石	9.3	9.6	328.00	粗安		
	6 凹石	10.6	5.7	265.00	粗安		
	7 凹石	9.4	8.9	498.00	粗安		
	8 凹石	7.6	7.1	262.00	粗安		
	1-1 凹石	10.3	7.9	549.00	粗安		
	2 敲石	9.3	6.3	259.00	粗安		
	3 多孔石	22.3	18.9	3000.00	粗安		
第159図	4 石皿	9.6	14.0	790.00	粗安		
	5 石皿	18.4	17.6	336.00	粗安	2点接合	
	1 石皿	18.3	12.9	1133.00	粗安		
	2 石皿	8.2	7.8	317.00	粗安		
	3 石皿	10.3	12.9	591.00	粗安		
	4 石製品	4.6	3.6	17.00	玄凝		
	5 砥石	13.8	5.4	100.00	珪頁		
	6 石製品	6.3	4.9	40.00	軽石		
第160図	7 石製品	6.3	4.5	35.00	軽石		
	8 垂飾	5.3	6.5	27.00	軽石		
	9 耳飾	4.3	2.1	15.99	葉緑石		
10 耳飾	2.2	1.2	2.27	葉緑石			





写 真 图 版





連峰の遠景 (南側上空から)



調査以前の遺跡周辺 (KT64-1、C20・21)



1. 遺跡の基本土層 (北壁)



2. 遺跡の基本土層 (西壁)



3. 石器と石器の出土層位



4. 石器の出土状態 (第5図1)



5. 石器の出土状態 (第5図2)



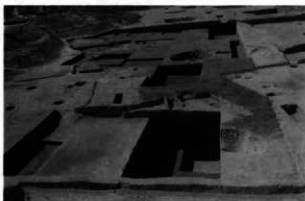
1. 第III文化層・石器の分布状態



2. 調査風景 (1)



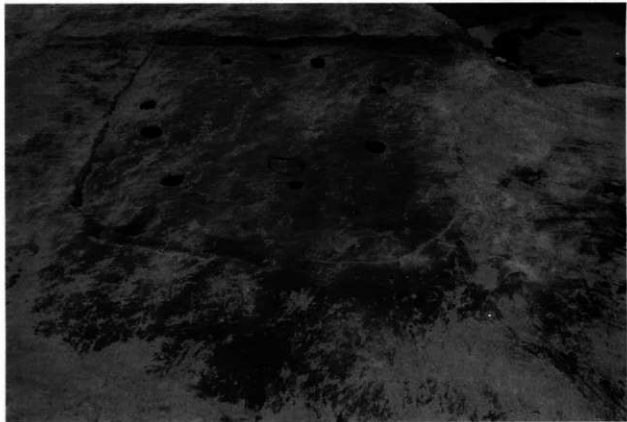
3. 調査風景 (2)



4. 調査終了状況



5. 暗色幕の試掘状況



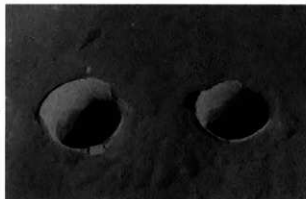
1. 2区19号住居全景



2. 2区49号住居全景



1. 2区49号住居遺物の出土状況



2. 同住居・埋設土器の検出状態



3. 同住居・石器の出土状態



4. 2区54号住居全景

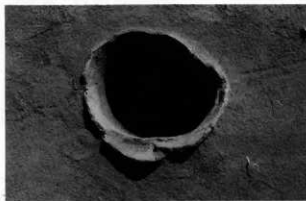




1. 3区4号住居全景



2. 同住居・遺物の出土状態(1)



3. 同住居・埋設土器の検出状態



4. 同住居・遺物の出土状態(2)



5. 同住居・遺物の出土状態(3)



1. 3区4号住居・遺物の出土状態 (4)



2. 同住居・遺物の出土状態 (5)



3. 4区2号住居全景



4. 同住居・遺物の出土状態 (1)



5. 同住居・遺物の出土状態 (2)



1. 4区3号住居全景



2. 5区7号住居全景



1. 5区7号住居・遺物の出土状態(1)



2. 同住居・遺物の出土状態(2)



3. 3区6号土壇



4. 同・土層の堆積状態



5. 3区12号土壇



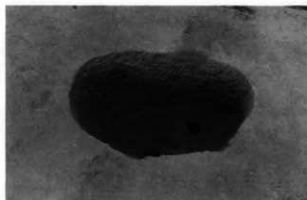
6. 同・土層の堆積状態



7. 3区18号土壇



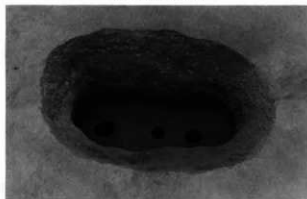
8. 同・土層の堆積状態



1. 3区16号土壤



2. 同・土層の堆積状態



3. 3区17号土壤



4. 同・土層の堆積状態



5. 3区14号土壤



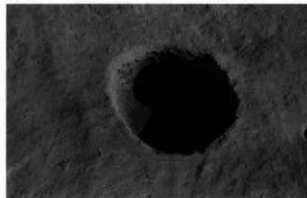
6. 3区11号土壤



7. 5区5号土壤



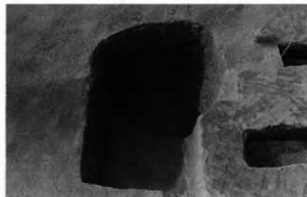
8. 5区8号土壤



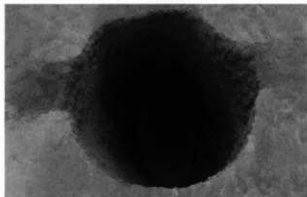
1. 3区8号土坑



2. 3区10号土坑



3. 3区13号土坑



4. 3区15号土坑



5. 集石の検出状態



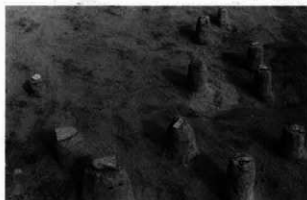
1. 3区南側・遺物の出土状態



2. 3区西側・遺物の出土状態



1. 三角錐形石器の出土状態



2. 3区遺物の出土状態 (1)



3. 3区遺物の出土状態 (2)

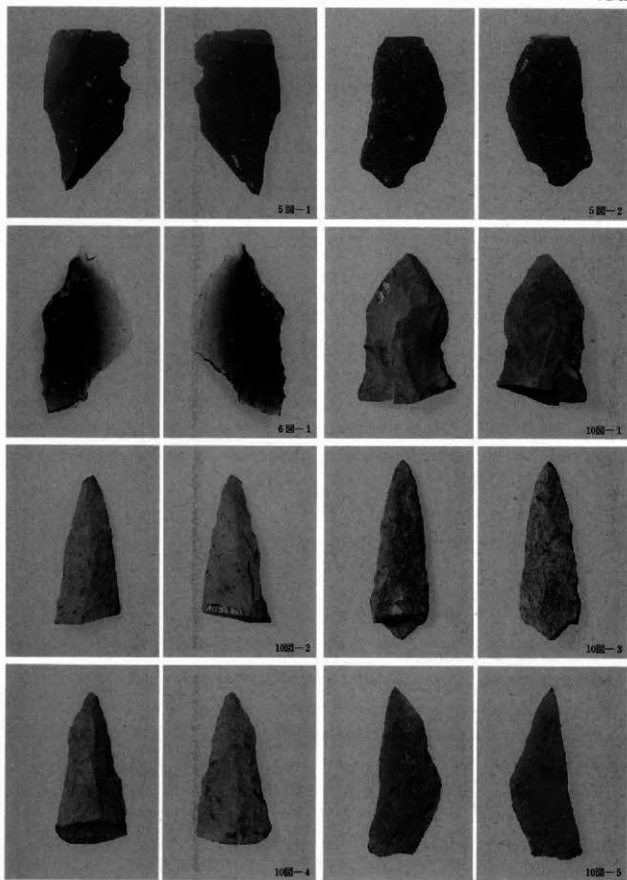


4. 3区遺物の出土状態 (3)

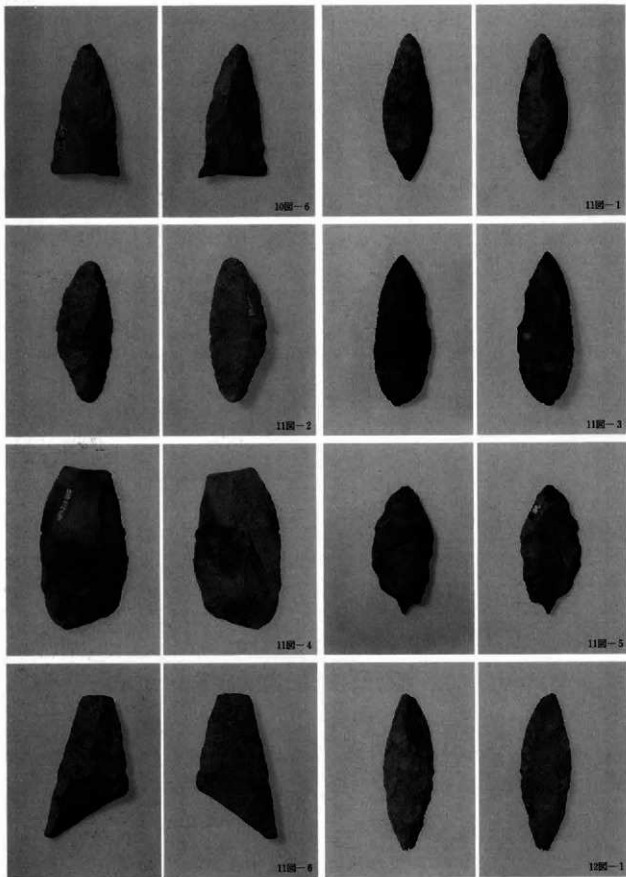


5. 3区遺物の出土状態 (4)

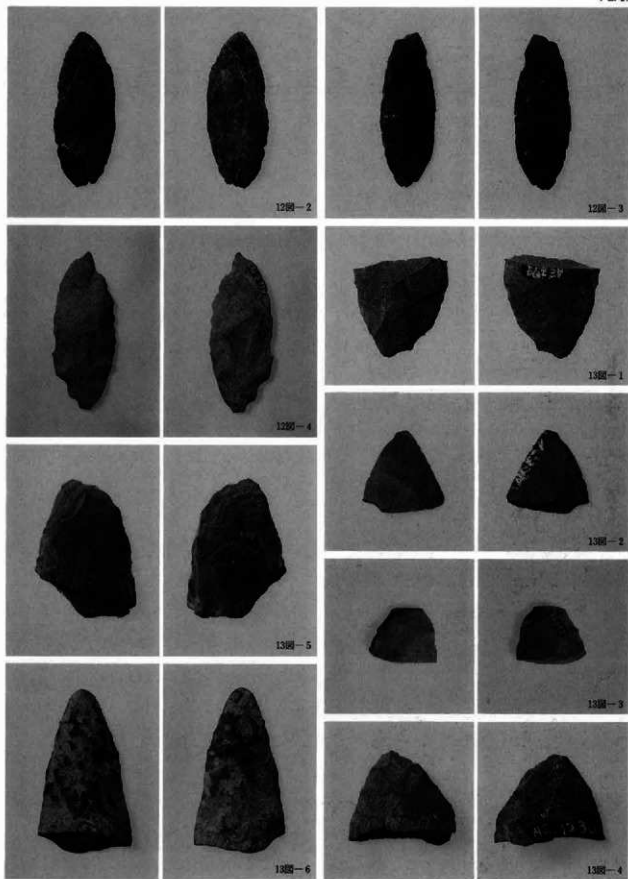




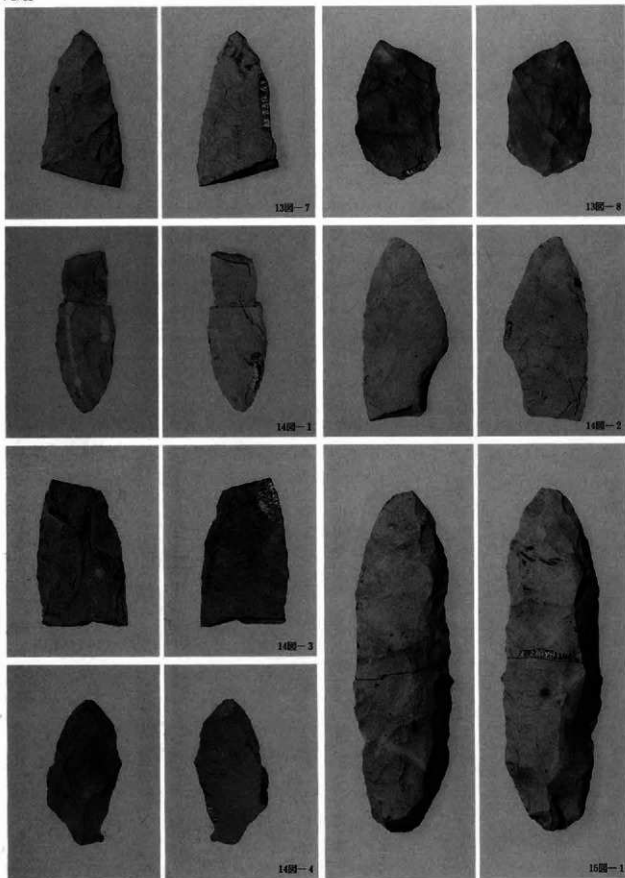
第 I・II・III文化層出土の石器 (1)



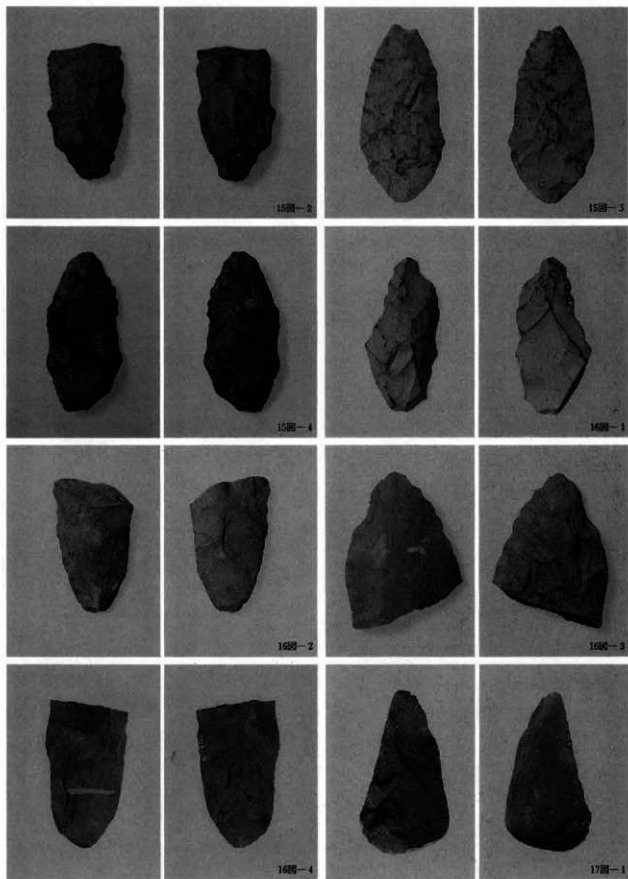
第III文化層出土の石器（2）



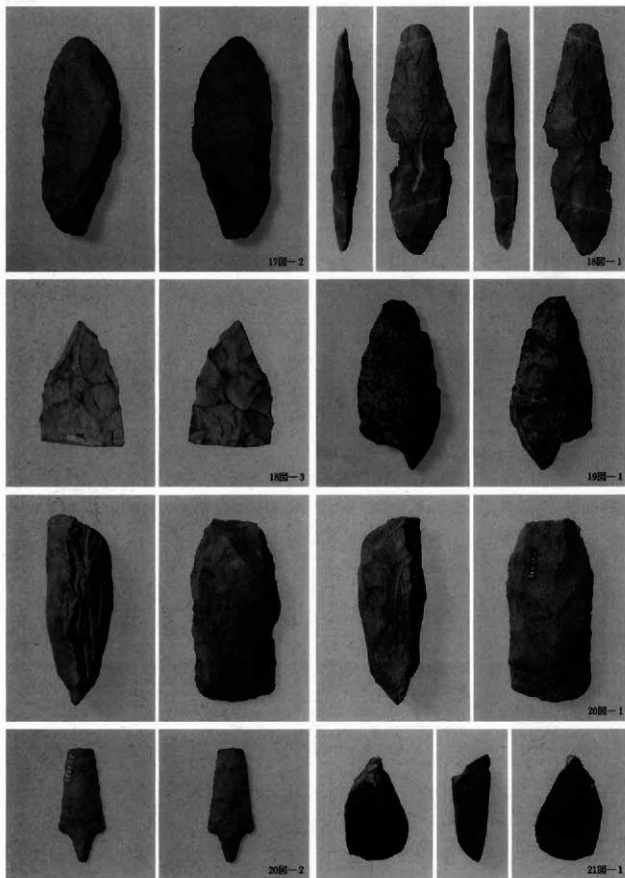
同・出土石器(3)



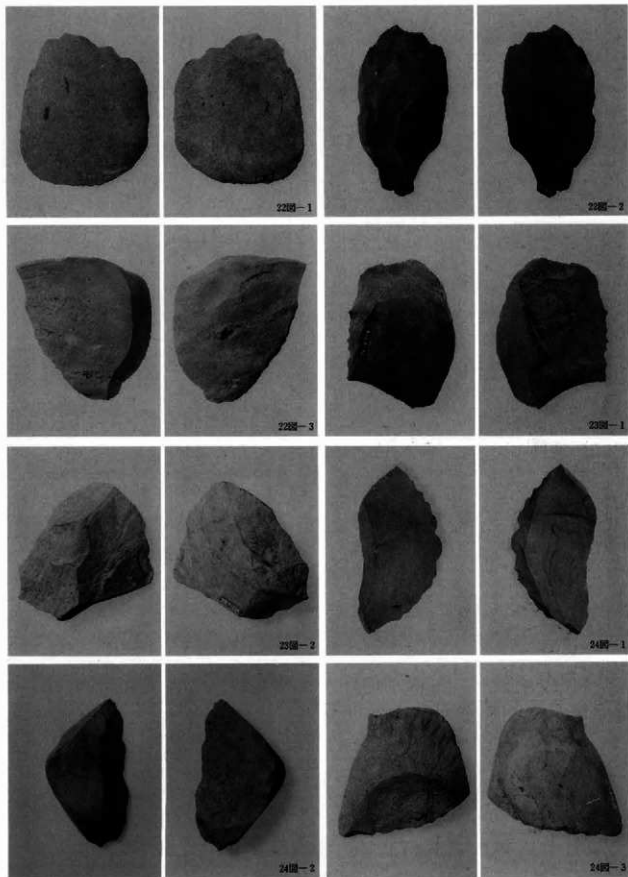
岡・出土石器 (4)



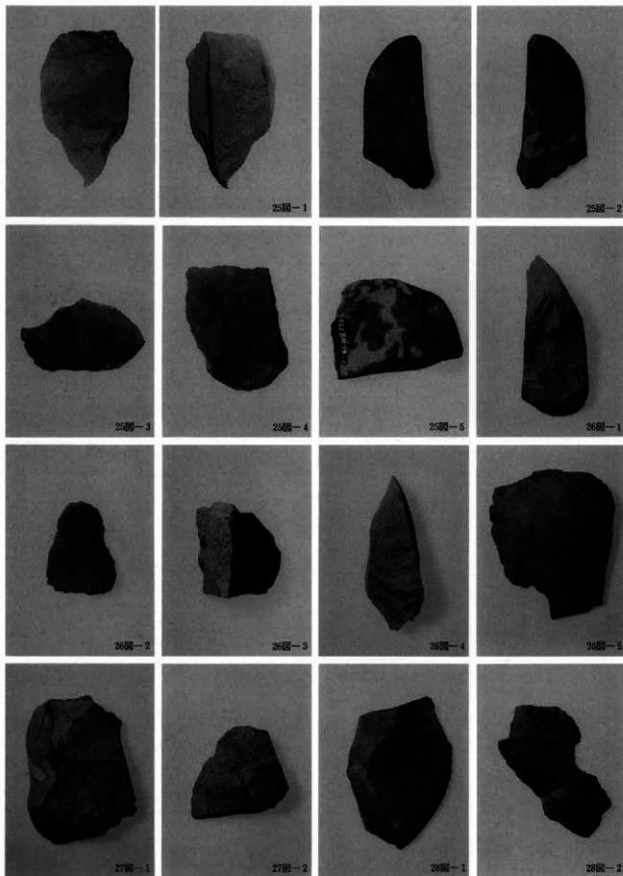
岡・出土石器(5)



同・出土石器 (6)

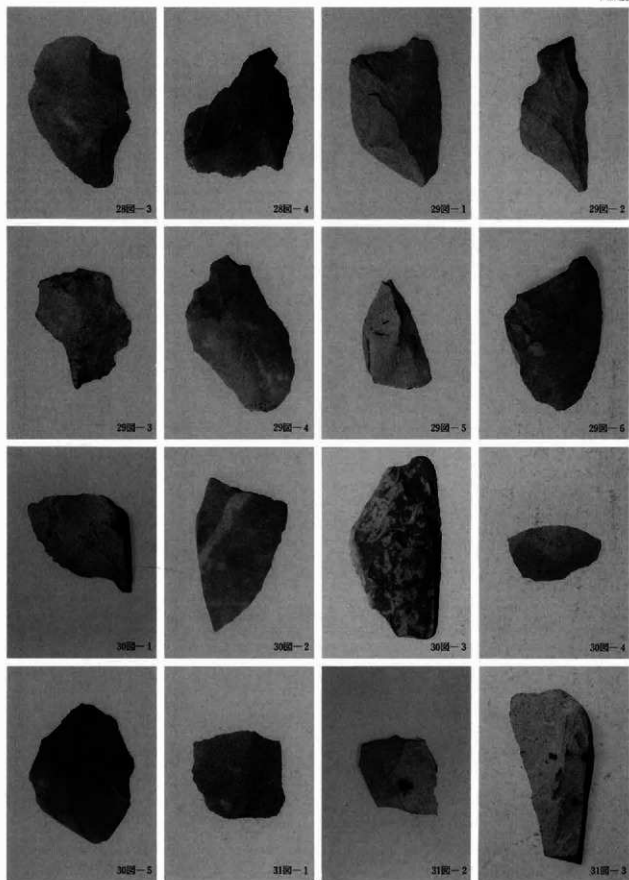


岡・出土石器(7)

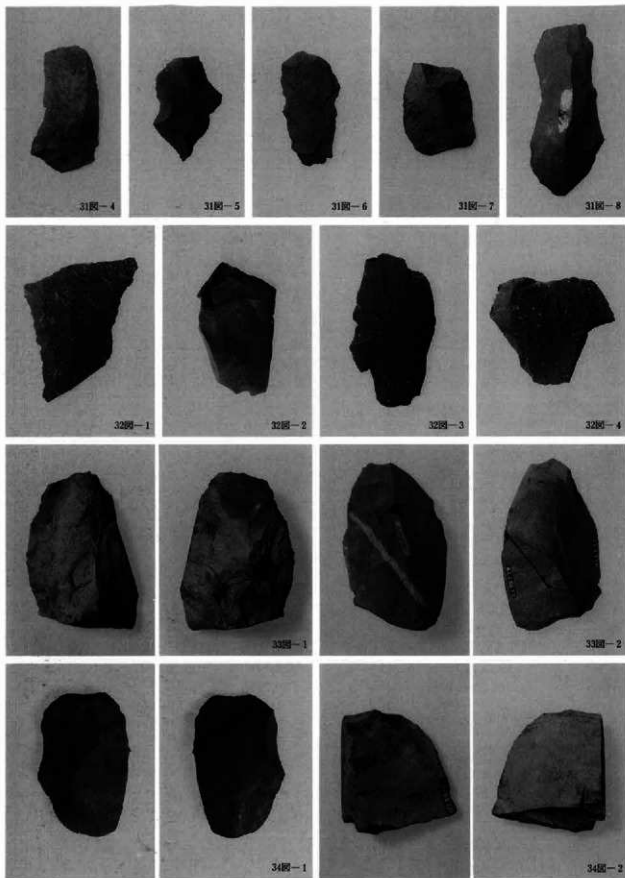


岡・出土石器(8)

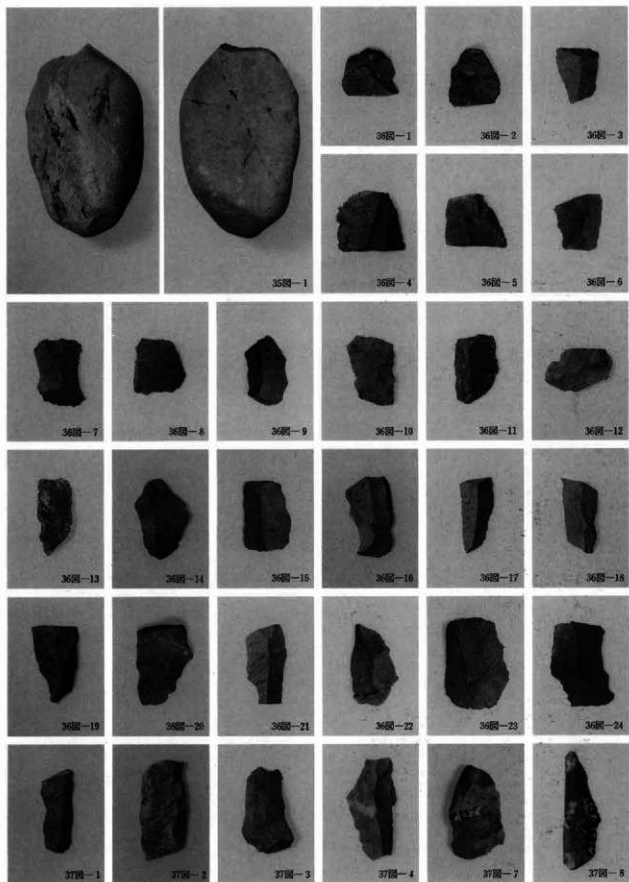




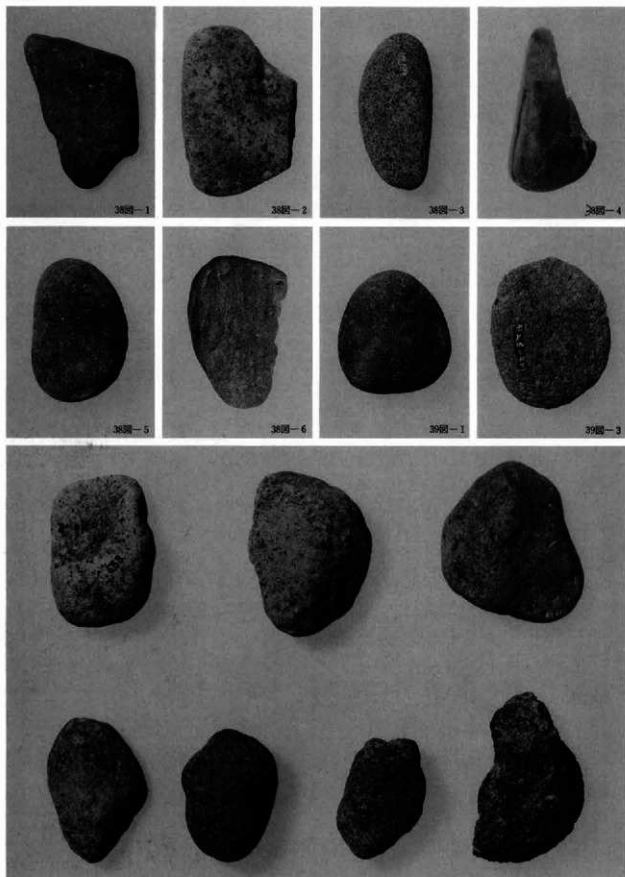
岡・出土石器 (9)



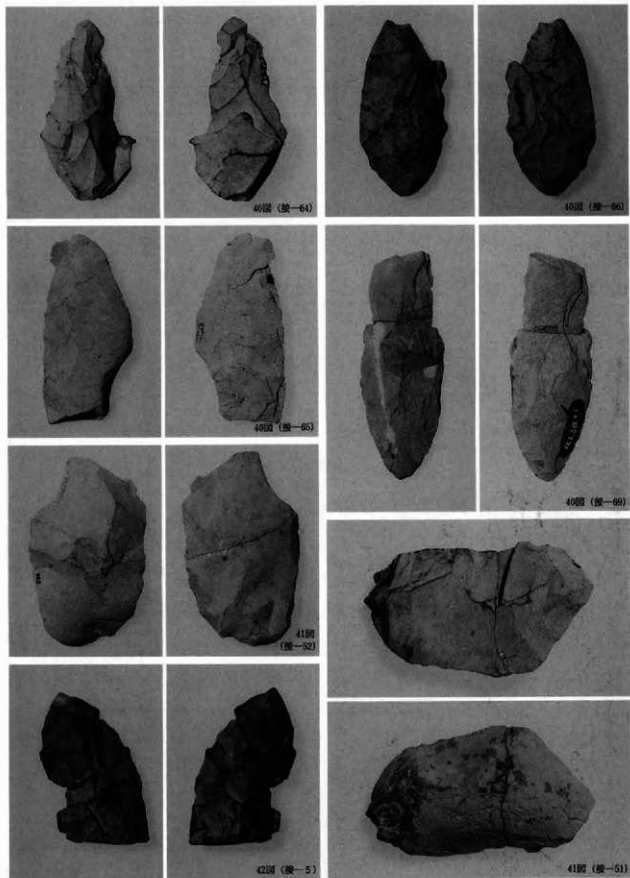
岡・出土石器 (10)



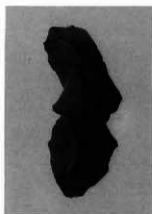
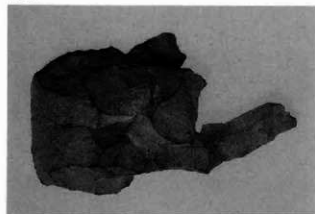
同・出土石器 (11)



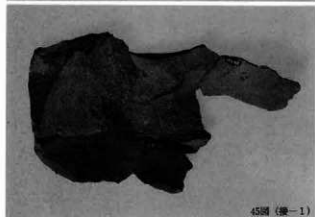
同・出土石器 (12、槍先尖頭器に伴う敲石・礫類)



同・接合資料 (1)

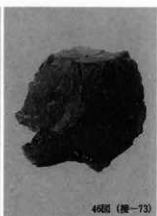
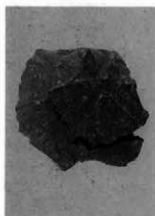


45図 (接-19)



45図 (接-1)

46図 (接-9)



46図 (接-73)



47図 (接-60)

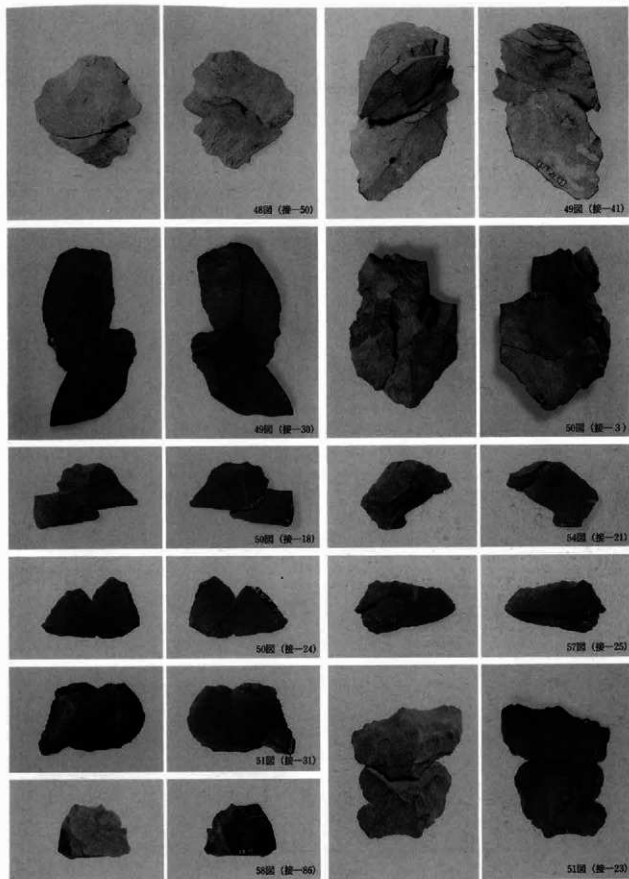


47図 (接-40)

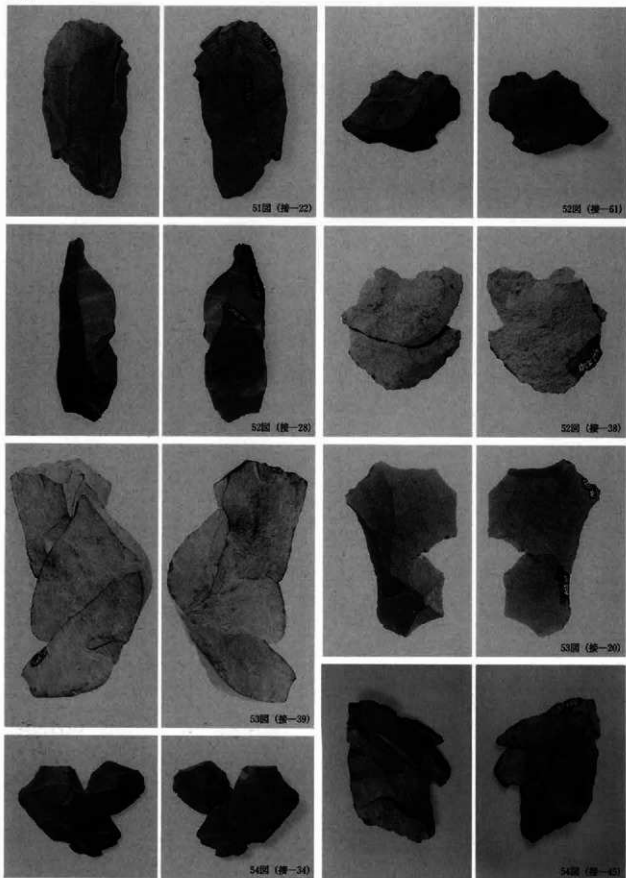


48図 (接-8)

同・接合資料 (2)

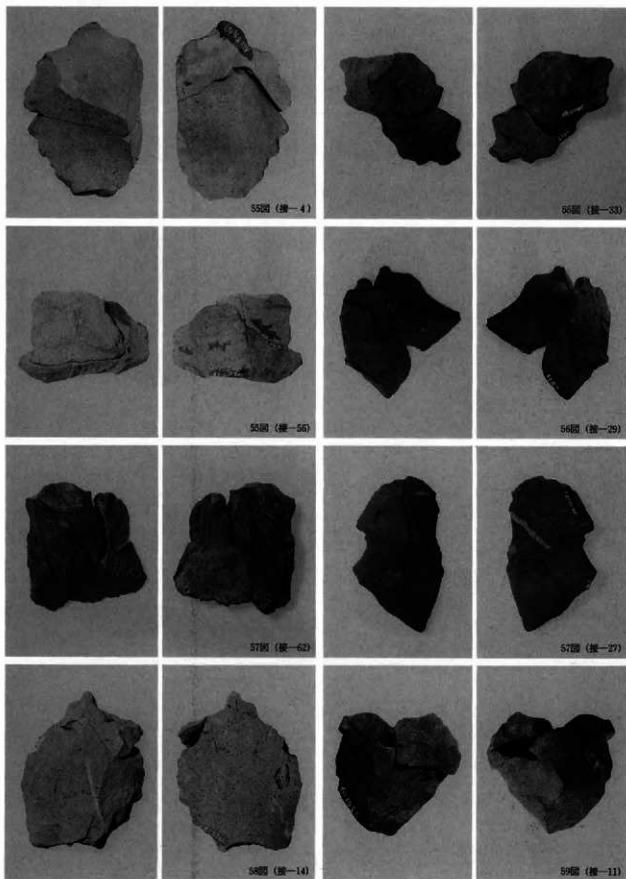


同・接合資料 (3)



同・接合資料(4)





同・接合資料 (5)



1899-2



1900-2



41圖 (原-70)



42圖 (原-53)



43図 (標-15)



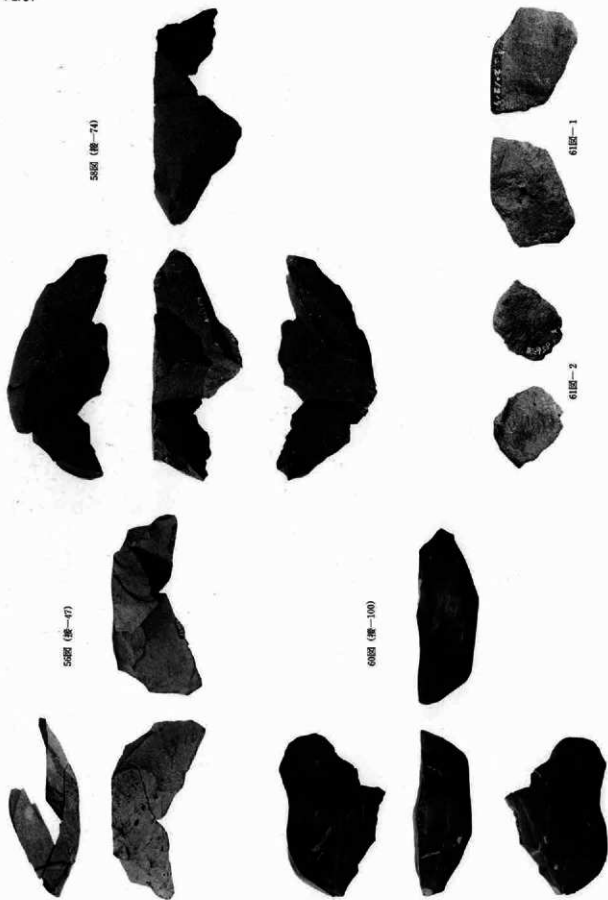
44図 (標-16)



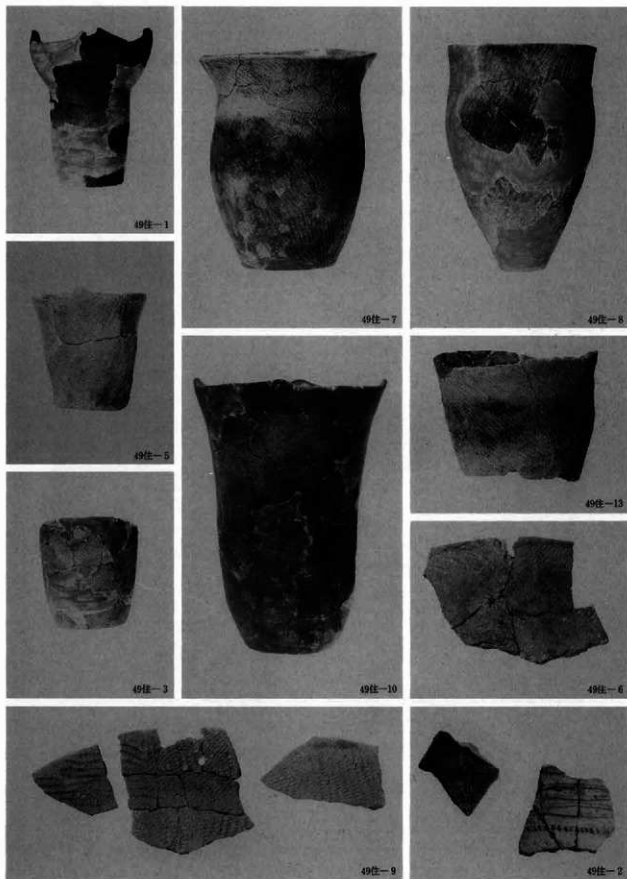
50図 (標-26)



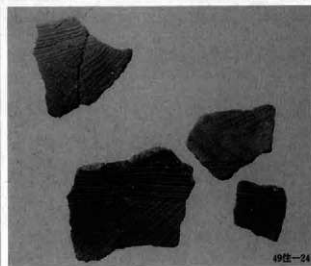
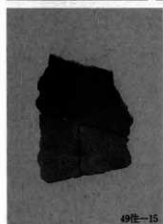
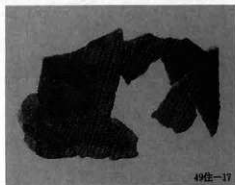
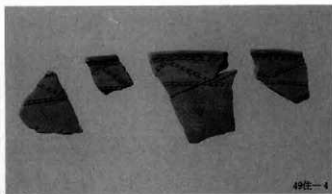
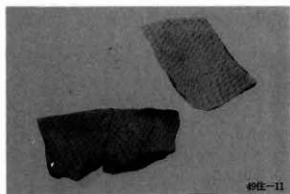
同・接合資料 (7)



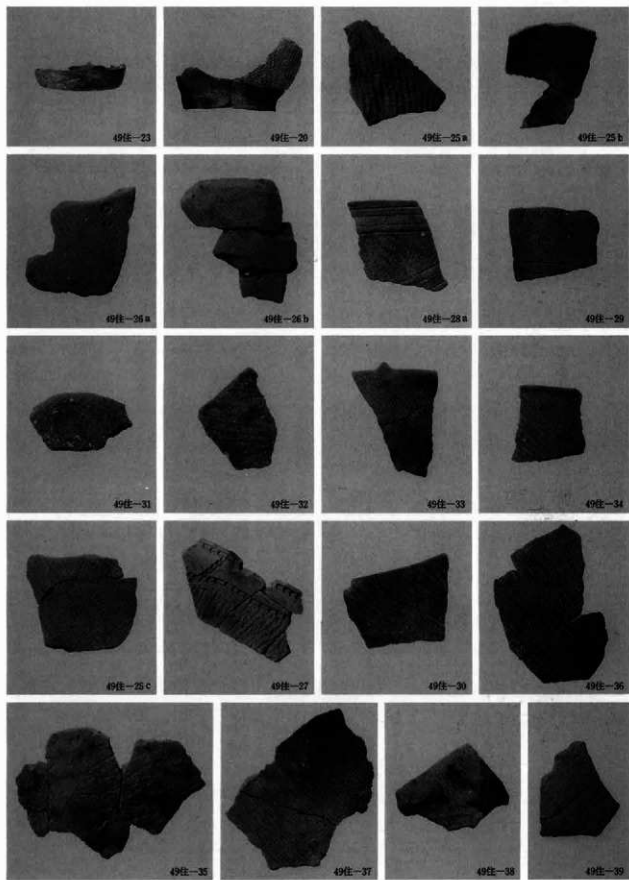
同・接合資料(8)



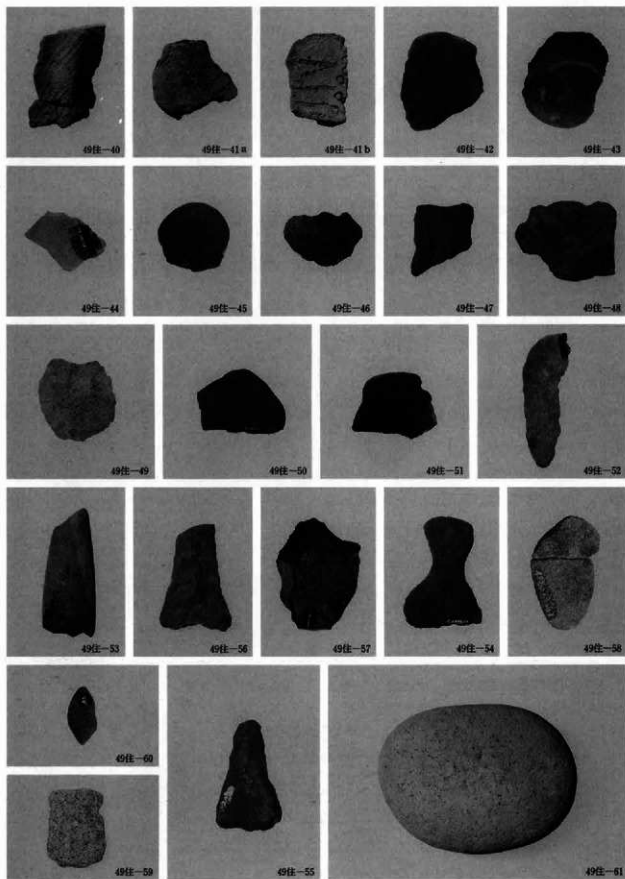
2区49号住居出土遺物(1)



2区49号住居出土遺物 (2)

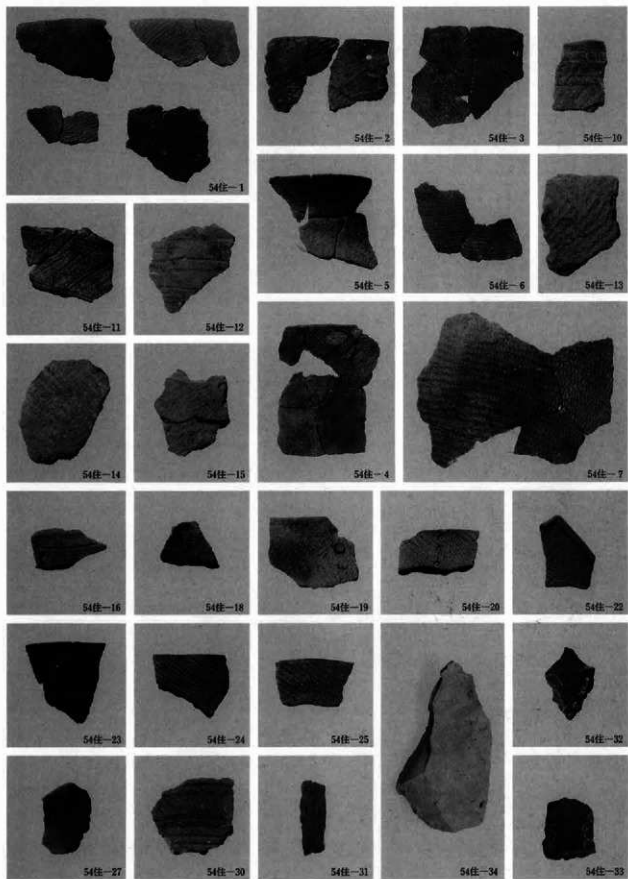


2区49号住居出土遺物(3)

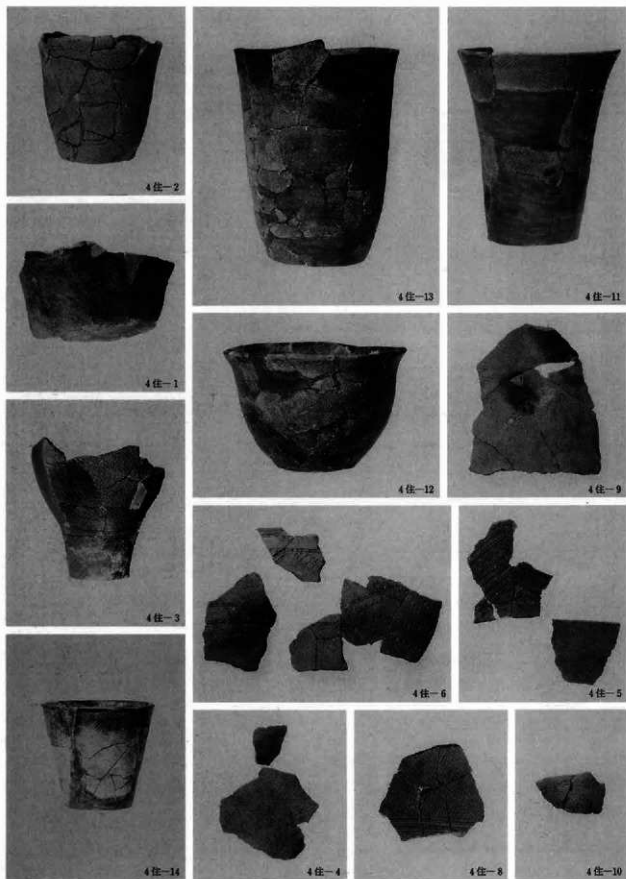


2区49号住居出土遺物(4)

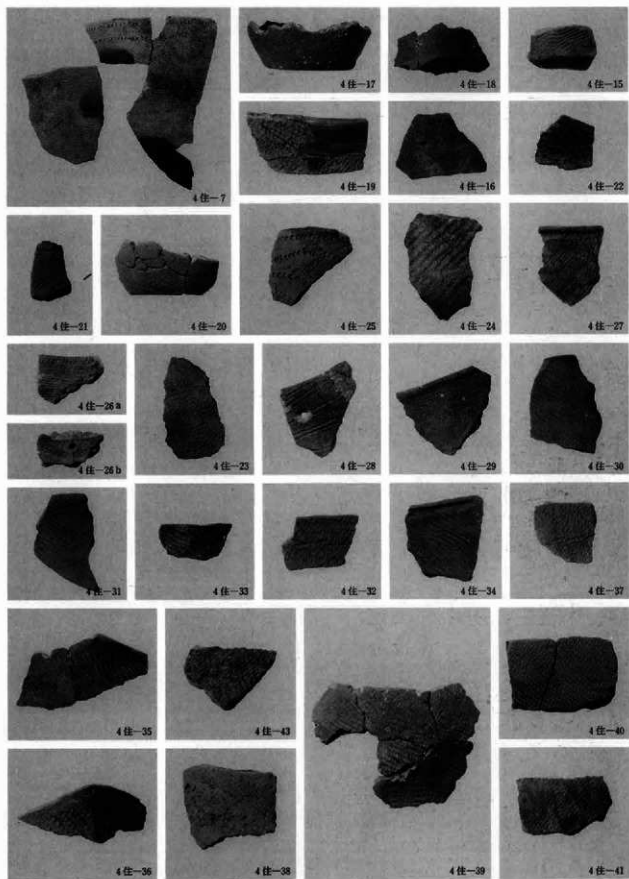




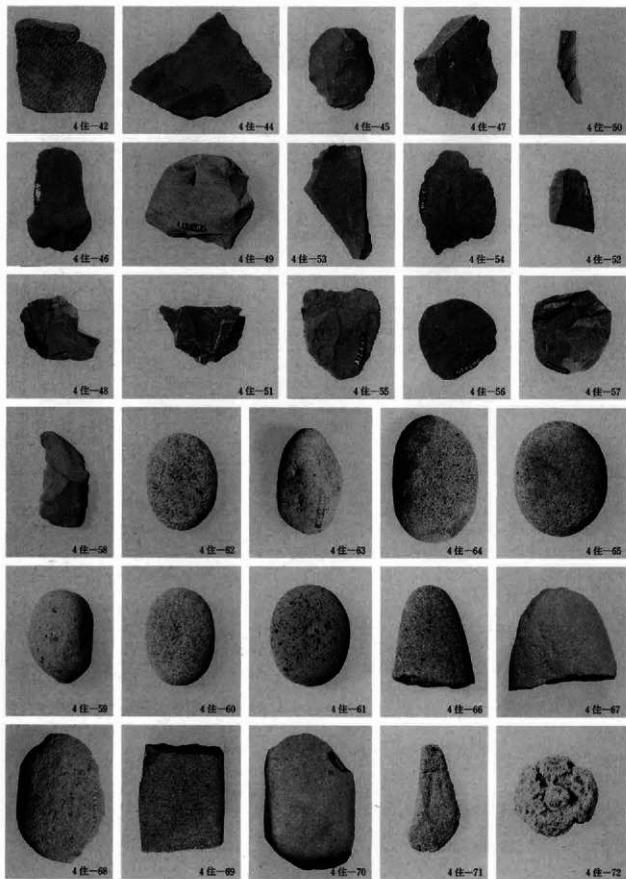
2区54号住居出土遺物



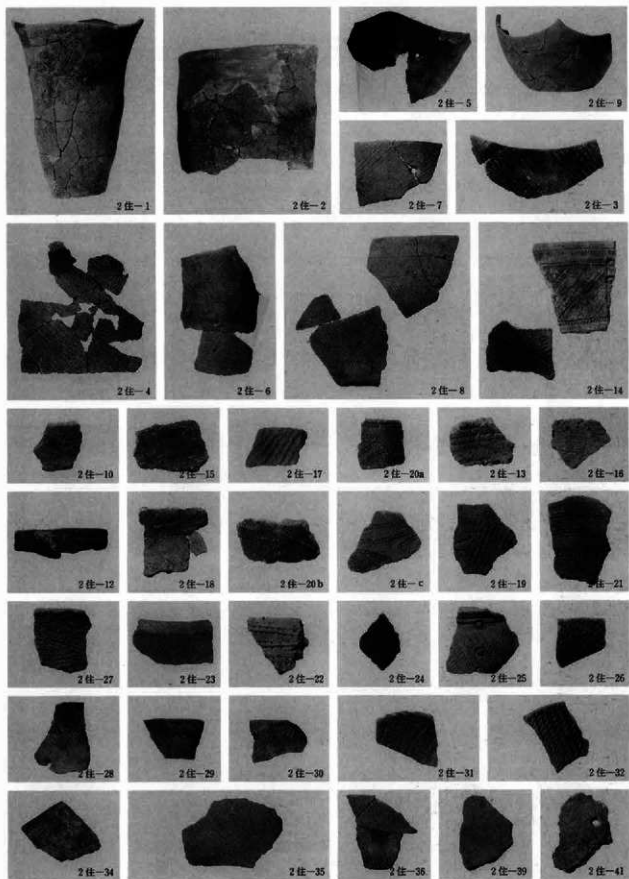
3区4号住層出土遺物(1)



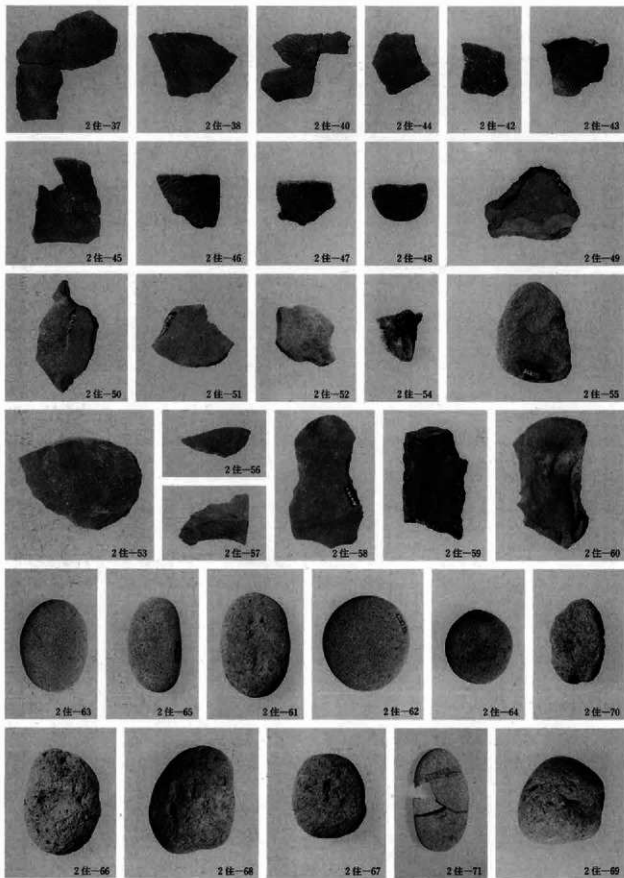
3区4号住居出土遺物(2)



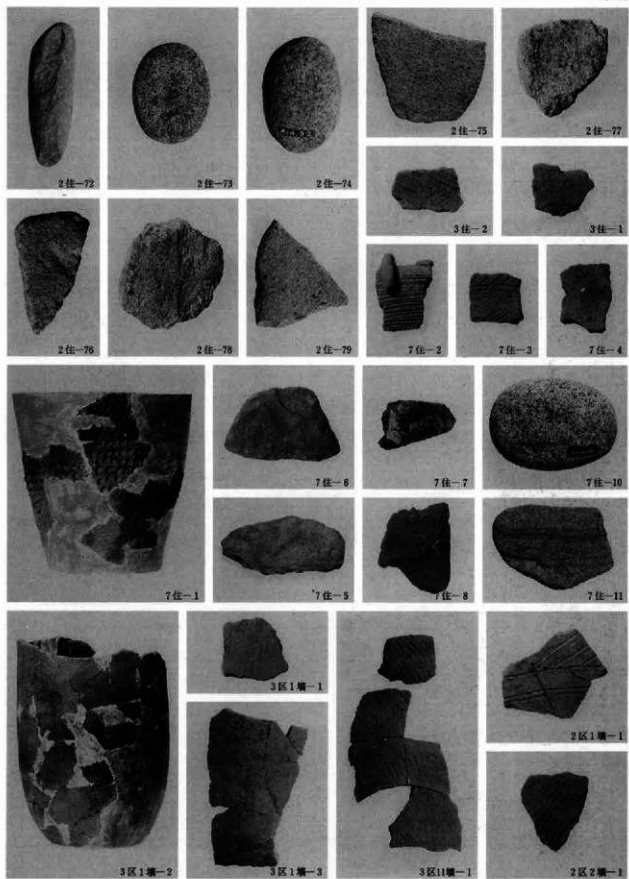
3区4号住居出土遺物(3)



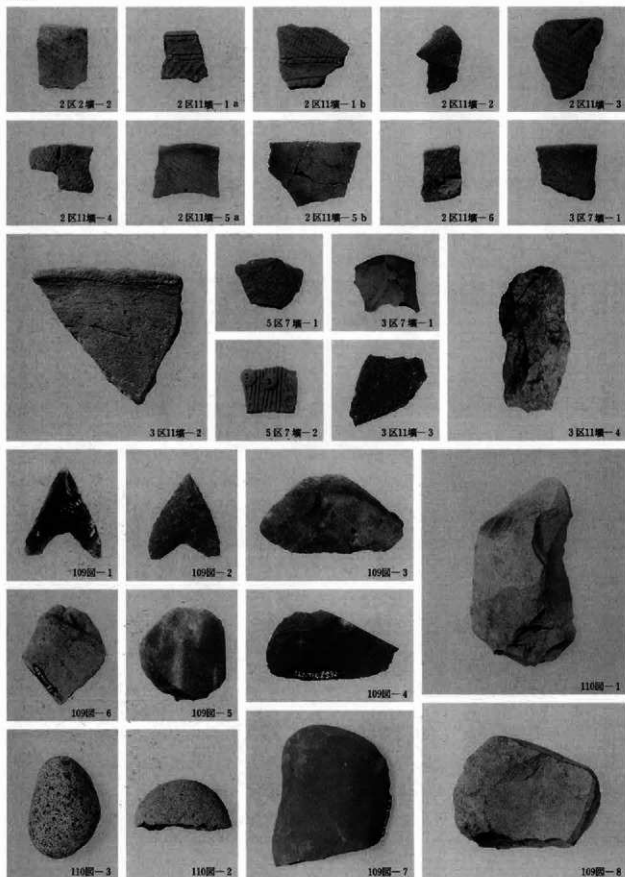
4区2号住居出土遺物(1)



4区2号住居出土遺物(2)

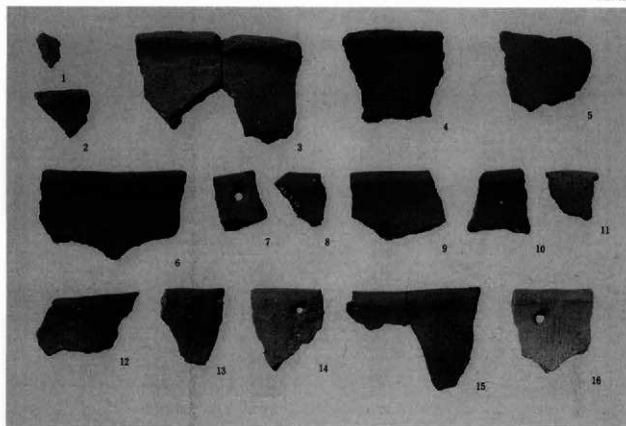


4区2号・3号・5区7号住居・土曜出土遺物

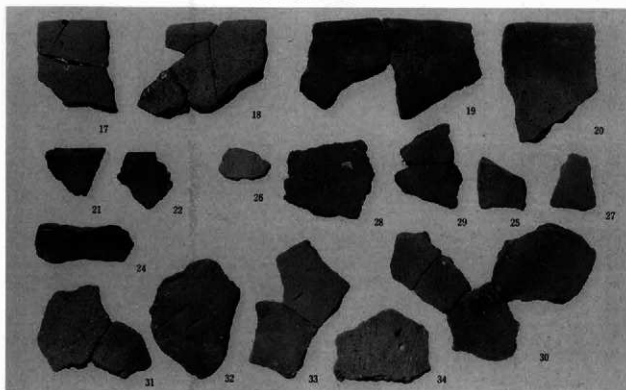


土壙出土遺物、集石・周辺出土遺物

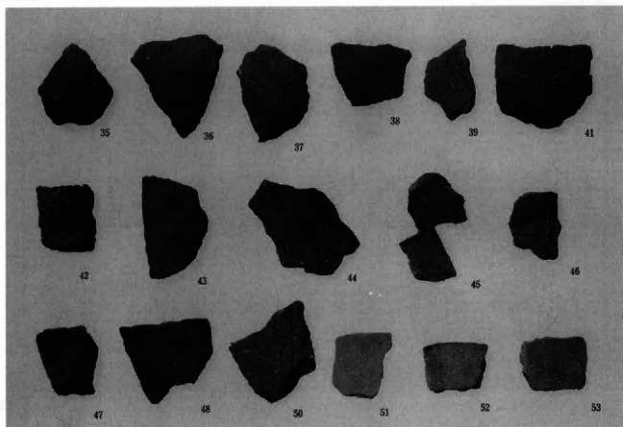




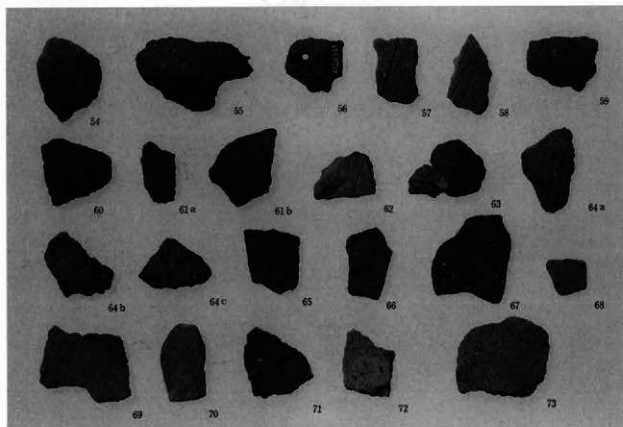
1. 3区出土の土器(1)



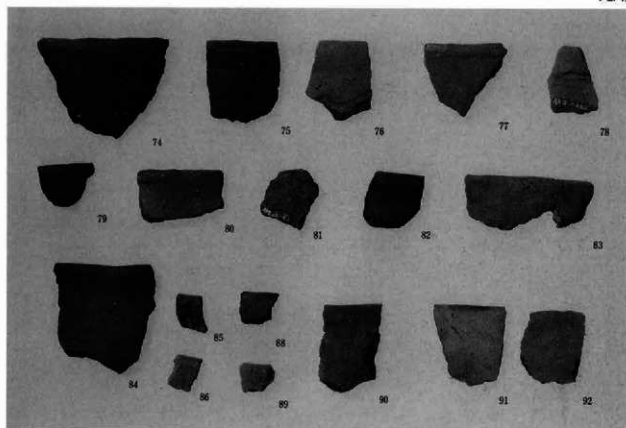
2. 3区出土の土器(2)



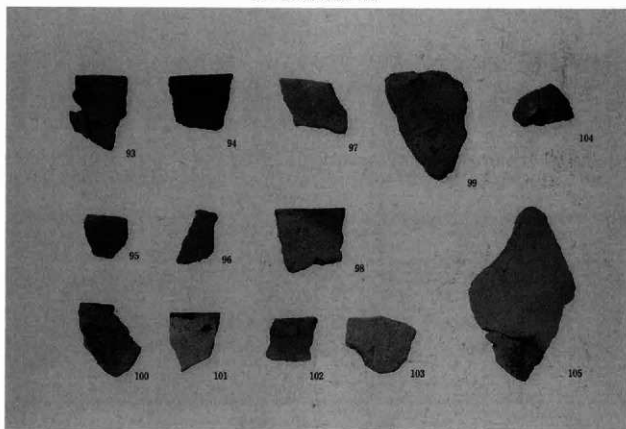
1. 3区出土の土器(3)



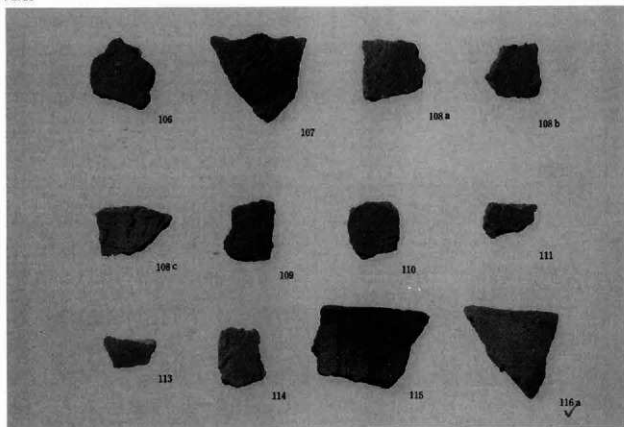
2. 3区出土の土器(4)



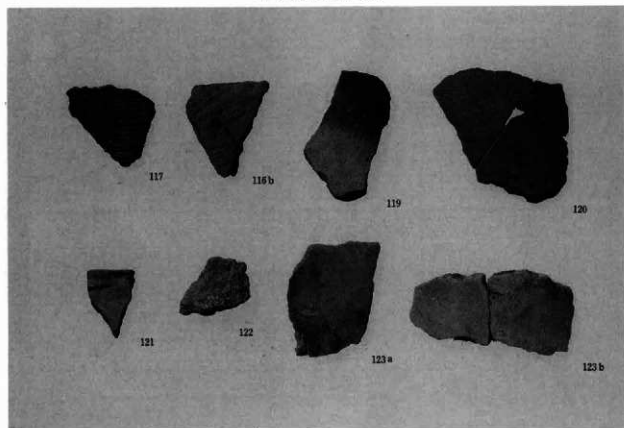
1. 3区出土の土器 (5)



2. 3区出土の土器 (6)



1. 3区出土の土器(7)



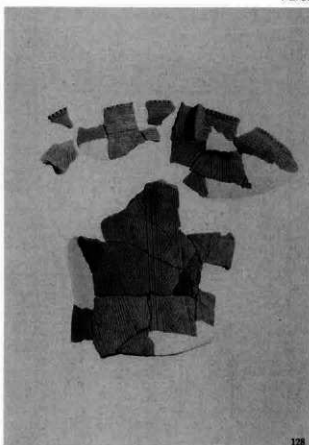
2. 3区出土の土器(8)



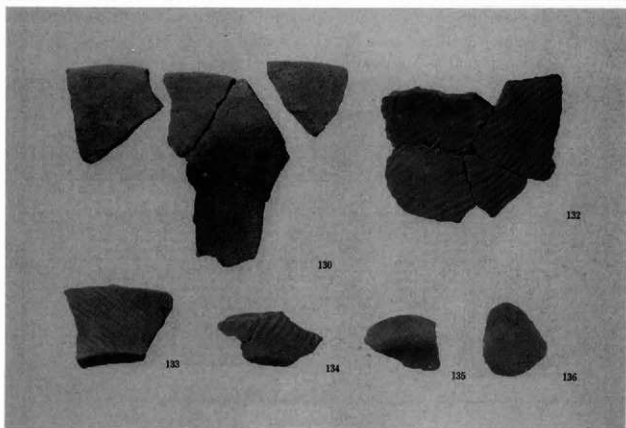
126



127



128



122

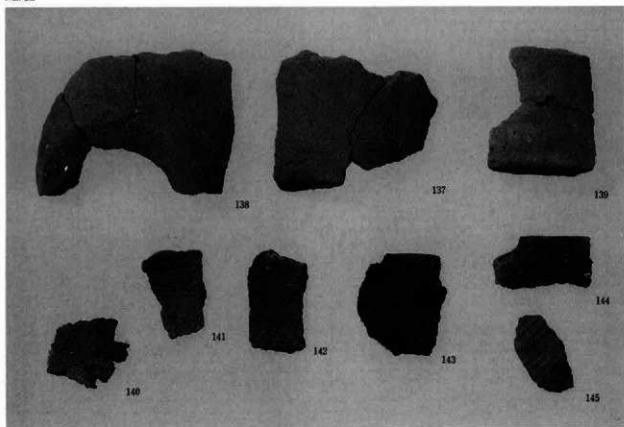
130

133

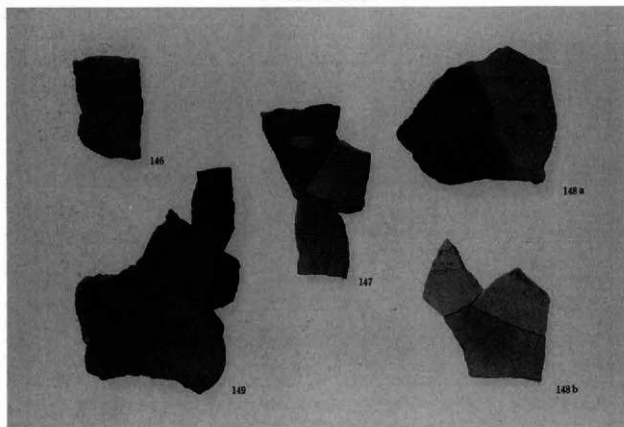
134

135

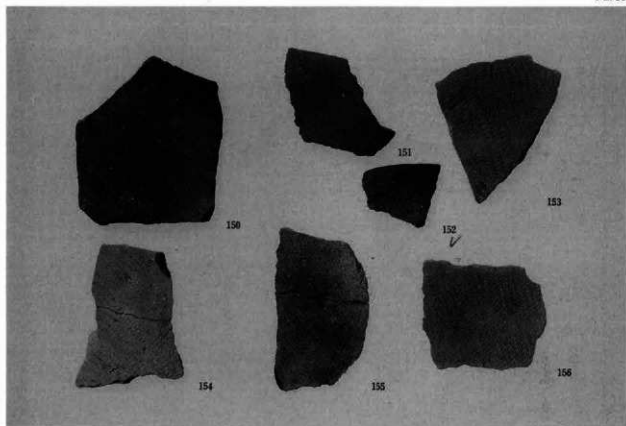
136



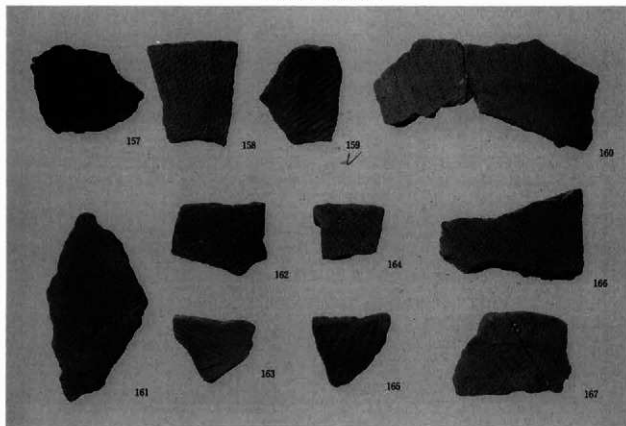
1. 3区出土の土器 (10)



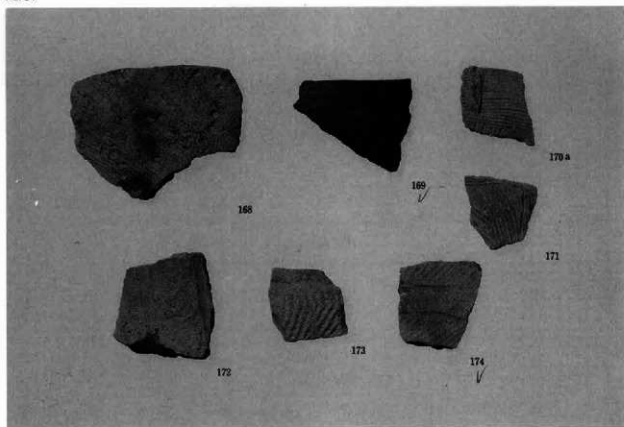
2. 3区出土の土器 (11)



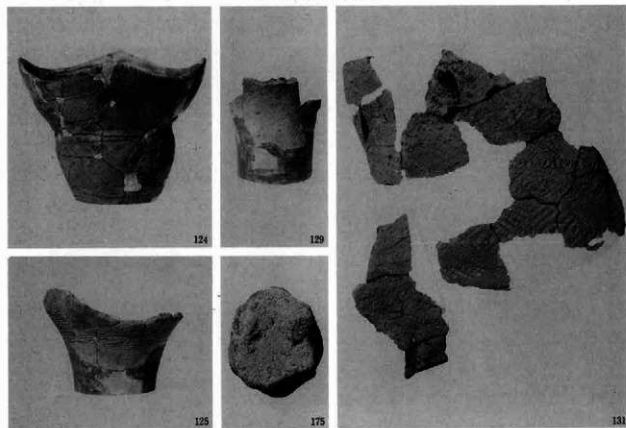
1. 3区出土の土器 (12)



2. 3区出土の土器 (13)

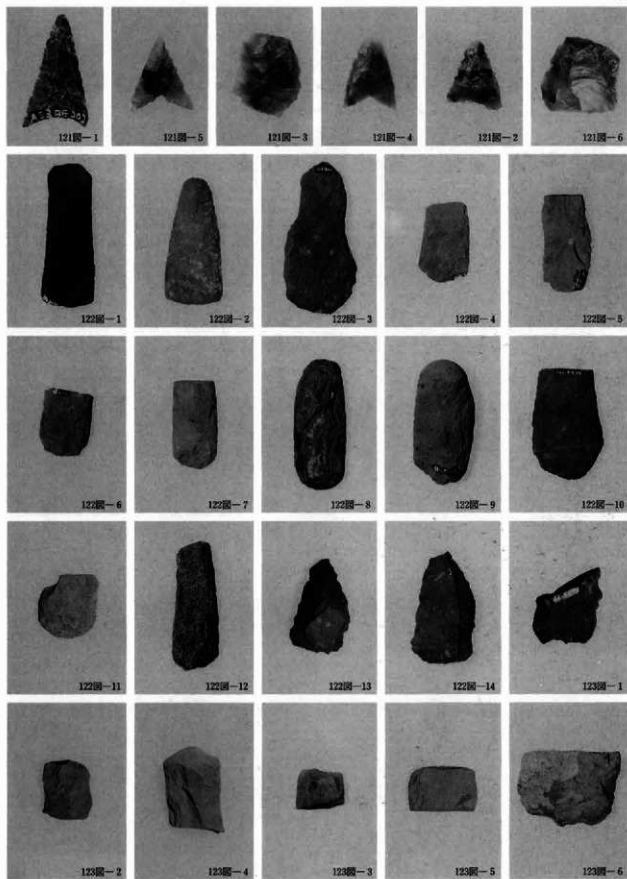


1. 3区出土の土器 (14)

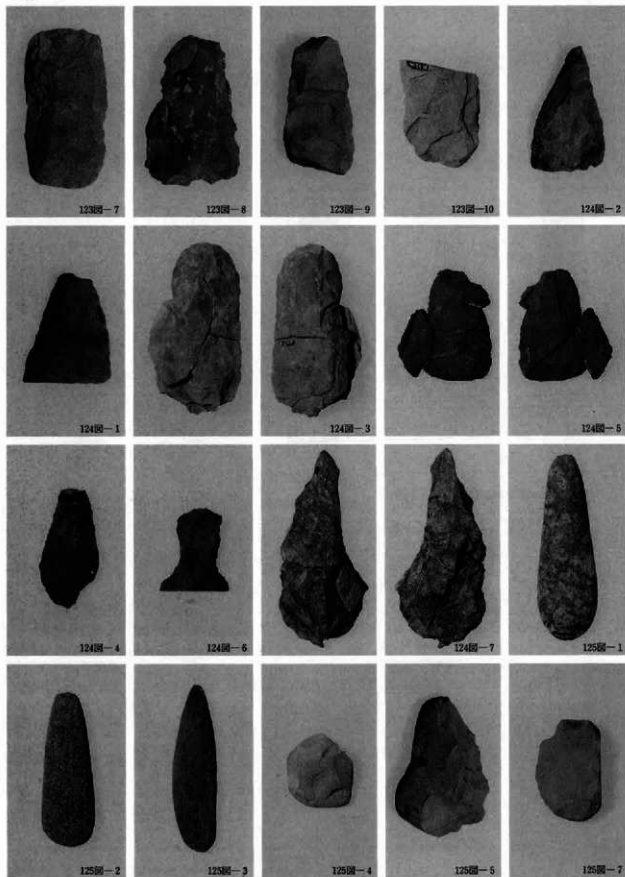


2. 3区出土の土器 (15)

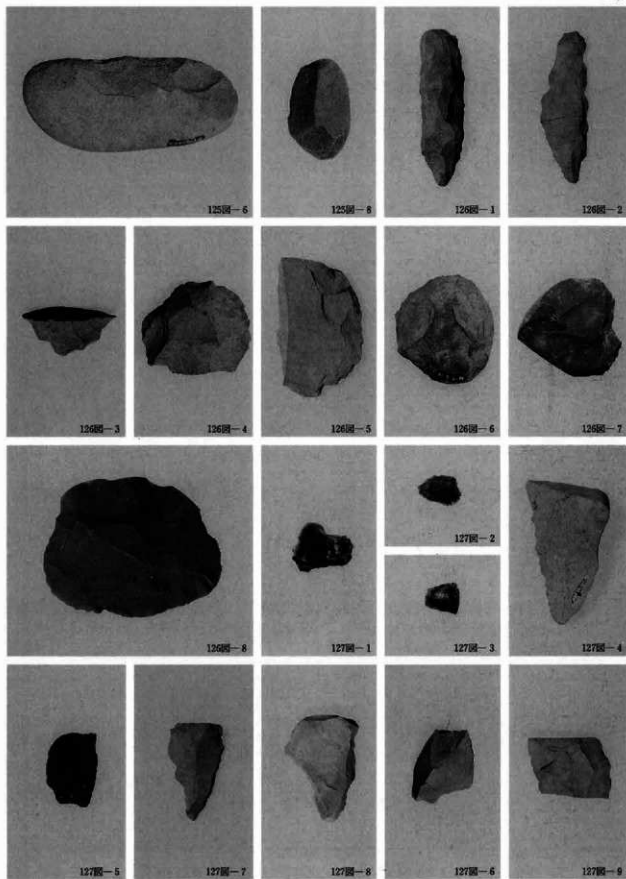




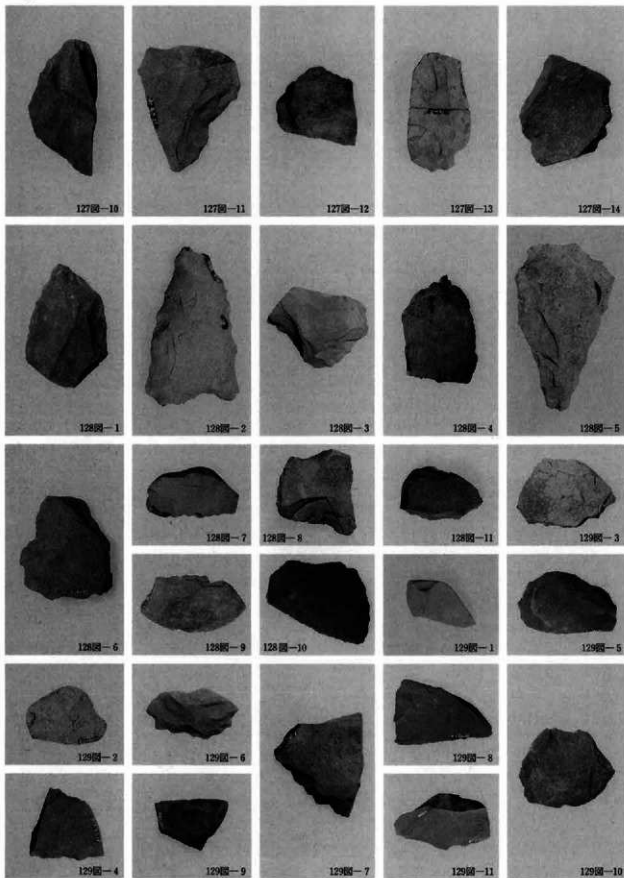
3区出土の石器(1)



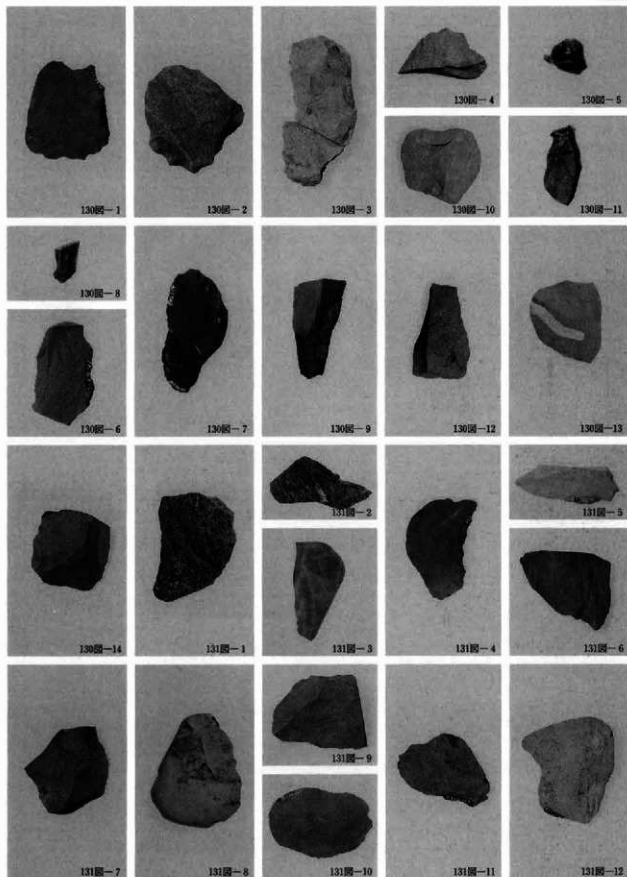
3区出土の石器(2)



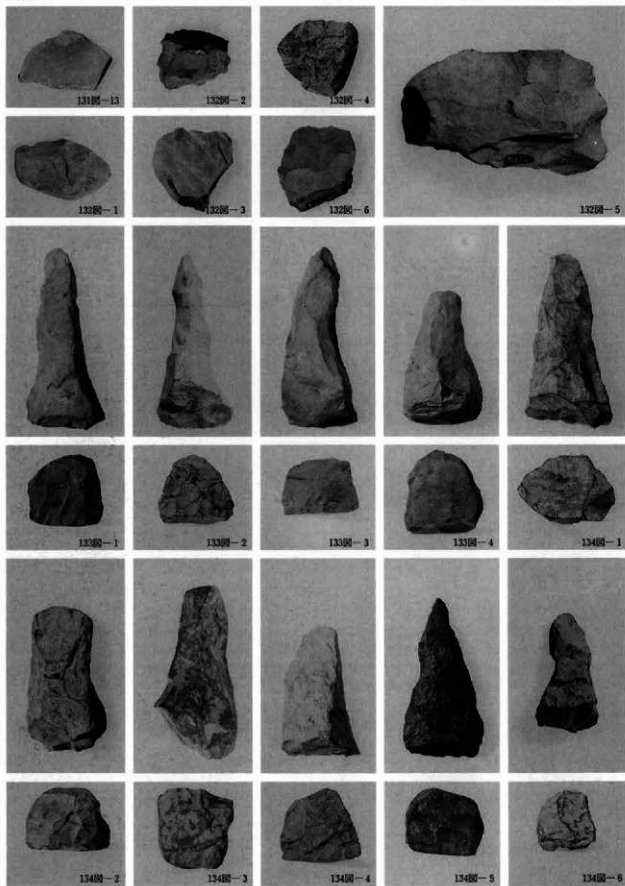
3区出土の石器(3)



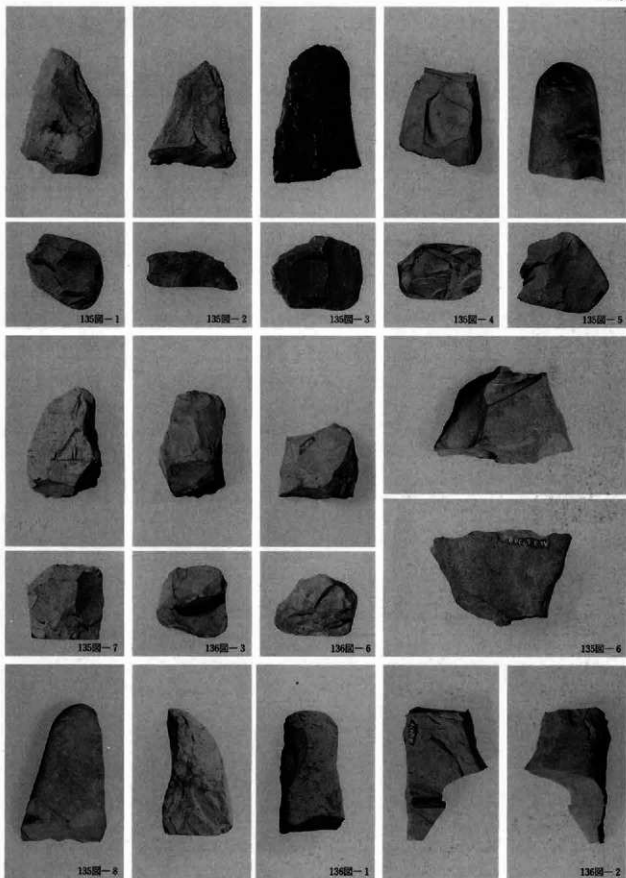
3区出土の石器(4)



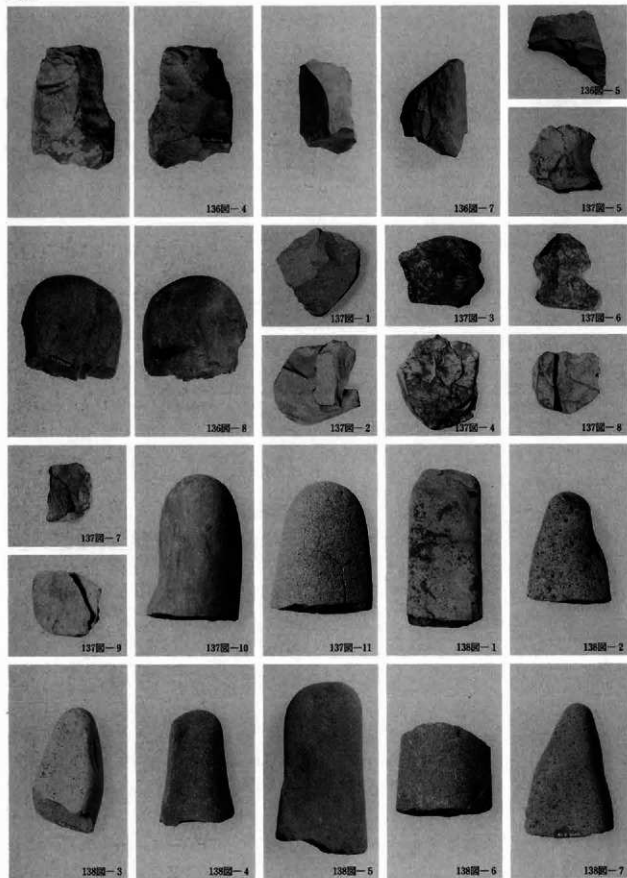
3区出土の石器(5)



3区出土の石器(6)

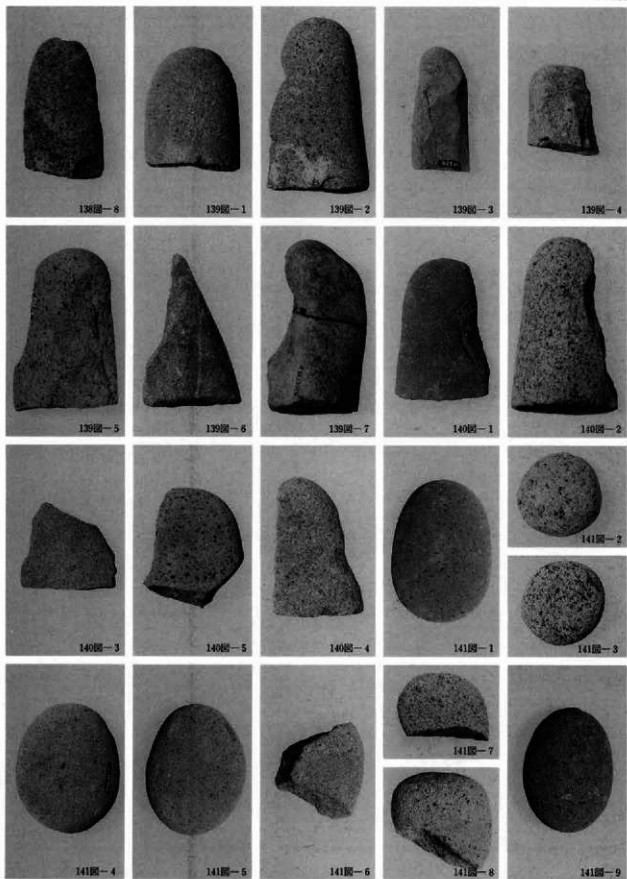


3区出土の石器 (7)

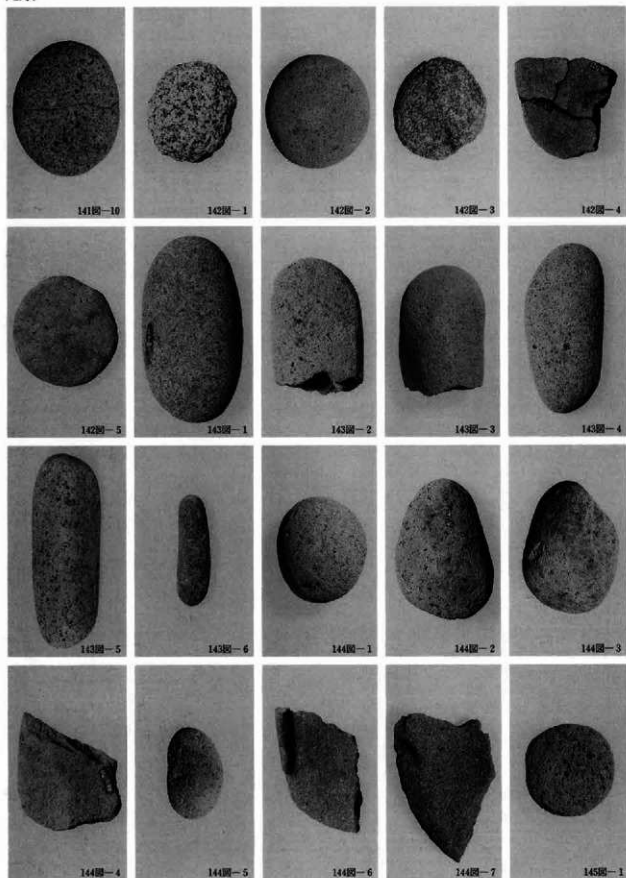


3区出土の石器(8)

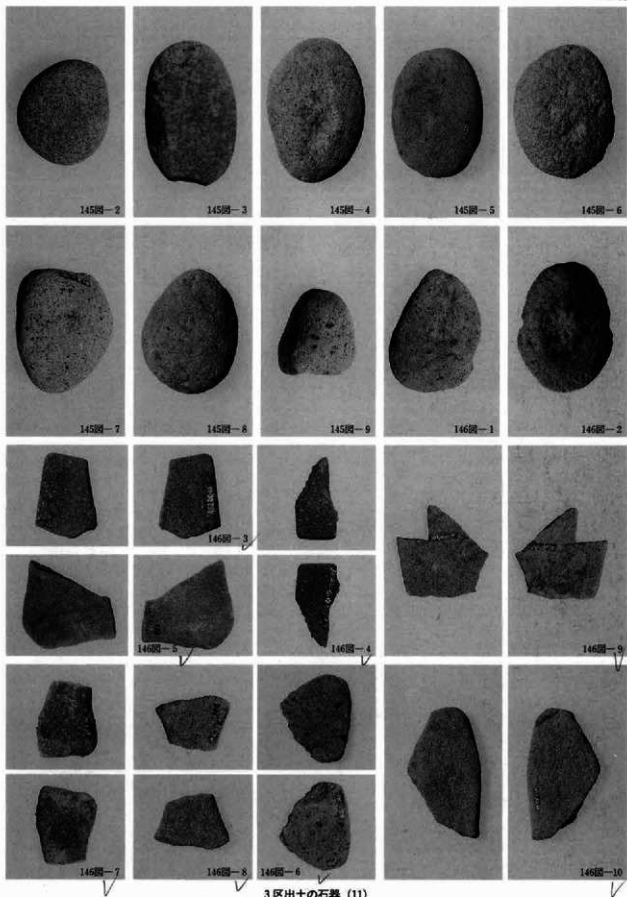




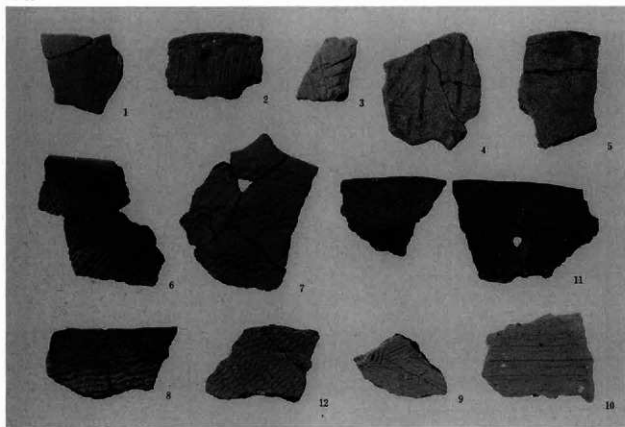
3区出土の石器(9)



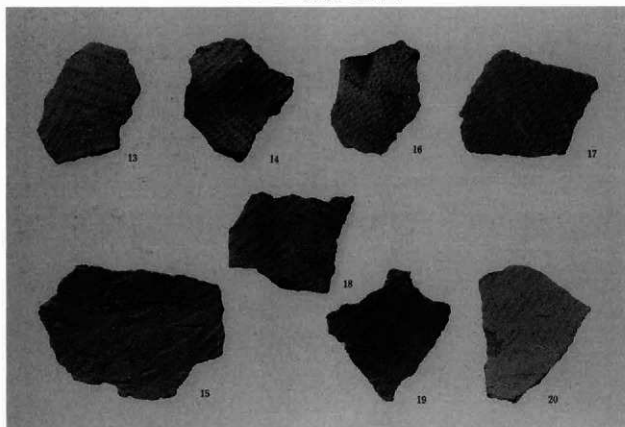
3区出土の石器 (10)



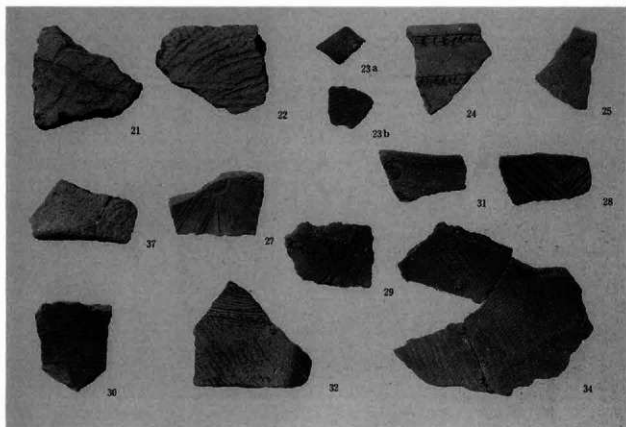
3区出土の石器 (11)



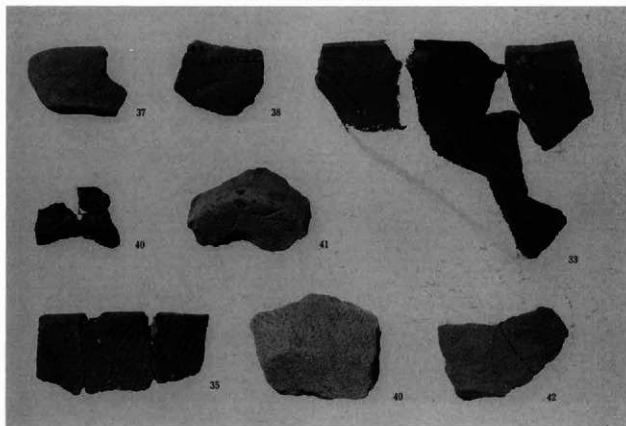
1・2・4・5区出土の土器(1)



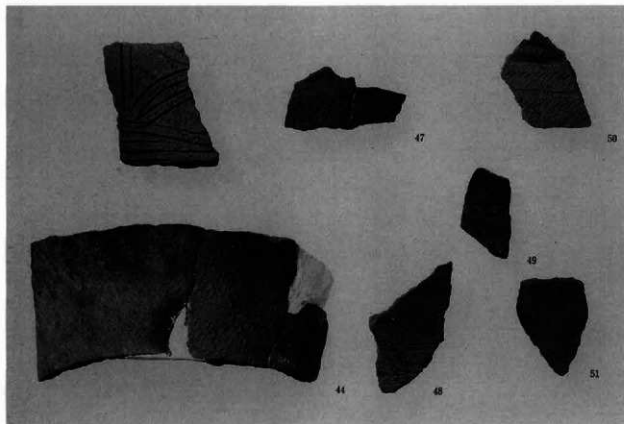
1・2・4・5区出土の土器(2)



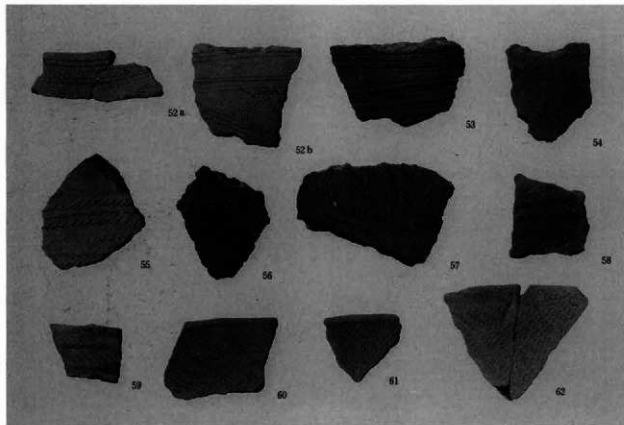
1・2・4・5区出土の土器(3)



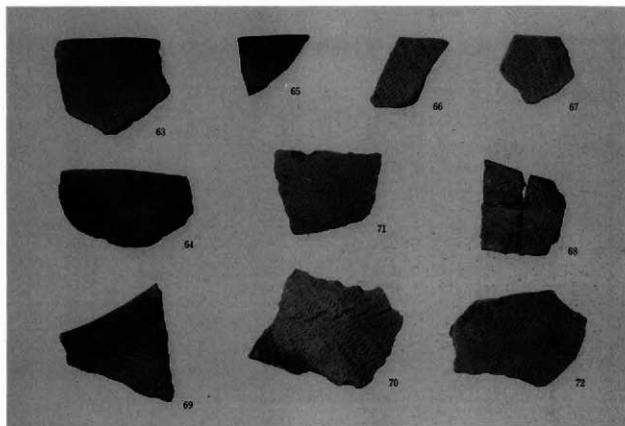
1・2・4・5区出土の土器(4)



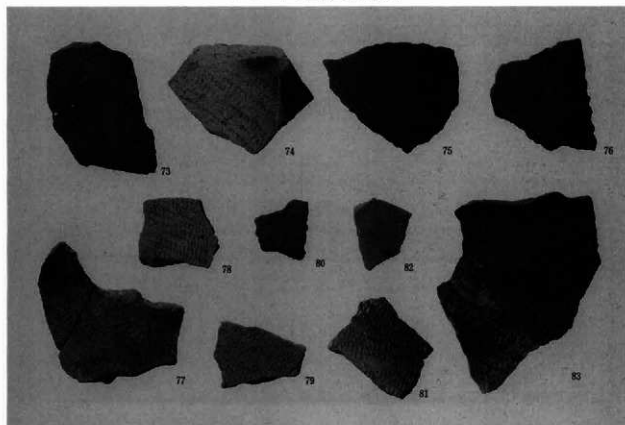
1・2・4・5区出土の土器 (5)



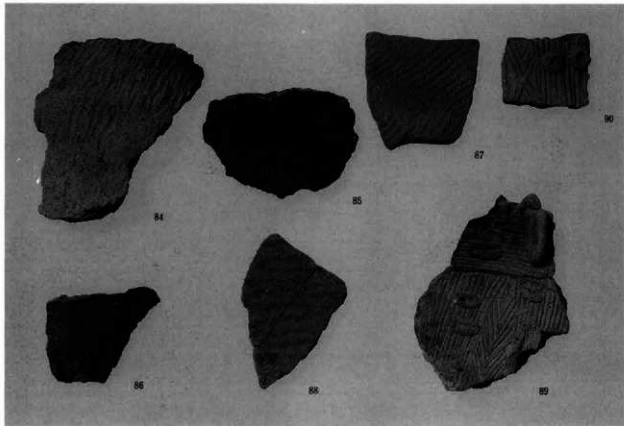
1・2・4・5区出土の土器 (6)



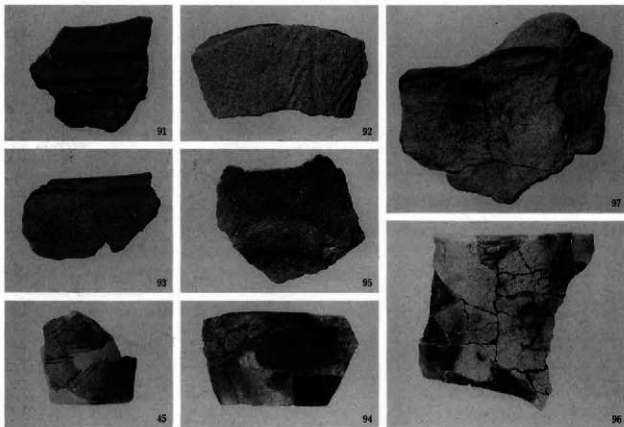
1・2・4・5区出土の土器(7)



1・2・4・5区出土の土器(8)

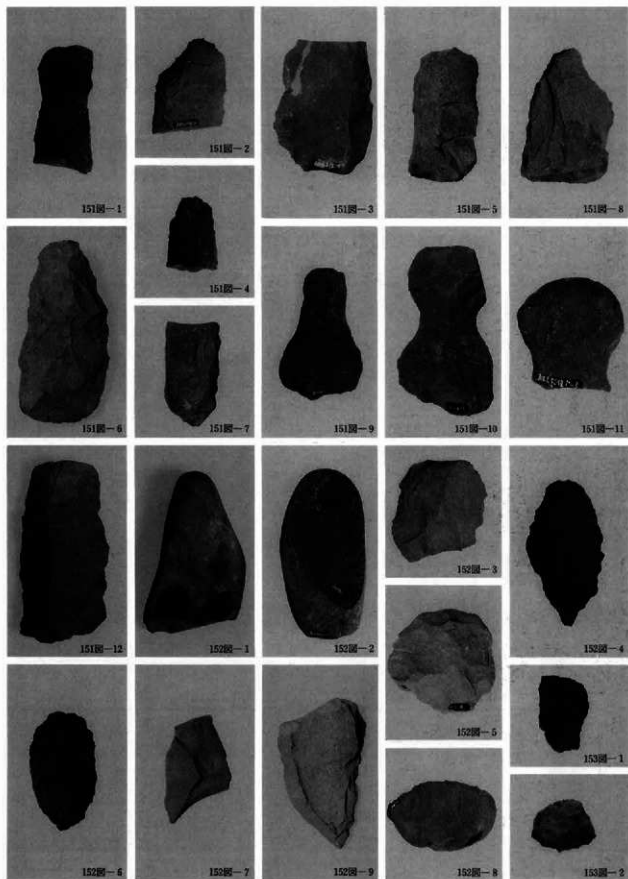


1・2・4・5区出土の土器 (9)

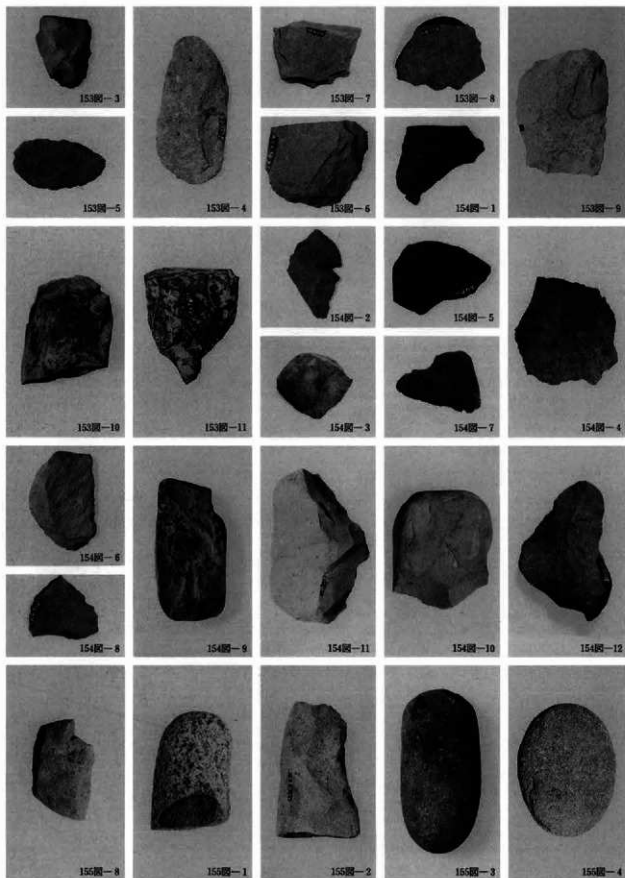


1・2・4・5区出土の土器 (10)

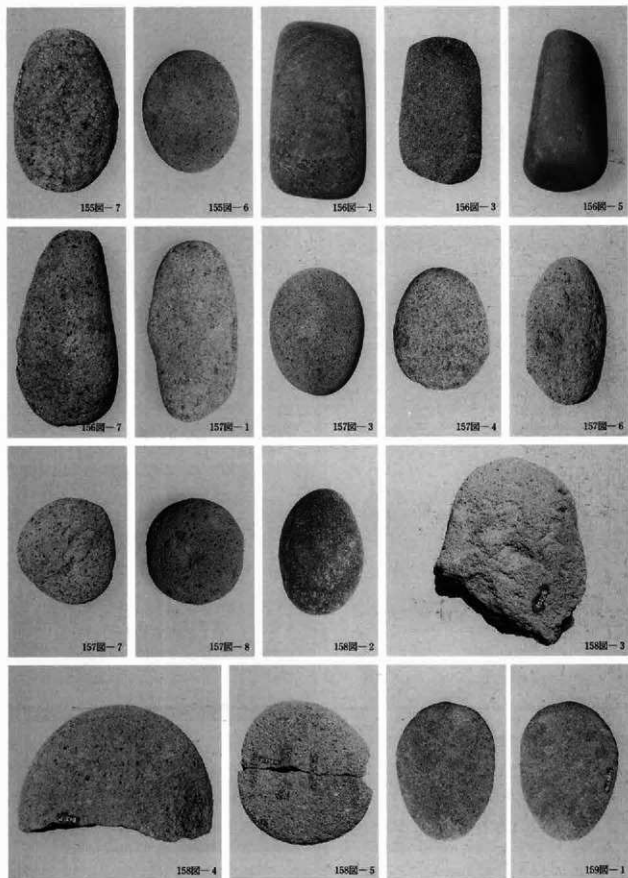




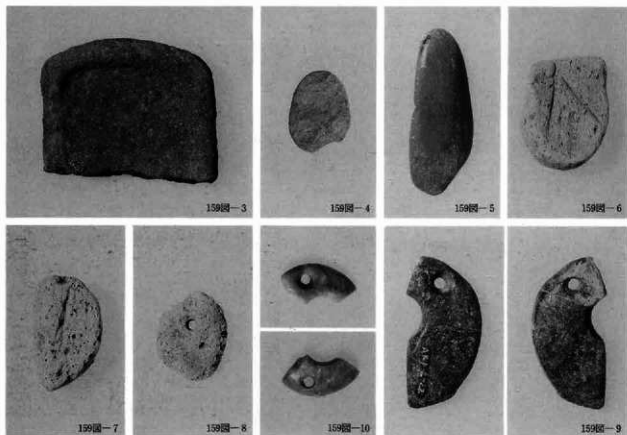
1・2・4・5区出土の石器(1)



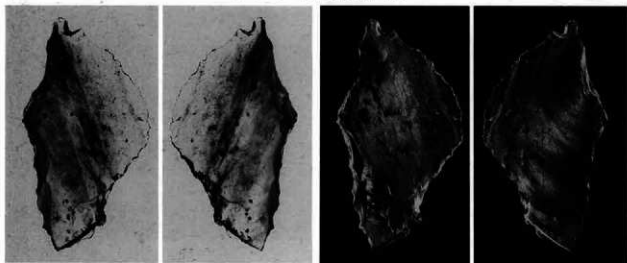
1・2・4・5区出土の石器(2)



1・2・4・5区出土の石器(3)



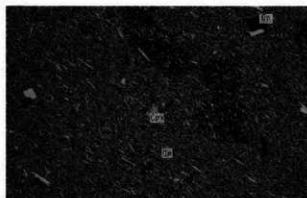
1・2・4・5区出土の石器(4)



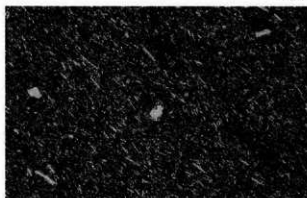
黒曜石の写真撮影に於いて、制塵や加工状態や石材感を表現するには、概ね次の撮影方法が有効であり、両者を併用することで、より実態に近い表現が可能と思われる。

1. 中央・左側の白バックの写真。撮影は透過光による。この場合、対象となる遺物(石割)の輪郭が不明瞭となるため、ライティングを工夫することにより、エッジを強調した。

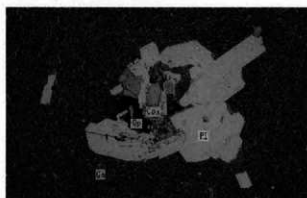
2. 中央・右側の黒バックの写真。撮影は反射光による。この場合も、遺物の輪郭が不明瞭となるため、ライティングによりエッジを強調した。



資料No.20(下方ポーラー)



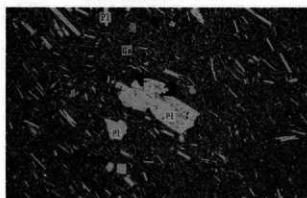
資料No.20(直交ポーラー)



資料No.24(下方ポーラー)



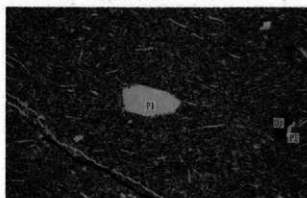
資料No.24(直交ポーラー)



資料No.19(下方ポーラー)



資料No.19(直交ポーラー)



資料No.28(下方ポーラー)

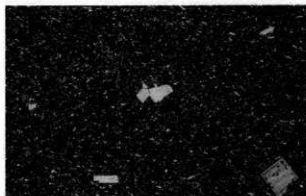


資料No.28(直交ポーラー)

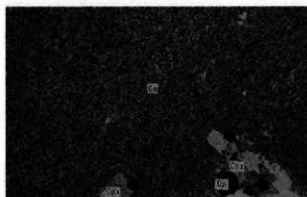
分析資料の偏光顕微鏡写真 (1)



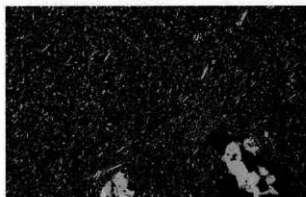
資料No.36(下方ポーラー)



資料No.36(直交ポーラー)



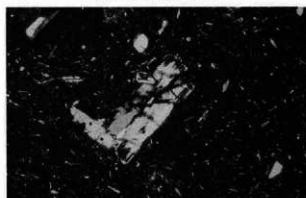
資料No.30(下方ポーラー)



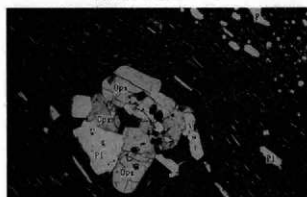
資料No.30(直交ポーラー)



資料No.7(下方ポーラー)



資料No.7(直交ポーラー)



資料No.10(下方ポーラー)



資料No.10(直交ポーラー)

分析資料の偏光顕微鏡写真(2)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第136集

## 荒砥北三木堂遺跡Ⅱ

昭和56年度県営掘場整備事業荒砥南部  
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月27日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会

〒371 前橋市大手町1丁目1番1号

電話 (0272) 23-1111(代表)

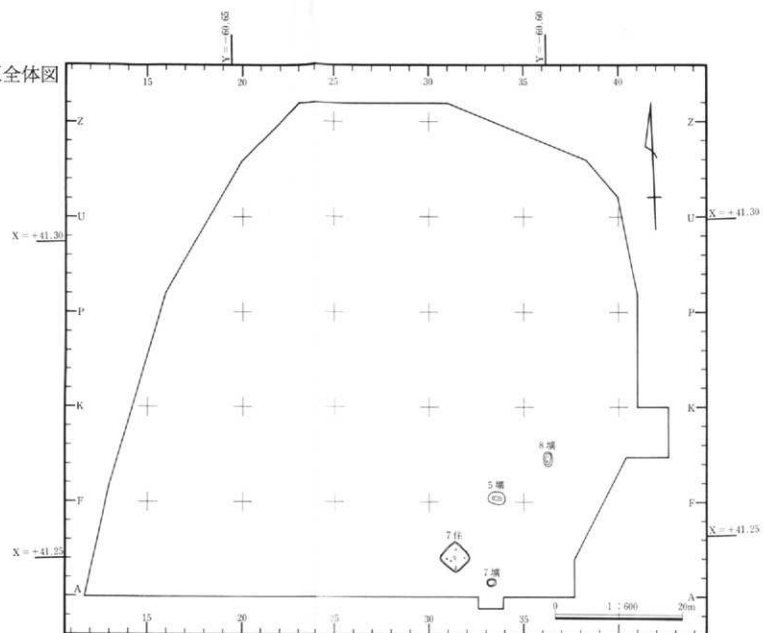
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377 勢多郡北構村大字下箱田784番地の2

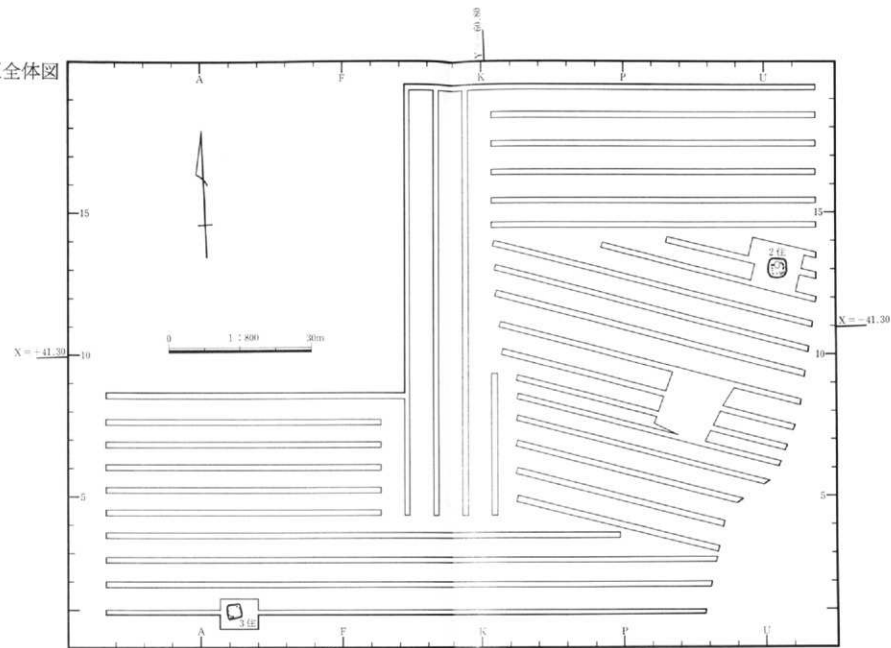
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

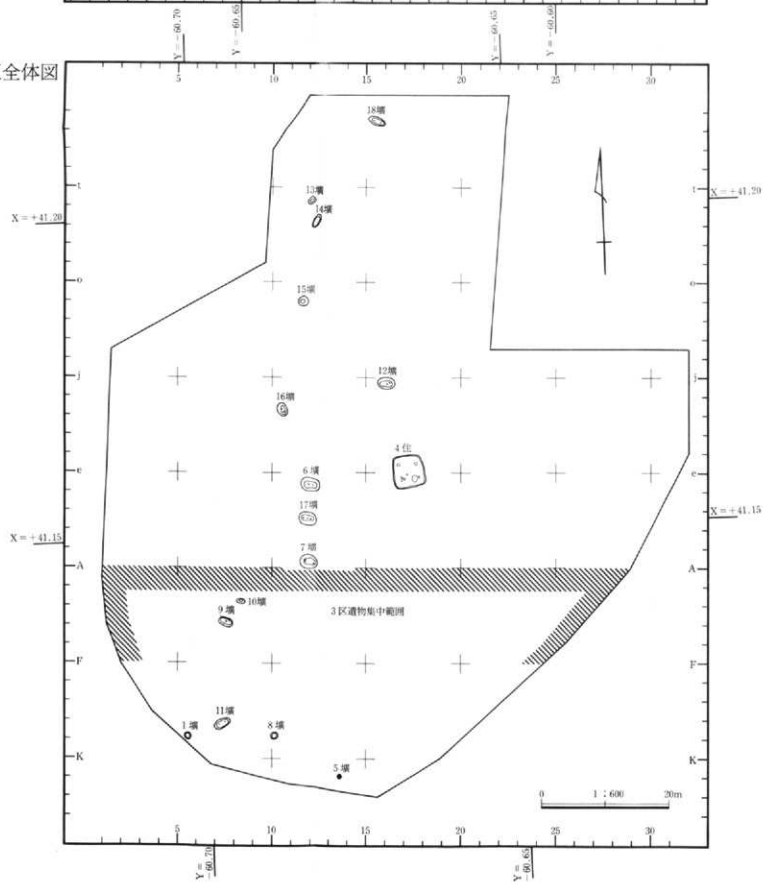
5区全体図



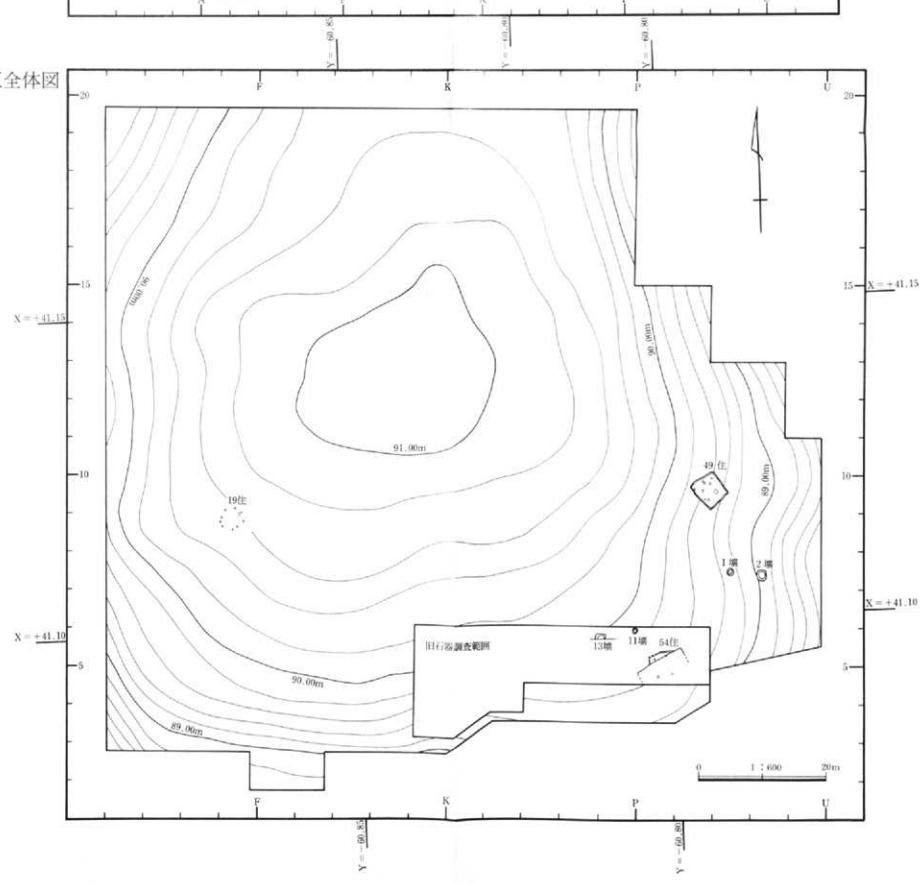
4区全体図



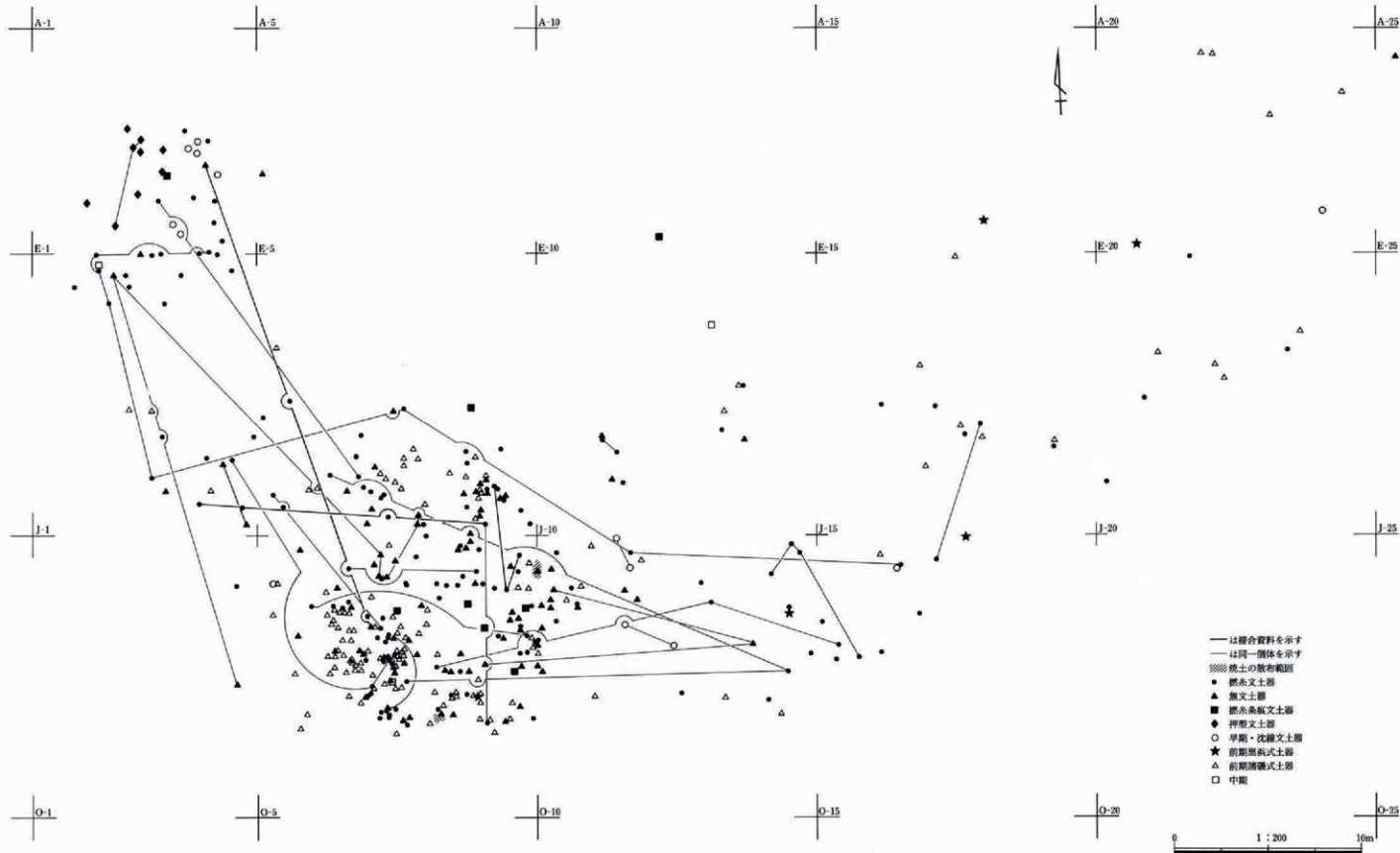
3区全体図

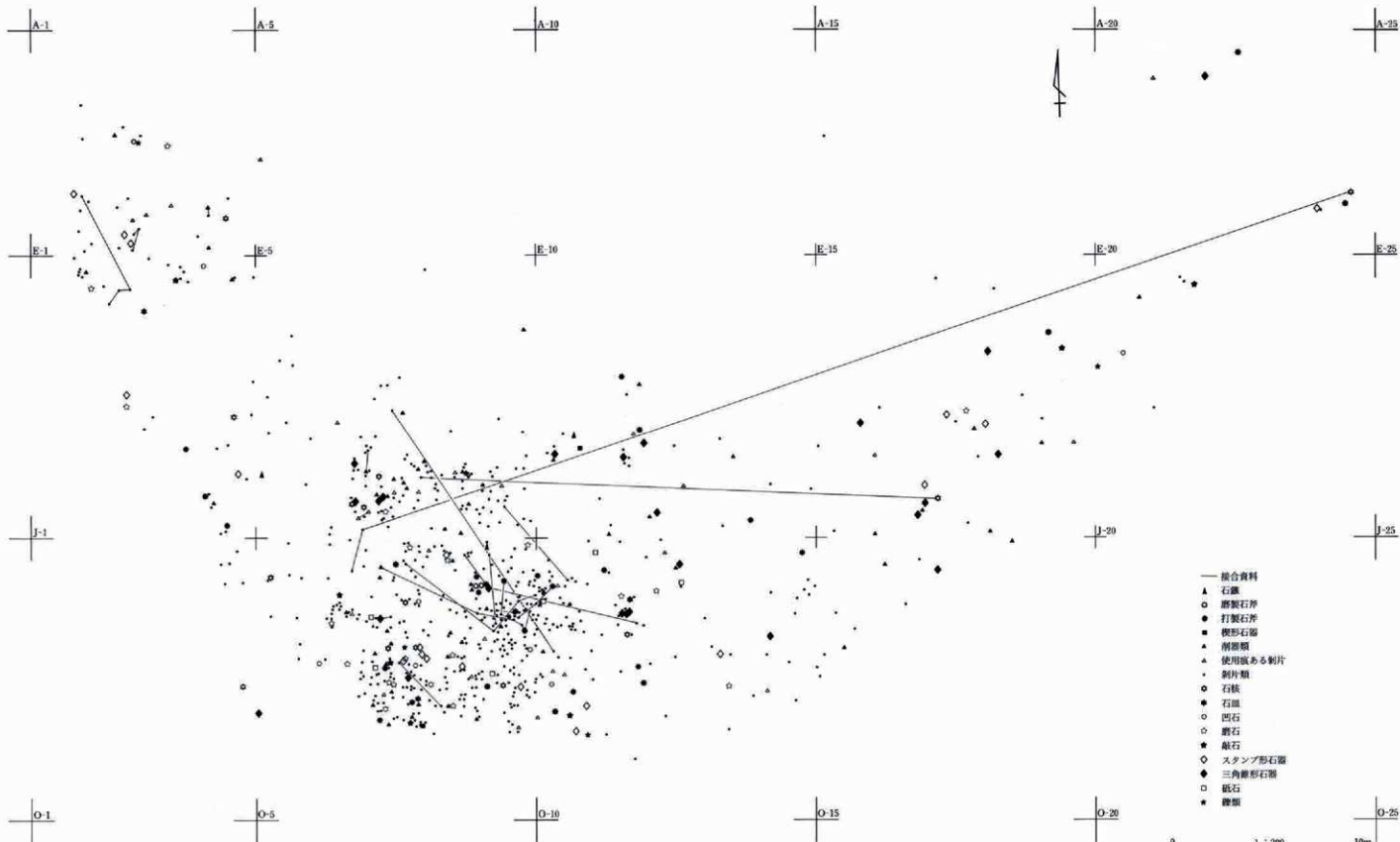


2区全体図









- 組合資料
- ▲ 石鏃
- 磨製石斧
- 打製石斧
- 楔形石器
- ▲ 骨器類
- ▲ 使用感ある刺片
- △ 刺片類
- 石槌
- 石皿
- 凹石
- 磨石
- ★ 敲石
- スタンブ形石器
- ◆ 三角磨石
- 砥石
- 礫類

0 1 : 200 10m